

白球熱譜

盛岡一高野球部
創設百周年記念誌



特集 甲子園

全国大会の17試合

覇者の誉れ 脈々と



校歌

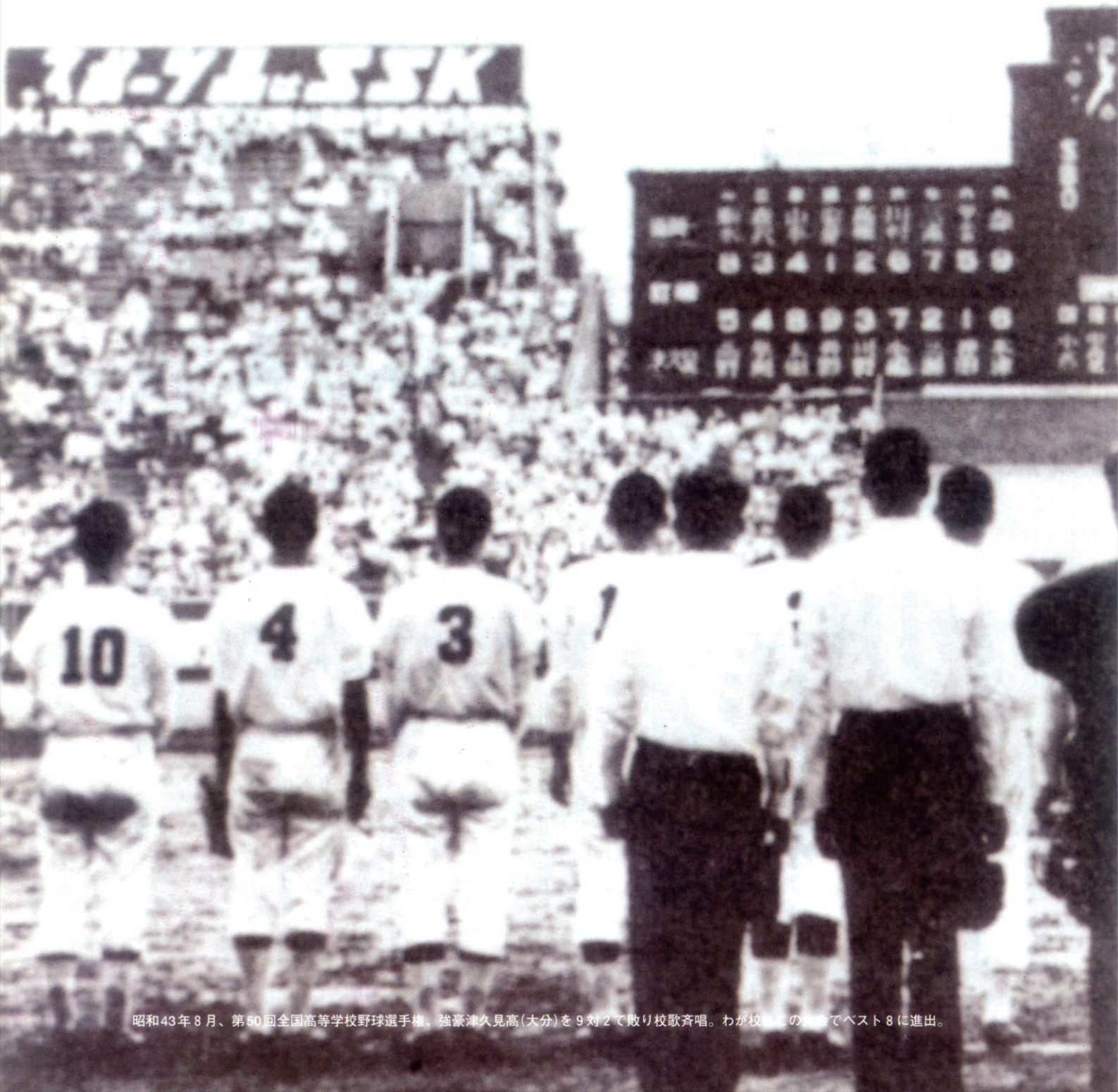
伊藤 九万一　作詞

一　世に謳われし　浩然の
大気を此処に　鍾めたる
秀麗高き　岩手山
清流長き　北上や
山河自然の　化を享けて
汚れは知らぬ　白堊城

二　明治十三　春半ば
礎固く　たたまれて
星霜此処に　幾かえり
徽章の松の色映えて
覇者の誉れは　日に月に
世に響くこそ　嬉しけれ

三　忠実自彊の　旗高く
文武の海に　わたる日の
久遠の影を　身に浴びて
理想の船路　一筋に
雄々しく進む　一千の
健児の姿　君見ずや

四　振えや杜陵の　健男児
海陸四方　幾万里
巉峭峙つ　起伏の岨
澎湃寄する　激浪の
其処奮闘の　活舞台
其処邁進の　大天地



昭和43年8月、第50回全国高等学校野球選手権、強豪津久見高（大分）を9対2で敗り校歌斉唱。わが校はこの大会でベスト8に進出。



大正６年８月、全国大会に初出場。大会は鳴尾球場で開催された。大会３日目の２回戦で慶応普通部と対戦。接戦を制しベスト４に進出する。１塁手は金矢忠志。

◆第3回大会 大正6年（1917）

初出場でベスト4

▽1回戦

（香川）

香川商業	0	0	0	0	0	0	1	1
盛岡中学	0	0	2	0	2	1	0	5

【ゲーム】香川商（現高松商）を相手に、久保田、照井の二塁打を含む7安打を放った。序盤・中盤と小刻みに加点。投げては本校エース小川が被安打2の好投で快勝した。

▽2回戦

盛岡中学	0	0	0	0	2	0	0	2
慶応普通	0	0	0	0	0	0	1	1

（東京）

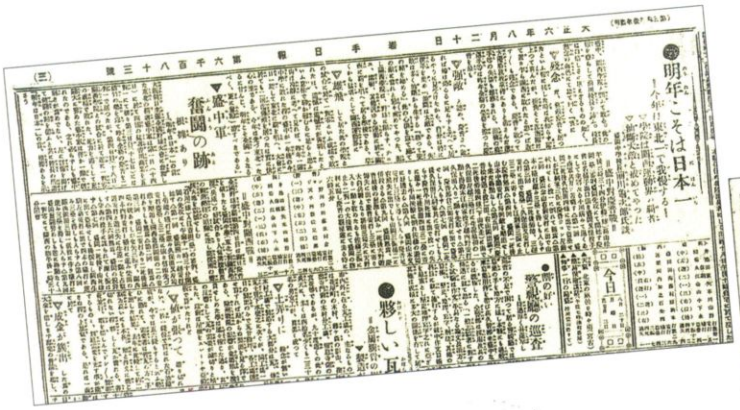
【ゲーム】前年の全国優勝校との一戦。病気で五年の小川が登板できなかった。代わりに登板した三年生の下山が見事な投球を見せ、被安打2と相手強力打線を封じる。本校は10安打の猛攻をかけ、接戦に強い本校らしさが出た試合だった。

▽準決勝

盛岡中学	0	0	0	0	0	0	0	0
関西学院	0	0	1	0	0	0	0	1

（兵庫）

【ゲーム】本校は初回、3連打で満塁。遊撃への


明年こそは日本一
悲しい瓦

盛岡中学優勝
組合決定
公園演奏
キャンピング

強襲ゴロで三走が本塁を走り抜けた。観衆も本校もセーフと思ったが、アウトの宣告で先制点を逸した。これが響き惜敗。この年だけ異例の敗者復活戦（1回戦敗者のみ）が採用された。それが無ければこの一戦は実質上の決勝だった。

◆第5回大会 大正8年（1919）

再びベスト4入り

▽1回戦

（京都）

同志社中	0	0	0	2	0	0	1	0	3
盛岡中学	0	0	3	0	0	0	0	0	1×	4

【ゲーム】短打のみだったが本校は10安打を放った。サヨナラ勝ちで2回戦進出。

▽2回戦

（愛媛）

松山商業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡中学	0	0	0	0	0	1	0	0	×	1

【ゲーム】本校下山、松山商松原の投手戦となった。本校は六回、二死三塁の時、相手遊撃手の一塁への暴投の間に、決勝点を挙げた。

▽準決勝

盛岡中学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
神戸一中	3	0	0	0	0	0	5	0	×	8

（兵庫）

【ゲーム】銀傘のない鳴尾球場。青空のため、相手の飛球を野手が見失うなど失点を重ねた。相手エースの前に3安打に抑えられ反撃できなかった。神戸一中（現神戸高校）が優勝した。

◆第7回大会 大正10年（1921）

強力打線でベスト8入り

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

（大阪）

市岡中学	2	0	1	0	0	0	0	0	1	4
盛岡中学	0	0	0	0	5	0	0	0	×	5

【ゲーム】地元の市岡中学（現市岡高校）と接戦となったが、本校は2度隠し玉を成功させ逃げ切って8強入り。

▽準々決勝

盛岡中学	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2
豊国中学	0	0	1	1	1	0	1	1	×	5

（福岡）

【ゲーム】本塁打3本が飛び出した一戦。序盤の本校は及川の本塁打などで2点を挙げたが、豊国中（現豊国学園）に小刻みに加点され敗れた。

◆第12回大会 大正15年（1926）

甲子園に白堊球児初登場

▽1回戦（不戦勝）



昭和８年５度目の全国大会出場を果す。瀬川正三郎野球部長（2列目中央）と当時の部員たち。

▽2回戦
（鳥取）

鳥取一中	0	0	0	0	1	3	0	4
盛岡中学	0	1	0	0	0	0	0	1

【ゲーム】頭脳派投手と評された山田をエースとした本校。しかし、鳥取一中（現鳥取西高）の猛打に会い力尽きた。

◆第19回大会 昭和8年（1933）
7年ぶり5度目の全国大会出場

▽1回戦

盛岡中学	0	0	0	3	0	0	0	3
浪華商業	1	10	0	0	0	0	0	1×

（大阪）

【ゲーム】まだ華々しい活躍をしていなかった頃の浪華商（現浪商高校）と対戦。本校海野は三回からスローボール主体の投球に変えて好投したが、序盤の失点が大きすぎた。安打数は本校8、浪商9と差が無かっただけに惜しまれた。

◆第31回大会 昭和24年（1949）
名門平安高校に奮戦す

▽1回戦

盛岡高校	0	0	2	0	0	2	3	0	7
平安高校	1	0	3	7	2	0	4	1×	18

（京都）



昭和25年夏の甲子園大会。「盛岡高校」として出場する。盛岡一高と盛岡商業が一つのチームになったので、戦力が一段とアップした。

【ゲーム】戦前より切磋琢磨し合ってきた盛商と統合し、盛岡高校として出場。食中毒で体調を崩す選手が続出したが、10安打で7点を挙げた。平安は24安打で18点。激しい点の取り合いだった。

◆第32回大会 昭和25年（1950）

米子東高に粘りをみせる

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

（鳥取）

米子東高	0	0	0	2	1	0	0	0	3
盛岡高校	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2

【ゲーム】地方大会を圧倒的な強さで勝ち進み、上位進出が期待された。九回裏に粘りを見せ2―3とつめ寄ったが苦杯をなめた。スピーディーな試合となり、試合時間は一時間十八分。

◆第50回記念大会 昭和43年（1968）

白聖旋風ベスト8

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

（徳島）

鴨島商業	0	0	0	2	0	0	0	0	2
盛岡一高	0	1	0	0	0	0	0	3	×	4

【ゲーム】本校は八回に見事な攻めで逆転し勝利を手にした。鴨島商が逆転後、逃げ切ろうとい



昭和43年夏の甲子園、２回戦で徳島代表の鴨島商業と対戦。
８回裏、本校２死2、３塁、川村の遊越え安打で３塁走者につづき２塁走者高橋が一挙生還。

う消極さを見せたのとは対照的に、本校は攻めに出る。八回に2―2とした後、本校は二死から重盗を決め二、三塁。川村が中前にはじき返し、2点のリードを奪った。小笠原の好投で反撃を許さず、4―2で勝った。

▽3回戦

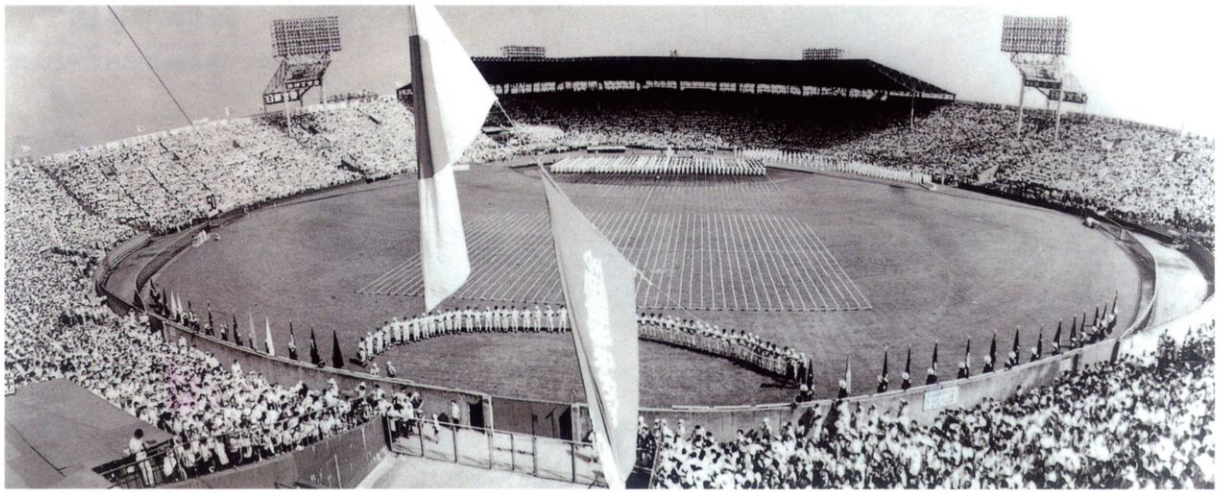
盛岡一高	1	1	0	7	0	0	0	9
津久見高（大分）	0	0	0	0	2	0	0	2

【ゲーム】春の選抜優勝校（大宮工業）を下して意気揚がる津久見だった。しかし、本校はあざやかな集中打で強豪に快勝する。初回は小笠原、二回は駒木の適時打が出て各1点を挙げた。攻撃の手を緩めず本校は四回、打者十一人で長短5安打を集中させ大量点を奪った。津久見は小笠原の好投に打線が沈黙、2点を返すのが精一杯。本校のベスト8入りは、実に47年振りの快挙となる。

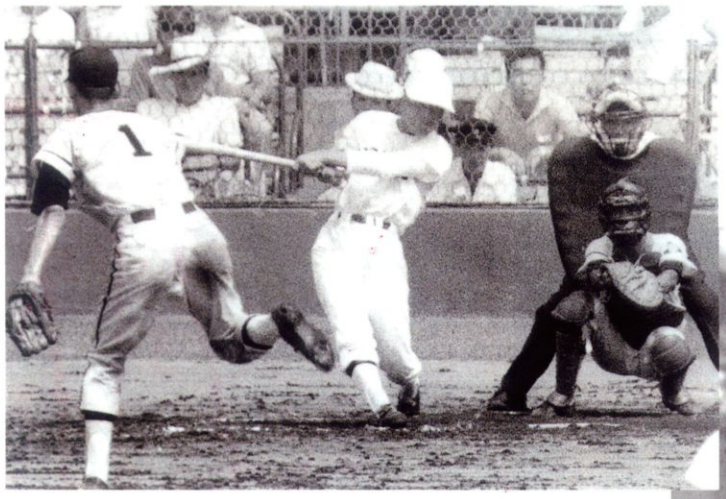
▽準々決勝

盛岡一高	0	0	0	0	1	0	2	1	4
興南高校（沖縄）	0	0	0	4	2	4	0	0	× 10

【ゲーム】堅守で定評のある本校だったが、初めて失策が重なり、やらずもがなの失点を重ねた。



第50回記念大会　開会式



3回戦の相手は大分代表の津久見高校。4回裏
1死満塁、小笠原走者一掃の中越え三塁打を放つ。

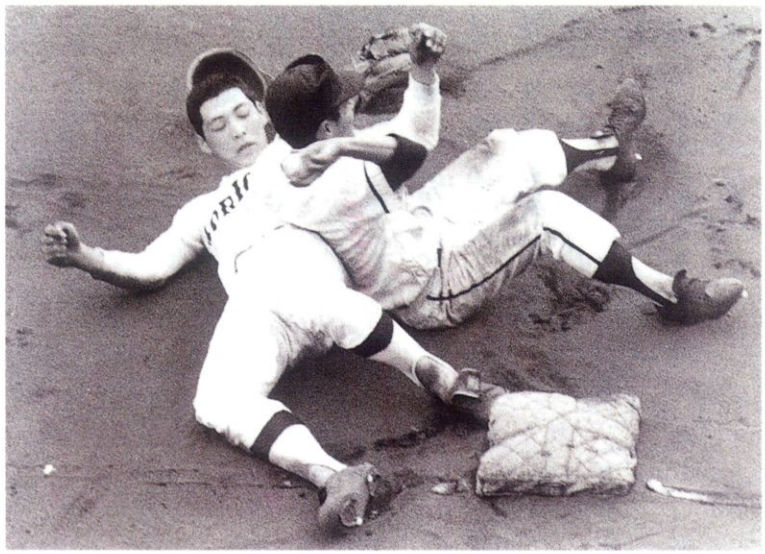


対鴨島商戦2回裏、1死1、3塁、3塁走者川村が、
佐々木(典)の安打で生還。先取点をあげる。

五回の本校は、赤沢の左犠飛で1点を返す。更に終盤の八、九回にも粘りを見せた。八回は川村の中前安打などで2点。九回には小笠原の左前安打で1点を挙げた。最後の最後まで食い下がったプレーは、多くの先輩が築き上げてきた白聖野球の真髄を示したものだった。

本校の登録メンバー

◎当時は十四名までのベンチ入りであった。



準々決勝は沖縄の興南高校と対戦。
2回表2死、三浦の2塁内野安打で1塁走者川村が一挙3塁をついたが、タッチアウト。



昭和43年夏の甲子園大会。白翌旋風と共に話題をまいたのは肉声を中心としたバンカラ応援であった。



昭和53年夏の甲子園大会。堂々の入場行進。



甲子園で練習するナイン。

（投）小笠原敬二［3年］
（捕）高橋　寿［3年］
（一）赤沢　敬文［3年］
（二）山本　仁［3年］
（三）佐々木典武［3年］
（遊）川村　協平［2年］
（左）三浦　宗［2年］
（中）駒木　進［2年］
（右）森　敬司［3年］
（捕）佐藤　誠剛［2年］
（捕）坂本　秀男［3年］
（捕）鈴木　忠彦［2年］
（捕）福田　啓二［2年］
（捕）佐々木和博［2年］
（監督）榊　貞助
（部長）遠藤　弘
（主将）高橋　寿

◆第60回記念大会 昭和53年（1978）

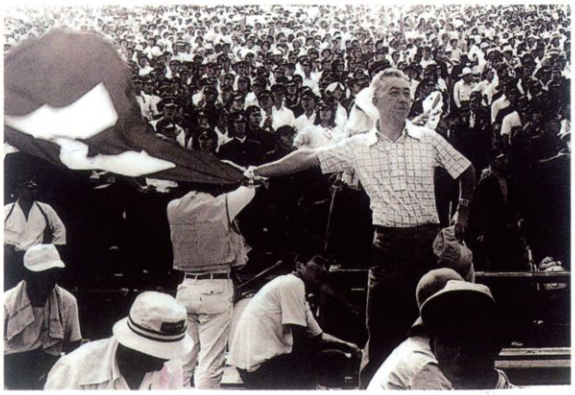
好投手北條、健闘す

▽1回戦

盛岡一高	0	0	0	0
報徳学園	1	0	0	7
	0	0	6	0
	0	0	0	×

（兵庫）

【ゲーム】初回から点を奪われた本校であったが、



昭和53年の夏の甲子園大会で母校に声援を送る船山賢一（昭和17年卒業）。



打者 川村



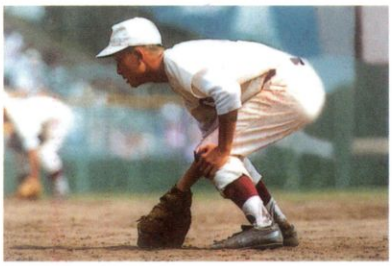
捕手 森



マウンド上

打者 八重樫





一塁手 木村



アルプススタンドの応援風景。

北條投手が好投し、報徳の強力打線を五回まで被安打3と抑え互角の戦い。本校は四回に同点の好機をつかむ。二塁打の森を三塁まで進めたが、ここ一本が出なかった。

本校の登録メンバー

◎当時は十五名までのベンチ入りであった。

（投）北條　潔［3年］
（捕）森　常記［2年］
（一）木村　司［3年］
（二）照井　達［3年］
（三）八重樫永規［1年］
（遊）泉舘　彰義［3年］
（左）塚原　伸一［3年］
（中）川村　昌義［3年］
（右）永井　修［2年］
（補）山崎　敏弘［3年］
（補）石川　均［3年］
（補）小笠原洋人［2年］
（補）佐藤　公彦［2年］
（補）吉田　寛治［2年］
（補）正木　祐輔［1年］
（監督）森　雄一
（部長）小山　卓也
（主将）泉舘　彰義

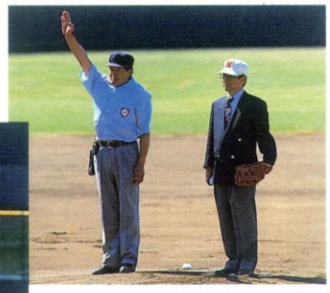
盛岡一高野球部 創設百周年記念試合

平成11年5月2日　岩手県営野球場

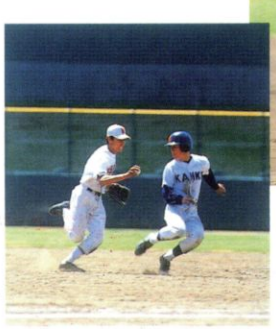
明治32年に創設された盛岡中野球部は、
その後、相次いで開校された中学野球部との交流により、
今日の確固たる地位を築き上げてきたと言っても過言ではない。
甲子園出場をかけて戦った数あるライバル校の中でも、
とりわけ運命的な存在であったのが一関中（現一関一高）と盛岡商業。
この二校を招いての盛岡一高野球部創設百周年記念試合は、
まさに名勝負の余韻と予兆を感じさせる、
一世紀めの確かな現在そのものであった。



現役戦開会式



原校長による始球式



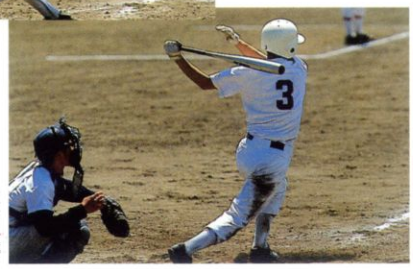
挟殺プレー



加藤宏泰



荻野真一



佐竹　研



選手宣誓する細川主将

◆現役戦［9時開始］

清々しい五月晴れのもと、記念の第一試合、一関一高を迎えての現役戦が行われた。

試合に先立っての開会式で、一戸秀光会長は「一関中野球部が創設されて最初の練習試合の相手が盛岡中。その後、甲子園出場をかけた決勝戦で二度当たり、盛岡一は二度とも一関一に惜敗している。今後もよきライバルとして県高校野球を盛り上げてもらいたい」と歓迎の言葉を述べた。また原久雄校長も「これからもライバル校として目標に向かい、高校野球の神髄を極めてほしい」と語った。

本校の細川星児主将による力強い選手宣誓の後、投手・原校長、捕手・一戸会長のバッテリー、対する打者・菅原新一関一校長での始球式を経て、ついにプレイボール。一関一の先攻で記念試合が始まった。

試合は初回、二回、三回と各1点ずつを献上した本校ではあったが、その後、四回から七回までを四死球でランナーを出すも、後続を断ち、ノーヒットに抑えた。

一方、攻撃では六回裏、それまでの沈黙を破り、二番加藤宏泰、三番我妻慎弥の連続ツーベース、四番佐竹研のセンター前ヒット、五番高前田幸大のライト前ヒット、さらに六番大内賢太郎のセンター前ヒットと、何と5連続ヒットの猛攻をみせ、2点を奪取し反撃。

八回表、一関一に1点を追加されて2―4となり、八回裏、九回裏と逆転を試みたが惜しく



小笠原敬二



渡邉史朗



選手宣誓する森雄一



ＯＢ戦開会式

も敗戦。ヒット数８本と相手を上回るも、６回の猛攻以外は単発に終わった。１００年目のシーズンは始まったばかり。夏に向けての意義ある課題を残す記念試合となった。

◆ＯＢ戦［12時30分開始］

試合に先立って行われた開会式では、「今まで公式戦で、盛岡商には23勝29敗という結果。ライバル校として切磋琢磨してきたと自負している。ケガのないよう注意して、後輩たちにファイトあふれるプレーをみせてほしい」という一戸会長の挨拶に始まり、「勝負にこだわり、後輩の手本となるプレーを心掛ける」（盛岡一・森雄一／Ｓ26卒）、「ケガのないよう楽しくプレーする」（盛岡商・斎藤磐生）という二人の選手宣誓があった。

いよいよ試合開始。ホームベースを挟んでの挨拶には、盛岡一45名、盛岡商57名、合計102名もの往年の選手たちが対峙した。さてこのゲーム、一回表、盛岡商三番石川晃選手の３ランホームランで幕を開けた。

対する本校は二回、五番三浦宏（現岩手日報社・記念誌編集委員長）の三塁線へのヒットを足掛かりに、代走・高橋弘行（Ｓ49卒）の二盗成功、これを六番中村正（Ｓ40卒）のセカンド強襲ヒットで返すという展開でまず１点。八番岩泉宏（Ｓ46卒）が、またしてもセカンド強襲ヒットで出塁し、ランナー一塁・二塁とした。ここで代打登場した高橋寿（Ｓ44卒）がセンター前ヒットで１点追加。この回２点を返した。

さらに三回、四球で出た上和野基（Ｓ48卒）の二盗成功を高橋弘行がライト前にはじき返し、この回１点追加で同点とした。

四回からは昭和50年度卒以降の選手も出場できることとなり、守備陣もガラリと代わった。

この回の表、盛岡商にさらに１点取られてしまうが、本校も黙っていない。そのウラ、四球を選んだ先頭バッターの新谷（Ｈ６卒）はすかさず二盗。続く現在本校のコーチを務める泉舘（Ｓ54卒）も四球を選び、ノーアウトでランナー一塁・二塁のチャンス。ここで現岩手大学野球部監督の澤村（Ｓ57卒）がライト前ヒット。一人生還してなおランナーは一塁・三塁。続く森常記（Ｓ55卒）の当たりはレフトフライ。ここでサードランナーはタッチアップしてホームイン。さらに２点を加えて再度逆転することとなった。

五回表、盛岡商の先頭打者・佐々木にソロホームランを浴び、またしても同点とされてしまうが、その後を抑えて１点止まりに凌いだ。

六回の攻防でゲームはまた動いた。この回からマウンドに立ったのは平成６年卒業の八角有紀。前回、同点に追いつき波に乗る盛岡商打線を、ぴしゃりと三者三振に切って取ったのである。八角はこの快投にとどまらず、そのウラの打撃でも力を発揮した。

２アウトとなった後、四球を選んだ清水成樹（Ｈ１卒）を一塁に置いて、左中間を真っ二つに


杉田清彦


細田敬一


澤村省逸


八角有紀

破るタイムリーツーベースを放ったのである。続く高畑（S58卒）のピッチャーへの打球もエラーを誘い、この間にさらに1点を加えて、7—5とゲームを引き離しにかかった。

八回表、平成6年夏に話題となった沼崎光祥・宏祥（H7卒）の双子バッテリーが、盛岡商の攻撃を抑えるべくついに登場した。しかし死球とエラーが絡み、ノーヒットで1点を許してしまう。九回表の盛岡商打線を抑えれば勝利というところまできたが一挙5点を挙げられ7—11。背水の陣で臨む九回裏、先頭打者の八角がファーストゴロで倒れた後、平成5年夏の県大会決勝進出時のメンバーだった藤原正孝（H6卒）がセンター前ヒット。好走塁をみせて二塁に達した。これに同じく平成5年にライトで五番だった千葉俊介（H6卒）が四球を選びランナーをためる。金野健（S51卒）のファーストゴロの間にランナーはそれぞれ進塁して、2アウトながら二塁・三塁のチャンス。ここで清水成樹が左中間を破る「執念の」ツーベース。二者生還して9—11。沸き上がるベンチ、そしてスタンド。この勢いを背に静かに燃える続くバッターは森常記。見事にはじき返した打球はレフトの頭上を越えた。ツーベースヒットである。さらに1点を加えて10—11である。あと1点。セカンドに代走の俊足・新谷が送られたが、本校の執念もここまでだった。

惜敗…。それはまさにこの2文字でしか言い表せない結果であった。ヒット数はともに15本。ライバル校としての歴史を再現するような、じつに取られたら取り返す、という緊迫した展開だった


試合終了。健闘をたたえ合う両軍選手。

OB戦メンバー表

背番号	氏名	卒業年度
100	一戸　秀光	S 27
99	杉田　清彦	S 38
1	森　雄一	S 26
2	澤村　省三	S 28
3	島田　繁	S 29
4	野中　恒	S 31
5	井上　健三	S 32
6	三浦　宏	S 36
7	中村　正	S 40
8	高橋　芳雄	S 42
9	工藤　功	S 42
10	渡邉　史朗	S 42
11	細田　敬一	S 43
12	小笠原敬二	S 44
13	山本　仁	S 44
14	駒木　進	S 45
15	高橋　良一	S 46
16	岩泉　宏	S 46
17	阿部　洋三	S 48
18	石川　仙平	S 48
19	菊池　健	S 48
20	上和野　基	S 48
21	山崎　泰弘	S 49
22	高橋　弘行	S 49
23	小山田浩之	S 49
24	金野　健	S 51
25	北條　俊則	S 52
26	泉舘　彰義	S 54
27	山崎　敏弘	S 54
29	森　常記	S 55
30	澤村　省逸	S 57
31	高畑　嗣人	S 58
32	高橋　直人	S 62
33	桜　克宏	S 62
34	高橋　雪文	H 元
35	清水　成樹	H 元
36	佐藤　晋	H 5
28	藤原　正孝	H 6
37	新谷　聡	H 6
38	八角　有紀	H 6
39	沼崎　光祥	H 7
40	沼崎　宏祥	H 7
41	高橋　寿	S 44
42	柳原　和久	S 62
43	千葉　俊介	H 6

盛岡一高野球部 創設百周年記念祝賀会

平成11年5月2日（日）18時　盛岡グランドホテル

一世紀もの歴史をもつ盛岡一高野球部。
平成11年5月2日、
その節目を記念しての祝賀会が
盛岡グランドホテルにて行われた。
幾多の雨風に耐え抜き、
数多くの勝利への願いが込められた応援旗が飾られる会場には、
盛岡一高をはじめ、県高野連、盛岡商業、一関一高など、
190名もの関係者が集まり、伝統校の栄光を懐かしむとともに、
この百年から始まる新しい歴史に熱い思いを寄せていた。



鏡開き


一戸秀光


三浦　宏


牧野正蔵


藤原洋二


中里四志雄


懇談

原　久雄

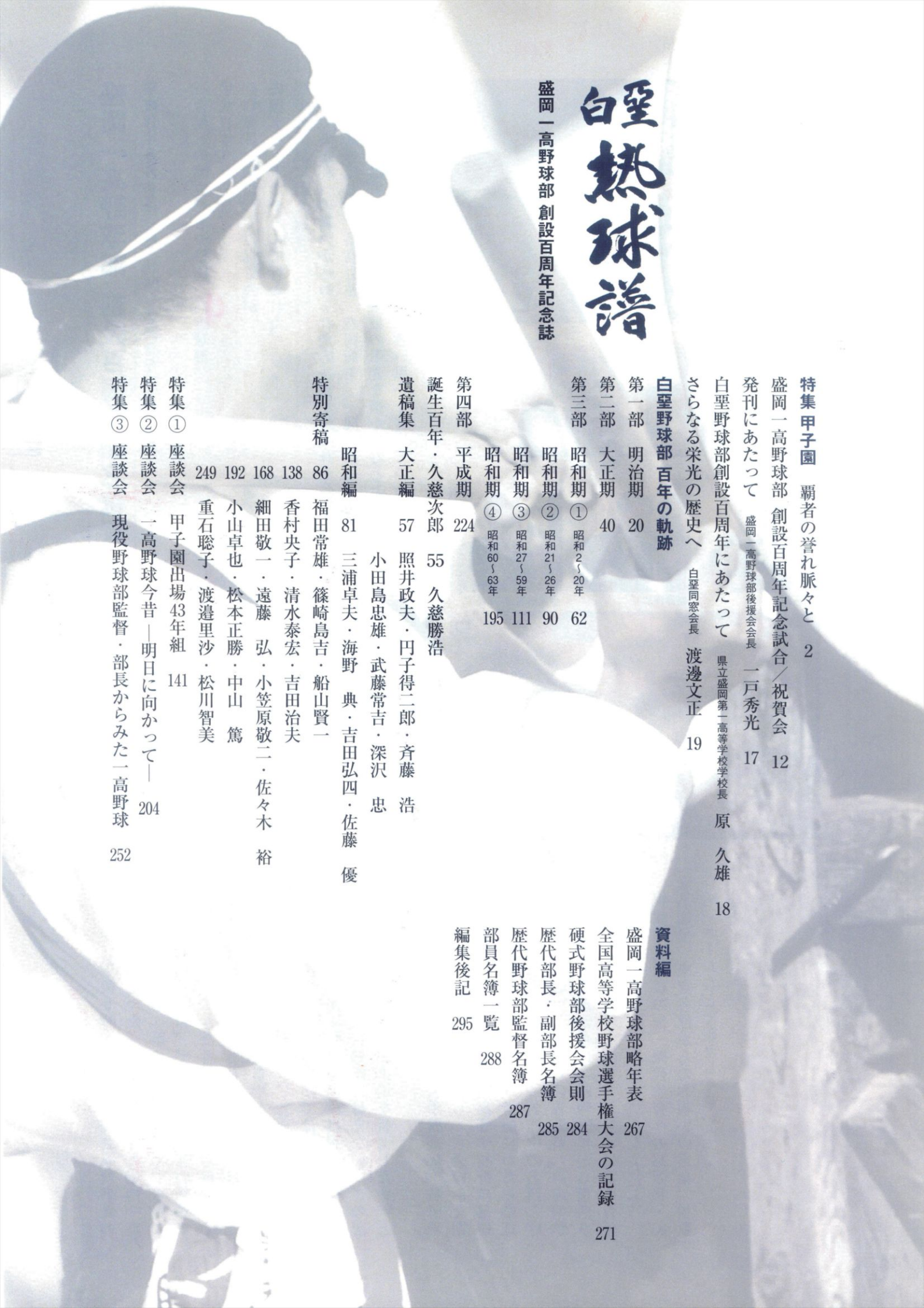

乾杯

祝賀会は午後6時、三浦宏後援会副理事長の開会の辞で始まった。まず、一戸秀光盛岡一高野球部後援会長が「県の近代化を支えてきたのは明治、大正、昭和、平成と盛岡一高の野球で心身を鍛え上げてきた者たちであると自負している。在校生、OBのさらなる頑張りによって過去は光を増すものである」と挨拶。引き続いて物故者への黙祷、鏡開きへと移った。

乾杯の発声に際しての挨拶では、原久雄盛岡第一高等学校長が「野球部創設百周年が皆様のご協力により迎えられ感謝に耐えない。この記念の年に10回目の甲子園出場を祈念したい」と述べた。

乾杯後の来賓祝辞では、岩手県高等学校野球連盟理事長・中里四志雄氏から「古豪復活を期待します」と、また盛岡商業高等学校野球部後援会長・藤原洋二氏から「一世紀にわたり県球界をリードしてきた功績は、名門中の名門と呼ぶにふさわしい」と、さらに青森県八戸高等学校長・牧野正蔵氏からは「昭和54年から復活された対抗試合を続けながら、お互いに次の百年を目指しましょう」とのエールをいただいた。

祝賀の宴はこの後、歴代監督への感謝状・記念品贈呈、来賓各位からのお祝いの言葉、校歌斉唱・エールなどで賑々しく続いた。



白聖熱球譜

盛岡一高野球部 創設百周年記念誌

特集 甲子園　覇者の誉れ脈々と　2
盛岡一高野球部 創設百周年記念試合／祝賀会　12
発刊にあたって　盛岡一高野球部後援会会長　一戸秀光　17
白聖野球部創設百周年にあたって　県立盛岡第一高等学校学校長　原　久雄　18
さらなる栄光の歴史へ　白聖同窓会長　渡邊文正　19

白聖野球部 百年の軌跡
第一部　明治期　20
第二部　大正期　40
第三部　昭和期①（昭和2～20年）　62
昭和期②（昭和21～26年）　90
昭和期③（昭和27～59年）　111
昭和期④（昭和60～63年）　195
第四部　平成期　224

誕生百年・久慈次郎　55　久慈勝浩
遺稿集　大正編　57　照井政夫・円子得二郎・斉藤　浩
小田島忠雄・武藤常吉・深沢　忠
昭和編　81　三浦卓夫・海野　典・吉田弘四・佐藤　優

特別寄稿　86　福田常雄・篠崎島吉・船山賢一
138　香村央子・清水泰宏・吉田治夫
168　細田敬一・遠藤　弘・小笠原敬二・佐々木　裕
192　小山卓也・松本正勝・中山　篤
249　重石聡子・渡邉里沙・松川智美

特集①　座談会　甲子園出場43年組　141
特集②　座談会　一高野球今昔―明日に向かって―　204
特集③　座談会　現役野球部監督・部長からみた一高野球　252

資料編
盛岡一高野球部略年表　267
全国高等学校野球選手権大会の記録　271
硬式野球部後援会会則　284
歴代部長・副部長名簿　285
歴代野球部監督名簿　287
部員名簿一覧　288
編集後記　295



発刊にあたって

盛岡一高野球部後援会　会長
一　戸　秀　光（昭和27年卒業）

盛岡一高野球部創設百周年記念誌が上梓された。誠に喜ばしい限りである。編集委員の大変な努力によって刊行され、編集子に深甚なる敬意を表したい。

この白堊熱球譜にそれぞれの感慨は新たなことであろう。頁をひもとくたびに、同じ目的を持って青春を送った多くの先賢をはじめ、後輩たちの声を聞く思いがする。記念誌はまた輝かしい球史を刻んでいる。白堊野球の練習は随分猛烈でつらいものだった。だが厳しかったものの陰湿ではなかった。先賢たちは後輩を全人格的に鍛えてくれたと思う。私はその中で育てられた。

日々の錬磨で得たことは「紳士道」であった。「ＦＡＩＲ　ＷＩＮＮＥＲ」「ＧＯＯＤ　ＬＯＳＥＲ」――という言葉が常に私の胸にある。単なる勝者でなく、己に打ち勝つ勝者であり、敗者は力及ばずを潔く認めて、やがての勝者を目指す、練習の明け暮れはその実践であったと思う。

母校野球部は本県中等学校野球の黎明期から大きな役割を果たしてきたことは周知のことである。日本野球史上に残る幾多の俊才を、大学や社会人球界へと送り出してきた「古豪盛岡一」と呼ばれるゆえんである。また盛岡一高の野球を熱愛する多くの人々がいることも忘れてはならない。

盛岡一高野球部創設百周年記念誌は、本県の中等学校野球勃興期から今日までの克明な記録である。県内外の野球ファンにとっても、それぞれの母校球史と重ね合いながら、この記念誌をひもといてくれるだろうと思う。野球の持つ正しいスポーツマンシップが、ともすれば見失われがちな昨今、この記念誌は本来の野球の価値を知らせズポーツマンシップを守り抜く力となってくれるだろう。

記念誌に貫かれた盛岡一高野球部の精神が後輩に受け継がれ、さらなる時代を切り拓き、新しい時代を生む力となってほしい。母校野球部の亭々とそびえる大樹に寄りて、そのことを思う。

白堊野球部創設百周年にあたって



県立盛岡第一高等学校　学校長
原　　久　雄

野球部の創設百周年誠にお目出度うございます。本校の野球部の創設は本県の野球の歴史の始まりでもあり、この記念誌の発刊は大変意義深いことであります。

大正四年に現在の夏の甲子園大会につながる全国中等学校野球大会が始まるのに先立つこと十六年、明治三十二年七月に旧制第二高等学校のグラウンドにおいて盛岡中学と仙台中学の最初の対外試合が行われたことをもって野球部の創設としておりますが、国民的スポーツに成長した我が国野球の黎明期において本校野球部がその発展に寄与出来たことは大きな喜びであります。この創設以来、後に野球殿堂入りをした久慈次郎氏を初め日本の野球界の発展に尽くした多くの人材を輩出したことは本校野球部の誇りであり、如何に充実した活動を行っていたかの証左でもあり敬意を表する次第でございます。

忠実白彊・質実剛健の校訓は野球部においても脈々と受け継がれ、常に真摯で必死に打ち込む姿は多くの人々の胸を打つものだと思います。昨年秋に佐賀県に行った時の事ですが、列車を待っていた時、隣にいた年配の方から「どちらから来られました」と声をかけられました。「盛岡から来ました」と言うと、「あぁ、盛岡一高があるところですね。私は盛岡一高のファンなんですよ」という思いもかけない応えが返ってきました。昔からの野球ファンで、昭和四十三年の甲子園で準々決勝に進んだ時、そして昭和五十三年の報徳学園戦等を見て、その応援振りを含めてすっかり惹き付けられてしまったということでした。列車が来るまでの十分程の時間でしたが楽しくうれしい時間でした。「また甲子園に必ず出ますので応援してください」「楽しみにしています」という会話で別れました。

代々の本校野球部の諸兄が青春の情熱を一つの白球にかけて、夏は灼熱の太陽の下、冬は身を切るような寒風の中で厳しい練習を行い、甲子園を目指して頑張って来られました。今、現役の生徒も先輩達が営々として築いて来た伝統を背負い、厳しい練習を通して自らを鍛えている姿に若者らしい純真さと逞しさを感じます。卒業した生徒が「あの苦しい練習のことを思うと受験勉強など何と言うことはなかった」という話をしていましたが、たのもしい限りです。伝統あるユニフォームを着ている生徒の姿は誇らしげで輝いています。目標に向って必死に努力していることを実感している表れでもありましょう。野球部の一層の発展を祈念致します。



さらなる栄光の歴史へ

県立盛岡第一高等学校　白堊同窓会長
渡邊文正（昭和15年卒業）

「明治十三春なかば」に生誕したわが白堊校は、来年百二十周年を迎えることになりましたが、その前年に当たる本年、伝統ある本校硬式野球部が創設百年を数えることとなりましたことは、誠に喜ばしい限りであります。白堊同窓会としましても、この記念すべき歴史の区切りにあたり、会員一同心よりお祝い申し上げたいと思います。

歴史をひもときますと、明治三十二年、野球部が誕生し、仙台中学（現仙台一高）との交流試合がそのスタートであったと聞いております。以来、この百年の歴史の中で、本県の中等野球、高等学校野球界をリードすることはもちろんのこと、戦前の全国中等学校優勝野球大会における、大正六年と大正八年の相次ぐベスト4の活躍や、戦後昭和四十三年に全国高等学校野球大会ベスト8の活躍などを筆頭に、これまで甲子園出場九回を数え、弊衣破帽の勇猛さを誇る応援団とともに、枚挙の暇がないほどの勇姿を阪神甲子園球場で披露し続けてきたのであります。

硬式野球部のこうした活躍は、本校の校訓とする忠実自彊、質実剛健の理想の姿を具現してきたものであり、学習との両立に苦しみながら練習を重ねる選手諸君の姿は、いわば文武両道の象徴でもあります。またグラウンドで活躍する選手諸君のひたむきなプレーに、幾多の同窓生や在校生が勇気づけられてきたか、はかり知れないものがあると思われます。

残念ながら、全国大会に駒を進めるのは、昭和五十三年から数えて二十年余り途絶えてはおりますが、昨今でも、平成五年の全国高等学校選手権県大会における準優勝や、平成八年の秋季高校野球県大会における二十二年ぶりの優勝など、甲子園出場への夢を実現させてくれるのではないかと思わせる活躍は随所に見せてきております。そして県下の強豪校に伍して「古豪、強豪盛岡一高」の名が今後も永遠に続くことを確信しております。

ここに盛岡一高野球部創設百周年記念誌として「白堊熱球譜」が上梓されるにあたり、編集に携わった後援会諸氏のご労苦に感謝するとともに、硬式野球部が「さらなる栄光の歴史」を刻まれんことを祈念して挨拶といたします。



白聖野球部百年の軌跡

第一部―明治期

文・久慈勝浩



小野寺真平が用いたと思われるマスク。


増嶋文次郎先生。
盛岡中学で初めてベースボールを教えた。


多田綱宏校長。
増嶋先生に次いで本校生にベースボールを指導。


明治31年夏、旧制二高野球部員の指導を受けた
室岡翁三。

部創設前史

一、岩手県および白堊校への野球輸入について

「岩手県に野球が輸入されたのは、いつのことであるか」という問題については、次のように言われて来た。

明治九年、盛岡の岩手種馬所（現在の農林水産省東北農業試験場）の所長の一条牧夫が、種馬を仕入れるためにアメリカへ渡り、バットとボールを土産に持ち帰った、と。しかし、史料の裏付けが無いわりには、事実のように扱われてきた。

この説を吟味してみると、四つの疑問点が生じ、信憑性が乏しくなっていく。

第一に、一条が岩手種馬所の所長に就任したのは、明治三十四年だ。

第二に、明治九年に一条牧夫は渡米していない。

第三として、一つの新聞記事を挙げなくてはならない。昭和五年、『岩手日報』に連載された「盛岡中学校五十年の昔話」である。この記事によると、盛岡に野球が輸入されたのは、明治十七年頃とある。

第四に、盛岡中学の創立六十周年記念誌所収の「追憶漫談」（筆者は一戸三矢）という一文を挙げなければならない。一戸三矢はその中で、「盛岡、岩手県では野球の元祖であろうと思う」と記している。この点は、大いに注目すべきである。

以上の四点から、一条牧夫野球輸入説は否定せざるを得なくなる。

白堊校（盛岡中学・盛岡高校・盛岡一高の総称）での野球事始が、そのまま岩手県への野球伝来となりそうだ。

現在のところ、岩手県での野球に関する最古の記録は、盛岡中学の「日誌」である。明治十九年十月二十三日に行われた運動会に、「ベースボール」が一競技として登場している。

一戸三矢は「追憶漫談」で、増嶋文次郎・多田綱宏の両先生が、盛岡中学に野球を輸入した、と書いている。増嶋が多田より先に盛岡中学に在職した上で転出している。よって増嶋が最初の輸入者となる。

新聞記事「盛岡中学校五十年の昔話」には、「フットボールもベースボールもこの頃盛岡に輸入された」という記述があり、「この頃」というが明治十七年頃を指している。

この説を裏付けてくれるものがある。それは、



寮生の間でもベースボールは盛んであった。野球帽やバットが見られる（明治33年ごろ）。

盛岡中学野球部の部歌である。この歌の二番の歌詞に「勲を立てて十九年」という一節がある。この部歌は、明治三十六年に作られた。それから十九年前は、明治十七年。増嶋文次郎の盛岡中学への着任年と一致する。

以上のことから、明治十七年、盛岡中学の教師である増嶋文次郎が、中学生たちに野球を教えたのが、岩手県と白堊校における野球事始である、と推定される。

二、運動会に「ベースボール」が登場

盛岡中学で運動会が行われたのは、明治十九年五月九日をもって初めとする。同校の「日誌」に運動会の記録が出てくるのは、この時からである。

同年十月二十三日にも、運動会が開催された。その時の競技の一つに「ベースボール」がある。この記録が、現在のところ、岩手県の野球に関する最古の史料と言われている。

盛岡中学の「日誌」を基準とすれば、白堊野球は、既に百十年の歴史を超えていることになる。

三、白堊校野球部創設年について

白堊校に野球部が創設されたのは、いつのことであろうか。この問題については、決定的な史料が無いため、いくつかの説が紹介されてきた。

①明治三十五年説

この説は、一関中学（現在の一関一高）と初の対抗戦を行ったことに、部の起源をもとめた。

②明治三十三年説

これは、校友会発足に、部の起源をもとめた。

③明治三十二年説

これは、仙台一中（現在の宮城県立仙台一高）との対抗戦に、部の起源をもとめた。

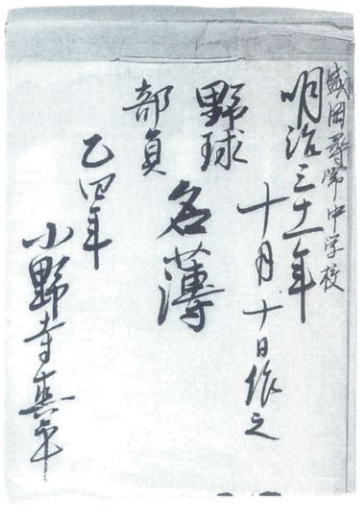
以上の三つの説が、今まで書籍に紹介されてきたものだ。

明治三十五年発行の本校の『校友会雑誌・第五号』の「野球部報」の中に、「回顧すれば歳を重ぬる茲に四」とある。このことから、「四年目」という解釈が成立する。つまり、明治三十二年の創設となる。よって、本年（平成十一年）が創設百年に当たるのである。

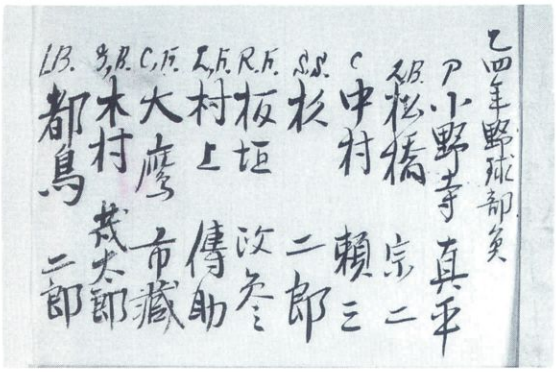
四、第二高等学校野球部員の指導を受ける

明治十九年、運動会の競技として登場した「ベースボール」は、明治二十年代になると、盛岡中学の生徒たちの間に、かなり広まっていく。

明治二十二年九月、東京で野球を覚えてきた多田綱宏が、第五代校長として着任。生徒たちに野



第1号選手の小野寺が書いた部員名簿（寮内の部員のものと推測される）。



小野寺が書いた部員名簿の第1ページ。

球を教えたことが、野球熱を高めることにつながった。当時は、グローブ・ミット・マスク・スパイクなどは無かった。捕手はホームベースのずっと後方に位置し、投手のボールをワンバウンドで受け止めていた。脚半に地下足袋か、素足で校庭を駆け回り、素手でボールを受け止めていた。

明治二十～三十年代は、全国的に中学校の増設が著しかった。そのため、明治三十年代になると、中学校や師範学校の間で、盛んに野球の対抗戦が行われる。

明治三十一年は、白墨野球にとって、特記されるべき年の一つである。この年の夏、公認の野球規則の下で、道具を使っての試合ができる野球を、盛岡中学の生徒たちは、初めて学んだ。その指導者は、旧制二高（現在の東北大学）野球部員。笠原寛美と馬場新一が来盛し、指導にあたった。

馬場と笠原の指導の下、グローブ・ミット・マスクを使うことを学んだ。それに伴って、捕手は投手のボールをダイレクトキャッチするようになった。指導を受ける以前は、捕手がホームベースから二～三間（約三・六～五・五メートル）離れて、投手のボールをワンバウンドで受け止めていた。

四チームを編成した上で、二人の指導を受けた選手たちは、次の人々である。

第一選手チームには、小原益遠がいて、技術は群を抜いていた。小原は、明治三十六年、第一回早慶戦に出場。早稲田大学の三塁手・四番打者として活躍する。

投手陣の顔ぶれを見ると、第二選手チームが柴内魁三、第三選手チームが室岡翁三、第四選手チームが目時政忠であった。柴内は後に、盛岡に私立盲唖学校を創設し、盲唖教育に生涯を捧げる。熊谷弥兵衛（後に巖と改名）は、第四選手チームの一塁手として参加。後に、第五高等学校（現在の熊本大学）でも一塁手として活躍する。

また、弓館芳夫が、スコアラーとして、この練習に加わっていた。後に早稲田大学のマネジャーになる弓館は、ジャーナリストとして、スポーツ評論にも健筆を振った人。小鰐（しょうがく）と号した。この時、盛岡中学の卒業生で、当時、旧制二高の野球部員だった青木周三が時々、来校し審判をした。

（注）仙台一中は、明治25年に宮城県尋常中学校として創立。同32年に宮城県中学校と改称。同37年に宮城県立仙台第一中学校（仙台一中）となる。現在の宮城県立第一高等学校。本編は便宜上、仙台一中で表記しました。



第1号選手の小野寺真平（1列目の左端）。

部創設以後

一、最初の対抗戦（対仙台一中戦）

正規の野球を学んだ盛岡中学は、腕前をためそうと他校と試合を始める。対抗戦時代の始まりである。

明治三十二年、仙台一中（現在の宮城県立仙台一高）と野球および柔道の対抗戦をすることになった。

そこで、旧制二高から塚本直をコーチとして招聘して教えを受けた。塚本の在盛中に、同校から馬淵雄五郎と山田浩三も来て、盛岡中学を指導した。

本校野球部が、初めて対抗戦を行った相手が、仙台一中であった。旧制中学同士の最古の対戦は、明治二十九年の水戸中学―宇都宮中学戦である。その試合のことが盛岡にも伝わった。本校の野球選手たちは、血を湧かせたに違いない。

おそらく、盛岡中学から仙台一中に挑戦状を送って、対抗戦を催すことになったのだろう。

試合は、同年七月（日は未詳）に、旧制二高グラウンドを借りて行われた。

盛岡中学と仙台一中の選手は次の通り。

【盛岡中学】
（投）小野寺真平
（捕）丹下　秀夫
（一）熊谷弥兵衛
（二）坂本　省三
（三）八重樫藤次郎
（遊）小原　益遠
（左）渡辺　静雄
（中）上田　耕一
（右）一条　友吉
（補）藤田松太郎
（補）中村　貞治
（マ）田中館　広

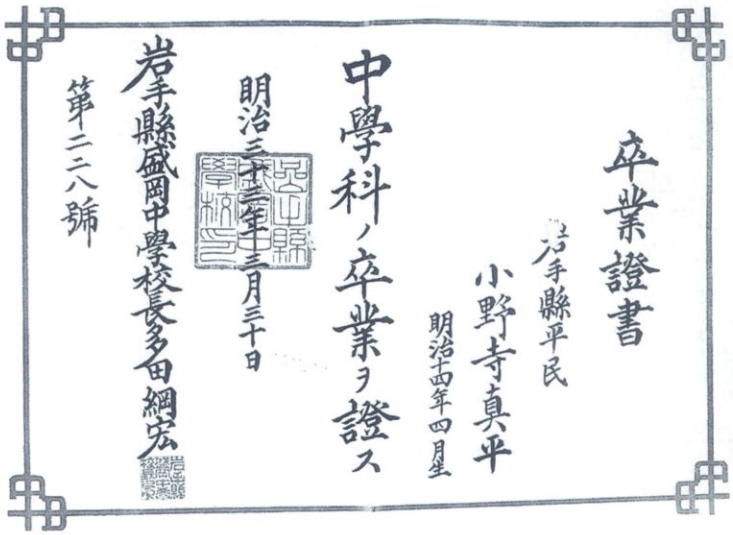
【仙台一中】
（投）半沢　常記
（捕）石川　三郎
（遊）伊庭野　薫

※史料が残っておらず、他の選手は不明。

盛岡中学の主将は、小原益遠だった。小原は、明治三十六年の第一回早慶戦に、後輩の獅子内謹一郎と共に出場。早稲田大学の三塁手・四番打者であった。4打数3安打の活躍。

現在のマネジャーは、明治から大正にかけて、「選手監督」あるいは単に「監督」と呼ばれていた。本校の初代マネジャーは、この遠征に加わった田中館広である。

試合は、三回あたりで、雨がひどく降り、没収試合（ドロンゲーム）となっている。スコアは不


卒業證書

岩手縣平民
小野寺真平
明治十四年四月生

中學科ノ卒業ヲ證ス

明治三十三年三月三十日

岩手縣盛岡中學校長多田綱宏

第二二八號

小野寺真平の卒業証書。

確かだが、1点差で本校リード中で中止と伝えられている。

二、第一号選手・小野寺真平

仙台遠征に参加した者で、最年長だったのが、五年生の小野寺真平であった。

小野寺は、明治十三年四月、現在の花泉町に生まれている。地元の尋常小学校を卒業した小野寺は、盛岡へ遊学。岩手師範附属小学校の高等科に進んだ。そして、明治二十八年、本校に入学。

自彊寮に入り、そこから中学校に通った。当時の寮は、ベースボール（註―まだ野球という訳語は定着していなかった）と柔道を中心に、スポーツ熱の中心であった。

それを裏づけるかのように、小野寺の筆による野球部員名簿が、現在も残されている。

有志が集って、仙台遠征の準備をした際、小野寺は投手に運ばれた。本校の第一号投手ということになる。

明治三十三年、小野寺は本校を卒業した。そして、仙台の旧制二高に入学している。

二高在学中だった明治三十五年のこと。七月十八日、本校と一関中学（現一関一高）の対抗戦を本校グラウンドで行なった。この時の審判をつとめたのが、小野寺真平である。当時の審判は、一人だけで担当した。

審判の時に用いたのではないかと思われるマスクが、現在も残っている。（明治期扉写真）

三、野球が二年余り中断

この試合が行われた後に、ある体操教師が、グラウンドに砂利を厚く散布した。そのため野球ができなくなり、二年余り中断。ほとんどやる者がなくなった。

明治三十三年五月、盛岡中学にとって最初の修学旅行が行われた。盛岡―好摩―花輪―尾去沢―大館―弘前―青森―函館―八戸―盛岡のコースであった。五月二十六日午後、函館において、函館中学（現在の北海道立函館中部高校）と野球の試合をしている。後に早稲田大学野球部のマネジャーになる弓館芳夫や同大学の三塁手で活躍する小原益遠らが、この修学旅行に参加していた。

この年の十月、「文ヲ講シ武ヲ修メ志気ヲ振イ交誼ヲ厚ウスル」ことを目的に、校友会が発足する。校友会は、文芸部と武芸部の二つに大別されていた。野球部は武芸部の一つとして、校友会に所属した。公認の部としてのスタートである。



初代主将の小原益遠（2列目中央の腕組みした人物）。3列目の左端は弓館芳夫。

四、全国中学球界の三傑

「岩手は野球王国であり、殊にその中心をなしたものは、名門盛岡中学である。盛岡は早く明治三十年代から、東海の愛知一中、関東の水戸中学とともに、全国中学球界の三傑といわれたものであり、伝統の古き、歴史の光輝に満てる、全国にあまり其の比を見ない名門である」。これは、昭和二十四年発行の『東北の野球』（半沢正二郎著）の一節だ。

盛岡中学野球部は、明治三十二年の仙台遠征から明治四十五年まで対抗戦を行った。県内のチームの他、県外のチームとも対戦。そして、「全国中学球界の三傑」の名に恥じない戦績をあげている。20勝3敗1無効試合。3敗の内訳をみると、中学のチームに負けたのは1回だけで、残りは上級の学校と対戦して苦杯をなめたものだ。

五、県内の対抗戦第一号（対一関中学戦）

明治三十一年、岩手県内で二番目の中学である一関中学（創立当初は一関尋常中学、明治34年に一関中学と改称。現一関一高）が創立された。明治三十五年、その一関中学が、実力を試そうと思い、盛岡中学に挑戦状を送ってきた。

謹啓

向暑の候各位益御清福御勤学の段奉大賀候陳れば生等修学の余暇に於て運動がてら野球練習相試み候へ共入門以来日猶浅く加ふるに弊地には由来適当の指導者無之斯道の為め慊焉至極に存居候就ては来る夏休暇をトし同志相率ゐて御錦地に参向の上親しく各位の御指南を仰ぎ候て生等日頃の慊焉を払ひ併せて我校運動場裡に多少の新生気を相添へ申度素意に有之候未熟の飛球を相手に貴重なる日子を潰させ申候事各位に取りては御迷惑千万に有之べく候へ共枉げて生等の微志を容し宜敷御指教被成下度偏に奉願上候右不取敢得貴意度早々頓首

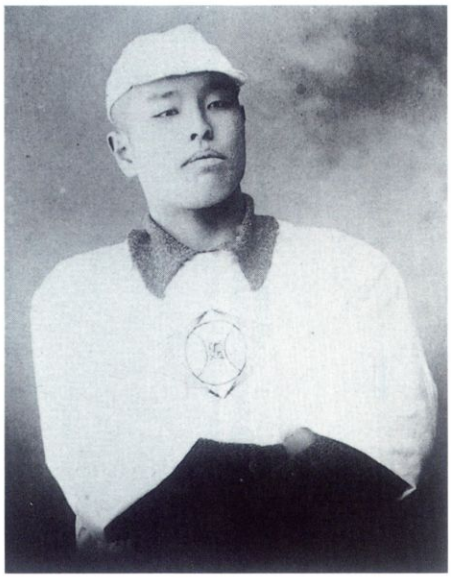
七月一日

一関中学校生徒有志者

盛岡中学野球部選手御中

（原文のまま）

この挑戦状が、盛岡中学野球部の活動を復活させるきっかけとなった。かつてグラウンドに散布された砂利が、野球をするのに差し支えない程度になっていたこともあり、挑戦を受けることになる。そして、岩手県内の中学同士の対抗戦第一号が実現するのである。


明治35年、対一関中学戦に出場した丹下秀夫（キャッチャー・4番打者）。


明治35年、対一関中学戦に出場した一条友吉（ライト・1番打者）。

七月十八日、盛岡中学グラウンド。審判は小野寺真平である。一関中学が、初回に2点を入れて気勢をあげたが、盛岡中学は、毎回得点を重ね、32―2で圧勝した。

盛岡中学	5	5	4	1	2	5	3	1	6	32
一関中学	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2

両校のバッティング・オーダーは次の通り。

【盛岡中学】

（右）一条友吉
（投）獅子内謹一郎
（遊）菊池　孝三
（捕）丹下　秀夫
（二）稲村　賢三
（中）小野崎正三
（一）小山田舜二
（三）小原多三郎
（左）小瀬川浩策

【一関中学】

（左）日野　和
（捕）古館純一郎
（遊）花坂　佐助
（投）藤波　麒
（一）渋谷　蕃
（二）及川清太郎
（中）菊池徳太郎
（三）村上雅太郎
（右）小沢利右衛門

盛岡中学では、試合の一週間前ぐらいまで投手が決定しなかったので、試合やキャッチボールをしてみた。その結果、肩が痛まなかったのが獅子内一人だけだったため、捕手しかやったことのない彼が、投手として出場することになった。獅子内は、明治三十六年、第一回早慶戦に出場。早稲田大学の中堅手・五番打者として活躍する。左きの捕手であった丹下秀夫は、野球ルールに詳しい選手だったので、他の選手たちから頼られていた。小原多三郎（後に小泉と改姓）は、後の盛岡市長。

一関中学は、翌三十六年にも、対抗戦を申し込んできた。

これに対し、盛岡中学は、先輩の大鷹市蔵を介して、平野正朝にコーチを依頼。平野は、当時、旧制一高の主将兼一塁手であった。

七月二十日、盛岡中学グラウンド。審判は守山恒太郎であった。守山は、旧制一高の投手だった。

イニングスコアとバッテリーは次の通りである。

盛岡中学	2	2	1	4	1	3	9	5	0	27
一関中学	2	7	1	0	1	4	1	0	0	16

（盛）中島米八―久慈忠
（一）渋谷蕃―小沢利右衛門

盛岡中学の主将は、一塁手の小山田舜二。左翼手瀬川惣次郎は、盛岡一高野球部後援会会長をつとめた瀬川正三郎の兄である。後に盛岡駅長となった人物である。

盛岡中学の勝利を喜びながら、平野正朝は東京に戻る。その際、平野は野球部の歌を作詞して残していった。

（野球部部歌）



明治36年1月、本校の生徒控所にてのキャッチボール風景。右は瀬川惣次郎で、左は菊池孝三。2人とも足袋をはいている。



明治36年、対一関中学戦に出場した久慈忠（キャッチャー・7番打者）。

一、黄金花咲く陸奥の
杜陵の城に籠りつつ
螢に雪にいそしみの
暇もなき迄六百の
健児が立つる其勲
中に雄々しき野球部や

二、不来方城下に焼くがごと
砂を踏てバット振り
岩手の山の山颪し
雪を払いて球競ふ
寒さ暑さにたゆみなき
勲を立てて十九年

三、名も一の関中学が
去歳の怨に報いんと
鍛へに鍛へし練習の
寄する鋒先繁けれど
物の見事に追ひ退けし
十一点の勝を見よ

四、思へば楽し青年の
理想の夢路清ければ
思へば嬉し若人の
たぎれる血汐熱ければ
立てし操は其胸に
止し常磐の松の実や

五、岩手の山の峯高く
北上川の水清し
そこに吾等の身を鍛へ
此所に吾等の膽洗ふ
秀麗の地に偉人あり
振へ杜陵の健男児

六、対抗戦に連戦連勝

明治三十七年、遠野中学より挑戦状が届けられる。遠野中学は、明治三十四年の創立。現在の遠野高校である。挑戦状の文面は、次の通り。

（前略）

今や神州青年か文武両道に励み申すべき秋に有之殊に山秀で水清らかなる夏のはじめ鬼とも組まむ野球選手が妙算奇略胸中百万の貔貅を躍らし健腕三尺の秋水をふるうて攻城野戦ノックの響を雲井高くとゝろかし錬磨幾回以て他日を待つべきの好時機と奉存候依りて来月十九日を期し御校々庭内に於て野球対抗演習致し度存じ候間御許可の程偏に願上候素より天晴れ東北の覇権を握り旗幟翩々飜って威風堂々さしもにかたき金城鉄壁を守る勇士諸君と山又山の一小盆地に蟄蹙せる井底の狂蛙おおうもいつれも初陣の乳臭き雑兵原か対



明治37年の対抗戦に出場した小笠原清七（キャッチャー）。主軸打者であった。

抗演習とは嗚呼の至り実は長へに弟子の礼をとり賢明なる御校撰手諸君の御高示を賜はりて日頃の望を達し度存し候間何卒不案内なる小生等の手を取り給ひ御垂教の段幾重にも切望仕候（下略）　恐惶謹言

六月二十日

遠野中学校野球部

盛岡中学校野球部御中

（原文のまま）

七月十九日、盛岡中学グラウンドにて試合を行った。審判は獅子内謹一郎。イニングスコアとバッティング・オーダーは次の通り。

遠野中学	0	1	0	0	0	5	3	0	0	9
盛岡中学	5	0	4	0	4	3	3	8	×	27

【遠野中学】

（二）昆野恒太郎
（左）佐々木弘一
（投）河野　善作
（三）鶴野周太郎
（遊）高橋　重郎
（中）阿部徳之助
（捕）千葉貞次郎
（一）多田　金蔵
（右）石懸　袒淳
（二）長岡六之助

五日後の七月二十四日には、一関中学と対戦。会場は盛岡中学グラウンドだった。獅子内謹一郎が審判。

イニングスコアとバッテリーは次の通り。

盛岡中学	2	5	2	1	3	0	0	3	6	22
一関中学	0	0	0	2	1	0	3	0	0	6

（盛）箱石康哉―小笠原清七
（一）新田政樹―小沢利右衛門

十月三十日には、福岡中学（現在の福岡高校）のグラウンドを借りて、八戸中学（現在の青森県立八戸高校）と対抗戦を行う。審判は對馬小次郎と福田四男が、交代で担当した。イニングスコアとバッティング・オーダーは次の通りである。

八戸中学	0	0	3	0	0	0	1	0	0	4
盛岡中学	0	0	3	1	2	0	2	5	×	13

【八戸中学】

（左）長谷川　寛
（中）苫米辺四楼
（一）細越　岩吉
（捕）宇野　礼七
（右）鈴木　精一
（二）高山　栄
（遊）佐々木高三
（投）箱石　康哉
（遊）菊池　孝三
（右）嶋田小二郎
（三）野々村　納
（捕）小笠原清七
（中）菊池彦一郎
（左）瀧川清十郎

【盛岡中学】

（遊）菊池　孝三
（三）野々村　納
（左）川村　四郎
（捕）小笠原清七
（投）箱石　康哉
（右）嶋田小二郎
（一）横沢栄次郎
（中）瀧沢清十郎



明治37年10月の早慶戦。小原益遠（3列目左より4人目）

（投）原子　武麿　（一）横沢栄次郎
（三）高橋　貫一　（二）長岡六之助

この年の対抗戦から、野々村納が出場。後に早稲田大学へ進学し、遊撃手として活躍する。

年が改まって、明治三十八年。

七月二十四日、盛岡中学グラウンドにて、大館中学（現在の秋田県立大館鳳鳴高校）と初手合せ。審判は獅子内謹一郎。イニングスコアとバッテリーは次の通り。

盛岡中学	1	2	2	1	2	3	0	2	0	13
大館中学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

（盛）野々村納―横川次郎
（大）奈良直太郎―九嶋彦吉

二日後の七月二十六日には、遠野中学が来校。盛岡中学ＯＢで遠野出身の小原益遠を招聘し、遠野中学はコーチを受けた上で、遠征をしてきた。獅子内謹一郎・小原益遠の複審。イニングスコアとバッテリーは次の通り。

盛岡中学	3	0	2	0	0	2	2	1	0	10
遠野中学	1	0	2	0	0	0	0	0	0	3

（盛）野々村納―横川次郎
（遠）河野善作―千葉貞次郎

翌明治三十九年。前年に続き遠野中学が遠征してきた。七月二十五日、盛岡中学グラウンドで対戦。審判は小原益遠と獅子内謹一郎が、交代で担当した。イニングスコアとバッテリーは次の通り。

遠野中学	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
盛岡中学	1	0	3	4	3	1	1	2×		15

（遠）佐藤総吉―及川義三
（盛）野々村納―横川次郎

八月一日、盛岡中学野球部は、仙台二中（現在の宮城県立仙台二高）と、同校グラウンドにて対戦する。明治三十二年に仙台一中と対抗戦を行って以来の仙台遠征であった。審判は獅子内謹一郎。九回表、盛岡中学の攻撃、無死、走者一・二塁の時、雨が降り出し、試合終了となる。イニングスコアとバッテリーは次の通り。

盛岡中学	3	0	0	3	0	1	0	0		7
仙台二中	0	0	1	0	0	0	0	0		1

（降雨のため九回表途中で試合終了）

（盛）野々村納―横川次郎
（仙）高崎懿―湯原精一

年が改まって、明治四十年。

遠野中学が、三年連続の盛岡遠征をする。獅子内謹一郎が審判。八月四日に盛岡中学グラウンドで行われた。イニングスコアとバッテリーは次の通り。



明治39年8月、対仙台二中戦の選手たち。胸のマークは、「TORYO（杜陵）」を用いていた。

遠野中学　１１０　０００　０００　２
盛岡中学　１０１　０１０　３０×　６

（遠）佐藤総吉―及川義三
（盛）野々村納―野坂直治

年は、二年後の明治四十二年に移る。

八月五日、盛岡中学グラウンド。三たてをくらっていた遠野中学が、対戦を求めてきた。審判は獅子内謹一郎。イニングスコアとバッテリーは次の通り。

遠野中学　０００　０００　０００　０
盛岡中学　１００　００１　１１×　４

（遠）大槻貢―吉田三郎
（盛）中村俊二―菊池八十吉

七、盛岡中学野球部、初の苦杯

対抗戦に連戦連勝の盛岡中学だったが、明治四十二年八月七日、初めて苦杯をなめることになった。会場は盛岡中学グラウンド。対戦相手は大館中学であった。獅子内謹一郎が審判。イニングスコアとバッテリーは次の通りである。

大館中学　１００　０００　０００　１
盛岡中学　０００　０００　０００　０

（大）渡辺準二―大阪能治
（盛）中村俊二―菊池八十吉

明治四十三年、遠野中学が来校。八月一日、盛岡中学グラウンドにて対戦する。審判は獅子内謹一郎。イニングスコアとバッテリーは次の通り。

遠野中学　０００　０２０　０００　２
盛岡中学　０００　６００　００×　６

（遠）川島民蔵―向井田
（盛）中村俊二―菊池八十吉

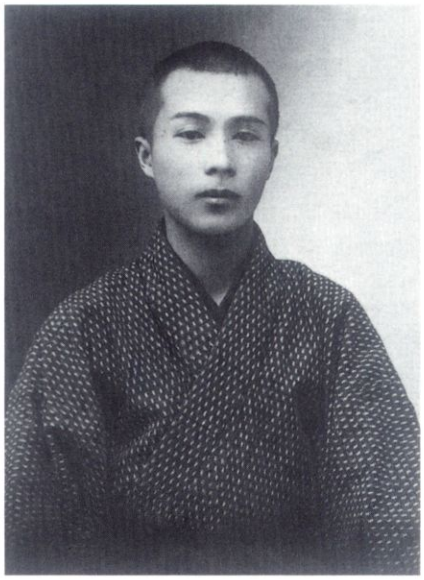
遠野中学の川島は、盛岡中学三年生の時、遠野中学に転校した。後に早稲田大学の投手として、球史に名を残す。この当時の盛岡中学エースは中村俊二。後に明治大学の投手として活躍する。後年、東都球界で名を成す二人が投げ合った一戦である。

八、早稲田大学第二軍と熱闘15回

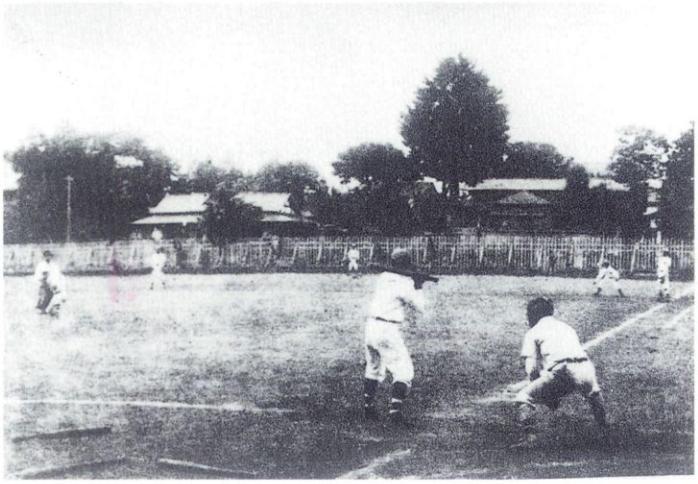
明治四十三年夏、早稲田大学野球部の第二軍選手たちが、高杉龍蔵部長の引率の下、関東・東北地方へ遠征を行った。盛岡中学が、その遠征チームと対戦したのは、八月三日。会場は盛岡中学グラウンドだった。審判は獅子内謹一郎。イニングスコアとバッティング・オーダーは次の通りである。

盛岡中学　０００　０００　０００　０
早大二軍　０００　０００　０００　０

（延長十五回）
０００　０００　０００　０
０００　００１×　１



明治40年、対遠野中学戦に出場した石川正（レフト・8番打者）。



明治43年8月、対早大二軍戦。投手の背後に審判の獅子内謹一郎がいる。

【盛岡中学】

（三）小本　五郎
（捕）菊池八十吉
（投）中村　俊二
（右）藤原
（左）山懸　義信
（中）加藤
（遊）中津山栄一
（二）菊池
（一）中島

【早大二軍】

（中）八幡　恭助
（二）弓削　徳次
（三）大町　政隆
（右）小野　初治
（捕）増田稲三郎
（遊）岡　克巳
（一）井上　芳夫
（左）望月　重雄
（投）宮代四之助

早稲田大学第二軍は、遠征の感想を雑誌『運動世界』に掲載したが、十月号に、盛岡中学に対する評が載っている。

「やはり光栄ある歴史を有する校とて、遠征中第一の強チームであった、今年は昨年大館中学に敗をとった復讐にでかくる事とて非常な練習であった、仕合は十五回まで双方とも一点の得点だもなく、吾軍十五回目の裏に二死者の後敵のエラーにて出て、続いて立たるバッタアの猛打により一点を収め遂に勝利に帰した、殊に三塁手小本君遊撃手中津山君は、技倆すべての点に於て非常に卓越して居つた」（原文のまま）

参考までに、早稲田大学第二軍と対戦した岩手県内のチームの戦績を記す。

▽早大二軍　10―2　エゾッコ倶楽部
（このチームは、一関中学ＯＢのチーム）
▽早大二軍　4―0　一関中学
▽早大二軍　4―0　岩手倶楽部
（このチームは、盛岡中学出身者を中心にして構成したチーム）
▽早大二軍　10―4　遠野中学
▽早大二軍　14―1　福岡中学
▽早大二軍　8―0　福岡形水会
（このチームは、福岡中学の出身者を中心としたチーム）

これらの戦績を考え合わせると、盛岡中学のチーム力が、いかにレベルの高いものであったかがわかる。

九、東北地方北部遠征

この年の夏休みを利用して、盛岡中学は、東北地方北部の中学と対抗戦をするために、遠征を行った。

八月七日、福岡形水会と対戦。会場は福岡中学グラウンドと推測される。審判は金矢光一。イニングスコアは不明だが、19―1で盛岡中学が勝った。両

チームのバッテリーは次の通り。
(盛)中村俊二―菊池八十吉
(福)一条―小向

八月十日には大館中学グラウンドにて、同中学と対戦。増田稲三郎と島田複二郎の複審の下、プレイボール。出場選手名は不明だが、イニングスコアは次の通りだ。

盛岡中学	0	2	0	0	0	0	2	0	4
大館中学	0	0	0	0	0	0	1	1	2

十六日には、黒沢尻軍と試合をした。このチームは、一関中学の現役生と卒業生の混合チームではないかと思われる。会場は不明。金矢光一が審判をつとめた。イニングスコアは不明だが、盛岡中学が5―1で勝利を収めた。両チームのバッテリーは次の通り。
(盛)中村俊二―菊池八十吉
(黒)今野―橘

十、第二高等学校と対戦

年が改まって、明治四十四年。
八月六日午後、遠征してきた大館中学と対戦した。会場は盛岡中学グラウンド。獅子内謹一郎が審判だった。六回裏が始まる前より雨が激しくなり、かつ大館中学の投手の疲労がひどく、試合を続行できないと申し出てきたので試合を終えた。イニングスコアとバッテリーは次の通り。

大館中学	0	0	0	0	0	0	0		0
盛岡中学	0	0	1	1	1	×			3

(降雨などの理由で六回裏で試合終了)
(大)工藤―簾藤
(盛)中村俊二―帷子一郎

十月十一日には、盛岡中学野球部の〝育ての親〟と言うべき旧制二高と初手合せをした。盛岡中学グラウンドが会場。審判は、球審が野々村納、塁審が三鬼隆であった。イニングスコアとバッテリーは次の通りである。

第二高校	0	0	0	0	3	0	2	0	5
盛岡中学	0	0	0	0	0	0	0	1	1

(二)高久謙吉―吉田実
(盛)中村俊二―帷子一郎

旧制二高の三塁手は本校出身の山口吉郎(後に俳人。青邨と号す)。母校の後輩たちと戦ったことになる。

十一、第一回東北六県中学連合野球大会

東北地区で初めて地方大会が開催されたのは、明治四十四年のこと。「第一回東北六県中学連合野球大会」が、その大会だ。主催は、旧制二高尚



明治44年、当時5年生部員だった瀬川正三郎（上）。

志会野球部。三鬼隆（本校出身。後に新日本製鉄の前身である日本製鉄の社長になる）ら野球部員が奔走して、この大会を創設した。大会の開催を知って参加の申し込みをしたのは、盛岡中学・一関中学・仙台一中・仙台二中・東北中学（現在の東北高校）・相馬中学（現在の福島県立相馬高校）の六校であった。

大会は、十一月三日から五日まで、仙台市片平丁の旧制二高グラウンドを会場として開催された。見物人に対する規制も定められていたようで、当事の『河北新報』に、次のような記述が見られる。「拍手以外の弥次は厳禁且つ袴又は洋服着用者に限り入場を許し競技開始前二十分に閉門する」。こういった点は、現在と趣を異にしている。

大会第一日目と第二日目の試合の結果は、次の通り。

相馬中学	1	4	0	0	1	0	1	2	10
東北中学	2	1	0	0	0	0	0	1	5

一関中学	2	0	0	3	4	1	0	0	10
仙台二中	3	2	0	0	3	0	0	0	9

仙台一中	0	0	0	0	0	0	3	0	3
一関中学	0	1	1	0	0	0	1	1	4

大会最終日の五日は、開会以来の好天気であったことに加え、〝東北中学球界の大立者〟と呼ばれていた本校が登場するというので、開期中一番の盛況で、見物人も二千人を超えた。午前中には、盛岡中学対仙台二中の一戦が、田村栄一と田辺文之助の複審の下で行われた。この当時は、球審と塁審が各一名の複審制（二人審判制）であった。両校のイニングスコア、バッテリーは次の通りである。

盛岡中学	0	1	0	0	3	0	1	0	2	7
仙台二中	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1

（盛）山口武男、中村俊二―帷子一郎

（二）石垣―斎藤

【ゲーム】仙台二に先取点を許した盛岡は、二回に同点、更に終盤にかけて加点、二回から代わったエース中村（俊）が、仙台二打線を無安打に抑えて決勝した。

同点で迎えた五回、盛岡は、安打で出塁した小川が盗塁、遠山の犠打で生還し1点。四球と安打で出塁した山口（武）、中村（俊）が、適失に乗じて生還。七、九回にも加点した。

仙台二は初回、盛岡の先発山口（武）を攻め1点を得たが、代わった中村（俊）の前に沈黙し、なすすべがなかった。

午後、吉田圭一と入交格の複審の下で、この日二試合目の盛岡中学と仙台一中との間で試合が行われた。見物人は、午前より増え、約三千人だったといわれる。イニングスコア、バッテリーは次の通りである。

盛岡中学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
仙台一中	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

（延長十一回）

	0	2									2
	0	0									0

（盛）中村俊二―帷子一郎
（仙）砂沢―三上

【ゲーム】盛岡中村(俊)、仙台一砂沢の投げ合いで無得点のまま、今大会初の延長戦に入った。

盛岡は十一回、一死一、三塁で一走遠藤が狭殺される間に三走山口(弘)が本塁を突き1点。更に、中越え二塁打で遠藤が生還し、ダメ押しの1点を加えた。

仙台一は、一、六、八回に走者を出しながら後続を断たれ、盛岡中村(俊)を上回る三振16を奪う砂沢の好投に報いることができなかった。

この試合をもって、大会は幕を閉じた。トーナメント方式でもリーグ戦方式でもない、ちょっと変わった方式で行われた。そのため、優勝校は無く、岩手勢（盛岡中学・一関中学）が各2勝、相馬中学が1勝を挙げて終了した。

第一回東北六県中学連合野球大会は、東北地方の中学球界にとっては、初の地方大会という意義深いものだったが、それと同時に、日本球界にとっても意義深いものがあった。それは、我が国の学生野球、アマチュア野球のグラウンド・マナーとして定着している「試合前の挨拶」のルーツが、この大会にあるということだ。

この大会において、試合開始前、対戦する両チームが審判を中心として脱帽し、礼を交わすことを始めた。これが、日本の野球で行われた最初の挨拶といわれており、旧制二高野球部員の三鬼隆らが、その考案者なのである。

この年の十二月、京都帝国大学（現在の京都大学）主催の第一回高等学校野球大会に、第二高等学校野球部は参加。同校の野球部長だった古川邦彦（同校教授）が、試合前の挨拶を提案し、同大会でも採用された。

この挨拶は、大正四年、第一回全国中等学校優勝野球大会が開催されるにあたり、「試合前の礼式」として採用される。そして、今日まで連綿として受け継がれてきたのである。

十二、農学校・盛岡高等農林学校と対戦

年が改まって、明治四十五年。

七月二日、盛岡中学グラウンドにて、盛岡農学校（現在の盛岡農業高校）と対戦した。審判は中村俊二。盛岡中学は、小川時雄のソロホームランを含む9安打を放ち、盛岡農学校に大勝した。

イニングスコアとバッテリーは次の通りである。

盛岡農学	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡中学	0	1	0	4	1	1	0	0	× 7

（農）石田―和高
（中）山口武男―小川時雄

盛岡中学の左翼手は葛誠四郎。主将でもある葛は、後に旧制二高野球部に入った。

七月十八日には、盛岡高等農林学校（現在の岩手大学農学部）と試合を行った。会場は盛岡中学グラウンド。球審は野々村、塁審は菅野であった。

イニングスコアとバッテリーは次の通り。

盛岡中学	1	0	0	2	1	1	3	2	0 10
盛岡高農	0	0	2	0	0	0	0	0	1 3

（中）山口武男―小川時雄
（農）菊池―神

七月三十日、明治天皇が崩御された。

翌三十一日、大正と改元。逝去のため、一年間、野球の対抗戦・地方大会は行われなかった。

ユニホームのロゴマーク

明治三十年代後半は、校章の松葉を配したマーク付きユニホームであった（通史の明治期の写真参照）。その松葉マークから、盛岡の古い呼び名でもある「ＴＯＲＹＯ（杜陵）」に変わる。鳴尾球場に初出場した時は、ＴＯＲＹＯであったため、野球ファンからどこの県の代表校か理解されなかったという。

その二年後、大正八年の全国大会では「ＭＯＲＩＯＫＡ」を用いた。ＭＯＲＩＯＫＡの文字も時により大きかったりで、字体デザインが少しずつ変化した。

九回目の甲子園出場時（昭和五十三年）は、アイボリー一色のユニホームであった。平成七年夏に元の純白のユニホームとし、ＭＯＲＩＯＫＡの字体デザインを変えたのが、最近の変更である。時代を経ても変わらぬのは、ＭＯＲＩＯＫＡの文字が早稲田カラーのえんじ色であり続けていることだ。

盛岡商業と統合された盛岡高校時代も、早稲田カラーは守られている。



明治35年、対一関中学戦に出場したナイン。(内丸校舎内にて)



明治38年に活躍した野球部員。(1列目右端　川村四郎)

明治期に活躍した部員

◆明治三十三年卒業
小野寺真平
田中館広

◆明治三十四年卒業
小原益遠
室岡翁三
弓舘芳夫
渡辺静男

◆明治三十五年卒業
上田耕一
熊谷巖(弥兵衛)
坂本省三
両川(八重樫)藤次郎
板垣征四郎

◆明治三十六年卒業
岩動康治
一条友吉
小野崎正三
小泉(小原)多三郎
小瀬川浩策
獅子内謹一郎
瀬川惣太郎

丹下秀夫
中村貞治
目時政忠

吉田与平治
瀬川壮太郎
藤田松太郎
小山田舜二
瀬川惣次郎

◆明治三十七年卒業
稲村賢三
久慈忠
駒ケ嶺哲
田沼甚八郎
対馬小次郎
中島米八

◆明治三十八年卒業
村井一郎
泉山専太郎
小笠原清七
滝川清十郎

◆明治三十九年卒業
川村四郎

菊池孝三
長岡六之助

◆明治四十年卒業
内田直
金矢光一
島田小次郎
二見直三
平井直衛
伊藤憲二
野々村納
福田哲三

◆明治四十二年卒業
野坂直治
皆川弘一

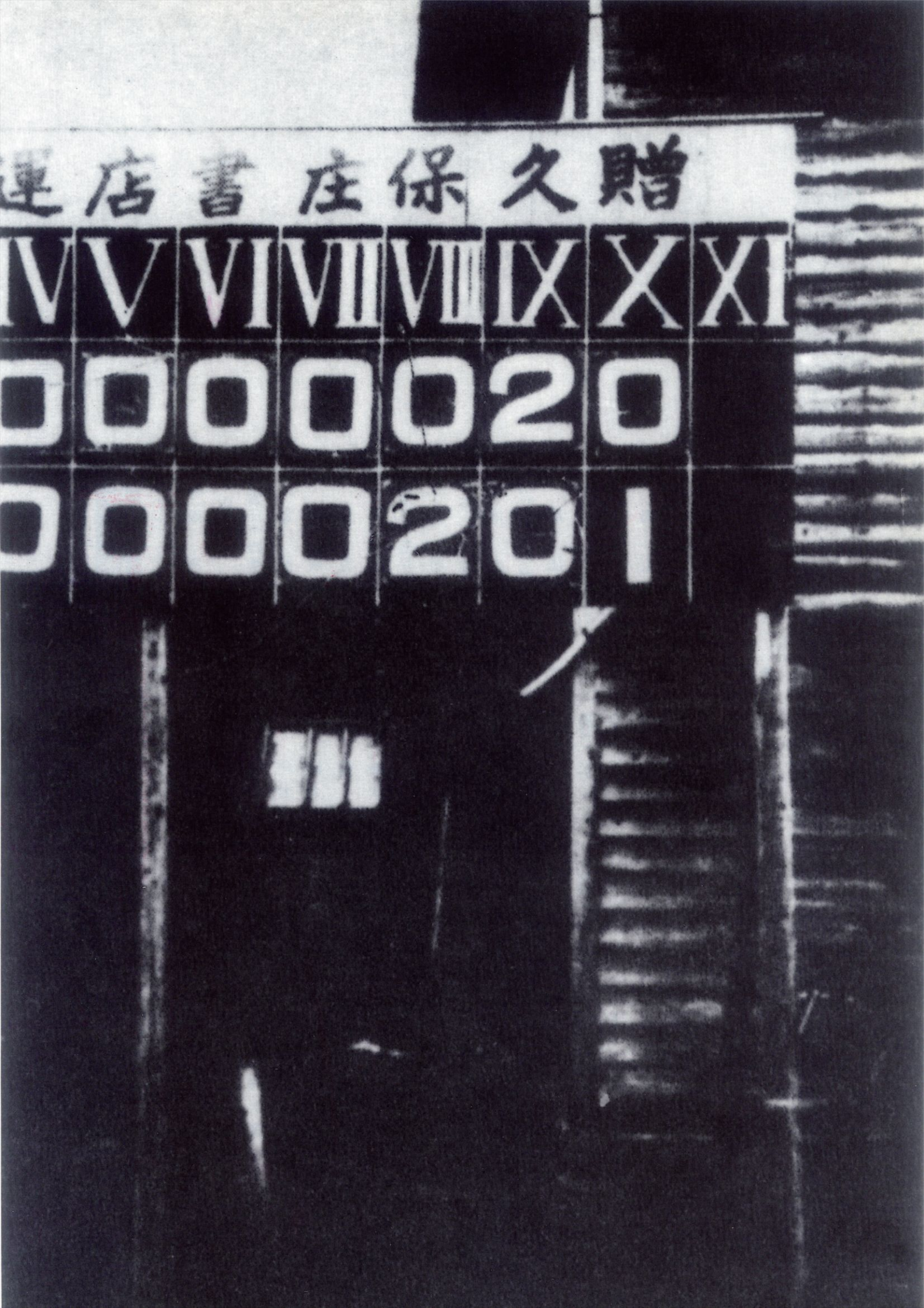
◆明治四十三年卒業
石川正
菅野五郎
佐藤緑郎
藤沢金平

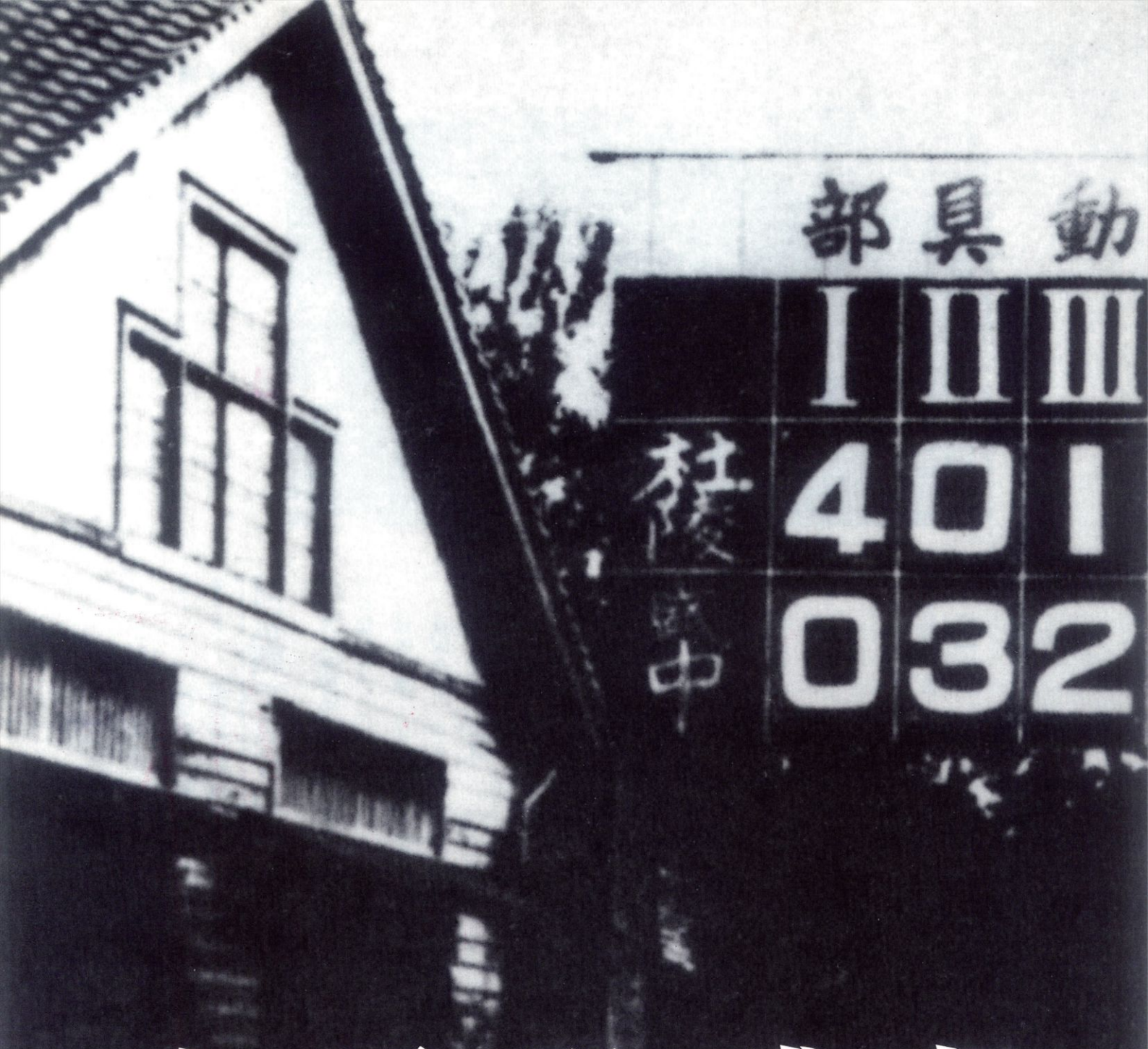
◆明治四十四年卒業
小本五郎
川村松助

菊地八十吉
中津山栄一

◆明治四十五年卒業
駒ケ嶺秀
瀬川正三郎
中村俊二
中村竜雄
平井直衛
山懸義信
山口弘
米内貞斉

◆大正二年卒業
遠藤政次郎
小笠原政美
小川時雄
帷子一郎
山口武男


贈久保庄書店運
IV V VI VII VIII IX X XI
0 0 0 0 0 2 0
0 0 0 0 2 0 1



白堊野球部
第二部—大正期
百年の軌跡

初代上田校舎校庭の一角にあったスコアボード



大正2年、東北六県中学連合野球大会。本校対一関中学の一戦。

大正2年[1913]

◆1月　盛岡劇場が誕生
◆2月　盛岡商業学校(現盛岡商業)が創立

対抗戦で負け知らず

八月に遠野中学と対抗戦をした。10―5で本校が快勝した。

▽遠野中学　0 0 2　1 0 0　0 0 2　5
　盛岡中学　6 0 0　0 0 0　1 3 ×　10
（遠）菅沼―松橋
（盛）石井(余)―山口

本校エースの石井余一は、速球派だったと伝えられている。同じ学年に詩人・宮澤賢治がいた。

この年の秋、東北六県中学連合野球大会が、2年振りに開催された。当時の史料が残っておらず断定はできないが、8校が参加したと伝えられている。

▽盛岡中学　0 0 0　0 0 2　2　4
　仙台一中　0 0 2　0 1 1　―　4
（七回裏途中で日没コールド）
（盛）石井(余)―山口
（仙）小松―長岡

▽盛岡中学　10―6　一関中学
（イニングスコア不明）
（盛）細越―山口
（一）鈴木―小野寺

▽盛岡中学　1 0 1　0 0 0　4 0 2　8
　仙台一中　0 0 0　0 0 0　0 0 1　1
（盛）細越―山口
（仙）小松―長岡

トーナメント方式でも総当たり方式でもない大会であった。本校は3試合を行い、2勝1引き分けの戦績だった。

本校投手の一人である細越健は、技巧派の投手だったと伝えられている

この年の5年生部員

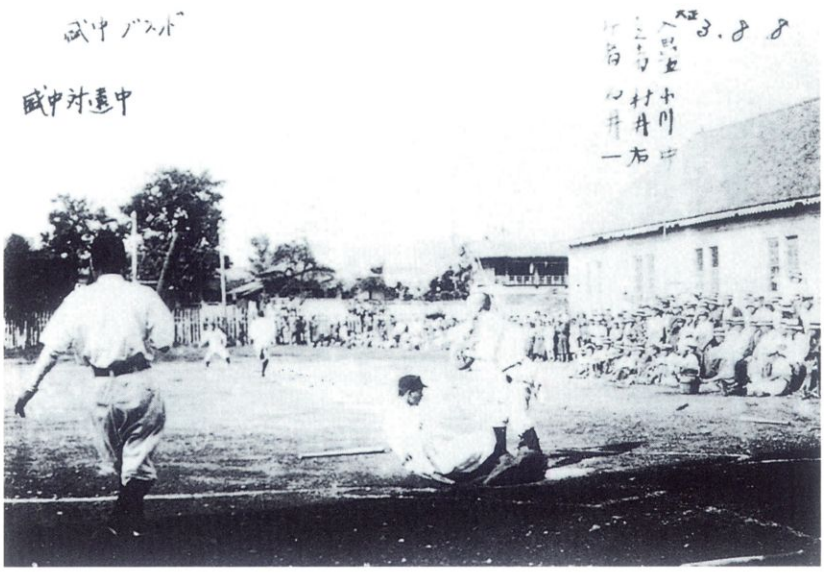
衛生兵　学
茂　勝貞雄要
山慈原川沢舘口川
内久桑瀬長谷山荒(石井)
地
余
郎蔵二一保一

大正3年[1914]

◆8月　松尾鉱山創業
◆10・30　新聞人・佐藤北江(本校出身)が死去

岩手師範に2勝す

一関中学および遠野中学と対抗戦を行った。共に八月のことである。



大正3年8月、対遠野中学戦。本校が4―3で勝った。

▽一関中学　0 0 0　0 0 0　1 0 0
盛岡中学　0 0 0　0 0 1　1 0 ×
（一）菅原―小野寺
（盛）細越―小田島

▽遠野中学　2 0 1　0 0 0　0 0 0
盛岡中学　0 0 3　0 1 0　0 0 ×
（遠）菊池―小原
（盛）細越―小田島…〔推測〕

この頃になると、本校と県内他校との間には、あまり戦力差が無くなって来ている。対一関中戦は接戦で、安打数も本校3に対し、一関中は1。また、対遠野中戦の安打は、本校が3で、遠野中が2であった。

秋（月日は不明）には、岩手師範学校（現岩手大学教育学部）と試合をした。スコア、出場選手名などは不明であるが、2試合対戦し、本校がいずれも勝利を収めている。

この年の3年生部員

己　克　郎
内　八　五　介
島　公　健
藤
越

梅
小田
沢
細

大正4年［1915］

◆3月　県立農事試験場が全焼
◆11月　県初の常設映画館が盛岡に開館

全国大会の開催知らず不参加

明治後期から大正初めにかけて、全国各地で中等学校野球が、ますます盛んになっていった。そんな状況下、全国的な中等学校野球大会を開いてはどうか、という声が高まっていく。

その結果、この年より「全国中等学校優勝野球大会」の開催が決定した。開催発表は七月。そのため予選を十分に行うことができないまま全国大会に至った。本県のチームは、この開催を知らず、予選にも参加できない有様であった。

「全国中等学校優勝野球大会」は、昭和二十三年になって「全国高等学校野球選手権大会」と改称され、現在に至っている。

平成十年には、第80回記念大会を迎えた。その記念として特別に、開会式では第1回大会から80回大会まで予選に〝皆勤〟出場を成し遂げている15校のキャプテンが、55地区代表校の先頭を切り特別入場行進の栄誉に浴した。本校も第1回大会の開催を知っていたならば、この入場



大正5年のライオン団。久保田禎・深澤省三・荒木田家寿の顔が見られる。

行進に参加できたのである。

本校はこの年、一関中学と対抗戦を行っている。

▽一関中学　000　001　000　1
　盛岡中学　200　003　00×　5

(注)『校友会雑誌』の記録からすると一回2点、六回3点となるが、『岩手日報』によると一回3点、六回2点となっている。

(一)菅原―坂田
(盛)小笠原―久慈

後に早稲田大学の遊撃手・主将となる久保田禎が、遊撃手・一番打者として初めて対抗戦に出た。また、右翼手・九番打者として深澤省三も試合に初出場。後に"球聖"と称賛されるほどの名選手になる久慈次郎にとっても、この試合はデビュー戦となる。捕手・五番打者であった。

この年の3年生部員

二郎
石井禎二
小笠原次郎
鈴木彦治
村井徳

大正5年[1916]

◆7月　釜石で大火。三百二十一戸が全焼
◆11月　南部紫根染研究所工場を設立

一関中学に初めての苦杯

春に、「岩手県下野球大会」が開かれた。主催は盛岡高等農林学校である。

▽1回戦
　一関中学　100　000　000　1
　盛岡中学　012　020　01×　6

▽決勝
　盛岡高農　000　000　011　2
　盛岡中学　000　000　002　2
(激しい降雨のため、九回表途中で試合終了)

本校は2―2で、盛岡高等農林学校と優勝を分けている。

これをもって、本県も対抗戦時代が終わり、全国大会出場を目指す公式試合の時代に移行していく。本校はこの年から、全国大会の予選に参加を始めた。

全国大会予選に臨もうとする本校を、当時の『岩手日報』は次のように紹介した。

「過般来試験中にも拘らず先輩の指導を請い猛烈なる練習を続け居れり殊に盛中撰手の如きは頗



大正6年ごろのライオン団団員。



大正6年8月、初の全国大会出場を決め、盛岡駅前での凱旋写真。

る鼻息荒く同校野球部は明治三十二年創設以来同三十五年には早稲田大学の驍将獅子内謹一郎氏を出し次で野々村納氏出でて覇を称え近くは明治大学より主将中村俊二氏を出したるが如き栄誉の歴史を有し大正二年仙台の二高主催東北野球大会に於ても実に優勝を占めたるなり（中略）常に向う所敵なき武者振りを示し来りたり」。

東北予選は、仙台市の旧制二高で開かれた。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

仙台一中	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡中学	2	0	3	1	4	1	×		11

（七回コールド）

（仙）砂澤―西村

（盛）小川―久慈

▽準決勝

福島師範	0	0	0	0	1	0	0	0	1
盛岡中学	7	0	4	0	2	5	×		18

（七回コールド）

（福）金田―澤田

（盛）下山―久慈

▽決勝

盛岡中学	1	0	0	0	0	0	0	0	1
一関中学	3	0	0	0	0	1	0	0	× 4

（盛）小川―久慈

（一）菅原―村井

明治三十五年に初対戦以来、黒星を喫したことのない一関中学に敗れ、岩手県からの全国大会への初出場の栄誉を逃してしまった。

この年の5年生部員

大	慈	次	郎
深	坊	憲	吉
山	澤	省	三
山	口	徳	郎
	本	兵	治四郎

大正6年［1917］

◆2月　盛岡―仙台間の市外通話線開通

◆9月　県下に暴風雨。青森までの列車不通

全国大会でベスト4進出

全国大会予選は、前年と同じく八月初め仙台で開かれた。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

仙台二中	0	0	0	0	0	0	1		1
盛岡中学	1	5	2	0	0	2	1×		11

（七回コールド）

（仙）鈴木―松浦

（盛）小川―永野


大正6年8月、関西の宿舎でくつろぐ選手と先輩たち。


大正6年8月、全国大会鳴尾球場において関西学院中等部戦。

▽準決勝

秋田中学	1	0	0	1	0	0	1	2
盛岡中学	4	2	0	0	0	0	1	7

盛岡中学	2	0	0	1	2	0	0	5
一関中学	0	0	0	0	0	0	2	2

(秋)野口―土崎
(盛)小川―永野

▽決勝

(盛)小川―永野
(一)村井―木嶋

この当時の東北中等学校球界においては、本校、一関中学、秋田中学が「東北の三強」と称され、他校より実力が一枚上であると言われていた。本校は、準決勝で秋田中学との一戦に勝利を収め、自信をもって決勝戦に臨んだ。初回に2点を先取。中盤でも加点し、主導権を握った試合運びで快勝した。記念すべき初優勝を果たした。

当時の『岩手日報』は、閉会式の様子を次のように伝えた。

「観衆の歓呼裡に優勝旗を受け場内を一周し凱歌を奏して引揚げた」。

全国大会は、八月十四～二十日、豊中球場から鳴尾球場に移されて開催された。1回戦では香川商業（現高松商業高校）と当たった。三回に先取点を挙げると、その後も着々と加点し、快勝した。前年優勝校を下し、四強入りした。

◇第3回全国中等学校優勝野球大会

▽1回戦
盛岡中学 5×―1 香川商業（香川）
▽2回戦
盛岡中学 2―1 慶応普通部（東京）
▽準決勝
盛岡中学 0―1× 関西学院（兵庫）

※詳しくは甲子園特集ページへ。

この年の5年生部員

三正　槇夫
郎春　二
雌子　康
菊地　
久保田　
照井　政
得
円子（小川）　
米内　英

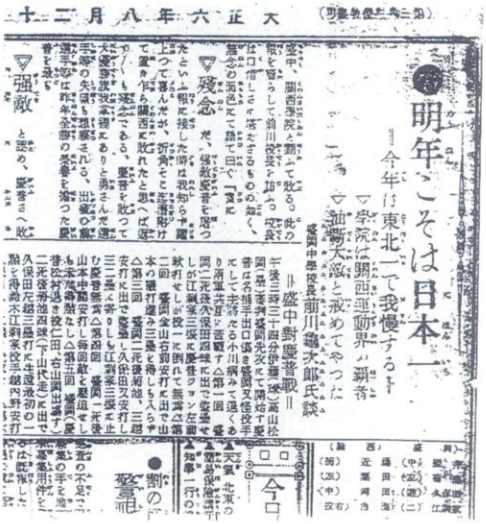
大正7年[1918]

◆9月　原敬（盛岡出身）内閣が成立
◆10月　スペイン風邪大流行し休校が続出

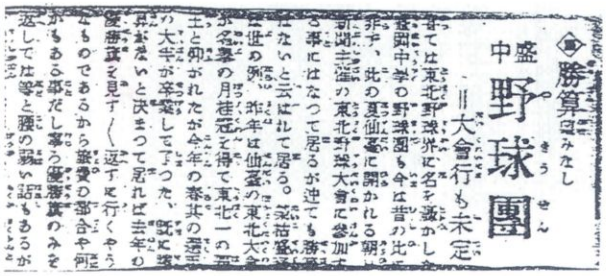
初戦で敗れ、全国大会ならず

前年、全国大会でベスト4入りした本校であったが、この年のチームの力は、あまり評価されなかったようである。

当時の『岩手日報』は、次のように掲載した。


明年こそは日本一
今年は東北一で我慢する
学院は関西連盟に覇者
強敵
残念

大正6年8月20日「岩手日報」。「明年こそは日本一」前川校長談。


勝算なし
盛中野球團
大會行も未定

大正7年7月26日「岩手日報」「勝算望みなし」の見出し。

「嘗ては東北野球界に名を轟かした盛岡中学の野球団も今は昔の比に非ず、（中略）東北野球大会に参加する事にはなって居るが迚も勝算はないと言われて居る」。

加えて、優勝旗を返還して欠場してはどうかという弱腰の発言も出たことを伝えている。が、最終的には仙台での東北予選に出場した。2回戦は、宿敵の一関中学であった。

▽1回戦（不戦勝）
▽2回戦

一関中学	1	0	0	0	1	4
盛岡中学	0	1	1	0	0	3

（一）村井―伊藤
（盛）下山―永野

一関中学は、予選決勝で仙台二中を破り、二回目の全国大会の切符を手にした。しかし、米騒動など社会情況不安定のため、全国大会中止に至る。大阪入りをしたが、選手茶話会に出席しただけで、帰県している。一関中学のエースは村井一郎だった。村井は盛岡中学から一関中学に転校した人物。大正五年の全国大会には捕手として出場の経験があった。しかし、投手として全国大会のマウンドを踏めずに、中等野球生活を終えている。

この年の5年生部員

藤田（永野）	重次郎
八幡	三郎
山本	権常
江刺家	宗良
平川	道彦
吉田	池忠
菊矢	金

大正8年［1919］

◆2月　普通選挙運動が全国に拡大
◆この年　ガールスカウトが盛岡に誕生

鳴尾で再び準決勝進出

この年、東北予選に、北海道のチームが初参加し、小樽中学（現小樽潮陵高校）と函館商業（現函館商業高校）の二校が出場。この陰には、本校野球部長（顧問教員）が「北海道の中学も東北予選に参加してはどうか」と小樽中学に提案したという経緯があった。

八月上旬、仙台で東北予選が開かれた。初戦敗退に終わった前年の雪辱を期して出場した本校は、決勝へ進んだ。函館商業と対戦し圧勝、二度目の全国大会行きを決めた。

▽1回戦（不戦勝）
▽2回戦

小樽中学	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡中学	6	0	2	0	4	2	×		14

（七回コールド）

（小）田中、右野―越後



大正8年8月、2度目の全国大会。(関西の宿舎にて)山下恭一(1列目左)。

(盛)下山―村井

▽準決勝

一関中学	0	1	0	0	0	0		1
盛岡中学	0	0	0	5	3	9		17	

(七回表途中で相手校が棄権)

(一)鈴森―高橋、佐藤

(盛)下山―村井

▽決勝

函館商業	0	1	0	0	0	0	0		1
盛岡中学	4	3	0	4	2	0	4	4×	
								21	

(函)加藤―桑名

(盛)下山―村井

東北大会で圧倒的な強さを発揮した本校は、全国大会でも強豪を連破し、前回の出場時と同じくベスト4入りを果たした。初の決勝進出を目指したが、地元の神戸一中に大差で敗れた。

◇第5回全国中等学校優勝野球大会

▽1回戦

盛岡中学 4×―3 同志社中(京都)

▽2回戦

盛岡中学 1×―0 松山商業(愛媛)

▽準決勝

盛岡中学 0―8× 神戸一中(兵庫)

※詳しくは甲子園特集ページへ。

この年の5年生部員

荒木田家寿
下山恭一
藤村松之助
水原友二郎
荒木田定雄

大正9年[1920]

◆4月 盛岡赤十字病院が開院
◆10月 第一回国勢調査

仙台一中戦、降雨に泣く

東北予選は八月上旬、仙台で行われた。この年から、北海道が独立して予選を開くことになった。

東北予選は文字通り東北六県のチームで全国切符を争う形となった。

▽1回戦(不戦勝)

▽2回戦

盛岡中学	2	1	0	0	0	0	0	2	
福島中学	0	0	0	0	0	0	1	0	
								1	5

(盛)山口―村井

(福)海野―石田

▽準決勝

仙台一中	0	0	4	0	0	0	0	0	
盛岡中学	2	0	0	0	1	0	0		
								3	4

(八回降雨コールド)



初代上田校舎にあった部室。各クラブ1坪ぐらいの広さであった。

（仙）本間―佐藤
（盛）久保、山口―村井、佐藤

本校の八回の攻撃中、雨降りになった。一時中断し様子を見たが回復の見込みなく、両校と審判団で相談し、試合は打ち切りとなった。

本校は八回、一死一、二塁とし、同点、そして逆転をねらっていただけに、惜しまれる一戦を失った。

この年の5年生部員

雄孝蔵亮郎郎江
時昌慶忠要芳直
田内保沼山田鎮
小生久黒晴吉田

大正10年［1921］

◆6月　橋場線大釜、小岩井、雫石各駅開業
◆11・4　原敬首相が東京駅頭で刺殺される

全国大会でベスト8

東北予選が始まって以来、岩手県からは本校と一関中学の二校のみが参加していたが、この年、盛岡商業と遠野中学が初出場し、本県から四チームの参加になった。

前年降雨コールドゲームという形で、全国大会出場を果たせなかった本校は、この年に三度目の優勝を成し遂げた。

八月上旬、仙台で東北予選は開かれた。

▽1回戦

盛岡中学	3	0	7	2	0	1	1		14＋1
築館中学	0	0	0	0	1	0	1		2

（注）当時の史料からすると15―2で本校の勝利だが、試合記事では14点しか判明しなかった。

（盛）山口―村井
（築）佐々木―三橋

▽2回戦

盛岡中学	0	0	3	0	0	0	5	0	2	10
盛岡商業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

（中）山口―村井
（商）秋山―東海林

▽準決勝

仙台二中	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡中学	3	1	0	0	1	2	3	1	×	11

（仙）青野―中川
（盛）山口―村井

▽決勝

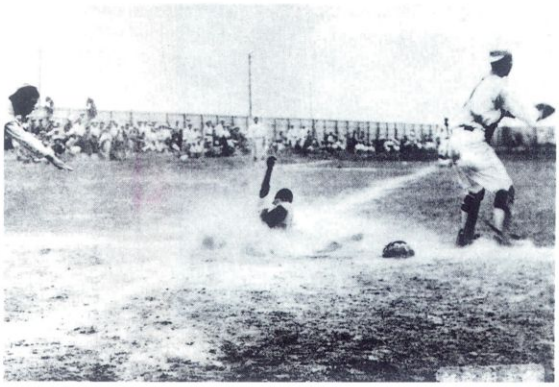
秋田中学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡中学	1	1	3	0	0	0	4	0	×	9

（秋）〔不明〕
（盛）山口―村井

強敵を9―0で完封し、自信を得て全国大会に



大正12年夏、東北予選に臨んだ選手たち。斎藤彰先生（3列目中央）。



大正12年8月、東北予選1回戦のひとコマ。本校対宮城師範。

駒を進めた。この年の本校チームは、過去に全国大会ベスト4進出を果たした時より破壊力があると、関係者から高い評価を得ていた。しかし、準決勝には進めなかった。

◇第7回全国中等学校優勝野球大会

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡中学　5×―4　市岡中学（大阪）

▽準々決勝

盛岡中学　2―5×　豊国中学（福岡）

本校の及川要一が本塁打を放った。ランニングホームランであったが、本県選手初の本塁打となった。

※詳しくは甲子園特集ページへ。

この年の5年生部員

道一　充雄　浩衛　三八　男雄　吉兵
弘要　忠　八雄　清尚　常
田川内島藤口鎖井口崎藤
泉及大小田斉関田村山鳥武

大正11年[1922]

◆4月　県立図書館が開館

◆10月　沿岸部でコレラが流行

秋田中学に初の苦杯

「昨年見事なる大スコアを以て東北の栄冠を勝ち得たる盛岡中学は、（中略）主将佐藤、副将深沢選手を相激励して先輩の早大選手永野重次郎氏コーチの下に栄ある歴史に汚辱を残さぬ様にと必勝を期し熱球はグラウンドの炎砂を噛んで物凄い打（あた）りを見せている」。

これは、大正十一年七月二十一日の『岩手日報』の記事の一部である。前年に全国大会出場を果たし活躍したことで、今期のチームがプレッシャーを感じつつも、猛練習をしていることを報じた。

本校、盛岡商業、一関中学の三校が、本県から東北予選に参加。前年参加の遠野中学は不参加だった。この年の会場は仙台一中グラウンドだった。

▽1回戦

盛岡中学	2	0	1	4	0	2	0	0	6	15+1
安積中学	0	0	0	0	5	0	0	0	1	6

（注）当時の史料からすると16―6だが、記事からは15点しか判明しなかった。

（盛）高瀬―太田

（安）〔不明〕

▽2回戦

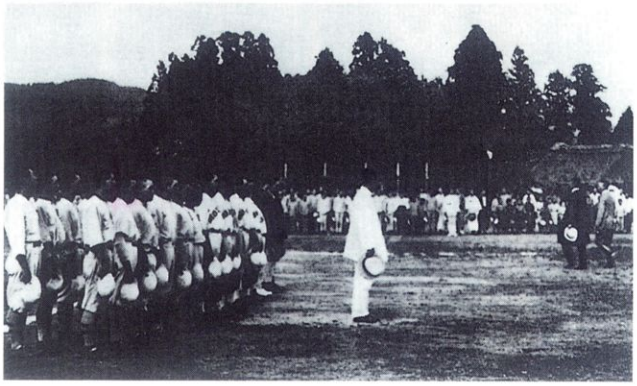
横手中学	0	0	0	0	0	1	2	0	0	3
盛岡中学	0	0	1	2	0	0	0	2	×	5

（横）富木、塩谷―山勢

（盛）高瀬―太田



大正12年8月、東北予選のひとコマ。



大正12年8月、賀陽宮恒憲王殿下が来校。対杜陵倶楽部戦。

▽3回戦

秋田中学	0	0	0	2	2	0	2	2	0
盛岡中学	1	0	0	0	0	0	0	0	1

8
2

（注）『校友会雑誌』の記録からすると8―2で秋中の勝利となるが、『岩手日報』によると8―3である。

（秋）築地―伊藤
（盛）高瀬、松原―太田

この年の5年生部員

治寿二夫郎衛一忠
定智啓武哲嘉
田藤井沢部飼澤
太佐平淵宮森鵜深

大正12年［1923］

◆7月　盛岡測候所が完成
◆9・18　岩手日報が夕刊の発行を開始

仙台一中に大敗

この年の予選は、仙台市の東北体育協会グラウンドが初めて会場として使われた。

▽1回戦

盛岡中学	1	0	0	2	0	3	0	1	
宮城師範	0	0	0	0	0	0	0	0	

16
0

（七回コールド）

（盛）松原―吉田
（宮）山本―小林

▽2回戦

盛岡中学	0	3	2	0	7	0	0		
磐城中学	0	0	1	0	0	0	0		

12
1

（七回コールド）

（盛）松原、高瀬―吉田
（磐）鶴山―神谷

▽3回戦

盛岡中学	3	0	0	2	0	0	0		
仙台一中	1	0	0	2	0	1	×		

5
15

（日没コールド）

（盛）松原―吉田
（仙）菊地―白幡

この年の5年生部員

小山田　三　郎
笹　川　俊　吉
高　瀬　勝　治


大正13年の5年生メンバー


大正14年、野球部員と斎藤彰先生。（2列目中央）

大正13年[1924]

◆7月　日照りが四十日余。各地で水争い
◆12月　宮澤賢治『註文の多い料理店』刊行

秋田中学に完封喫す

東北予選は、前年と同じく仙台市の東北体育協会グラウンドで開かれた。岩手から福岡中学が初参加した。

▽1回戦

盛岡中学	2	4	0	0	2	0	5		13
仙台商業	0	0	0	0	0	0	1		1

（七回コールド）

（盛）松原―鈴木
（仙）澤田―栗村

▽2回戦

盛岡中学	2	0	1	0	0	1	0	1	6
盛岡商業	0	0	0	1	0	4	0	0	5

（中）松原―鈴木
（商）阿部―小原

▽3回戦

盛岡中学	2	0	0	0	0	0	0	3	5
大館中学	0	2	0	0	0	0	0	1	3

（盛）松原―鈴木
（大）佐藤―高瀬

▽準決勝

盛岡中学	0	0	0	0	0	0	0		0
秋田中学	1	2	0	0	0	0	2	1×	6

（盛）松原―鈴木
（秋）伊藤―蓼沼

この年の5年生部員

太郎　三一
一弥　小常浩
太　川木岡沢
小
常
浩
及
鈴
長
古

大正14年[1925]

◆3・1　東京放送局（現ＮＨＫ）が試験放送
◆6月　岩手歌人協会結成

決勝で仙台二中に完敗

この年から東北予選が二地区に分かれることになった。岩手・宮城・福島が東北予選と称され、青森・秋田・山形は奥羽予選と名付けられた。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

福島師範	0	0	0	0	1	1			3
盛岡中学	0	0	0	1	8	0	4×		13

（七回コールド）



大正期の名投手の一人、松原泰雄。



大正15年8月、4度目の全国大会出場を祝して記念撮影。

（福）嶋―富岡
（盛）松原―吉田

▽3回戦

仙台一中	2	3	2	0	0	0	0	0	7
盛岡中学	0	0	0	0	3	7	0	0	10

（仙）熊谷―佐藤
（盛）松原―吉田

▽準決勝

福岡中学	1	0	0	0	0	0	0	1	2
盛岡中学	0	0	0	0	0	1	4	0	5

（福）中津川―小坂
（盛）松原―吉田

▽決勝

仙台二中	3	0	1	0	1	0	0	1	11
盛岡中学	0	0	0	0	0	0	0	0	0

（仙）菊地―安田
（盛）松原、山田―和賀、坂本

この年の3年生部員

三次吾郎　志雄
慶宗金　悦広　泰太郎
岡澗本藤　司原
飯今坂沢庄　松森

大正15年［1926］＝昭和元年

◆4月　私立岩手中学（現岩手高校）創立
◆12・25　大正天皇が逝去。翌日、昭和と改元

「甲子園」出場第一号

この年の東北予選は初めて福島県での開催となった。会場は福島高等商業（現福島大学経済学部）グラウンド。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

会津中学	0	0	0	0	0	0	1	1	2
盛岡中学	0	0	0	3	0	0	0	0×	3

（会）小川、大井―渡部
（盛）菊池―吉田

▽3回戦

福島中学	0	0	0	1	0	0	0	1	2
盛岡中学	0	0	0	0	2	1	0	0×	3

（福）渡辺―和田
（盛）山田―吉田

▽準決勝

東北学院	0	0	0	0	1	0	3	0	4
盛岡中学	1	4	1	0	0	0	0	0×	6

（東）菊池、斎藤―相見
（盛）山田、菊池―吉田





エース山田五郎(写真右)と上野善雄捕手(写真左)。大正15年夏の甲子園大会でバッテリーを組む。

▽決勝

福岡中学	0	0	0	1
盛岡中学	0	1	0	0
	0	0	0	
	1	0	0	
	2	0	×	
	3			1

(福)戸来―村田
(盛)山田―吉田

本校は5年振り4度目の全国大会出場を成し遂げた。

全国大会の会場は、大正十三年から甲子園球場になっていた。夏の全国大会の殿堂である甲子園球場が完成してから、岩手の代表校が全国大会に出たのは、この年が最初。文字通り県勢の〝甲子園出場〟は、本校が第一号だったことになる。



大正15年夏に甲子園出場した部員中心の記念写真。



この年の5年生部員

田村藤兵衛
中島康吉
吉田健次郎
吉田保雄(菊池)
阿部清次郎
松村哲二

◇**第12回全国中等学校優勝大会**

▽1回戦(不戦勝)

▽2回戦

盛岡中学 1―4 鳥取一中(鳥取)

※詳しくは甲子園特集ページへ。

誕生百年・久慈次郎

久慈勝浩

火事が、ある人物に、その町を捨てる決心をさせ、新天地に旅立たせている。それとは反対に、火事によって、ある者は、その町に死ぬまで住むことを決心している。

その町とは、北海道の函館である。

函館に岩手から移り住んだ一人は石川啄木だ。文学で身を立てるという目標と生活を安定させなくてはならないという決意で、啄木は津軽海峡を渡った。時に明治四十年五月のことである。

函館の啄木は、小学校の代用教員と新聞社の遊軍記者をした。北の港町生活に慣れ親しんできた頃、函館の町を大火が襲った。同年八月の出来事である。その火は、小学校や新聞社を灰にしてしまった。

新生活を開こうとして渡ってきた函館。その意気込みを打ち砕いた災害であった。

生活の安定を求めるべく、啄木は函館の町を去ることにする。そして、札幌へ向け出発。

それから、十五年後の大正十一年四月。啄木の中学の後輩にあたる青年が、函館にやって来る。その人物の名前は久慈次郎だ。

函館水電という会社に入るために、津軽海峡を渡ってきたのである。が、ある意味では、就職目的ではなかったと言ってよいのかもしれない。

それは、函館太洋(オーシャン)倶楽部の捕手に抜てきされたためだった。野球をやるために、次郎は函館にやって来たとも言える。

久慈次郎は明治三十一年一月、青森市で生まれた。間もなく一家は盛岡へ引っ越す。次郎の幼・少年時代の舞台は、盛岡の町になる。

長じて、旧制盛岡中学(現盛岡一高)に進学する。後「球聖」とまで賛美される名選手だったが、現在の〝夏の甲子園大会〟には出場できなかった。地方大会の代表決定戦で敗れている。

大学は、早稲田大学へ進んだ。当時、市岡忠男という名手がいたため、捕手の座は、次郎に回ってこなかった。

二年生の秋、市岡が怪我をしたため、次郎はゲームに初参加。以後、努力を重ね、力量のある捕手に成長し、活躍するのである。


WASEDA
WASEDA
WASEDA

大正十一年、早大を卒業する。古里の盛岡を通り越し、函館に就職したのには、こんな話がある。函館太洋倶楽部に、橋本隆造（早大OB）という剛腕投手がいた。その剛速球をキャッチングできるのは久慈次郎しかいない。野球関係者が、そう言う。白羽の矢が立ったのである。次郎も、それに応えたのだ。

函館太洋倶楽部入りした次郎は、選手（後には監督を兼ねる）として大活躍する。

とりわけ、全国都市対抗野球大会が開かれるようになってから、次郎のチームは、全国大会に何度も駒を進めた。

昭和三年　1―3　（東京クラブ）
五年　4―6　（大連満州クラブ）
六年　4―5　（名古屋鉄道局）
七年　9―10　（台北交通団）
八年　2―4　（名古屋鉄道局）
十年　4―12　（全大阪）
十一年　2―4　（全大宮）
十三年　1―5　（全京城）
十四年　7―1　（長野法規）
同年　3―5　（東京鎌倉電線）

全国大会の会場は、神宮球場であった。都市対抗の「常連チーム」も昭和十四年の対長野法規まで、白星にめぐまれなかった。

年月を少し戻してみよう。

昭和二年というから、函館生活六年目に、次郎は、自らの店「久慈運道具店」を始めている。都市対抗の全国大会への初陣は、次の年だ。

昭和六年、第一回日米野球大会が開催される。次郎は、全日本の主将・捕手として出場した。

三年後にも、同大会の第二回大会に、主将・捕手として出ている。静岡県の草薙球場での一戦。全日本の投手は、沢村栄治であった。次郎のリードよろしく、アメリカチームを苦しめたため、日本人の観客は大喜び。結果は、0―1で苦杯をなめた。が、次郎の技量はもちろん、沢村栄治の名を高めた一戦となる。

この大会がきっかけとなり、大日本東京野球倶楽部が創立された。現在の読売巨人軍の前身に当たるチームである。次郎は主将に抜擢された。

しかし、こういった快事は、発展し得ないままに終わる。というのは、昭和九年三月、再び函館大火を迎えてしまったことに要因があった。

紅蓮（ぐれん）の炎が、函館の街並みと、そこで生活する人々の心を疲弊させてしまう。

この惨状を目のあたりにした次郎は、函館と市民を見捨てられなかった。

そこで、全日本東京野球倶楽部に入ることを断念する。そのため、次郎は、読売巨人軍の「初代主将」として記録に名をとどめただけとなる。プレイする次郎は目にできないままとなる。

「函館市長の名前を知らなくとも、久慈次郎の名前を知らない者はいない」

「函館の町で久慈次郎の悪口を言えば、ファンになぐられる」

そんなふうに言われた次郎だった。

昭和十四年八月、札幌で行われたゲーム中、相手チームの捕手の送球を頭部に受け、それがもとで死去する。

昭和五十二年八月、函館の千代台球場前にキャッチャー姿の顕彰碑が建てられた。三十九回忌のことである。

平成十年は、久慈次郎生誕百年であった。

平成10年6月21日（日）『盛岡タイムス』掲載

「鳴尾球場の思い出」

（大正七年卒業）
照井政夫



大正七年の第三回大会ですからもう本当に古い話ですな。私などは全国大会に出場したもっとも古い者の中に入るのでしょう。明治も三十一年生れだから年令からいってもいいところです。

ところで私たちのときは高校野球も誕生期だからなにかにつけて今とは比較になりません。出場した学校の数にしても全国でわずか十二校だったし、仙台でやった予選でも東北六県で一校だった。それも第一回の時は予選もなく東北では秋田中学が一番強いだろうということで推せんで出場した。第二回は一関中だった。

当時は道具にしても予算がふんだんにあったわけではないから大切に使った。ボールにしても破れたら自分たちで糸でぬって使ったし、バットにしてもクギをうちつけて使ったものです。今の選手にしたら想像もつかない事だと思う。もっとも金属バットでは折れる心配もないわけだ。

盛岡中学は伝統があったね。それも早大へいった名選手たちが先輩同級生にたくさんいた。たとえば早大のキャプテンをやった久保田禎さんとか名捕手として評判の高かった久慈次郎さんなどこれらの先輩が積極的にコーチに来てくれて教えてくれるものだから一種の野球王国のようなものだったわけですよ。

私はセンターで一番を打った。足は速かったですよ。家が田舎で両親が鉱山生活をしていた関係上、親類の家へ下宿して学生生活をしていたから野球をやることで寂しさがまぎれて都合がよかった。応援もすごかったですね。一般の学生も選手たちの練習をおそくなるまで見ていてはげましてくれたものです。旧制中学の時代は学校そのものに一つの連帯感というかまとまりがあっていい時代だった。生徒の数も今ほど多くはないから部員もせいぜい十六人ぐらいだった。皆、野球の好きな連中ばかりでそれぞれに個性を持ったいい連中でした。

ところで我々の時は甲子園でなく、大阪の鳴尾でやった。高校野球といえば甲子園というのが決まり文句ですがあれは後から甲子園が出来てそこへ移った。さて試合ですが、一回戦で香川商を5―1で破り、二回戦では前年度優勝校だった慶応を2―1で破ったから強かったものです。あの時はうちのエースが具合が悪く出られなかった。次の準決勝で関西学院に0―1で負けたが惜しかった。関学は決勝で愛知一中に負けたが、あの時は我々にも優勝のチャンスはあったし、ベストナインに何人か選ばれたものです。

最近の高校野球を見ていると技術的にはなる程進歩したものの精神面での鍛え方がなまぬるいのではないですか。

来年で母校が創立百周年を迎えます。だから来年はぜひ母校に甲子園へ出て活躍してもらいたいと思っているのですがね。

我々のとき以来、全国大会でがんばっていないから大いに期待しています。

〔第3回全国大会に出場〕

サン企画編集『甲子園の60年』より
（昭和54年刊行）

「鳴尾球場の思い出」

（大正七年卒業）
円子得二郎
（旧姓小川）



私が出たのは第3回大会、大正六年ですから高校野球の草分け時代といってもよいかも知れません。当時は甲子園ではなく鳴尾球場でした。豊中から鳴尾へ移ってそれから甲子園で行われるようになったはずです。第一回大会の時は確か推薦で東北からは秋田中学が出場しました。第二回目から予選になったのですが決勝で一関中学に負けました。私は投手だったのですがエラーが多くて残念だった。第三回大会は私は五年生でキャプテンにも選ばれたので張り切りました。当時の予選は北海道と東北地方の一道六県でやりました。

今の練習についてはよく知りませんが、私たちの時はそれはきびしいものでしたね。早稲田の名選手だった川島さんがコーチに来てくれ、二年間つきっきりで野球というものをたたき込まれましたね。まあ、物事はなんでもそうだと思いますが、つらいことを乗り切らないと本物にもなれないし、初期の目的を達成することはできません。第三回の時は前年の轍を踏まないよう耐え抜いたわけでした。

一回戦は四国の香川商業に勝ちましたが、そのあと二回戦の抽選の時に胃けいれんを起こしてしまい私は出場できませんでした。肝心な時にこんなアクシデントが起こりあの時は悔しさで一杯でしたね。別に自分ではそんなに緊張していたわけでもなかったから不運だったのでしょう。しかし、二回戦は前年度の優勝校だった慶応普通部とやったのですが2―1で勝ってくれました。うれしかったですよ。次は関西学院が相手でした。

私はまだ体が悪かったのですがライトで出場しました。これは0―1の惜敗でなんとも言いようがありません。後でナインに君の胃けいれんがなかったら優勝できたのにと言われたものです。

あの時は全国のベストナインにうちから三人も入ったから相当レベルが高かったわけです。早稲田へいった久保田君や藤田君（旧永野）などがいた。当時は鳴尾球場に出場したチームは十二チームだったので、私たちは準々優勝。惜しいことをしたものですよ。以後、岩手県からは私たち以上の成績を残したチームはありません。それだけに誇りに思っていますが岩手の後輩の諸君のがんばりを期待しているわけですよ。

時々、当時の新聞のスクラップを見ながら若かった時のことを想い出します。なんといっても五十七、八年も前、半世紀も前のことですからね。だんだん記憶力がなくなっていくようです。しかしこのスクラップを開くと不思議にそんなに昔のことではないような気がします。他の出来事は忘れても野球をやって鳴尾へ出たことは鮮かに印象に残っていますね。

私ももう八十才になりましたがまだまだ元気でおれるのも、むかし鍛えた精神力のたまものだろうと感謝しています。若い時は二度と来ないから野球に限らず何かに打ち込むことが肝要でしょう。

〔第3回全国大会に出場〕

サン企画編集『甲子園の60年』より
（昭和54年刊行）

「鳴尾球場の思い出」

（大正十一年卒業）
斉藤　浩



私が夏の全国大会に出場したのは大正十年のことであるから、もう半世紀以上も前のことになる。大会もまだ七回目で、甲子園球場は無くて、鳴尾球場で行われたものである。今から考えると、まさに隔世の感がある。野球に取り組む情熱に変わりはないが、もう少しのんびりしていた。

私にしても野球部に入ったのは中学五年の時であった。それというのも、父が野球部長をしていたものだから、それがいやで、野球は好きでやっていたが選手になることはしなかった。もっぱら、スキーなどで体を鍛えていたのである。

野球部に入ってからの練習も今とは、かなり異っていた。

今は冬季でも雨天練習場などがあって練習を休むことはないが、当時は冬の間、休みの状態であった。その分だけ、雪どけを待って猛練習に入ったのである。集中した練習のやり方を通したのであった。

当時は東北六県から一校が選ばれるわけで、予選には多くの学校が集ったが、いずれも似たような練習を行ってきていた。だから実力も伯仲である。

勝たねばならぬ—。こんな気力と気力がぶつかり合う。いま考えても、すがすがしい思いになるような死闘が展開された。

そして、勝った。

全国大会に出場できることは、当時でも、大きな栄誉であった。勇んで鳴尾球場にでかけたのだが、その入場式には不思議なぐらい上がってしまったのを覚えている。出場校は十七校。七年連続出場の和歌山中は、さすがに堂々としていたが、こちらは足が地につかない状態であった。

試合に入り、対戦は大阪の市岡中である。地元とあってスタンドは九割九分まで市岡中の応援である。こちらは、先輩や縁者がひと握りいただけである。しかも市岡中は優勝候補と騒がれていた。私たちとしては捨て身でぶつかっていくほかはない。というより、あえて〝奇襲〟作戦をとるほかなかった。

それが、隠し球であった。

三点先取された四回表だった。二アウト二塁でライト前へヒットを打たれ一、三塁となったのだが、球がファーストを守る私のところへ返ってきた。私は何くわぬ顔でボールを持っていたのだが、一塁走者は球がピッチャーに返ったものと思って塁を離れた。そこをタッチアウト。その上、三塁手も隠し球をやった。スタンドのワーワーという抗議はすごかったが、翌日の新聞に飛田穂洲さんの講評がのった。「野球は一個の球でやっている。その球がどこにあるのか分らないようでは選手とはいえない」と。大変、愉快であった。半世紀以上も前ならではの、のどかさのせいかもしれない。この試合には勝ったが、準々決勝では豊国中に敗れた。

しかし、野球を通して和の精神を学んだことは得がたい体験であったと思っている。

〔第7回全国大会に出場〕

サン企画編集『甲子園の60年』より

（昭和54年刊行）

「大会の異状事態」

（大正十一年卒業）
小田島忠雄



大正十年の盛中はとにかく強かった。早大のアメリカ遠征留守軍に京都第一商業と共に勝ったのは全国で二校だけであったから自信の程もと言う事で、東北予選は問題にせず悠々大阪に進み不戦勝の後二回戦で地元の市岡中学に快勝、準々決勝に進んだ迄はよかったがここで異状事態が起きたのである。和歌山中学の戦績を見て余りにも強過ぎるのに獅子内監督以下内心シュンとなってしまった。後で判った事だが当時の和歌山中は明大と互角の試合をしており、その実力は六大学級と言う事で井戸の中の蛙であった事を恥じた次第であった。準々決勝で豊国中学に敗れ和歌山中学と一戦出来なかったが、同中学の毎試合得点、安打共に二〇に近く異状事態と言う外なかった。メンバーは

投　山口尚男
捕　村井清八
一　斉藤　浩
二　及川要一
三　小田島忠雄
遊　深沢　忠
左　大内　充
中　佐藤智寿
右　鵜飼　一
監督　獅子内謹一郎
部長　斎藤　彰

〔第7回全国大会に出場〕
県高野連発行『20周年記念誌』より

「鳴尾球場の思い出」

（大正十一年卒業）
武藤常吉
（妻茂子代筆）



私は大正八年の第五回大会に出場致しました武藤常吉の妻でございます。主人は昭和四十八年に七十一才で亡くなりましたけれど、甲子園出場を回想する出版物のお話をうけたまわりました時、私は今は亡き主人の心を思い残念でたまりませんでした。なんとか記録に残して置けないものか、考えに考えた末、今日ペンを取りました。主人は野球が好きで好きで一生を野球で終わったと申上げても過言でございません。私もまた野球通に育てられ主人亡き後テレビ、ラジオで楽しませていただいております。

主人が時折甲子園に出た時の事を話しておりましたので、私が代わってお伝えさせていただきます。主人は大正六年にも全国大会に出場したそうです。その時は一年生でバッテングがよかったので補欠として行ったそうです。第五回は大正八年で、初めてグラウンドに立った時は見物人の方達で周りは全部白、白で目がくらむ思いだったと言っておりました。三回か五回か忘れましたが勝ったらしく、この時の投手の小川さんが急にお腹を悪くして下山さんが代わりに投手をしたそうで、やはり今考えると田舎者が中央に行くと言う事は大変な事だと言って、負けた時の悔しさを何十年後で

も涙ぐんで話しておりました。学校を出て銀行員になり、野球部の主将をして毎年の様に優勝した思い出がございます。

〔第3・5回全国大会に出場〕

サン企画編集『甲子園の60年』より

（昭和54年刊行）

「鳴尾球場の思い出」

（大正十二年卒業）
深沢　忠



当時の盛岡中学は伝統的に野球が強かった。私は二年生になって野球部に入りいきなりショートのポジションをもらいました。

当時の大会は甲子園ではなく、鳴尾球場でした。

四年生のとき出場したのですが初めてスタンドのある球場を見て驚いたものです。

予選は東北六県で、参加校は二十四校ぐらいでした。盛岡中学は早稲田で活躍した久保田さんや久慈さんなどが先輩にいて絶えずコーチに来てくれていたから強かったわけです。その時の監督は早大ＯＢの有名な獅子内先輩でした。

ところで鳴尾へは行けたものの、名投手の下山さんが卒業していたからそんなに勝てないと思っていました。ただ一回戦だけは何としても勝ちたいと思っていました。鳴尾での印象は暑かったことと空の色が海の色のように真っ青だったことを憶えている。観客が多いのにはあがりました。私は二番バッターでよく打った方でしたが鳴尾では打てなかった。バットが重く感じましたね。せいぜいピッチャーゴロでした。この大会は和歌山中が優勝した第一年目です。

一回戦は大阪の市岡中学でしたが5―4で勝ちました。この試合で忘れられないのは我々が一塁と三塁で二度も"隠しダマ"でアウトにしたことです。何回目だったか向こうが無死で三塁打を打ったのですが、タマは三塁手が持っているのに、うちの山口投手がマウンド上で持っているようなそぶりをしてランナーが塁を離れるのを待ってアウトにしたわけです。市岡中の監督（早大ＯＢ、佐伯達夫、現高野連会長）はアンパイアに抗議しましたが受け入れられませんでした。その瞬間、詰めかけていた市岡中の応援席から、"キタナイゾ"と猛烈なヤジが飛んだ。次の回、今度は一塁でも隠しダマが成功したわけです。盛岡へ帰ってからも市岡中の関係者から盛岡のやり方は実に汚いではないかという葉書が来ました。

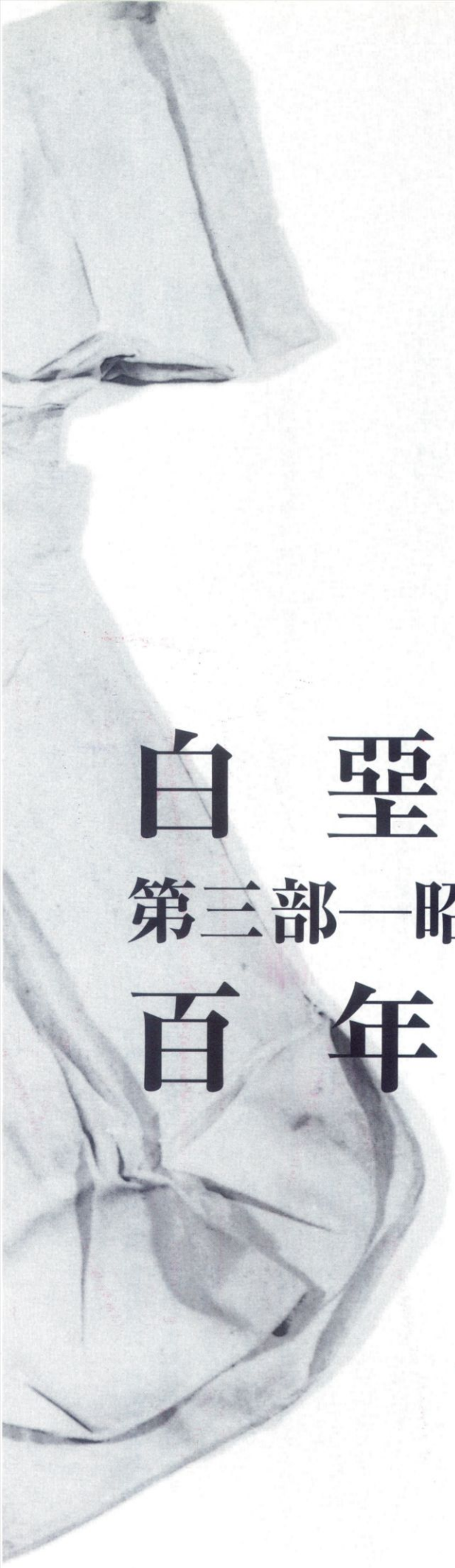
しかし、朝日新聞に総評を書いた飛田穂洲氏は、盛岡中学は隠し球をやってヤジられたがいやしくも野球の選手であれば今ボールがどこにあるかがわからないようでは話にならない。だから盛岡は立派なトリックをやったのだからなんら卑下することはないと書いてくれました。

野球をやってがんばりがきくようになったしよかったと思います。

〔第7回全国大会に出場〕

サン企画編集『甲子園の60年』より

（昭和54年刊行）



白聖野球部

第三部―昭和期①【昭和2～20年】

百年の軌跡



佐藤優の練習用ユニホーム。



昭和2年の部員

昭和2年[1927]

◆6月　県公会堂が落成
◆8月　NHK、甲子園で初のラジオ中継

福岡中学と熱戦十三回、惜敗

東北大会は、本校グラウンドが会場となった。岩手県が東北大会の開催地になったのは、この年が最初である。

参加校の中では、本校と福岡中学の両校が、頭一つリードしていた。本校は山田―上野のバッテリー。山田は前年、甲子園を経験していた。福岡中学は、戸来―村田のバッテリーであった。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡中学	1	1	0	0	6	0	5		13
東北中学	0	0	0	0	0	0	0		0

（八回コールド）

【ゲーム】本校は、東北中投手に14安打を浴びせ、計13点を挙げた。投手の山田は、東北中から13三振を奪った。

▽3回戦

盛岡中学	2	4	0	1	0	0	1		8
福島商業	0	0	0	0	0	0	0		1

▽準決勝

福島師範	0	0	0	0	0	2	0	0	2
盛岡中学	0	1	0	0	0	2	0	2×	5

▽決勝

福岡中学	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0
盛岡中学	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0

（延長十三回）

	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		1
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0

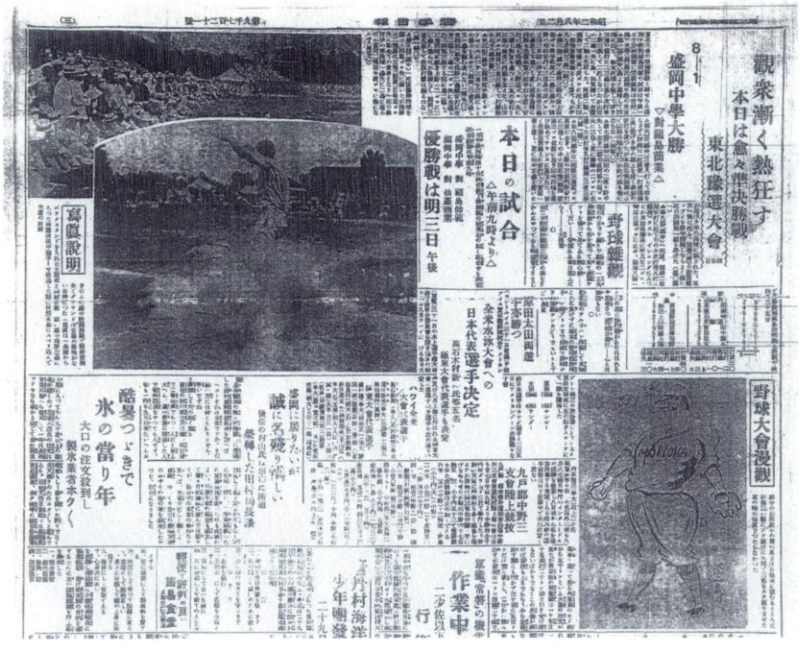
【ゲーム】先取点の好機は、本校の二回に巡って来た。二死二塁（走者は本校エース山田）の時、上田が右前安打を放つ。山田が本塁をねらうも福岡中の好守備に阻まれ、憤死。

本校山田、福岡中戸来の投手戦は続いた。

十三回表、福岡中の攻撃の時、本校に失策が重なる。二死二塁の時、戸来が遊ゴロ。一塁への送球が乱れる間に、二走佐藤の本塁生還を許してしまった。結局、この得点が決勝点となり、二年連続の甲子園は成らなかった。

この年の3年生部員

浅野金治
江渡要次郎
和賀祐助


観衆漸く熱狂す
本日は愈々準決勝戦
東北豫選大會
盛岡中學大勝
8—1
本日の試合
優勝戰は明三日
野球雜觀
野球大會漫觀
寫眞說明
氷の當り年
作業中

東北大会準々決勝で福島商に快勝。
（昭和2年8月2日の岩手日報）

昭和3年［1928］

◆7・1　岩手医学専門学校が開校
◆9月　盛岡―東京間に直通電話が開通

福島商業に屈し、初戦敗退

この年の東北大会は、仙台で開かれた。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

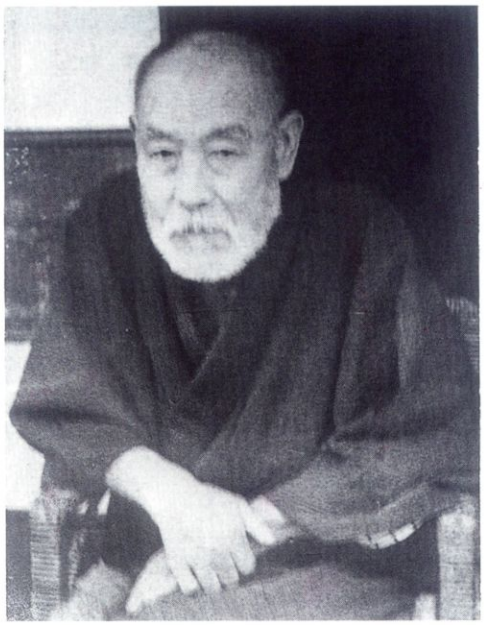
福島商業	0	0	4	0	8	0	3	0	0	15
盛岡中学	1	0	0	0	2	2	1	0	0	6

【ゲーム】本校は初回、一死後二塁打の田村が、相手の暴投と失策で本塁を踏んだ。

しかし、投手の制球が定まらないところを突かれ、三回に4点。更に、藤沢から代わった佐藤も猛打を浴びて五回に8点を失う。本校は、五、六、七回と小刻みに点を返したが、中盤までの失点が大きすぎ初戦で姿を消した。

この年の5年生部員

上野善雄
島功一
藤沢万佐雄
三浦卓夫
山田五郎



大正期から昭和3年迄、監督だった斎藤彰先生。愛称“ズンベエさん”



昭和4年の部員

昭和4年[1929]

◆4・13　後藤新平（水沢出身）死去
◆9月　盛岡農学校の新校舎落成

6連勝するも甲子園に届かず

この年の東北大会は、変則な方式で開かれている。岩手県だけが県予選を行って、東北大会に出場する代表二校を決めた。

そして、予選なしで参加をした宮城、福島の全チームに加わっての東北大会になった。岩手県チームにとり、とても不利な方式のため、翌年には取り止めとなる。

初の県予選で、本校は優勝した。

▽1回戦

盛岡中学	0	0	1	1	0	0	1	3	0	6
黒沢尻中	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

▽準決勝

盛岡中学	4	0	1	0	0	1	0	0	1	7
盛岡商業	2	0	0	1	0	0	0	0	0	3

▽決勝

盛岡中学	2	0	2	0	0	0	2	0	2	8
福岡中学	3	0	0	0	0	0	0	0	1	4

東北大会は福島県で開かれた。

▽1回戦

会津中学	0	0	0	0	0	1	2			3
盛岡中学	1	0	4	5	0	0	3×			13

（七回コールド）

▽2回戦

相馬中学	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3
盛岡中学	0	1	6	0	0	0	0	2×		9

▽3回戦

盛岡中学	6	0	0	1	0	3	0	1		11
東北中学	1	0	0	0	0	0	0	0		1

（八回コールド）

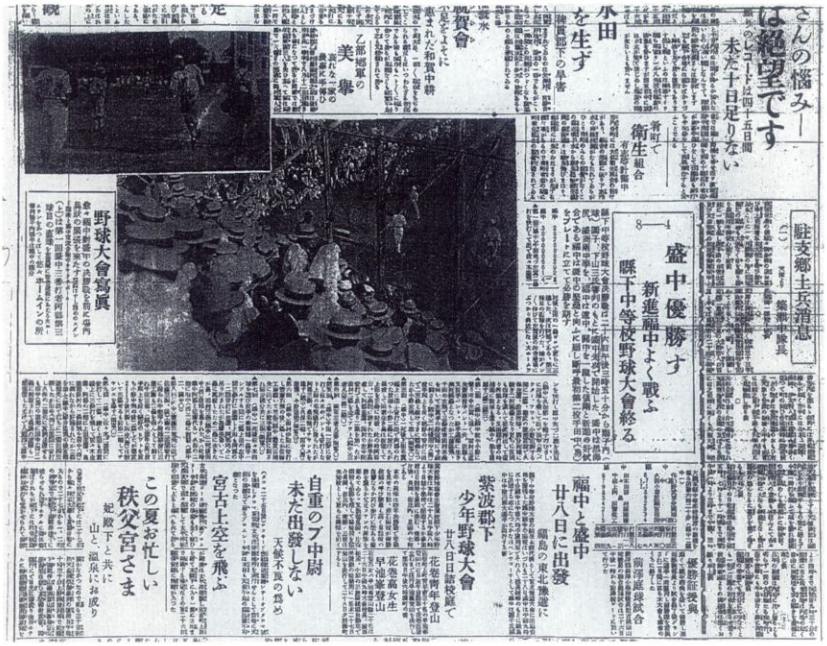
▽準決勝

仙台二中	0	0	0	0	0	0	2	1		3
盛岡中学	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2

【ゲーム】本校は初回、一死一、二塁に、四番阿部の右前安打で1点を挙げた。八回、仙台二中の四番温井に本塁打を喫するなどして逆転された。九回にも1点を追加された本校は、その裏無死満塁から1点を返した。が、反撃もここまで。

この年の5年生部員

八実　理　郎
阿部田　常次
上島　大　夫
大畠　忠


盛中優勝す
新進輪中よく戦ふ
縣下中等校野球大會終る
野球大會寫眞
駐支郷土兵消息
美事
さんの悩み―
は絶望です
未だ十日足りない
小田
を生ず
衛生組合
慰安會
紫波郡下
少年野球大會
輪中と盛中
廿八日に出發
自重のプ中嗣
未だ出發しない
この夏お忙しい
秩父宮さま
宮古上空を飛ふ

初の県予選で福岡中学と決勝で対戦し、優勝した。
（昭和4年7月27日岩手日報）

昭和5年［1930］

◆2月頃　県内で不景気深刻、就職難が問題化
◆この年　山口青邨氏（本校出身）が『夏草』創刊

仙台一中と息づまる一戦

東北大会は、本校グラウンドを会場に開かれた。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡中学	1	0	1	4	0	0	3		9
宮城工業	0	0	0	0	0	0	0		0

（七回コールド）

【ゲーム】本校は初回、二死後に2四球と1安打で満塁。六番工藤の打球を宮城工の三塁手がハンブルしている間に、三走長沢生還し先取点を取った。三回に1点を加えた後、四回にも相手守備陣の失策と本校の3安打で一挙4点を奪い大勢を決めた。

本校の投手佐藤は、宮城工打線を3安打に抑え完封。守備陣は無失策で佐藤を支えた。

▽3回戦

盛岡中学	0	1	0	0	2	1	2	0	4
仙台一中	0	2	0	1	5	0	3	0	×

11　10

【ゲーム】3―3で迎えた五回裏、本校は無死満塁のピンチに立たされた。七番を三振にとったが、3四球を選ばれ、押し出しにつながった。ここで本校は投手を佐藤から佐々木に交代。二死後、本校に2失策が出て、この回5点を失った。七回には2三塁打などで3点を取られた。

本校は、七、九回に猛反撃に出る。九回には無死満塁のチャンスを得た。三番長沢、四番佐々木の連続安打で2点を挙げた。続いて仙台一中の2失策で2点を加えた。1点差となったが、そのあと仙台一中投手の前に、3者連続三振で、ゲームセットとなった。

この年の5年生部員

郎	七	端	造資
太郎	陸	米	耕
工	藤	村	田
斉	藤	村	田
谷	藤	米	耕
田	千		
河	原	崎	陸弥善


昭和6年の野球部長だった瀬川正三郎先生（後に野球部後援会会長）。

昭和6年[1931]

◆4・1　花巻中学（現花巻北高）が開校
◆10月　花輪線が全線開通

ライバル福岡中学に2敗

岩手予選は、本校で開かれた。初日の開幕ゲームは、本校と盛岡商業の地元対戦となる。

▽1回戦

盛岡商業	1	0	0	4	0	0	0	0	5
盛岡中学	0	0	0	2	0	2	7	1×	12

【ゲーム】本校は初回、盛岡商三番の山形に本塁打を放たれ、更に四回にも加点され、0―5となった。本校の反撃は、四回から始まった。1点差に迫った七回には、4安打と相手失策につけ込み、一挙7点で形勢を逆転。八回にも加点し、逃げ切った。

▽準決勝

黒沢尻中	0	0	0	1	0	1	0	0	2
盛岡中学	2	0	2	0	0	6	0	3×	13

▽決勝

福岡中学	1	0	1	0	2	0	0	0	4
盛岡中学	0	0	0	2	0	0	0	1	3

【ゲーム】本校投手は海野（三年生）。福岡中の投手は、五年生の小野だった。海野は奪三振3個ながら、守備陣の助けもあり、大量点を許さなかった。本校は、福岡中小野の投球の前に、15三振を喫する。安打も5本だけ。堅守で相手の得点を抑えたが、攻撃力の差に屈した。

東北大会は、仙台の澱橋球場で開かれた。

▽1回戦

盛岡中学	1	0	5	0	0	3	1		10
梅檀中学	0	0	0	0	0	0	0		0

（七回コールド）

▽準決勝

盛岡中学	0	0	0	1	0	0	0	0	1
福岡中学	4	0	0	0	1	0	2	4×	11

【ゲーム】県予選の決勝と同じ顔合わせになった。前回は接戦であったが、今回は一方的なゲームに終わった。打撃力が充実した福岡中の前に、本校投手の海野は14安打を浴びた。本校は、相手が繰り出す三投手から8安打を放つも、1得点のみだった。

この年の5年生部員

佐藤源蔵　吉也夫
佐々木之子　欣正
島沢尾四郎　徳吉
長松村奥



昭和7年の本校選手たち。

昭和7年［1932］

◆1月　県下の小学校の欠食児童二千五百人
◆5・26　斎藤實（水沢出身）内閣成立

東北大会の壁厚し

岩手予選は、本校で開かれた。

▽1回戦（不戦勝）

▽準決勝

盛岡中学	0	1	3	0	1	0	0	0	1
福岡中学	3	0	2	0	1	0	0	0	0

（延長十回）

								1	7
								0	6

▽決勝

遠野中学	0	1	0	0	0	0	0	0	1
盛岡中学	0	0	0	1	0	0	3	0×	4

【ゲーム】本校海野、遠野中石原両投手の互角の投げ合いだった。海野は被安打3本。奪三振5個。石原のそれは、4本と4個。

本校七回の攻撃。先頭の五番小原が粘った末に二塁打を放った。続く佐藤の四球、吉田のバント内野安打で無死満塁となる。長沢の三塁ゴロを相手が失策。カバーも無く打球は外野を転々とする。この間に二者生還。その後、二死三塁の時、三浦の三塁ゴロを相手野手がトンネルし、更に1点を加えた。

東北大会は、福島県で開かれた。

▽1回戦

福島商業	1	0	1	0	0	0	0	0	2
盛岡中学	1	2	1	0	0	0	0	1×	5

▽準決勝

盛岡中学	0	1	0	1	0	0	0	0	2
宮城工業	4	2	0	0	1	0	0	1×	8

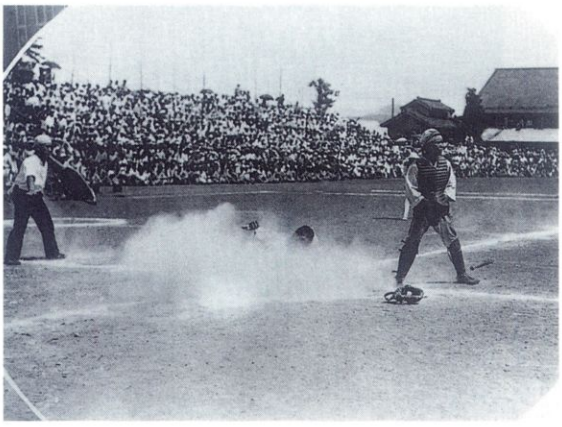
【ゲーム】本校は、宮城工の14安打の猛攻に屈した。そのうち長打は、3三塁打と1二塁打であった。本校は4安打であり、相手の失策につけ込んでの2点にとどまった。

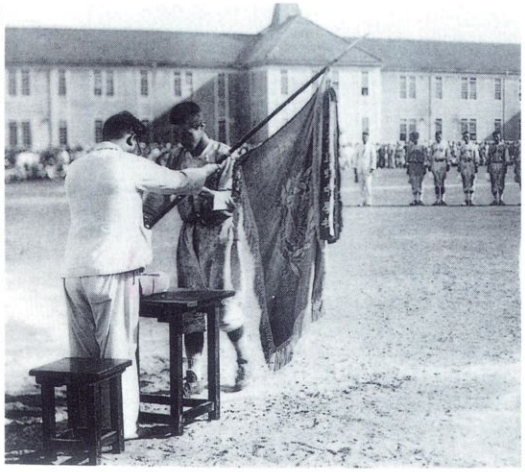
（県予選決勝で本校が対戦した遠野中学は、東北大会で優勝し、甲子園大会に出場した。遠野中学のエース石原繁三は、後にプロ野球のセネターズに入団する）

当時、ボール1個470円、グローブ1600円、スパイク1500円、バット700円であった。

この年の5年生部員

小原	三郎
北田	善三郎
遠山	富夫
三浦	好雄


昭和8年の試合のひとコマ（本校上田グラウンド）。


昭和8年夏、奥羽大会で優勝旗を受ける（本校上田グラウンド）。

昭和8年[1933]

◆3・3　三陸大津波起こる
◆10・16　新渡戸稲造、カナダで客死

育英中学を下し、甲子園へ

岩手予選は、本校を含む6校の参加で開かれた。会場は本校グラウンドであった。

▽1回戦（不戦勝）

▽準決勝

盛岡商業	4	0	0	0	2	0	0	0	6
盛岡中学	0	1	0	0	1	0	0	0	2

東北大会の開催地が本県だったので、本校も代表四校に加わった。

東北大会も本校で行われた。

▽1回戦

盛岡中学	0	4	1	0	0	0	2	0	7
宮城工業	0	0	0	0	0	3	0	0	3

【ゲーム】本校は二回、一死満塁のチャンスを得た。ここで、二番吉田は相手投手の畑から本塁打を放った。相手の出鼻をくじいた一打となった。六回に3点を失った直後も2点を挙げ、終始優勢に試合を運んだ。

▽準決勝

磐城中学	0	2	0	0	0	0	2	0	4
盛岡中学	1	2	0	0	0	2	0	0	7

▽決勝

育英中学	1	0	0	1	0	0	1	1	4
盛岡中学	5	0	0	0	2	0	0	1×	8

【ゲーム】対宮城工戦と同様、本校は初回に相手失策に安打をからめて大量得点した。一死満塁の時、五番外川は一ゴロ。一塁手からの返球の時、捕手が本塁を踏まず、1点目。次の佐藤は三塁打を右中間に放つ。更に関のスクイズも決まり、この回、一挙5点を挙げた。中、後半は互角の戦いだったので、初回が明暗を分けた。本校は七年ぶり五度目の全国大会出場を決めた。

◇第19回全国高校野球選手権大会

▽1回戦

盛岡中学　3―12×　浪華商業

※詳しくは、甲子園特集ページへ。

この年の5年生部員

海野　典男
藤田　秀吉
八幡　長四
吉田　弘



昭和8年夏、5度目の甲子園出場決定を祝っての提灯行列。



昭和8年、宮古水産との練習試合に臨んだ選手団（浄土ヶ浜）。

昭和9年［1934］

◆7月　県内天候不順で、伝染病流行
◆11月　山田線、宮古まで開通

遠野中学に苦杯をなめる

県予選は、花巻グラウンドで開かれた。

▽1回戦

黒沢尻中	0	0	0	0	0	1	0	0	1
盛岡中学	0	0	0	0	0	0	0	2×	2

【ゲーム】本校菅野、黒中菊池両投手の投げ合いとなった。悪送球で1点を失った本校は、九回、一番高橋が右前安打の後に盗塁を成功させる。二番長沢の三塁打で同点としたあと三番菅野の中前安打で、熱戦を制した。本校は菊池の投球に苦しんだが、ここ一番で集中力を発揮した。また、剛球投手の菅野は、黒中打線から14三振を奪った。

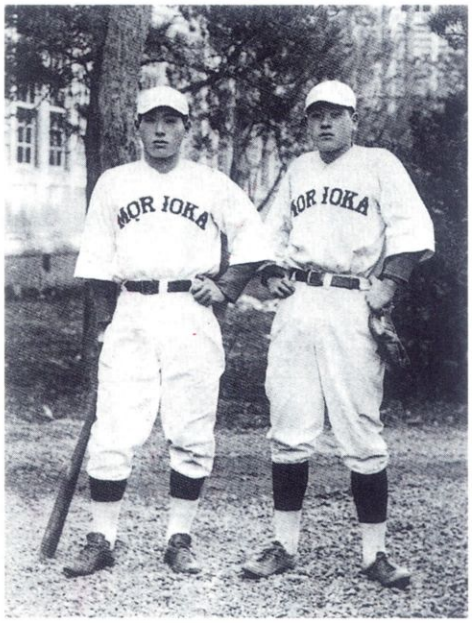
▽準決勝

遠野中学	0	0	0	0	0	0	0	2	3	5
盛岡中学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

【ゲーム】試合が動いたのは、八回だった。本校投手菅野が、一死一塁から、五番中村に三塁打を浴びた。外野からの返球が乱れ、2点を献上してしまった。九回には3点を失った。本校打線は、遠野中学投手横山の前に、散発2安打で反撃の糸口を作れぬまま終わった。

この年の5年生部員

高橋直治
長沢常人



昭和9年の5年生部員


昭和10年、応援団からエールをおくられる野球部員。


昭和10年の全運動部員の記念写真。

昭和10年[1935]

◆3・13　盛岡商業学校校舎が全焼
◆9月　第一回芥川賞・直木賞発表

甲子園まで、あと一歩

岩手予選は、本校で開かれた。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

一関中学	0	0	0	0	1	0	0		1
盛岡中学	3	0	3	0	7	4	×		17

（七回コールド）

▽準決勝

花巻中学	0	0	0	0	0	0	0		0
盛岡中学	8	0	3	3	0	0	×		14

（七回コールド）

▽決勝

盛岡中学	1	0	1	2	2	0	0	1	6
福岡中学	4	1	3	1	0	0	0	3	2

奥羽大会は、青森県で開かれた。

▽1回戦

盛岡中学	1	4	0	4	0	0	5		14
青森師範	0	0	0	0	0	0	0		0

（七回コールド）

▽準決勝

盛岡中学	0	0	0	0	2	0	0		2
秋田中学	0	0	0	1	0	0	0		1

【ゲーム】1点を先行された本校は五回、2安打で逆転に成功した。五番関は不規則安打で生き、続く河原崎のバントを相手投手が一塁へ悪送球。この間、走者は、それぞれ二、三塁に進む。この好機に、七番皿井が、遊越えの適時打を放ち、同点。その後、無死満塁の時、秋田中投手山谷に暴投が出て、三走河原崎が逆転のホームを踏んだ。

▽決勝

秋田商業	2	0	2	0	0	0	2	0	1
盛岡中学	0	0	0	0	0	0	0	1	0

【ゲーム】本校菅野、秋田商赤根谷の投手戦が予想された。が、初回、三回と2点ずつ奪われ、リードを許す形となった。八回に1点を返したが、好投手赤根谷の前に、8安打を生かせず、甲子園行きは成らなかった。

この年の5年生部員

秋広　宥（菅野）
坂下幸吉（佐藤）
佐々木哲夫
皿井英治
外川孫次郎
村井六郎



関西学院大学時代の関行雄選手。昭和13年春季リーグ戦において、東北出身選手として第1号の首位打者となる（後に一高の監督）。

昭和11年［1936］

◆7月　岩手山測候所が開所
◆10月　現在地に岩手教育会館が建てられる

二年連続して秋田商業に屈す

岩手予選は、本校で開かれた。開幕ゲームは本校と黒沢尻中との一戦となった。

▽1回戦

黒沢尻中	2	0	0	1	0	0	2	0	5
盛岡中学	0	0	2	4	1	2	5	1×	15

（八回コールド）

▽2回戦

盛岡中学	2	0	1	1	0	5	0		9
宮古水産	0	0	1	0	0	0	1		2

（七回コールド）

▽準決勝

盛岡中学	0	0	3	0	0	0	0	1	4
盛岡商業	2	0	0	0	0	0	0	2	4

（延長十回）

盛岡中学	0	0	3	0	0	0	0	1	4
盛岡商業	2	0	0	0	0	0	0	2	4

（延長十回）

盛岡中学	0	0	3	0	0	0	0	1×


闘ひは第三日目に
けふ堂々の準決勝
縣下中等野球大會
8-7
その差僅か一點
牛四頭斃されて
大熊退治決行
荒澤安比嶽の放牧地で
傳馬船顚覆し
危く二名溺死
盛岡放送局は
年内には開局
熱戰第二日を迎ふ

岩手予選の2回戦で盛岡商業と対戦。1点差で涙をのむ。（昭和12年7月27日岩手日報）

昭和12年[1937]

◆2月　県下一帯に大吹雪と雪崩
◆5月　釜石市制施行

九回の2本塁打も及ばず

岩手予選は、日居城（ひいじょうの）野球場（花巻温泉株式会社所有）で開かれた。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡中学	0	0	2	0	0	0	1	0	4	7
盛岡商業	3	0	2	0	0	1	0	2	×	8

【ゲーム】本校は初回、3点を失い、以後、盛岡商にずっとリードを許したまま、九回を迎えた。この回、二死一、二塁の時に、三番佐藤が本塁打を打つ。続く四番細川も右翼越え本塁打。伝統の粘りを十分に発揮し1点差に詰め寄った。が、追撃もここまで。盛岡商は8四死球に9盗塁を絡める効率の良い攻めを見せた。



昭和12年夏の地方予選で配られた記念手拭い。

この年の5年生部員

江袋（えぶくろ）（篠原）吉島（たいしま）
吉田宇八
内村幸雄
大衛史郎


中学時代の大ケ生昌一。


中学時代の上館馨文先生。昭和24年夏の甲子園出場時に野球部長。


中学時代の後藤力。


中学時代の工藤巌。後に野球部後援会名誉会長。

昭和13年［1938］

◆1月　新岩手日報（現岩手日報）発刊
◆4月　盛岡市に県立保健所を開設

13安打の逆転も実らず涙

この年の七月九日、待望の盛岡市営球場が誕生した。両翼87メートル、中堅が118メートルという立派なものだった。当時は、東北六県でも屈指の規模を誇る球場であった。

岩手予選は、新造なった市営球場で開かれた。2回戦から出場の本校は、二年続きで盛岡商業と準決勝進出をかけて対戦する。

▽1回戦（不戦勝）

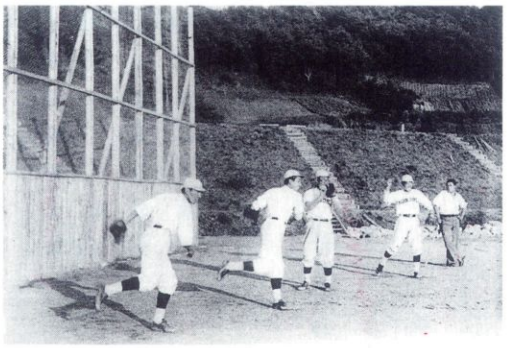
▽2回戦

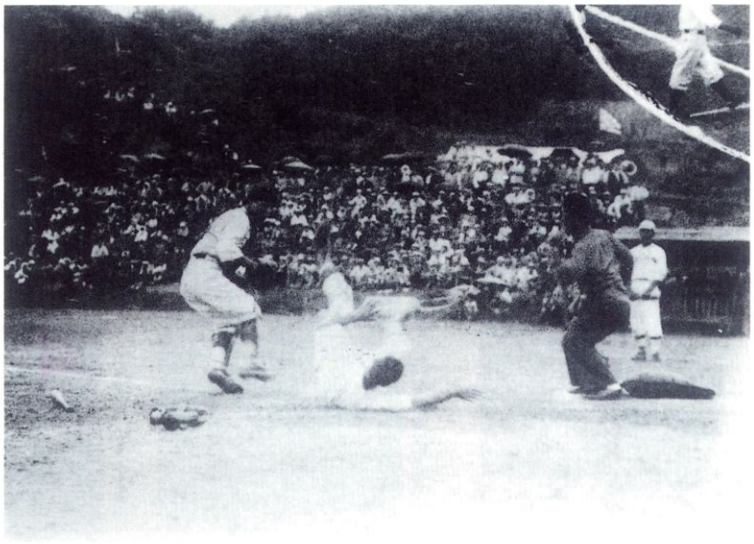
盛岡中学	0	0	0	0	2	2	0	1	2	7
盛岡商業	5	0	0	0	0	0	0	0	3×	8

【ゲーム】本校は初回、盛岡商に一挙5点を取られ、苦しいスタートを切った。五、六回と2点ずつ返し、反撃に出た。五回の本校は、安打で出塁した北田（康）を八番斎藤が右越え三塁打で還し、まず1点。すかさず一番川村も安打を放ち、2点目を挙げた。六回には一死一、二塁として、北田（康）の投手強襲安打で2点を加えた。八回に同点とし、さらに九回には2点を挙げ7―5と試合を引っ繰り返した。右前安打で出塁した九番大ケ生を、川村のバントで二進させ、続く二番成島は三塁打を放ち逆転。成島は盛岡商守備陣の虚を衝いてホームスチールを敢行し7点目とした。しかし、2点リードで迎えた九回裏、一死満塁にされたところで投ゴロ野選の間に1点を献上。続く朝倉の左犠飛で三走荒川に同点のホームを踏まれ、最後は本校の成島同様の本盗を決められてサヨナラ負けした。

この年の3年生部員

飯岡	夫
大ケ生	貞一
上館	昌文
工藤	馨巌
後藤	力
佐々木	作好
細川	夫重
細川	男良


昭和13年、市営球場での練習風景



昭和14年の試合のひとコマ。

昭和14年[1939]

◆5月　盛岡高等工業学校(現岩大工学部)創立
◆11月　松尾鉱山で落盤事故

延長15回秋田師範を制す

岩手予選は、盛岡市営球場で行われた。本校は、宿敵盛岡商業を破ると、決勝まで進出したが、福岡中学に大敗した。

▽1回戦(不戦勝)

▽2回戦

盛岡商業	0	0	0	0	0	0	2
盛岡中学	0	0	0	0	5	0	8

▽準決勝

花巻中学	3	2	0	0	1	0	7
盛岡中学	1	1	0	2	1	0	8

▽決勝

盛岡中学	1	1	0	0	0	0	2
福岡中学	0	4	0	2	5	0	11

奥羽大会が岩手県で開かれたため、県代表四校の一つとして出場権を得た。出場校は本校の他、福岡中学、釜石商業、花巻中学であった。

▽1回戦

盛岡中学	1	0	0	0	0	3
秋田師範	0	0	2	0	0	0

	0	0	1	0	0	2	7
	0	0	1	0	0	0	5

(延長十五回)

【ゲーム】本校は九回、一死満塁で三番成島が中前に運び、2点を返す。更に1点を挙げて4―4の振り出しに戻した。十五回の本校は、二死満塁から、五番佐藤の中飛を秋田師範守備陣がもたつく間に、二者生還し勝敗を決した。

▽準決勝

盛岡中学	0	0	0	0	1	0	2	2	7
青森師範	0	0	0	0	0	0	2	0	2

▽決勝

盛岡中学	0	0	1	0	0	2	0	4	7
青森中学	1	0	0	0	0	0	0	4	8

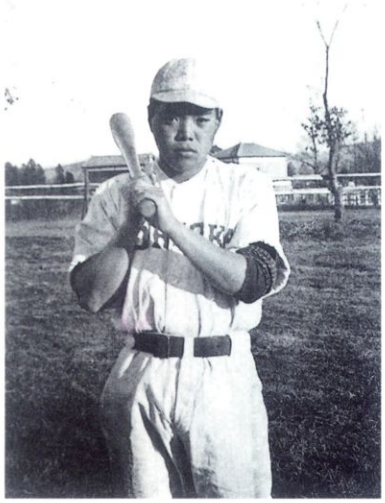
【ゲーム】九回裏、二死満塁から、不運な不規則打球の前に、甲子園出場を逃してしまった。

この年の5年生部員

北田鉄郎
佐藤優
高橋淳
千田玄光
成島忠四郎
川村荘



昭和14年夏、奥羽大会決勝で敗れ涙するナインたち。



中学時代の佐藤優。後に一高の監督、後援会長。

昭和15年［1940］

◆1・16　米内光政（本校出身）内閣発足
◆2月　県下に天然痘が流行

戦前最後の公式戦、関中に屈す

岩手予選は、盛岡市営球場で開かれた。本校は1回戦不戦勝。2回戦では、五年振りに一関中学と対戦した。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡中学	0	0	0	0
一関中学	0	1	1	3

【ゲーム】本校投手は長崎（四年生）。一関中投手阿部は、一年生からマウンドを踏み四年目を迎えていた。エースが病後のためマウンドに送り出した長崎が緩急をつけた投球で好投をしたが、三回には二死二塁から、一関中三番高橋のラッキー安打で先取点を取られるなど計3点を失った。これに対して本校は、二回を除いて毎回走者を出す。中でも四回に無死二、三塁、五回一死三塁と好機を作りながら、一関中阿部にかわされ無得点に終わった。

この年の5年生部員

北田康三
岡本賢四郎（外川）
畠隆一郎
星合剛



昭和17年の部員

昭和16年[1941]—昭和20年[1945]

◆4月　小学校が国民学校と改称される
◆12・8　太平洋戦争が始まる

戦時下の盛岡中学野球部

—桜小路善治氏談—
（昭和十九年卒業）

私は盛中時代、本大会のグラウンドでプレーしたことがない。野球を敵性競技にしてしまった「時代」が、その場を与えてくれなかった。

昭和十四年の入学式。編上靴にゲートルを巻いた新入生は、式終了後、そのままの姿で当時の東溜まりで正座させられた。先輩の助言もあって「野球部」と答えた私はすぐに解放されたが、入部先を決めてこなかった連中は大変だった。もっとも、入部した私には次の日から夜九時までという猛練習が待っていた。

練習は随分やった。私の記憶では新入部員は久慈の川村弘二君と二人だけだったと思う。水くみからグラウンド整備、夕方からはボールに石灰をつけてやる。親父には文句も言われた。しかし、一年から補欠でベンチに入ることができた。岩手予選から青森、秋田との奥羽大会、最後は青森中との決勝戦。「俺は一年生から甲子園に行ける」と胸が躍ったことを覚えている。

結果はまさかの逆転負け。盛岡市営球場のスタンドで資金カンパを始めた瀬川正三郎さん（故人）の背中で、走者一掃の青中の選手が次々にホームを駆け抜けていたというわけだ。

翌十五年は予選の準々決勝で一関中に敗れた。ベンチの中で体験した私の盛中現役時代の野球はここまでだ。大陸の情勢が緊迫の度を増し、やがて大戦に突入する十六年夏、大会は中止された。

敵性競技ということで野球のほかテニスなども

昭和16年の5年生部員

斉藤	雄一
澤藤	雄時
長崎	幹雄
船山	賢一

昭和17年の5年生部員

石川	二郎
佐藤	克載
横澤	謙一
吉田	信正

昭和18年の5年生部員

斉藤	清
川	幸二
小村	時陞
川藤	弘治
斉藤	善吉
桜小路（佐々木）	敬雄
藤原	光
和井	久

昭和19年の5年生部員

二	一
良	雄
康	男
国	夫
時	正
崚	實
利	一
裕	暢
原	
沼	
上	
崎	
動	
井	
藤	
藤	
橋	
浅	
村	
山	
岩	
永	
斎	
内	
高	



ユニホーム姿の浅沼康一。



昭和18年の部員

めだったと思う。よくやったのは国防競技というやつで、銃を背負って模擬手榴弾を投げ、高い障害物を乗り越えてタイムを競った。確か盛中は全国優勝したことがあるはずだ。

対外試合は禁止になっても野球部はあったし、ボールも握っていた。現に十九年の卒業時、五年生七人が部員として記録されている。しかし、大会のない練習はあまり印象に残るような思い出もない。よく覚えているのは雨の日のこと。「今日は休めるか」と思っているとルール勉強だ。当時、野球部は自前の部室を持っていて、そこでみっちりやる。お陰でルールには自信があった。

自信喪失は本業の勉強だ。入学して一学期終了後、吉田先生に呼び出された。旧校舎時計台の下に一室があった。そこで「君、このままでは進級できないよ」と言われた。その時点で私の成績は二百人中百九十八番であった。もちろん、秋からのシーズンオフでなんとか格好はつけたが…今も昔も両立の苦労に変わりはない。

さて、戦争真っただ中というより、敗戦への急坂にあった昭和十九年春、私は卒業と同時に仙台の航空機乗員養成所を経て福岡の飛行隊に入隊した。飛行訓練も受けたが整備兵に回された。思えば、命永らえて今日あるのは、この配属が岐路であった。宮崎県木脇の飛行場で、沖縄に向かう不帰の兵を何人見送ったことか。その後広島、岐阜、明石と移り、栃木県黒磯の部隊で終戦を迎えた。この間、野球に関わることは、夢、現（うつつ）にも一切空白である。

盛岡に帰り、まだ職もなくぶらぶらしていた頃、先輩の関さん（故人）らと会った。「野球をやろう」と言う。そして「お前が監督をやれ」と言われた。昭和二十一年の夏、私は母校のグラウンドで、選手たちの授業が終わるのを待つ毎日だった。

石川、浅沼のバッテリーはじめ宮川、榊、小川、村田、船山…と、錚々（そうそう）たるメンバーが揃っていた。絶対負けるわけがない、そんなチームだった。初戦から圧倒的な強さで勝ち進み、県大会決勝で一関中を6―5で下した。私が監督を務めたのはここまでである。

奥羽大会決勝で、その一関中に敗れた。選手たちの悔しさを、胸中を、今も思う。

戦後半世紀。後輩たちの挑戦が続いている。四十三年、五十三年の二度の甲子園出場が、今に、明日に望みをつないでくれているのだと思っている。

白堊随想録—1

思い出

澤藤時雄　（昭和十七年卒業）

私が野球部にお世話になったのは、昭和十三年から十六年までの四年間である。

四年間の野球部生活で現在でも残念でならないもののひとつは、昭和十四年、盛岡市営球場で開かれた奥羽（岩手、青森、秋田三県）大会で秋田師範、青森師範を連破して決勝に進出し青森中学と対戦、甲子園を目前にして逆転負けしたことである。以下、故佐藤優先輩の手記「私の物語」（『産経新聞』掲載）によれば「八回の表まで7—1で勝っていました。—これは行けそうだ—と後援会長さんなんか甲子園に行く寄付を集め始めてました。ところが八回裏に3点入れられ、九回の裏二死満塁、ツーストライク、ツーボールで平凡なファーストゴロ。不運なことに不規則バウンドして頭の上を越え、泡食って飛んできたライトがトンネルしてしまいランニングホームランで逆転サヨナラ負けをしてしまったんです」

まさに悪夢のような一瞬だった。というのは補欠の私は菅野宥監督の指示で一塁手の成島さんの守備位置を少し後退させるべくベンチを出て「タイム」と声をかけたが審判に届かず、リリーフ投手の故北田鉄郎さんから運命の一球が投げられ、ファーストゴロがイレギュラーし外野へ転々とした有様が今でもまざまざと思い浮かぶ。もう少し大きな声なり大きな動作をしてタイムをかけていればと、自分の至らなさを痛感している次第。

もうひとつは昭和十六年、五年生の時、大会が中止になったことである。例年どおり夏の大会を目指して春から練習を続けた。特にグラウンドの荒れようがひどく、練習を休止して部員全員がバットに代えてショベル等をとり内野全部を掘り返して整備するなど、涙ぐましい努力をして頑張ったにもかかわらず非常時ということで大会中止となり、全員がすっかり落ち込んだことが思い出される。しかも秋には大会があるという噂を信じて練習を続けたが、野球一途に私達について来てくれた下級生諸君には改めて深く敬意を表するところである。

結果的には、昭和十六年から昭和二十年の敗戦まで全国大会は中断（と言っても、昭和十七年には文部省主催の全国大会があったが、本県では予選すらなかった）し、昭和二十一年に復活したことは皆さんご承知の通りである。

ちなみに、私が小学校六年生の昭和十一年には市内小学校（仁王、城南、桜城、付属、大慈寺、山岸、仙北、杜陵）リーグ戦があり、翌年、支那事変ぼっ発とともに中止された。

「甲子園出場の思い出」

（昭和四年卒業）
三浦卓夫



12回大会は早慶戦で活躍した宮武が地方予選で敗れ、単独で優勝旗を返還。またプロ監督の水原が選手で参加して居た頃である。母校は獅子内、久慈等日本球界の先達がたくさんおられ「東北の球都盛岡」、球歴の古い名門校として詳しく紹介され肩身の広い時代であった。大正10年以来5年目。その間に球場は鳴尾より甲子園に移り、未知の球場のため諸先輩の助言や、コーチ陣も日本最高の先達者たちで、特に全日本主将久慈捕手の日の丸レガーは印象的で、強く脳裏に残っている。また東北大会優勝の因は吉田芳郎・坂本金吾等の力が大きかった。

鳥取一中と対戦。押し気味な試合で、殊に9回2死満塁カウント2―3と追い詰めたが、1―4で敗れた。吉田主将の有名な〝御優勝を祈る〟の名句が『朝日スポーツ』や諸雑誌に掲載され「マナー」の点で大いに賞賛され、山田―吉田のバッテリーはそれぞれ十傑に選ばれた。甲子園を見る時、今でも尚当時に想いを馳せ、二塁ベース上の自分の姿やナイン全員の活躍の模様を、グラウンドに置き換え当時を偲んでいる。

〔第15回全国大会に出場〕

県高野連発行『20周年記念誌』より

「甲子園の思い出」

（昭和九年卒業）
海野　典



母校の盛岡中学は我々の時より前に四度甲子園へ出場している名門でしたから、目標はもちろん甲子園一本にしぼっていました。盛岡は十月になれば雪が降って練習が一年中できるわけではありません。雪が降るともう走ることしかできませんから、練習ができる間はきびしい鍛練に明け暮れたものです。夏などはバケツの水をぶっかけられたし、鍛える者と鍛えられる者も真剣そのものでケンカ腰でした。

昭和八年といえばもうかなり古い話ですが、当時はグラウンドにしてもたいしたものはなく、岩手県の大会もうちの学校のグラウンドでやりました。道具類ももちろん豊かではなかった。バットが折れるとクギをうって使ったものです。金属バットを使っている最近では考えられないことですが……。

私は投手とショートを兼用でやりました。いわゆるリリーフは私たちのときからはやり出したものです。打順は四番でしたからまあ投打の中心だったわけです。当時は岩手、宮城、福島の三県で一校だったから予選大会も大変でした。幸い順調に勝ち進んで優勝した時は母校としても七年振りだったので感無量だった。

甲子園での入場行進は上っていたせいか全然憶えていません。甲子園のマウンドは高いので面食らいました。なにしろ球場らしい所で試合をしたことはなかったからいきなり甲子園のような大球場へ投げ込まれても落ち着くわけがありません。一回戦の

相手は浪商でしたし、地元代表で応援団もすごく完全に圧倒されて完敗でした。それに残念なことに予選大会で指を痛めていたのが悪くなって、二回まで11点もとられてしまった。私は立ち上がりはいい方ですがその時はだめだった。しかし三回からはスローボールを投げて三振をとって押えましたよ。結局は3―12で負けたのですが、翌日の新聞には、盛岡中学の立ち上がりさえよかったらこの試合は盛岡が勝っていたかもしれないと書いてくれました。打つ方では私もヒットを打ったし、あそこまでやったんですから思い残すことはありません。

あとで反省しますと、甲子園へ行けば超スピードボールか超スローボールを投げるかしないと通用しない。生半可なボールは必ず打たれてしまうということでした。

ともあれ、野球をやって体力がついたし、自信も出来たのでよかったですよ。人間は健康が第一だから頭がよくて身体が弱いより元気な方がいいですから。後輩のみなさんにアドバイスをすれば、練習の時も試合をやっているんだという意気込みでやって欲しい。よくゴロのエラーがありますが、私たちのときはイレギュラーが多かったが胸でおさえたものです。ゴロに対してもっと真剣に打ち込む必要がありますね。

テレビで高校野球をみるのが楽しみです。大いに血をわかせてくれるような試合をやって下さい。

〔第19回全国大会に出場〕

サン企画編集『甲子園の60年』より

（昭和54年刊行）

「甲子園の思い出」

（昭和九年卒業）

吉田弘四



中京商業と明石中学の劇的な延長戦があった第十九回、昭和八年に甲子園へ行きました。当時は岩手、宮城、福島の三県で一校が甲子園へ出場できたのですが、数からいえば今ほど学校数は多くなかったから、そんなに苦労することもなかったと思います。岩手県では十校ぐらいでした。

練習は早稲田の先輩がきて暗くなるまでやりました。暗くなるとベースランニングをやらされた。私たちの時は野球専用のグランドがなかったのでラグビー部やサッカー部といっしょに使っていました。この点がやりにくかったようです。

私はショートと投手をかけもってましたがショートの方が主でした。予選は順調に勝ったので特に印象に残っていませんが、甲子園へいってあのスリバチ型の大球場を見て驚きました。今ならテレビや交通機関の発達があって甲子園がどんなものか位はだれでも知っていますが、私たちは初めて見たものだったから、観客で埋まった白一色の観客席の雰囲気に圧倒されたわけです。とにかく我々が今までやってきたグランドと規模が全くちがうのでめんくらいました。

一回戦の相手は大阪の浪商でナインが上がったせいか二、三回までに大量点をとられどうにもなりませんでした。私もリリーフとしてマウンドへあがったのですが、かまえている捕手の所へ球がいかなくてバックネットへぶつける仕末ですぐマウンドを

おりました。

昭和四十三年に盛岡一高が甲子園へ出たとき三十五年振りで甲子園の応援に行きましたが、昔の感激がよみがえってくるようでした。あの時も感激して入場行進をやったのですが若い選手が昔の私とダブってくるわけです。それと同時に関西への修学旅行を返上して練習に打ち込み、甲子園へ行こうと明け暮れていた若き日々の思い出が胸に迫って来て感傷的になりました。

今はテレビで野球を見せてもらっていますが、今の諸君は甲子園をある程度知っているから、私たちのように田舎から出てきても上がってしまうことがないのでしょうか初出場でもはつらつとしています。技術的にも格段の進歩があります。しかし、精神面では私たちの時の方がたくましかったような気がします。それも時代が昔と今とではちがうからやむを得ません。しかし、技術がいくら進歩しても高校野球というものは精神面を鍛えないと興味が半減します。自分を甘やかすことなく己の心との戦いだという風に受けとって鍛えてもらいたい。

一つの目的をもって、それを達成するためにひたむきに努力するということは美しいものです。それが若い時であればあるほど後の人生にとってプラスになる。私も盛岡一高の試合を見ながら出来ることならもう一度あのマウンドに立ってやってみたいと思ったものです。

〔第19回全国大会に出場〕

サン企画編集『甲子園の60年』より

（昭和54年刊行）

（絶筆）「横沢パン秘話」

（昭和十五年卒業）

佐藤　優



今は、三ツ割の方に移ってしまったが、戦前横沢パン屋さんは上田にあった。パンの旨さは、現在でも市内の一流レストランからの注文が多いことでも窺い知ることができるが、いつも空腹の十代の生徒たちにはこたえられないものであった。私も旧制盛岡中学校の野球部員だったので、練習帰りの夜道、薄灯りに吸われるように横沢パンに寄ったものだ。友人と無けなしの金をはたいて、冷たい麦茶を飲みながら疲れから解放されたのである。

私の場合、こんな楽しみをしたのは昭和十二～十四年頃の主として一学期であった。当主横沢義次さんの話によると、盛中のこんな伝統（？）はもっと前からあったようで、野球部に限らず、柔道部など各運動部が出入りしていた。昭和八～九年の柔道部は、東北大会を制し、全国大会への出場を果たしている。猛者も多く、練習の帰りに横沢パンに寄るが金の無い時は、ヘコピン（鈴木先生・柔道部部長）に鼻をつまんで電話する。「どうにも腹が減ってしょうがないので、パン代先生につけておきました。よろしく、ガチャン」。ヘコピン先生も相手が誰だか分らないが、折返し横沢パンに電話をかける「生徒の空腹はよく分るが、私もサラリーマンなので、生徒たちには適当に（余り多くなくとの意）出してください」。横沢パンの主人（先代高義さん）は、盛中とは宿敵といわれた盛岡商業学校の卒業生ではあったが「腹が減って困

るのは誰も同じ。学校が違っても子供たちは皆いっしょだ」と盛中の生徒を励ます豪腹の人であった。

私たちの頃は、先生に「パン代つけておきました。よろしく、ガチャン」とやる程度胸のある者がいなかったが、夏休み近く野球の練習も熱のこもっている頃、夏休みで帰省していた野球部ＯＢが練習後「今日はご苦労だった。今からおめえたちに奢るからついて来い。」と横沢パンに行った。確か四～五人がついていったと思う。たらふく食ってからＯＢ氏が電話をかけている。「○×先生スか。パン代○円××銭つけておきました。よろしく、ガチャン」。我々は唖然とした。「ナニ、さっきちょっと宿直の先生誰だか、確かめておいたのよ」とすましたもの。

それにしても、当時野球の練習が終るのは午後八時過ぎだったが、よく遅くまで店をあけていたものである。豪腹の先代が、空腹の生徒たちのために待っていたような気がしてならないのである。

電話で一方的にパン代のつけを宣告された先生やその他の先生たちもよく通ったそうだ。先生たちはほとんどつけなので、給料日には当時盛商生であった当主義次さんが、制服のまま、盛中の職員室に集金したものだと述懐している。だから今でも当時の先生方の名前やアダ名、風貌などを記憶されているのには驚く。

当時の校長は筧舜亮という豪気不屈の教育者で、旧制二高から東京帝大哲学科を卒業後旧制弘前高校から来られた人で（Ｓ２・12～11・５）長い髯を貯え、眼光鋭く、少年たちには極めて近づき難い存在であった。その校長が、月に２回位は横沢パンに出かけ、パンを美味しそうに食べながら、盛中の生徒たちがいろいろ世話になっていて申し訳ないとお礼をいうのを欠かすことがなかったという。

先生方はパン代のつけがきくが、生徒の中にも常連でつけのきく人がいた。昭和七～八年頃の野球部員にも何人かつけのきく人がいてそのつけが大部滞っていたらしい。しかし、先代高義氏は「そんなこと心配するナ。優勝したら帳消しにするから、頑張れ！」と励ましていた。昭和八年といえば盛中は海野、吉田という投手、村井捕手という名バッテリーで東北予選では宮城工、磐城中、育英中を破り、七年ぶりに甲子園出場を果たした。優勝祝賀パレード途次、盛中ナインはわざわざ横沢パンに立寄り、先代に優勝を報告し、共々感涙に咽んだのである。（盛中の生徒たちのもう一人の教育者）

※この原稿は、佐藤優氏の絶筆となったものである。原稿一枚目には「Ｈ６・７・24」というメモ書きが残っている。この日付は、書き始めた日を示していると思われる。



昭和14年の５年生メンバー

特別寄稿

福田　常雄（昭和10年卒業・野球部外）―86
篠崎　島吉（昭和13年卒業）―87
船山　賢一（昭和17年卒業）―88

香村　央子（昭和30年卒業・野球部外）―138
清水　泰宏（昭和33年卒業）―139
吉田　治夫（昭和37年卒業）―140

細田　敬一（昭和43年卒業）―168
遠藤　　弘（昭和43年野球部長）―169
小笠原敬二（昭和44年卒業）―170
佐々木　裕（昭和44年卒業・応援団長）―171

小山　卓也（昭和53年野球部長）―192
松本　正勝（昭和54年卒業・応援団長）―193
中山　　篤（昭和57年卒業）―194

重石　聡子（平成８年卒業・マネジャー）―249
渡邉　里沙（平成９年卒業・マネジャー）―250
松川　智美（平成10年卒業・マネジャー）―251

昭和９年、校庭での練習風景

さわやかな野球試合

IBC岩手放送最高顧問
福田常雄　昭和十年卒業

昭和五年私が盛岡中学一年生の時、東奥義塾野球部を迎えグラウンドで親善試合した日のことを懐かしく思い出している。

試合は10―7で盛岡中学が勝ったが、このスコアでもわかる通り、のびのびと打ち合った実にすがすがしいものだったが、当時のことを知る人も六十八年も前のことで、ほとんどいなくなってしまった。

何しろ甲子園を目指す全国中等野球大会は天下の話題となっていて、この三年後の第十九回の準決勝戦で中京商業対明石中学は、延長二十五回一点を争って大騒ぎとなったものである。

当時の模様を正確に再現したい、と思ったので元盛岡市立図書館長小森一民氏をわずらわして『創立五十周年記念号校友会雑誌』を届けていただいたが次のように記録されていた。

「奥羽の雄東奥義塾軍をわが校庭に迎えて戦い九回を通じて十二本の長短打を放って堂々十点を得たるに対し、敵も後半に七本を飛ばし試合は白熱化したが遂にわが軍の快勝となる。(審判名久井、長岡、金田一)」

これに対して義塾の方はどうなっているだろうか。

私の問い合わせに対して、図書館では九十五年史と創刊以来の『学友会誌』に載っている野球部史の詳しい記録のコピーを届けていただき恐縮した。

これによれば大正十一年(一九二二)から記録されており、盛中と同じように歴史は古い。

ただし盛岡中学は、私が在学していたころから後に函館オーシャンクラブの名捕手と謳(うた)われた久慈次郎が、後輩指導で直接来校していたのでレベルは高かった。

なお、ついでに書けば昭和九年(一九三四)ベーブ・ルースらアメリカ野球界の花形が来日した時、日本側の主将として久慈は、沢村栄治(のち巨人軍)とバッテリーを組んで、沢村をして〝世紀の快投〟をなさしめた。

さて『学友会誌第五号』によると次のように載っている。

「昭和五年五月三十一日本校創立以来初めて遠征の途についた。遠征とは名のみで旅行をしながら八戸、盛岡に行った。三十一日は八戸と翌日は盛中、盛商と試合をし大いに歓迎され夜行にて帰弘した。盛中とは接戦に接戦を重ね美事なる試合をした」

なんとケロッとした正直な書き方だろう



昭和10年、盛岡中学卒業。
現在、IBC岩手放送株式会社最高顧問。
加齢評論家として著書が多数ある。
東京都狛江市在住。

か。また当時としては、試合の表現は、まるで戦闘のように敵だ、味方だ、悲憤の涙だとしているが、義塾の選手には、盛岡の印象は決して悪くなかったことはこの行間に読み取れる。

幼かった私の感じでも、迎える気持ちに親愛の情がない訳ではなかった。

昨今はどちらにも南部藩だ、津軽藩だの意識はなくなったが、昔はたしかに意識のどこかに引きずっていた。

しかしそれなればこそ、われわれは津軽に対して逆に親近感で迎えたのかもしれない。

中等大会も今では高校になったが、回数も私の年齢に匹敵する長さになった。

昨今の不況だ閉塞（へいそく）の時代だ、といわれる折、この全国大会は日本に勇気と涼風を与えている。両校ともここのところ甲子園に駒（こま）を進めていないが、次のチャンスに期待に応（こた）えてもらいたい。（東京都狛江市、加齢評論家）

（平成十年十月七日の『陸奥新報』掲載）

わが甲子園出場記——昭和八年度

篠崎（江袋）島吉　昭和十三年卒業

本校が五回目の甲子園出場を果たした昭和八年の『第十九回全国中等学校優勝野球大会』に、ただ一人の一年生として参加。当時のメンバー十三人中唯一の現存者で七十八歳、東京在住。永年の教員生活後、野鳥愛護・自然保護の活動に従事中。

昭和八年（一九三三）八月十四日は、本校が七年ぶりで五回目の全国大会（第十九回）出場を遂げ、甲子園の土を踏んだ思い出の日である。

この時のメンバーは、エースで四番の海野主将を中心とした次の十三名だが、現存者は私一人である。

投・海野（5）捕・村井（3）一・関（2）一・長沢（4）二・佐藤（3）二・皿井（3）三・佐々木（3）遊・吉田（5）左・高橋（4）左・藤田（5）中・菅野（3）右・外川（3）右・篠崎（1）

ベンチコーチ・山田五郎

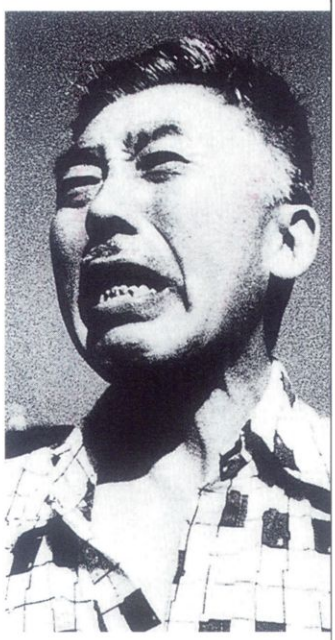
当時の第二次予選の東北大会は、岩手、宮城、福島の代表八校（開催県四校、他は



昭和13年、盛岡中学卒業。
1年生の夏、甲子園大会に出場した。
東京都在住。

甲子園で血潮の旗を振って

OB応援団団長
船山賢一
昭和十七年卒業



昭和17年、盛岡中学卒業。
舟山産婦人科医院。白堊野球を応援するOB応援団長として、今も後輩を励まし続けている。白堊同窓会副会長。

二校）によって争われていたが、県大会の準決勝で、宿敵盛岡商に不覚の一敗を喫した本校は、開催県の特権に救われて、幸運な東北大会出場ということになった。

東北大会では、禍を転じて福とする活躍で、まず宮城工を7―3、準決勝で磐城中を7―4、決勝では育英中に対して8―4と、余裕をもって優勝を飾ることが出来た。

甲子園での初戦の相手は地元の雄、強豪の浪華商で、結果は思わぬスコアでの敗戦となった。

盛岡中	0	0	0	3	0	0	0	0	3
浪華商	1	1	0	0	0	0	0	1	× 12

勝負は二回裏の10点がすべてで、まさに悪夢のような一瞬であった。これには、海野投手が大会直前に右手親指のひょうそう（瘭疽）を患い本復しなかったという不運があった。

ベンチの不安の通り初回から四球で1点を失い、問題の二回には連続四球を与えて吉田投手と交代をする。

公式戦初登板の同投手はムキになって正面から直球を投げ込み、2四球、3単打、1野選によって5点を失い、再登板の海野投手も2四球、1三塁打、1内野失によって、さらに5点を失う結果となった。

三回以降は海野投手も持ち前の沈着冷静な投球に返って、対等な試合運びだっただけに悔いの残る一戦だった。

かの飛田穂洲氏も、まず名門校盛岡中の復活を喜び、好感の持てるカラーとたたえた後、中盤以降大差にもめげず追いかけてきた気力と打力には、さすがに伝統校の血筋は争えないとの好意的な論評をされた上に『遅かりし・緩球凡打の道』と結論された。

なお、本大会では準決勝で『球史に輝く25回戦』として有名な中京商対明石中の一戦があり、また、中京商が不滅の三連覇を飾っている。

余事ながら、この年は日中戦争、不景気に加えて三陸大津波、冷害、凶作、女子の身売り等世相は暗く、九月には宮沢賢治が逝去している。

昭和五十三年八月八日、私は甲子園のアルプススタンドにいた。私にとって10年振り2度目の甲子園。甲子園原頭に立ち、緊張感に打たれたことを思い出す。

七日の夜行列車（新幹線はまだ開通していなかった）に乗り、甲子園に向かう。同級生の金田一晋一君、宮田欣一君、瀬川明君が一緒だ。

球場に着く。中村市助君、佐藤宏君、上野啓悦君ら同級生の顔が見える。大阪病院の杉立先生、それに二、三の親戚といった懐かしい人たちに会えたのも、甲子園出場のお陰だ。

試合直前。「世に謳はれし浩然の…」。応援団の斉唱する校歌が、銀傘にこだまする。四十三年の時と変わらないバンカラ応援。肉声と和太鼓を使っての伝統の応援スタイルである。私も真紅の応援旗を打ち振る。手にも声にも力が入った。

対報徳学園戦に、必勝の意気込みで臨んだ。初回先取点を奪われた。しかし、北條投手は走者を出しながらも、大きなカーブを巧みに使い後続を断っていく。四回、一高が追い付く好機が巡って来た。先頭の森君が左中間を破る二塁打。続く川村君のバントで三塁へ進んだ。ここぞとばかり燃え上がる応援団。「ピッチャーおかわりこい」の大合唱となったが、一発が出ず無得点に終わった。

五回まで被安打3の好投を続けた投手に疲労の色濃く、連続長打を浴びピンチ。「バットエール」でナインを励ます応援団。応援用大バットを応援委員が振り上げる。それに合わせて「一高！」「一高！」の連呼。怒涛のごとき応援だったが、報徳のソツの無い〝足攻〟に一挙6点を失う。無念やる方なし。

しかし、0―7で敗れたとは言え、北條・泉舘両投手の力投はあっぱれであった。また、森捕手がファールをバックネット直前まで追って転倒したファイト満々のプレーは、大観衆から温かい拍手を受けた。応援団も選手も、白堊健児の意気を存分に示してくれた。

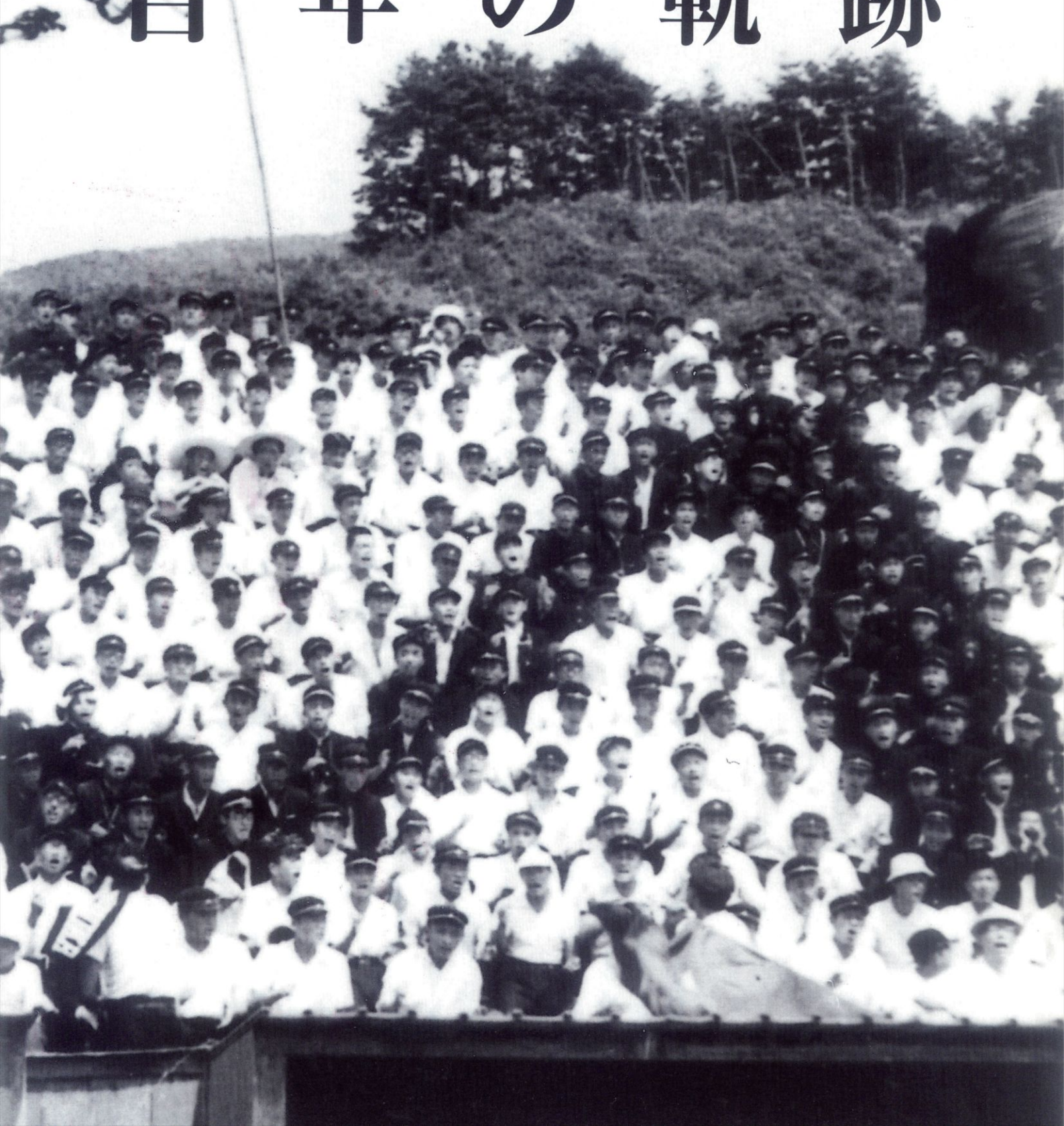
狭い校庭、長い冬、進学校なるがゆえの勉学との両立などを克服し、甲子園出場を成就したことを、テレビの解説者が称賛してくれた。私は感無量なるものがあった。

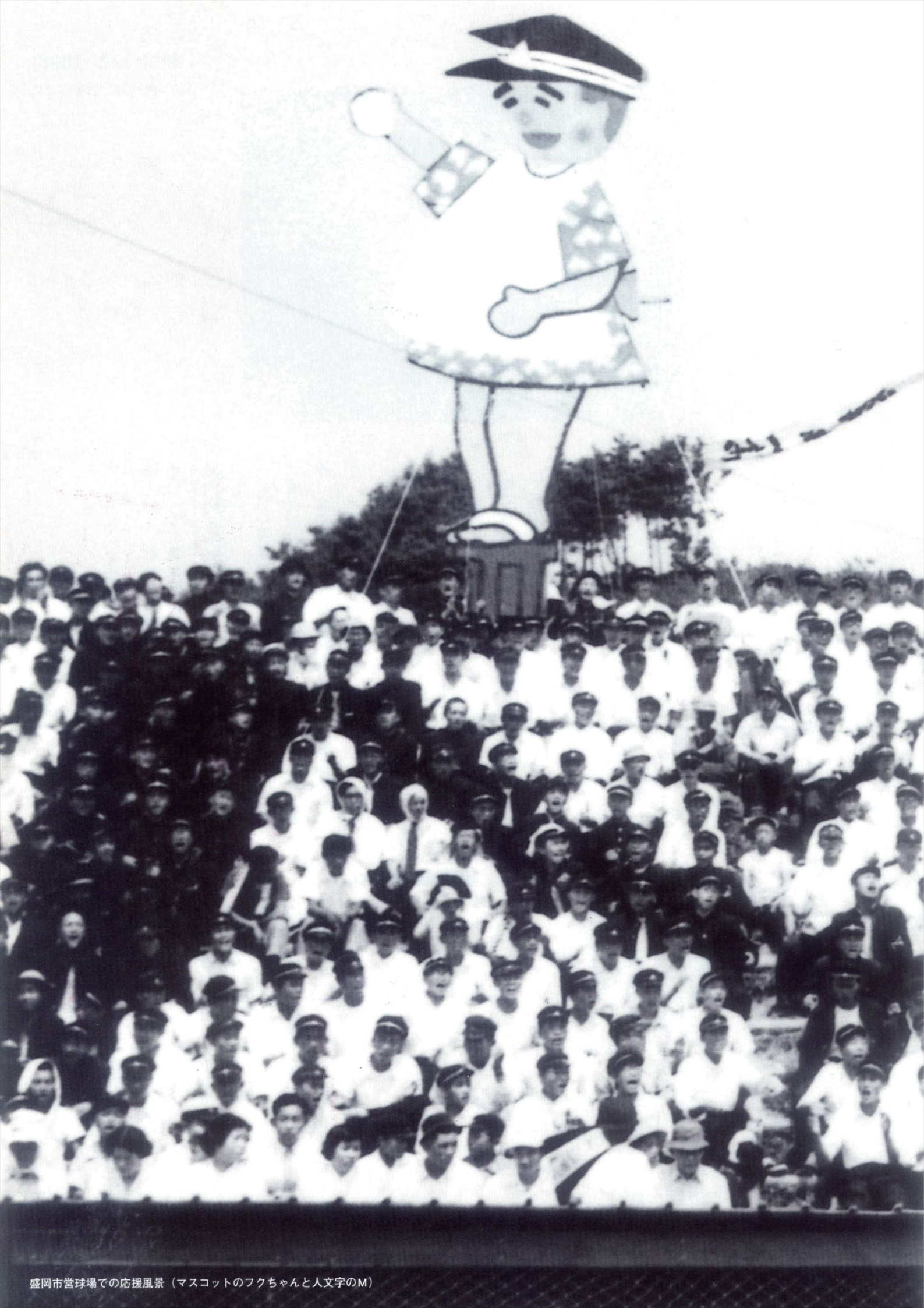
泉舘主将は帰校後、後輩たちに「甲子園でも勝てる野球を」と激励した。一高らしく〝集中力に徹した精神野球〟を実践し、一年でも早く十度目の甲子園を果たしてもらいたいと切に願っている。燃えよ白堊！

白聖野球部

第三部―昭和期②【昭和21～26年】

百年の軌跡





盛岡市営球場での応援風景（マスコットのフクちゃんと人文字のM）


昭和21年の部員

昭和21年[1946]

◆4月　初めて女性有権者を含む総選挙
◆11・3　日本国憲法公布

奥羽大会の決勝で涙

終戦の翌年に当たるこの年、早くも全国中等学校優勝野球大会が復活した。本校は県大会で優勝。地元で開かれた奥羽大会でも決勝に進んだが、一関中学の前に敗れた。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

岩手中学	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡中学	6	0	0	0	0	2	0	0	×

▽3回戦

盛岡中学	0	0	0	0	2	3	4	0	0
福岡中学	2	0	0	0	0	0	0	0	0

▽準決勝

花巻中学	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡中学	2	0	0	0	4	0	6	0	×

▽決勝

一関中学	2	2	0	0	0	1	0	0	0
盛岡中学	0	0	2	0	1	0	0	3	0

奥羽大会は、上田地区にあった岩手医専グラウンドで開かれた。岩手から2校、青森と秋田から1校ずつ出場し、代表権を目指した。決勝は地元決戦となったが、本校の敗戦に終わった。

▽1回戦

角館中学	0	0	0	0	0	0	1	0	0
盛岡中学	0	0	2	0	0	0	0	0	0

▽決勝

盛岡中学	0	0	0	0	0	0	0	2	0
一関中学	0	0	0	0	2	0	1	0	×

この年の3年生部員

三浦清巳信
川村泰良
小川藤
伊中川

昭和22年[1947]

◆5・3　新憲法慶祝行事が県内各地で実施
◆11月　共同募金始まる

二年連続関中に苦杯

本校は県立農蚕学校に大勝し、2回戦の一関中学戦に臨んだが、相手投手の前に散発2安打に終わった。



昭和21年7月、岩手県大会の優勝メンバー。

▽1回戦

盛岡中学	5	3	3	1	3			15
農蚕学校	1	0	0	0	0			1

（五回コールド）

（盛）斎藤、村松―宮川

（農）堀越―千葉

▼三塁打　宮川2（盛）

▼二塁打　村松（盛）

▽2回戦

一関中学	2	1	0	0	1	0	1	3	8
盛岡中学	0	0	0	0	0	0	0	0	0

（一）田村―北原

（盛）村松―宮川

望めば、叶う

石川泰三郎（昭和二十二年卒業）

在京白堊会は、昭和四十三年八月、当時の盛岡一高野球部が甲子園大会に岩手県代表として出場し、さらに準々決勝まで駒を進めた盛り上がりの中で、在京の白堊ＯＢに工藤先輩（昭和十七年卒）が呼びかけて創りました。やはり一高野球部の甲子園出場は全国の同窓生が校歌を斉唱する一大イベントなのです。故郷を離れて暮らしている先輩たちは、夏になると早起きして新聞を見るのです。今年の夏も大栄信金理事長の大内氏が、来訪一番「専大北上が代表になりましたねぇ」と残念そうに呟きました。

九月六日のＮＨＫスペシャル『延長十七回横浜ＶＳＰＬ学園闘いの果てに』を見て、現高校野球のレベルの高いのに感心し驚きました。春の選抜で優勝した横浜は、春に打たれていないＰＬの下位打線に連打され2点を失いました。横浜のベンチはＰＬ三塁コーチの打者に対するアドバイスに不審を持ち原因を究明しました。横浜の捕手は投球を受ける姿勢の動きで直球・変化球を決めていました。ＰＬは直球は「行け行け」変化球は「狙え狙え」と打者にサインを送ったのです。

横浜の攻撃で走者三塁の時は三塁ゴロなら走者は躊躇なくスタートして捕手のミット目がけてスライディングする。インフィールドを走った走者に返球が当たり春に横浜が勝ちました。

夏の大会ではＰＬは同じ過ちをせず、反対側に送球してアウトにしました。三塁バックホームの練習を再三繰り返したそうです。

横浜は1点を追う八回二死一塁となりました。ＰＬベンチは長打を警戒してライトにバックするよう指示したところ、一塁手が勘違いして塁を離れ、二盗を許し同点打を浴びました。横浜の監督はこの



昭和24年夏、奥羽大会決勝。対黒沢尻高戦、本校七回裏、3点目を挙げる。

プレーで勝利を確信したと言っていました。

十一回1点リードされたPLは二塁走者がタイムを求め、ゆっくりとスパイクのひもを通しました。走者は打者に落着いて冷静になって打ってくれと祈ったそうです。打者は見事に打ちました。十六回表横浜は一死満塁になりました。監督はPLの投手のスクイズを見破る技術は超一流で、出来ないと判断。一方のPLは、正捕手が怪我で退場。本試合で経験のない二年生の捕手がマウンドで投手にスクイズ対策を相談したところ、目を大きく明けたら「ハズス」と打合せたそうです。横浜が1点勝ち越しましたが、PLも内野ゴロの打者が一塁への猛スライディングで本塁送球を阻止して同点にしました。十七回横浜のホームランで秘策因録の対決が終わりました。

この経過は現役の選手にも勉強になったと思います。

有名なフットボールコーチ曰く「特に人よりも才能に恵まれているわけでもないのに並外れた業績を上げられる人がいるのはなぜか。二つの原則に要約される」と、一つは「ひとが何を成し遂げられるかは、持っている能力と同じくらいそのひとの信念に左右される」

二つめは「どんな助力を得られるかで結果はまったく違う」

人生をエンジョイし情熱的で強い目的意識を持ち、しっかりした自尊心と自負心（自分は人生の大事な事を実現できると言う気持ち）を抱いて「望めば」「叶う」を実現出来る野球部の後輩諸君に期待しています。

甲子園で校歌を斉唱しよう。

昭和23年[1948]

◆4月　一関に市制施行
◆7・10　郵便料金値上げで、はがき2円になる

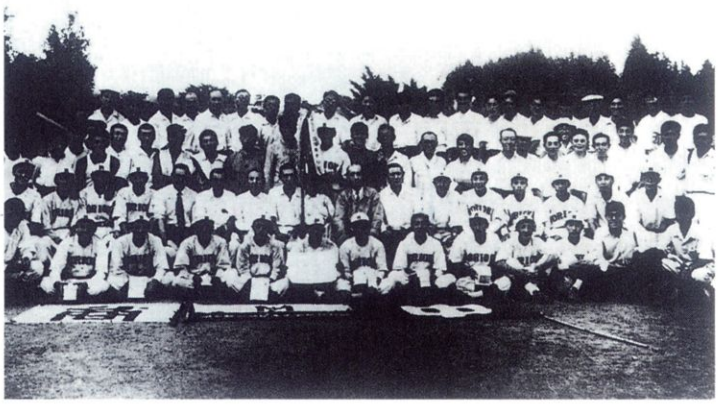
宿敵福岡高に敗れる

学制改革が実施され、旧制中学は高校に変わった。これに伴い、大会名は「全国高等学校野球選手権大会」と改められた。この年は地区予選を行って学校数を絞った上で県大会を開いている。本校は地区予選（盛岡と県北の学校）1回戦で福岡高と対戦。完封を喫した。

▽1回戦

盛岡中学	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福岡中学	1	0	0	3	0	0	0	3	× 7

（盛）川村―小原
（福）横館、高木―菅



昭和24年、奥羽大会決勝で黒沢尻高校を破って優勝。6度目の甲子園出場を決めた。



昭和24年の3年生部員

この年の3年生部員

佑治　助清　武道　昌二
光登　貞　要　合倉　栄
山藤　　川田　　田岡
青斉　榊宮　村盛　藤

昭和24年［1949］

◆9月　第1回国民体育大会が開催
◆11月　県高等学校野球連盟結成

16年振りに甲子園へ

県大会は、花巻温泉グラウンドと花巻一高（現花巻北高）を会場に開かれた。本校は県大会準決勝で敗れたが、奥羽大会の岩手開催によって出場権を得た。決勝へ進み、県大会で苦杯をなめさせられた黒沢尻高と再び対戦。雪辱なって、16年振りの全国大会出場を果たした。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡高校	1	1	0	0	0	0	0	0	0
宮古高校	0	0	0	0	0	1	0	0	1
（延長十二回）									

盛岡高校	0	0	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0
岩手高校	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	2			4									

▽準決勝

盛岡高校	0	0	0	0	0	0	0	0	0
黒沢尻高	2	2	0	0	0	0	0	0	0
奥羽大会は盛岡で開かれた。									

盛岡高校	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
黒沢尻高	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	7			0									

▽1回戦

盛岡高校	0	0	0	0	0	0	0	0	1
青森一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	1			0					

▽準決勝

一関高校	0	0	0	0	2	0	0	0	2
盛岡高校	1	4	0	2	2	0	0	1	×
	2			10					

▽決勝

黒沢尻高	0	0	0	0	0	2	0	0	0
盛岡高校	1	0	0	2	0	0	0	2	×
	3			2					

◇第31回全国高校野球選手権大会

▽1回戦

盛岡高校　7―18　平安高校（京都）

※詳しくは甲子園特集ページへ。

この年の3年生部員

三雄小　志裕川　也伸村　義弘我　喬陽野　昇正山　司克松　省角


昭和25年7月、岩手県大会で一関高校を破り優勝。

昭和25年[1950]

◆1月　千円札（聖徳太子像）が発行される
◆8月　盛岡鉄道管理局が発足

2年連続の甲子園出場

◇**夏**　下馬評の高い本校は、実力を十分に発揮し、県大会で優勝した。

▽1回戦

岩手高校	2	0	0	0	0	0			2
盛岡高校	0	0	0	0	7	5×			12

（六回コールド）

▽2回戦

胆沢高校	0	0	5	2	0				7
盛岡高校	4	4	0	0	9×				17

（五回コールド）

▽3回戦

黒沢尻高	1	0	0	0	2	0	0		3
盛岡高校	0	3	1	0	1	0	3×		9

▽準決勝

一戸高校	0	1	0	0	0	0	0		1
盛岡高校	1	0	3	3	0	4	1	0×	12

▽決勝

一関高校	0	0	0	0	0	0	0		0
盛岡高校	0	3	0	3	0	4	0	0×	10

奥羽大会は秋田市で開かれた。本校は決勝で本荘高を破り、2年続けて甲子園に駒を進めた。

▽1回戦

金足農業	0	0	0	1	0	0	1	0	5
盛岡高校	0	0	3	6	0	0	0	1×	10

▽準決勝

秋田工業	0	0	0	0	0	0	0		0
盛岡高校	2	0	1	0	0	2	0	3×	8

▽決勝

本荘高校	0	0	0	0	0	1	0	0	1
盛岡高校	3	0	1	0	1	0	0	0×	5

◇**第32回全国高校野球選手権大会**

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡高校　2―3　米子東高（鳥取）

※詳しくは甲子園特集ページへ。

◇**秋**　盛岡市営球場15周年記念のため「東北高等学校招待野球大会」が特別に開かれた。本校、高松高（現盛岡工業）、一関高（現一関一高）の

この年の3年生部員

藤村朗一
森雄



昭和25年8月、甲子園で練習をする盛岡高校のナインたち。

地元チームが3校。それに加えて、八戸高、金足農業、気仙沼高、山形東高、郡山工業が招待された。本校は優勝し、地元勢の意地をみせた。

▽1回戦　盛岡高校　13―4　山形東高
▽準決勝　盛岡高校　3―2　気仙沼高
▽決勝　盛岡高校　15―2　一関高校

盛商と統合の頃の思い出

村松　昇　（昭和二十五年卒業）

今回、百周年の記念すべき年を迎えるが、野球部が他の高校の野球部と一緒になったということはこの時期しかない。

しかも、野球部として甲子園出場9回のうち2回がこの時期であった。

昭和二十年八月十五日の敗戦によって、敵性スポーツとして中断されていた中学校野球が復活し、盛岡中学（当時）でもその年の秋には野球部が活動を始めている。

勿論、荒廃した国土のなかで果たして甲子園大会が再開されるのか、その辺は全く不明であったが、当時、進駐していた米軍がソフトボールを盛中の校庭で楽しんでおり、その中をぬって校内クラス対抗の野球大会も行われていたと記憶する。

そして、翌二十一年の早い時期には甲子園大会（この年は甲子園の使用は出来ず西宮球場）の再開が朝日新聞社から発表され、大いに沸いたところであった。

当時は各校とも軍隊から復員した年齢の高い部員が在席し、盛中でも投手に石川、捕手に浅沼、遊撃手として小川といった超中学級の選手が復帰して、彼等を中心に練習試合でも殆ど10点以上の差をつけており、「大地を打つ槌が外れても盛中が負ける事は無い」と言われていたが、県予選では優勝しながら奥羽大会（当時は岩手、秋田、青森の3県から1校）で、県大会で破った宿敵関中に敗れてしまった。岩手医専（現杜陵高校の地）のグラウンドから、咽ぶ悲憤の涙にくれながら田んぼの畦道をトボトボと引き上げて来た光景が半世紀たった現在でも昨日のように目に浮かぶ。

翌二十二年、翌々二十三年は中学、高校制度の革命がいろいろあり、そのため戦力的にベストの陣容で大会に臨めず不本意な成績に甘んじた。

一方、ライバル盛岡商業はと言えば戦後の復活が遅れ、盛中との復活の第1戦は0―32という記録的な敗戦であり、不審のどん底であったが、二十三年に至って有望新人が入部し漸く前途に光明が見えて来たといったところであった。

この間、昭和二十三年には新制高校となって盛


新岩手日報
高校野球
一関、福岡に快勝
きょう四強豪対戦

県大会3回戦、対岩手高に4―2で勝ち、準決勝に進む。
（昭和24年7月31日新岩手日報）

岡中学から盛岡一高になる。

昭和二十四年度を迎え小生も最終学年となり、なんとか悔いの残らない高校生活を送りたいと思っていた矢先、またまた、学制改革で一高、二高、更に商業が統合されることが知らされ、勿論、野球部も一緒ということで少なからず動揺したことを覚えている。

お互いに県内のトップクラスではないが、ベスト8の力が着いてきており今年こそなんとかなるとの自信もあった。

こうなると外野も煩くなり、それぞれの先輩連中が「うちが強いから一高が主力だ」、「こっちにいい選手が沢山いるから商業が中心だ」とかしましい。

しかし、選手の間では、二十一年は関中が、二十二年には福岡中学が甲子園出場を果たしたのに、一高も商業も戦後は甲子園から遠ざかっている。

なんとかこの機会に統合をいい方向にもって行き、念願の甲子園出場を実現させようという一致した考えが出てきたのは確かなことであった。

しかし、野球に対する考え方も、チームカラーも異なり、戦前から「岩手の早慶戦」といわれ、お互いにライバル意識の旺盛な二つのチームが、単に一緒になったからといって強くなるものではない。さまざまな悩みを抱えての統合であった。

こうした時、誰から提案されたか不明であったが、三月末、チームワークを図るために集まろうという話が持ち上がり、天神町の城南荘（現在は無い）で一夜ドブロクコンパを開催した。このドブロクコンパ、実際どこまで効果があったのか分からなかったが、決してマイナスには作用しなかったと思う。現在なら間違いなく1年間の出場停止位では済まなかったのではないか。こうなっては、伝統ある一高野球部も廃部の運命にさらされていたかも知れず、こんな回想録などとても書けなかったのではないか。

この年は岩手県で奥羽大会が開催されるとのことで、本県から四チームが出場できることが決まり、県内の勢力分布はと言えば、黒沢尻高（現黒北）がサウスポーの好投手佐藤を擁し、攻守ともバランスが取れNO・1。次いで瀬川、小原の二投手を持つ花巻高（現花巻北）、盛岡高、甲子園投手田村の宿敵一関一高、伝統の福岡高が続き、これに新鋭の高松高（現盛岡工）、岩手高といったところで出場チームは三十余チームであった。

我がチームは、主戦投手田頭（一年）。オーバーとサイドハンドの中間でスピードはあまり無かった。今でいうスライダーが決め球で、いろいろの球種を持つ、頭脳的な投手で、特に投手守備が抜群で


黒高花高決勝へ
盛岡一関涙呑む
県大会準決勝で黒高に敗れるも、奥羽大会に出場となる。
（昭和24年8月1日新岩手日報）

スクイズなどもやらせておいて、ホームで簡単に殺すといった器用な投手でもあった。控えはスピードの橋本（二年）と技巧派の村松（三年）。

攻撃陣は一年の鈴木を四番に、好打の一、二番コンビ藤村、森（共に二年）とライトヒッターで好機に強い川村（三年）が中心であった。

守備陣は内外野とも特に穴は無く、一応バランスがとれた布陣と言えた。

監督沢藤（故人）、コーチに佐藤優（故人）、田山、大沢。

主将村松、副将小川、マネジャー久我で、夏の大会前の戦績は七割程で甲子園を狙える位置にあった。

奥羽大会が本県開催の年で、戦後初めて地元の四チーム、他県二チームずつの八チームで代表を競うことになり、県予選は日居城（ひいじょう）野球場（今の花巻球場）、奥羽大会が盛岡市営球場であった。

県予選は雨の日が多く日程消化に苦労したが、最後はこの雨が我々に味方することになるから何が幸いするか分からないものである。

一回戦は不戦勝、二回戦からの登場となった我がチームは宮古高校との対戦。戦後ナンバー1投手と謳われた快速球の木村の尻上がりの好投に苦しみ抜き延長十一回、いちかばちかの鈴木の三盗が相手捕手の悪送球を誘い薄氷の勝利であったが、これですっかり調子を崩してしまった。三回戦は岩手高校に4―2で勝ったものの、準決勝は黒沢尻高に0―7の完敗で、辛うじて奥羽大会への出場権を獲得して盛岡に帰ってきた始末であった。

県優勝は黒沢尻高、準優勝は花巻高、そして県代表のもう一つは、一関一高であった。

前述した通り、雨に悩まされた大会であったが決勝戦も雨で二日延期され、県大会終了後一日で奥羽大会が始まったのである。

我がチームは盛商の寄宿舎に合宿し、大会に備え軽い練習をして調整に努めた。

奥羽予選の第一試合は卒業後プロ（近鉄バッファローズ）に入団した石田投手を擁し絶対甲子園行きだと豪語する青森一高（市立で青森高校ではない）との対戦だった。

試合は田頭、石田の投手戦となり、どちらもチャンスらしいチャンスもなく、0―0で最終回を迎えた本校に一死三塁の好機が訪れた。この時スクイズのサインを見誤った三塁走者が塁を飛び出し三本間に挟まったが、捕手が悪送球し貴重な1点を得てそのまま1―0で辛勝したのである。

この大会は、本県勢がいずれも勝利し、再び県大会のやり直しとなったが、我が方は宿敵一関高とぶ


縣四代表揃つて快勝
高校野球奥羽大会
大観衆熱狂の乱舞
盛岡、青森を抑う
黒高安打7本
一関三回に快打

奥羽大会第1日目、対青森一高戦に勝利する。
（昭和24年8月5日新岩手日報）

つかり、二十一年の雪辱とばかり意気天を突くものがあった。その上、調整練習がうまく行き、県予選とは見違えるばかり投打とも調子が上がった。それ以上にこの試合は、固くなったか好守を誇る一関高の内野陣に凡失が出て、最初からビッグイニングを迎え、試合半ばに主戦田頭を休ませることが出来た。これが決勝の勝敗を大いに左右した。

一方のブロックは県大会の決勝、黒沢尻高と花巻高の再現で、両者最後まで死力を尽くしての一戦となり、5―3で再び黒沢尻高が勝利し決勝の相手となった。

決勝の日の盛岡市営球場はバックネット裏から一塁側、そしてライト方面、バックスクリーンまで、統合した女生徒を含む大応援団、盛岡市民が大挙して押しかける。三塁ベンチ裏から左翼方面はトラック何十台かで押し掛けた黒沢尻高校応援団で立錐の余地も無い人々で埋まった。午後一時、長澤正夫球審（現県野球協会長）のプレーボールで戦いの火蓋が切られ、先攻の我がチームは初回、二番森の二塁打と四番鈴木のタイムリーで先取点を奪い、田頭が好調で球を外角に集め黒沢尻打線を凡打に打ち取って行く。

回が進むに従い、相手のサウスポー佐藤も調子を上げ、特に右打者の内懐をクロス気味に突く快速球が決まり出し我が方も0が続く。打線も田頭の外角球に慣れ五回、遂に2点を奪われ終盤へと向かう。何とか佐藤の球に食らい付き七回二死満塁という一打逆転の好機を迎えた。五番稲葉（一年）の当たりは三塁ゴロ。三塁手伊藤が捕球態勢に入ったその瞬間、打球はイレギュラーし伊藤の頭を越えて転々レフトへ。二者ホームインし鮮やかに逆転。二走森が勝ち越しのホームベースに滑り込んだ光景は、今でも鮮明に覚えている。

この回、佐藤投手は、県大会から雨で連投では無かったとはいえ、全試合一人で投げ抜き緊張の連続もあり球威が落ちていた。そして彼の武器はクロス気味の快速球とアウトシュートで、惜しむらくはカーブ（落ちるカーブ、当時はインドロップと言っていた）が無かったのが我々には幸いしたと思われる。

伊藤三塁手の懐古談「あの時は、二死満塁で平凡なゴロだったので、捕球し三塁ベースを踏もうとした。姿勢を低くした途端にゴロが弾んで肩先を越えていった。普段のように取って一塁に送球すれば弾んでも処理出来たと思う。あのことは今でも目に浮かび残念だ」

まさにラッキーな逆転劇であり、その後八、九回と二遊間に好プレーが出てこの1点を守り切り、念


盛岡高 甲子園に玉砕
猛烈な打撃戦
守備の失策に潰ゆ
田園の不調

甲子園で平安高校と対戦するが、打撃戦に屈す。
（昭和24年8月15日新岩手日報）

願の甲子園への切符を手に入れた。

この日は、夜遅くまで提灯行列が市内を練り歩き、市民あげての「バンザイ、バンザイ」の歓呼の声がこだました。昭和十一年に盛商が甲子園初出場を果たして以来の盛岡市からの甲子園出場であり、昭和十四、二十一年と二度も奥羽大会の決勝で涙を飲んだ一高関係者には無上の喜びであった。

昭和十四年、一高野球部史上最大の痛恨事といわれる青森中学との7―1からの逆転サヨナラの悲憤の時のライトを守っていた長崎先輩が「あの時の逆転劇のライト横のゴロを直接後逸した私にしてみれば、兵隊に行っても忘れられず、胸のつかえが取れず気持ちが晴れなかったが、ようやくさっぱりした」と言われた時は、甲子園に出場出来たことは直接勝った我々ばかりでなく、皆に喜んでもらえ本当によかった、というなんとも言われぬ気分になったものである。

当時は寝台車も無く、東京まで十二時間かかる夜行列車で上京し、日中は東京で休憩し、また夜行で大阪入りした。

食糧事情も終戦後の最悪の状態は脱したものの、全員リュックに米と味噌を背負っての甲子園行きであった。

現在はやっていないと思うが、当時は抽選会で各校が壇上にあがり校歌を歌わされたと記憶している。歌ったのは「世に謳われし」の校歌ではなく、現在も盛商野球部が必ず口ずさむ「凱歌」であったと思う。

その年の代表チームで有名なのは小倉高校の福島投手で大会三連覇がかかっており、打者では往年の強打者、高松一高の中西太三塁手であった。

我々の相手は大会二日目の第二試合で甲子園の常連、伝統校、京都代表平安高校であった。

この時の平安は攻撃力が抜群で足もあり、投手力が頑張れば優勝も望めるといったチームであった。

試合は、下馬評どおり猛烈な打棒の洗礼を受け、6打数5安打が二人、そのうち一人は大会史上初めてのサイクル安打を達成し（杉山二塁手、後日大、大映スターズ）、おまけにその後、清原、桑田時代のPL学園が東海大山形戦で破るまで大会新記録となっていた一試合の最多安打24の記録も達成されて、試合は7―18で敗れたのである。

実は裏の話がある。というのは、何年か後に黒沢尻工が甲子園初出場の際、食中毒で何人かの選手が出場出来なかったことは有名な話であるが、我々にも同じことがあったのである。

久し振りの甲子園出場というので先輩はもちろんのこと岩手県人の方々が、神戸牛やスイカな


新岩手日報 第4304號

名門OB優勝戦

栄冠 盛中に輝く

盛中 0 0 0 0 0 0 1 0 0 1
盛中 1 0 0 0 0 1 0 0 A 2

畑中の善投空し

熱闘の跡

成島ホームラン

安打9本の福

生みの親五十年の感慨

田中舘博士緯度観測所を訪

山ボシ街チャコ

深沢省三絵・深沢紅子文

岩手日報主催第2回県下名門ＯＢ選抜野球大会決勝で、福岡中を破り優勝する。（昭和24年10月10日新岩手日報）

ど、当時では珍しいものをたくさん差入れて下さり、我々も喜んでいただいたのであるが、何せ県大会以来の連戦で疲れており、その上、関西特有の暑さに体が弱っていたからたまらない。殆どの選手が腹をこわして、試合当日は皆ピィーピィー腹で満足に動けなかったのである。満足なのは小生と今は故人となった向井田選手（一年）のみだったと思う。

更に当時の甲子園球場のネット裏の鉄傘（現在の銀傘）が戦時中の金属供出で無く、影が出来ず白一色で打球の出どころが分からず、しかもあがってしまって気持ちが普通でないときている。これでは打たれたボールをまともに追えるわけがない。ライトを守っていた小生には横から打球は見えるが、正面に飛んでくるセンターはどこに飛んだのか分からず、左中間に飛んだフライにライトの方に走って来る。これではヒットを24本も打たれるのが当然であり、翌日の朝日新聞の大会を伝える横山隆一画伯の漫画に、打球とは反対の方向に走っている盛岡の外野手が面白おかしく書かれる始末で、まさにお笑いであった。

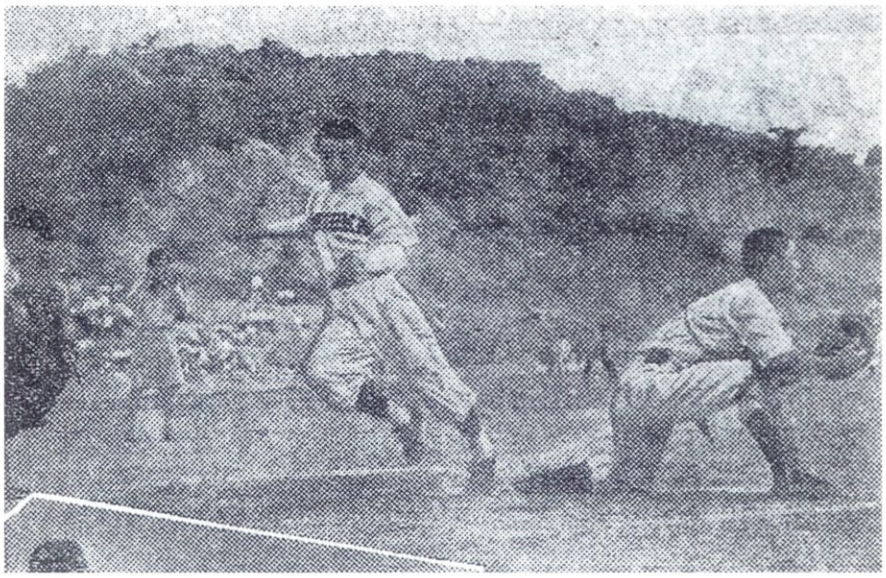
やはり、相手は投手力が弱く我々もヒット11本位は打って7点奪っているし、次の試合で中国代表の柳井高校に3対4かで敗れている。

なお、この平安高校は二年後全国優勝しているが、本校との試合でも三、四人は一年生選手として出場している筈で、彼等が全国優勝の主力選手であった。

帰りは京都見物、更に東京に一泊して郷古潔（経済の大御所）、出淵勝次（外交官）といった大先輩の御招待を受け国会議事堂などを見学して帰盛したのである。

この時になるとお腹の具合も回復し、もう一度試合をしたいといった雰囲気で誠に勝手なものである。

今、冷静に振り返って見ると、一応、投打のバランスは取れていたが、決して強いチームではなかったと思う。県大会の初戦、奥羽大会の1回戦、そして決勝と幸運に恵まれて決勝点を挙げるなど、一つ間違えばイチコロの運命にあったチームカラーでもあったわけだ。いろいろ言われたように、春先は一高、商業といったチームカラーの違いなどチームワークがうまく取れずポジション争いに敗れ、退部した部員も何人かいたのも事実であったが、甲子園に出場出来るチャンスなのだから、選手だけでなく先輩も勝つために一致協力して頑張ろうという気持ちになり、六月頃から先輩諸兄も盛中、盛商の垣根を越えて指導に足を運



昭和26年夏、岩手県大会決勝。対岩手高戦。五回表、島田の安打で二走一戸が生還。

び、徐々にチーム力が上昇していった。

そして、大会前には早稲田大学野球部の蔭山主将（元南海ホークス監督・故人）をコーチに迎え、基本プレーをチェックして貰うとともに、勝つためのノウハウなども伝授されチーム力は向上した。とにかく一、二年主体の若いチームであったが、その割には試合度胸があり、一人ひとりが攻守にわたって独特の業をもっていて、それがチャンスやピンチに発揮されたのでないか。そんな感じのチームだったと思う。

その翌年、昭和二十五年は卒業による痛手も少なく、打撃の良い新入生を加え、文字通り県下は無論、奥羽でも敵無しの常勝軍で、あっさり二連覇して甲子園に乗り込んだが、惜しいかな戦力にいささか慢心し甲子園で勝つための練習が不足し、米子東に2―3で惜敗している。今、思い起こしても実に残念でならない。せっかく一高、商業が一緒になったチームであり、あれだけ戦力も充実していたのであるから甲子園で大暴れをさせたかったチームであった。

こんなチームも気まぐれ学制改革の余波をまたまた受け、統合も僅か二年で終わり、再び、一高と盛商（分離した当座は盛岡三高と称した）となり、この夏の県大会の準決勝で運命の対決をし、7―6で予想を覆し一高が勝ち、県大会も制覇し、奥羽大会では歴史に残る延長二十四回の死闘の末、青森高に0―1で敗れ、三連覇の夢がはかなくも消え去るのである。

最後に後輩諸君よ、「岩手の高校野球をリードするのは、いつの世も一高であり、商業なのだ」のプライドを持ち、勝った方が甲子園に行くんだの気概で、いつの日か真紅の大優勝旗を奥羽の野に翻すことを念頭に、お互い切磋琢磨し、更なる努力をして欲しい。

県高野連会長（本校関係者）名簿

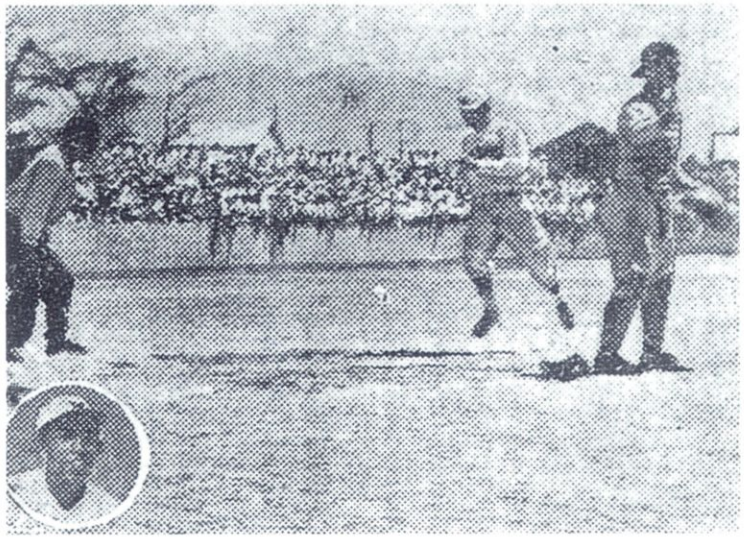
岩手県高等学校野球連盟は、昭和二十四年十一月下旬に発足した。

当初は「県高体連公式野球専門部」と兼ねていた。その兼務時代に、本校の学校長が会長であった。

初代　小坏　洋

二台目　樋口佐平

以後は他校の校長に移された。



昭和26年夏、奥羽大会。対秋田南高戦。三回裏、中村の安打で島田が生還し先制点。

昭和26年[1951]

◆3月　岩手師範学校が廃止
◆8・25　民間放送が開始される

死闘24回、藤沢の剛腕今に

◇春　対高松高戦で0―4とリードされていた本校は、八回裏一気に同点。が、九回に2点を奪われた。

▽準決勝

高松高校	1	1	0	0	2	0	0	2	6
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	4	0	4

◇夏　本校は初戦から接戦の連続で苦しいスタートだったが、4回戦から攻撃のリズムが上向きになり、強豪を連破し、県大会優勝を果たした。

▽1回戦(不戦勝)

▽2回戦〔注　釜石高は現釜石南高〕

盛岡一高	0	2	0	0	0	0	0	0	2
釜石高校	0	0	0	0	0	0	0	0	1

▽3回戦

盛岡一高	0	0	0	0	1	0	0	0	1
福岡高校	0	0	0	0	0	0	0	0	0

▽4回戦〔注　尾崎高は現釜石工業〕

尾崎高校	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡高校	0	0	0	3	0	1	0	0×	4

▽準決勝〔注　三高は現盛岡商業〕

盛岡三高	0	0	1	0	0	0	0	0	5	6
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	6	1×		7

▽決勝

盛岡一高	0	0	0	0	2	0	0	0	2
岩手高校	0	0	0	0	0	0	1	0	1

奥羽大会は、青森市営球場で開かれた。決勝まで進んだ本校は、地元の青森高校と死闘24回。1点に泣いて、3年連続の甲子園は成らなかった。藤沢栄投手の剛腕は今も語り継がれている。

(当時は18回打ち切りでの再試合制度は無かった)

▽1回戦

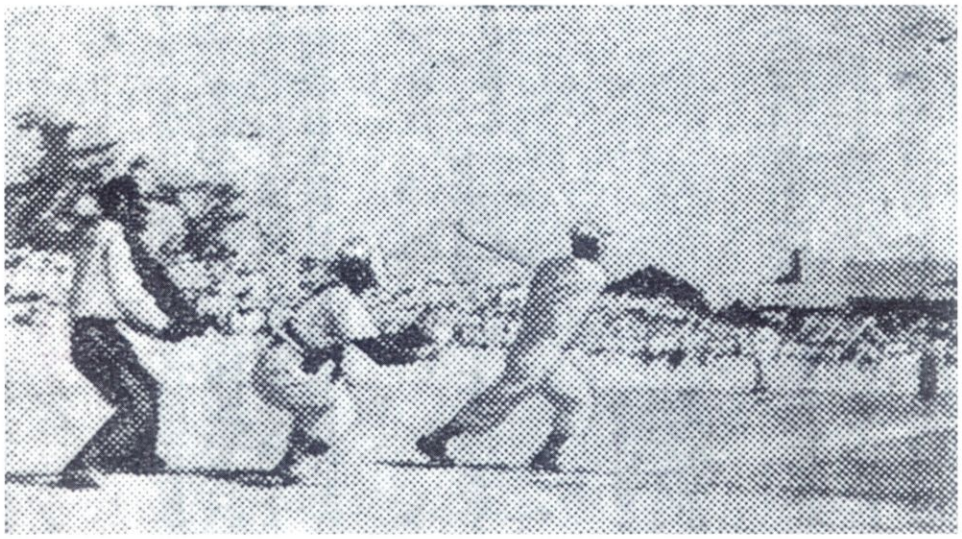
青森工業	0	0	0	0	0	1	0	0	1
盛岡一高	0	5	1	1	0	0	0	0×	7

▽準決勝〔注　秋田南高は現秋田高〕

秋田南高	0	0	0	3	2	1	0	0	6
盛岡一高	0	0	2	1	0	0	0	1 3×	7

この年の3年生部員

一　光　亮　雄　介　寛　治　八　昭
雄　秀　豊　信　圭　　亀　精　泰
木　戸　川　嶋　川　山　村　田　原
鈴　一　細　安　小　下　中　向　井　小



昭和26年夏、奥羽大会決勝。対青森高戦。十七回裏、二死三塁の好機を生かせなかった一瞬。

▽決勝（試合時間4時間6分）

青森高校	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0

（延長二十四回）

（青）梶原―岩谷
（一）藤沢―向井田

野球部の思い出

船山　喬　（昭和二十五年卒業）

戦後の荒涼たる社会情勢の中で、私共中学生生活も何かと落着かず、将来の方向についても混沌とし、確然としたものが立てられなかった。

この凡々としていたある冬の日、野球部員募集のため石川先輩が教室に勧誘に来られた。子供の時から野球が好きだったので、何か元気を出してやっていこうという気持から入部し、翌日からランニングを始めたことも覚えている。満足にグローブ、ボール、バット等の用具がなく、戦前使用のものを部室から引っ張り出し、ボールを縫合わして使ったり、今では考えられない状態でスタートしたのである。

校庭は、進駐軍がなかなか返還してくれず、市営球場、医専グラウンドなどに足を伸ばし、走りまくったこともあった。

練習の帰りには石川先輩のお宅でミーティングをしたが、食糧事情の悪い折、すいとん等もご馳走になり、上下の厳しさはあっても、楽しいクラブ生活を送ることが出来た。また夏の合宿には、荒れていた寄宿舎を借り、初日には畳をあげ、ＤＤＴをまきノミ退治、汚れきった内部の大掃除で一日汗したことも思い出の一つである。

そして二十一年夏、戦後第一回の全国中等学校優勝野球大会で、破竹の進撃で堂々一関中を破り優勝し、続く奥羽大会（岩手・青森・秋田三県）の決勝では、同じ相手の一関中に一点差で惜敗、涙のドラマを味わったが、何か心残りもあり、青春の一コマとして脳裏にやきついて消えない。この敗戦は速球の石川投手に全員が頼りすぎ、自分達が打たねばという闘争心不足だと少年の心の中で猛省した。

（白堊25会の『40周年記念誌』より抜粋）

学制改革の中の野球

久我伸也　（昭和二十五年卒業）

戦時中四年制になっていたのが、昭和二十一年五年制に戻り、五年間中断していた「全国中等学校


昭和25年7月27日　新岩手日報

盛岡高堂々の優勝

10—0一関高を撃ち倒す

高校野球終る

一関 000 000 000 0
盛岡 030 304 00A 10

県大会決勝戦で一関高を下す。
（昭和25年7月27日新岩手日報）

優勝野球大会岩手県大会」が復活開催された。

自他共に優勝候補の呼び声が高かった我が校は、県大会では順当に優勝したが、残念ながら奥羽大会決勝戦で一関中学に2—3で敗れ、戦後第一回の甲子園出場は成らなかった。

それだけ優秀な選手たちであったが、翌年の昭和二十二年、五年生の三人が卒業するのと同時に、四年生のレギュラーから進学や退部する人達が続出し、また、新制盛岡中学の発足で、新制中学生は大会に出場できなくなった。残った五・四年生で部を維持しなければならず戦力はがた落ちになってしまった。それよりも選手不足で、大会に出場するのさえ危ぶまれる状態になった。

盛岡中学野球部創立以来初めてとも思われる大会欠場になるかもしれない状況になったのである。

七月、前年と同じ上田の岩手医専グラウンドで1回戦県立農蚕学校に15—1で勝つことはできたが、2回戦盛鉄球場で前年甲子園に出場した一関中学に0—8で完敗してしまった。

翌二十三年、県立盛岡第一高等学校となり、新制中学からは何人かがきたが大勢に影響なく、この年は県下を四ブロックに分け、代表が県大会に出場することに変わった。我々は盛岡地区予選の2回戦に福岡高校と対戦。0—7で完敗した。

福岡高校は、前年福岡中学として甲子園に出場していたチームで、その時のメンバーがそのまま残っていた。この年も県大会で優勝した。

前年の一関中学、この年の福岡高校とも甲子園に出場し、その時のメンバーがそのまま残っているチームと、欠場しかねないほど選手不足に陥っている我々とではどうしようもない大変な差があった。

翌二十四年、盛岡二高・盛岡商業と合併し、県立盛岡高校となった。野球部も「昨日の敵は今日の友」となり、弱いチーム同士が欠陥を補い、結果として二十四年、二十五年と連続甲子園出場を果たしたのだから、二十二～三年の時代は、学制改革の混乱の中に埋没してしまい、永い歴史のある部史にドロを塗った時代であったかもしれない。そう問題にもならずにすぎたが、慙愧に耐えない思いである。

甲子園連続出場

—統合時代の強きよき年—

藤村明朗　（昭和二十六年卒業）

昭和二十五年、三校統合二年目の盛岡高校は、前年逆転優勝して甲子園に出場したこともプラスとなって、実力は他校を完全に圧倒していた。

春から無敗のまま迎えた夏の大会でも相手校を寄せつけない強さで勝ち進み、余裕すら持ちなが



盛岡高甲子園へ
奥羽大会に優勝す
本荘高を圧倒
5―1堂々の二連勝

奥羽大会決勝で本荘高を倒し、2年連続甲子園出場を決める。（昭和25年8月7日新岩手日報）

ら県・奥羽の両大会を制覇して、〝甲子園二年連続出場〟を達成した。

そこにはドラマティックな逆転試合もスリリングな接戦も、そして永く語り継がれるようなドラマもなく「勝つべくして勝った」堂々たる完全優勝であった。

恵まれた「強き年」であったと自負している。奥羽の覇者として君臨した盛岡高校は僅か二年で統合を解消し分離した。旧商業の選手諸君が伝統ある慶応カラーのユニホームを脱いで、白地にエビ茶の旧盛中のユニホームに衣替えをし、大会前夜祭では旧商業の「凱歌」を胸を張って唱い上げた統合時代、その期間はたとえ短くても、永い球史のなかで必ずや光彩を放つことだろう。

その一〔入部テストのこと〕

新年度を前に優勝候補の野球部の人気は抜群で、入部希望者が殺到した。全員の入部を認めては毎日の練習に支障がでるということから、希望者を二つに分けて紅白戦を行い入部者を選別した。入試よりも高い競争率を突破しただけに新入部員のレベルは高く、二名の一年生がこの夏の大会からレギュラーとして出場し、先輩にひけをとらない大活躍をした。

本格的な入部テストを行ったのは長い部史のなかでも特筆すべきことではないだろうか。

その二〔グラウンドのこと〕

普通科（一高）は上田に、商業科（盛商）は新小路に校舎があった。このため毎日の練習には、どちらかが相手方へ行かなければならない。当時練習には市営球場を多く使わせてもらった。授業を終えて上田の校舎から市営球場まで約一時間、炎天下をよくも毎日歩いたものだと思う。しかし、その当時は余り負担に感じなかった。若さと野球への情熱、そしてグラウンドへの途中、天神町校舎（二高）からの美しい声援にもずいぶん元気づけられたものである。

その三〔ジャンケンのこと〕

先攻・守を選択する試合の前ジャンケン。このジャンケンを六月初めの頃からY君に代行してもらうことにした。それからY君の驚異的な連勝記録が続いた。県大会の後半にはチーム内での話題から外部へ広がって、新聞記者の耳にも入り、新聞紙上に紹介されて一躍有名人になった。連勝のコツをしつこく取材されたようだったが、Y君は黙して語らない。

いずれにしても、このジャンケンは奥羽大会でも連勝し、更に甲子園の舞台でも見事に勝って先攻を選択したと記憶している。



最終回に長蛇逸す
3−2盛岡高惜敗の涙
馬の値持ち直す
秋のおセリ日取決る

甲子園連続出場を果たすが、2回戦で米子東高に惜敗する。（昭和25年8月16日新岩手日報）

甲子園での対戦相手は米子東高校で2―3の惜敗。最短時間試合という記録つき。甲子園出場という最大の目標を達成したあとの気の緩みがあったのか、この一戦、淡白にやり過ぎたと後悔している。

さて、ジャンケンで連勝記録をつくったY君とは、翌年盛岡一高のレギュラーとして大活躍した安嶋信雄氏である。

私の甲子園

森　雄一　（昭和二十六年卒業）

昭和二十四、五年の第三十一回、三十二回大会に連続出場しました。盛岡一高と二高（女子だけ）、商業が合併して盛岡高校になった時であり、野球部員も最初は五十名ぐらい。必然的にポジション争いは凄まじく甲子園に出場する事よりも、まずレギュラーになる事が目標で野球漬けの毎日でした。

私が社会人、高校の監督の時「和気あい合いのチームワークよりチームの目標が個々に浸透した時に切磋琢磨、結果として素晴らしいチームワークが生じ勝利を得る事が出来る」といつも言っていたのは、この時の努力、体験からだと思います。

伝統校ながら久し振りの甲子園はお祭りさわぎのような気分で行ったためか、健康管理に失敗してナインは急性大腸炎にかかり、レギュラーのほとんどは開会式にも出る事が出来ず、控えの部員が代わりに行進しました。食事も取らずの平安高校との試合は7―18の敗戦。試合時間が長く感じ集中力を欠いた悪夢の一戦でした。

三年生の時、春の岩手・宮城選抜野球大会の決勝戦。私は六回にホームランを打って1―0とリードし気分がルンルンだったのか八回に無理な突っ込みで鎖骨を折りました。瀬川正三郎先生に懸命に治療をしてもらいましたが県大会は間に合わず、奥羽大会の準決勝から出場、ナインみんなの頑張りで連続甲子園に出場することが出来ました。相手は米子東高校、最終回2点リードされて二死ランナー一塁、私がバッターで左中間を抜き三塁まで走りタッチアウトとなり2―3でゲームセット。暴走。ナインに申し訳ない。今でもその時のシーンを夢見ます。

また、当時は甲子園へ行くのに鈍行列車。通路で寝たり食糧難で味噌や醤油を引率の先生方が両手にぶらさげ持参。旅館で蚊帳をつって暑い暑いと汗をかき寝たとか懐かしい想い出もあります。

盛岡一高で少なからず勉強を犠牲にして野球をやる以上は、高校球児の憧れの的である甲子園出



昭和26年夏、市営球場にて。

場を目標に苦しい練習を自分のものとし頑張ってください。

昭和五十三年、私が監督をやり、センスとパワーのある選手を揃え、圧倒的な強さを自他共に認めていた黒沢尻工高を破って甲子園に出場出来たのは、当時の選手諸君が私の暗示、期待に応え「甲子園に行くぞ‼」と毎日掛け声を掛け合い、目標に向かって自分にも他のナインにも厳しく集中力をもって努力し、頑張ったからだと確信しております。甲子園で校歌を歌う日を楽しみに……。

球史に残る延長24回

安嶋信雄　（昭和二十七年卒業）

昭和二十六年第三十三回奥羽大会が青森で開催された。準決勝は、秋田南高校との対戦になった。優勝候補の一番手と言われた秋田に九回二死まで4―6とリードされたが、そこからの逆転劇は見事であった。

三番小川がヒット、そして盗塁をした。2点リードされての盗塁で相手も投手もビックリした。当時は1点差なら走るけど2点差では走らなかった。それで逆にコントロールを乱し四番鈴木、五番向井田と連続四球で六番の私に回ってきた。

1ストライク2ボールの4球目。左中間の三塁打でまず同点。七番藤沢の三遊間内野安打でサヨナラ勝ちをした。

いよいよ決勝戦。それにしても、よくこのチームが勝ち進んだと思う。

前年は「盛岡高校」で甲子園に行ったが、鈴木、向井田、安嶋の三人しか残らず、二年前甲子園に行った小川を復帰させた。更に下山と一年生の藤沢という投手を作り、一戸、細川、中村、一年生の島田を入れての青森高との決勝戦である。それが思い出の延長二十四回の死闘となるのである。

打順が10回まわってきた。私は安打2、四死球3で、五回もランナーに出た。しかし、ホームは遠かった。三年連続の甲子園行きはストップした。

一年間、本当によく練習した。私にとっては一生の思い出だ。

球史に残る延長二十四回涙をのむ

小川圭介　（昭和二十七年卒業）

岩手県大会を制したわが盛岡一高は青森市で行われた奥羽大会に臨んだ。

初戦の青森工業を下し、準決勝で優勝候補秋田南高校を奇跡の逆転サヨナラで葬って、決勝戦を迎えた。


盛岡一高血涙をのむ
死力盡して24合
奥羽球史に不滅の一頁
ヒーロー藤沢投手
まだ一年生の藤沢投手

奥羽大会決勝戦、延長二十四回0―1で青森高に敗れ、3年連続甲子園出場ならず。（昭和26年8月4日新岩手日報）

対戦相手は地元青森高校である。エース梶原の豪球を打てるかに勝敗の鍵があると言われたが、結果は延長二十四回激闘の末、0―1で涙をのんだ。

試合は投手戦となり、両軍点の入らないまま延長になる息苦しい程の緊張感があったことは覚えているが、詳細な攻防は記憶が定かでない。延長に入って、わが校にチャンスが続いたがあと一本が出ない。スコアボードに0が並ぶ。十三回に外してまた0が並んで二十三回。更に外した二十四回、とうとう試合は決着をみた。

藤沢君も疲れからストライクが入らず成田球審の手が上がらない。得意のアウドロがボールの判定を受ける苦しい展開となる。相手の梶原投手も豪球が衰えて、打ち頃の球ではあるが安打が続かない。内野ゴロで一塁に駆け込むが塁審の手が開かない、一瞬セーフと見えることも再三だったが、残念としか言い様がなかった。

試合は私のエラーによって1点を取られ、終わった。私のエラーは力の限り戦ったチームのみんなにも、情熱の限り指導をして下さった先輩にも相済まぬことになってしまった。

この試合は四時間余にわたる互角の戦いだったが青森高校に地の利があったのだろうと思うしかない。ここまで、勝つ度にふつふつと大きくなりつつあった甲子園への夢があと少し、ほんの少しのところで消えてしまった。

思えば四月の学制改革で三校に分離してから、野球部存続の危機を乗り越え、鈴木主将には叱咤されながら、引っ張ってもらい、県大会優勝、奥羽大会決勝の二十四回までよくぞ来れたものだと思う。

これには奇跡に近いものを感ずると共に、誇りにも思ったものである。

そして最初に「勝ことの基本はチームワークなり」と結果を出して教えて下さった早大山本氏を忘れることは出来ない。今でも感謝している。更には後で聞くと思わぬ出費で財政に苦慮された、今は亡き千田玄先生、初心者チームの監督として言い知れぬご苦心のあった浅沼先輩、事にあたって大きい身体から適切なアドバイスを欠かすことのなかった亡き関先輩など多くの先輩の方々に、そして声を限りに応援してくれた学友諸氏にも感謝の念を今も忘れてはいない。

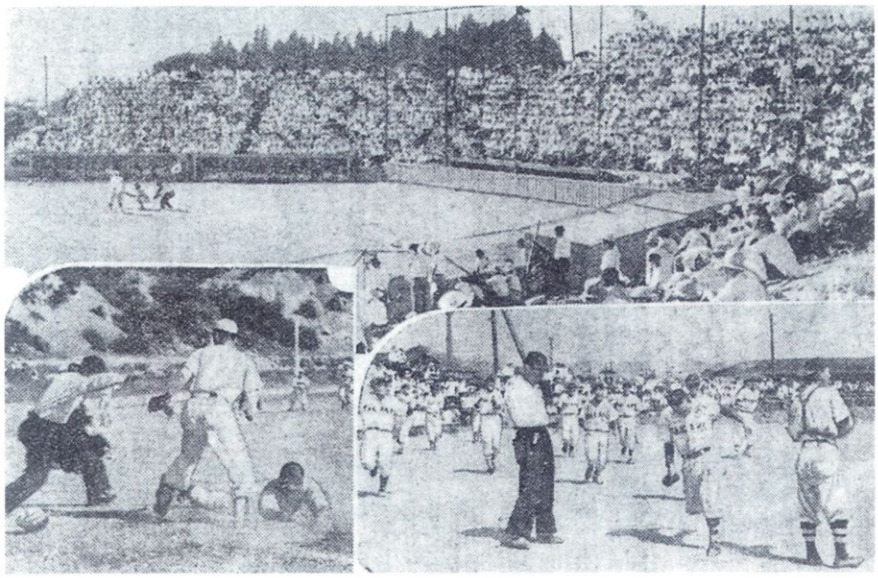
白堊野球部

第三部―昭和期③【昭和27～59年】

百年の軌跡



昭和43年夏、県大会で優勝し、8度目の甲子園出場となる。



昭和27年7月、県大会。対黒工戦。

昭和27年[1952]

◆6月　岩手日報、8年振りに夕刊を復刊
◆10・15　警察予備隊が保安隊に改組

夏県予選　初戦黒工に敗れる

◇26年秋　夏の奥羽大会決勝に惜敗して、約一ヶ月余り。七人のレギュラーが抜け、新人戦とは言え、厳しいスタートになった。初戦一戸高には貫録勝ちはしたものの、続く準決勝の高松高（現盛岡工業）戦では、相手投手佐藤を打ち込めず完封負けを喫してしまった。

▽1回戦　7―0　一戸高校
▽準決勝

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0		0
高松高校	1	0	0	0	0	0	1	0	× 2

◇春　県北予選（当時、県予選は県北、県南の2ブロックで実施）は、福岡高グラウンドに於いて、12チームによって開催された。本校は、初戦でいきなり宿敵盛岡商業との顔合せになった。しかし、相手校エース千葉を打ち込めず、秋季大会と同様、完封負けを喫し、県大会へ進出することは出来なかった。

この年の3年生部員

三　勉　浩　繁
省
村　原　木　藤
澤　藤　鈴　谷

▽1回戦

盛岡商業	0	0	1	1	1	0	0	0	3
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0

夏季県予選に向けて、チーム力を強化しなければ…そんな思いが窺える『岩手日報』のチーム紹介記事は次のようなものであった

表題『新人揃い、闘志は強い』

「一高のグラウンドをのぞくと二塁盗塁の練習をしていた。（中略）大量に七人の正選手が抜けたので藤沢投手と島田遊撃手以外は新人ばかり（中略）スケールはひと回り小さくなった。打撃は三番笹森と四番藤沢が当っているが守備はまだまだで心細い。春からの試合は十試合、六勝二敗二引分の成績だ。春の県北地区予選では盛岡商に徹底的に敗れ、六月十五日の一関一高戦には12対5で敗れたが、同二十二日には花巻、遠野両高を破りいくらか調子は出ている様だ。浅沼監督は『練習試合は昨年と同じくらい行い、打撃の方も

カーヴは一応打てる様になった。投手は藤沢ひとりに頼らねばならないが、武器であるアウドロと外角低目の速球がよく決るようだから、そんなに打ち込まれることはないだろう。大会までには一層打撃練習に努力しなくてはならぬ』と語っていた。又『五日ころから早大川瑞捕手のコーチを受け、準決勝まではこぎつけたい』とは澤村主将の豊富だった。」（高校野球めぐり②より）

◇**夏**　県予選大会は出場36校によって熱戦の火ぶたが切られた。

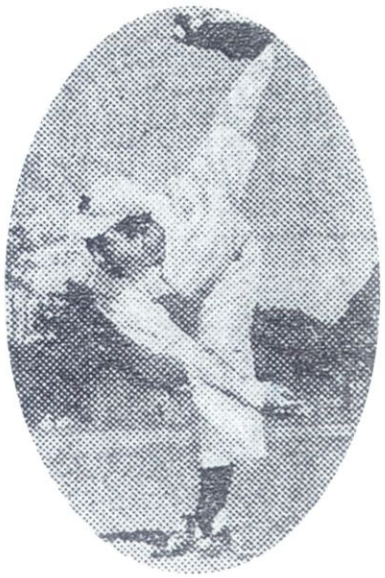
▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

黒沢尻工	1	0	0	0	0	1	2
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0

【ゲーム】本校藤沢、黒工砂川両投手の一騎討ちとなった。安打数は本校3で黒工2と互いに苦しい展開ではあったが、一回と六回に二塁走者をおいて適時打を放った黒工に軍配が上がった。当時の大野球審は、次のように評した。

「互角の力を持った両チームではあったが、〝打倒一高〟の闘志に燃えて捨身になってぶつかって行った黒工の気はくは、ゲームにありありと映っていた。忘れてならぬことは運、不運が大きく響いていたことで、安打は盛岡一高が一本多かったが、黒沢尻工のそれはタイムリーであり、得点を加えて行った。砂川投手は制球力よい上に一高打者が悪球に手を出したので楽であった。藤沢投手は敗れたとはいえ、球速といいフィルディングも立派で砂川より優れていた。ともあれ、最後まで両軍奮闘し、近来にない好ゲームといえる。（『岩手日報』より）



名投手と評された藤沢栄。

白堊随想録－2

敗戦そして廃部の危機に

澤村省三　昭和二十八年卒業

昭和二十七年の梅雨は今年（平成十年）の程ではないが、非常に長かったように記憶する。

前年の二十六年には自分の出身校である厨川中学から誘って入部させた一年生投手藤沢栄の活躍もあり、県大会の本命とされた盛岡商業を準決勝で、また屈指の好投手小武方を擁する岩手高校を決勝で屠って、奥羽大会に臨んだ。

そして、甲子園出場を賭けた決勝戦。延長二十四回の死闘という大健闘があった。我々は、その翌年でもあり、大いに期待されたのであった。が、前年に甲子園行きを逃したこともあって、部費も極端にひっ迫していた。

レギュラーの大半が入れ替わるというチーム事情の中、水はけの悪いグラウンドということもあって、長雨による練習不足がまた、大きくこたえた。

この年、盛岡市長選挙を戦われた二見直三先輩に「俺より君たちの方が色が白い」と言われる程だった。

夏の結果は2回戦で和賀高校（現黒沢尻工業）に0―2で敗れ「伝統校ともあろうものが、名もない学校に負けた」と〝馬面（バメン）先生〟等からもお叱りを受けた。

そして、私の高校野球は優勝旗返還と選手宣誓、敗戦の苦い思い出で終わる筈だった。が、卒業後間もなく野球部の廃部の話が持ち上がり大いに責任を感じた。

休みの度に盛岡に帰り、千田玄部長はもとより吉田健次郎、坂本金吾両先輩はじめ幾人かの方々を訪ね存続への働きかけをお願いした。

また、最後には、今考えれば向こう見ずにも程があるが、当時後援会長であり同窓会長であった瀬川正三郎さんの加賀野のお宅に押しかけて、存続をお願いした。必死の思いだった。

〝サンコ先生〟は黙って聞いてくれた後、「わがった。おめぇが心配するごどでね」と言ってくれ、玄関先で丁寧に見送って下さった。

今となっては、あの話が何処から出て、どの程度の信憑性があったのか、つまびらかではないが、後に社会人チームを預かることになった際、資金運用の上でも大いに役立った。いずれにしろ、若かったなぁと改めて思い返している。



昭和28年の応援風景。フクちゃんも一高を応援。

昭和28年[1953]

◆2月　NHKテレビが本放送を開始
◆3月　田子一民氏(本校出身)が農林大臣就任

好投手藤沢またも甲子園の夢たたれる

◇27年秋　前チームでの春季、夏季大会とも初戦完封負けの屈辱に奮起し、チームを建て直して好スタートを切った。

▽1回戦　22―1盛岡農業(五回コールド)
▽2回戦　2―1福岡高校(延長十五回)
▽準決勝　3―1高松高校
▽決勝　1―2盛岡商業

県大会は福岡高グラウンドで開催された。

▽1回戦　6―1宮古高校
▽準決勝

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	1	0	1
一関一高	1	0	0	0	1	0	0	×	2

【ゲーム】藤沢投手は相手から13三振を奪う好投を見せたが、味方打線の援護がなく1―2で惜敗した。

◇春　初戦で盛岡工業を破り、続く準決勝の盛岡商業戦は、初回2点を先行し、そのまま逃げ切り県大会の出場権を得た。

▽1回戦　4―2盛岡工業
▽準決勝　2―1盛岡商業

県大会は10チームで争われた。本校は2回戦からの登場となった。相手は秋季大会で苦杯をなめた一関一高。しかし、前半そつなく得点を重ね快勝。続く準決勝遠野高戦は延長十一回1点を勝ち取り決勝に進出した。

▽1回戦(不戦勝)
▽2回戦　6―3一関一高(五回降雨コールド)
▽準決勝　4―3遠野高校(延長十一回)
▽決勝

盛岡一高	0	1	0	0	0	0	4	0	5
宮古高校	0	0	0	0	1	0	0	2	3

【ゲーム】1―1の同点から八回一挙4点を奪い春季県大会の優勝を飾った。

◇夏　春季県大会に優勝した本校は、その実力と自信が相重なり、破竹の快進撃を繰り広げていった。

▽1回戦　11―1平舘高校(六回コールド)
▽2回戦　13―0高田高校(五回コールド)

この年の3年生部員

繁藤　郎
二瓶　夫
瞭見　朗
繁藤　伝
栄
公
伍
島田　一
野田　栄
奥　公
笹　森
岩　崎
日　景
土　川
工(柳舘)　藤
臼　井
藤　沢

▽準々決勝　6―1花巻北高

▽準決勝

黒沢尻高	0	0	0	0	0
盛岡一高	0	0	0	0	0
	0	3	3	0	6

【ゲーム】藤沢投手は相手打線を1安打19奪三振の好投を見せ完封。打線も四回、五回に集中打を浴びせ6―0で快勝。球審評でも『黒沢尻としては精一ぱいの試合』とまで言わせる圧勝で、奥羽大会の出場権を得た。

▽決勝

遠野高校	0	0	0	0	0
盛岡一高	0	0	1	0	5
	0	0	0	4	×

【ゲーム】本校は三回裏、四球と敵失により無安打で1点先取。八回裏には、一死満塁から安打、押し出しの四球そして野選暴投で4点を追加。投げては藤沢投手が6安打完封し、5―0で2年ぶりの夏季県大会優勝を遂げた。



昭和28年夏、奥羽大会。対能代工戦。一回裏、一死満塁の時、柳館の犠打で先制点。

◇奥羽大会

悲願の甲子園出場をめざして、藤沢投手擁する本校は、秋田で開催された奥羽大会に臨んだ。

▽1回戦

盛岡一高	1	0	0	2	1
能代工業	0	0	0	0	0
	4	0	0	0	0

【ゲーム】藤沢投手は県大会の調子を持続し、相手打線を1安打17奪三振の快投を見せた。打線も六回までに8点を取るそつのない攻撃で大勝した。

続く準決勝は秋田高戦で事実上の決勝戦でもあった。

▽準決勝

秋田高校	1	0	0	0	2
盛岡一高	0	0	0	0	0
	0	0	4	7	0

【ゲーム】秋田左腕投手青山に本校打線は全く手が出ず1安打10三振を契する内容。逆に藤沢投手のピッチングは冴えず、また相手打線の初球狙い打ちに合い10安打を許し、結果0―7の完敗となった。

またもや本校は、甲子園出場の夢を奥羽大会で逸したのであった。

白堊随想録― 3

現役当時のコーチ団のこと

工藤柳舘繁　昭和二十九年卒業

我々が入学した昭和二十六年から三年間の野球部生活で特に印象に残っていることは、夏の大会はさておいて毎日のようにどこからともなく上田のグラウンドに足を運んでくれたコーチ団の諸先輩の顔です。まず長老では吉田芳郎氏(大正十年卒)。打撃練習中「マエデ、マエデ」と声をかける。投球を体の前でハジキ返せという教えだった。また坂本金吾氏(大正十五年卒)は「ボーミイ、ボーミイ」が口ぐせだった。ボールを良く見て打てとのこと。

今のタレントでは、たけし軍団などが有名ですが、一高では関軍団が野球部を支配していた感じでした。関行雄さんを団長に佐藤優さん、岡本賢四郎さん、斉藤一雄さん、吉田正さん、桜小路善治さん、それに加えて血気盛んな組頭クラスの宮川清さん、榊貞助さん以下川村裕志さん、村松昇さん、森雄一さんと豪華多才な顔ぶれでした。

秋の大会で一戸へ向かう列車の中で度胸をつけなきゃ野球がうまくなれないからと自己紹介をさせられ一曲歌わされたのには参りました。カラオケはまだ遠い未来の時代でした。


昭和29年夏、対花北戦。鈴木が生還し先制点。主審は坪井氏。


昭和29年夏、対岩谷堂高戦。捕手野中。

昭和29年[1954]

◆7月　岩手県警察本部が発足
◆11・3　金田一京助氏(本校出身)に文化勲章

夏準々決勝で福岡高に惜敗

◇28年秋　藤沢投手を含む6人のレギュラーが抜けた布陣での大会となった。

▽1回戦(不戦勝)

▽準決勝

盛岡商業	0	3	0	0	2	2	0	6
盛岡一高	0	0	0	0	0	1	4	1

13
6

【ゲーム】前半から盛岡商業の攻撃にあい六回までに0―7の劣勢に立たされた。終盤6点を挽回したが、時すでに遅く完敗を喫した。

◇春　またしても盛岡商業との顔合せになった。

▽1回戦(不戦勝)

▽準決勝

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡商業	4	0	0	0	0	0	2	0×

0
6

【ゲーム】初回一挙に4点を奪われ、七回にも2点を加点されるなど一方的な展開となり、結局完封敗けを喫してしまった。

◇夏　前年度と比較して、戦力低下は否めないところではあったが、夏季大会に向けて相当な練習量を消化しチーム強化を行っていた。『岩手日報』掲載のチーム紹介は次の通りである。

『甲子園を目指す　県下37校の横顔』より

「前年度優勝の同校は主力メンバーが六人抜けてチーム編成に苦労したが、メンバー編成もほぼ終り、スケールは小さいものの練習量も多く伝統の力を発揮相当な試合をするものと予想される。投手川田はスピードもあり、日増しに安定感を見せており内野は二塁北本、三塁鈴木の三年連続出場の選手を有し心強い。遊撃佐々木は一年生ながらもピチピチしたプレーを見せ期待される。外野は新人で占められいまのところ練習不足の感がする。打撃は佐々木、北本、野中と大物打ちはいないが、確実な当りをみせている。練習試合の戦績は十二戦四勝五敗三引分け」

▽1回戦

花巻北高	0	0	0	0	0	0	1	1
盛岡一高	3	1	0	0	1	0	0	0×

2
5

【ゲーム】前半相手エース中村を打ち崩し、五回までに5点を先取。終盤2点を失ったが堅守で切り

この年の3年生部員

勘之樹郎健昴夫穂三
島村木本野田藤川訪
田川鈴北繁川斉石諏
小泰正誠紀高貞
(千葉)



昭和29年の3年生部員

抜け快勝した。

▽2回戦

山田高校	0	1	3	0	0	0	0	4
盛岡一高	1	0	0	3	2	1	0	0× 7

【ゲーム】序盤1―4とリードされたが、持ち前の打棒で四回3点、五回2点、六回1点と加点し逆転勝ち。

▽3回戦

盛岡一高	1	2	0	0	1	0	4	1	3
岩谷堂高	0	2	2	0	0	1	0	0	0

12
5

【ゲーム】前半お互いに点の取り合いとなり、五回終了時点で4―4の同点。六回に1点を奪れたが、七回以降は本校打線が気を吐いて12―5の逆転勝ちを収めた。

準々決勝はライバル福岡高との一戦となる。名門同士の対戦に多くのファンや応援団が、一、三塁側スタンドから外野席に至るまで埋めつくし、炎天下で熱闘が展開された。

▽準々決勝

盛岡一高	0	0	0	0	0	4	0	0	0	4
福岡高校	1	2	0	0	0	0	0	0	2	5

【ゲーム】本校は立ち上がり攻守共に固くなり、3点を奪われてしまった。しかし、六回表福高エース相馬の乱れに乗じ2安打を絡め、一挙4点を奪って逆転した。4―3のまま最終回まで進んだが、その裏勝ちを意識し過ぎて一死満塁のピンチに2点タイムリーを浴び、逆転負けを喫してしまった。

坪井主審は「盛岡一高は実力を完全に出し切らず負けた感じだ」とこの試合を評した。

白堊随想録― 4

昭和二十九年度当時の野球部をめぐる話題

鈴木正樹　昭和三十年卒業

当時県大会開催時には東京六大学の審判員が派遣されてきており、岩手県には坪井忠郎氏（東大ＯＢ）が連続して来られた。同氏は極めつきのジェントルマンのうえ盛岡一高に対し、好意的かつ親身なサジェストを下さる方であった。

また、品田栄太郎氏（現北海道社会人野球連盟会長、当時法政大学エース）が森雄一氏の紹介でコーチとして数年来盛されたが、同氏も真摯で人柄がよく率先垂範の指導を受けた。

ある意味では両氏とも盛中大先輩の関行雄氏、外川賢四郎氏、宮川清氏、村松昇氏、森雄一氏等々と並んで当時の盛岡一高野球部のバックボーンともなっていたと言っても過言ではない。

私事にわたる後日談になるが、坪井氏とは明治神宮球場での全日本大学選手権の場で四度お会いし、品田氏とは日銀札幌支店次長当時、拓銀の検査役として連日お会いする機会があり、両氏からはその後も含め、野球談義はもとより幅広く薫陶を受けた次第である。



昭和30年夏、対水農戦。一回裏井上の左犠飛で北村生還。

昭和30年[1955]

◆4月　盛岡市、大田村を編入
◆5月　陸中海岸国立公園が正式指定される

夏三回戦　花北の打棒に敗退

◇29年秋　盛岡地区予選は六チームが参加。
▽1回戦　8―3岩手橋高
▽準決勝　1―2岩手高校
◇春　1回戦は秋に続いて岩手高との対戦。
▽1回戦

岩手高校	0	0	0	0	0	0	3		3
盛岡一高	2	1	0	0	1	0	4	×	8

【ゲーム】本校は序盤3点を先取し、その後も着実に追加点を上げ、岩手高の反撃を九回の3点に抑え大勝した。
▽準決勝

盛岡工業	1	1	1	0	0	0	0	0	0				
盛岡一高	0	0	0	3	0	0	0	0	0				
（延長十三回）	0	0	0	1									4
	0	0	0	0									3

【ゲーム】序盤小刻みに3点を奪われたが、本校は四回一挙に同点とした。その後ゼロ行進が続き、延長戦に突入した。そして延長十三回1点を許し、3―4で惜敗した。

◇夏　夏季大会に向けた本校を『岩手日報』の記事は次のように紹介。

『甲子園を目指して　高校野球展望』より

「甲子園出場六回、県内一の名門であるこのチームは、法政の品田投手をコーチに迎え春以来素晴らしい進歩を見せている。ことに主将野中を中心とする打撃力は長短打取りまぜてムラのないシュアーな打線を形成し、持前の闘志とともに優勝候補の貫録十分。エース女鹿は盲腸炎で試合には出られないが佐々木、平野、関本といった型の違う三投手がおり、投手陣は豊富。（中略）三遊間が強くなったといわれる内野陣は三浦、井上を中心としてスピーディな動きと軽妙な球さばきを身につけ堅陣を誇っている。外野は左翼の岩崎を主力に平野、佐々木、関本らが投手陣を守り、いずれも好走、強肩でその守備範囲も広い。一方進境いちじるしい打撃は井上、野中、佐々木のクリーン・アップ・トリオを主軸として確実なミーティングとシュアなバッティングに切目のない打線がたのもしい」。そして、大会前の先発

この年の3年生部員

岩崎　淳
野中　恒



昭和30年夏、対花北戦。捕手槇。

予想メンバーは三年生2人・二年生4人・一年生3人の若々しいチームへと生れ変わっていた。

◇夏

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

水沢農業	0	2	0	0	0	1	0	3
盛岡一高	2	1	1	5	2	1	2×	14

（七回コールド）

【ゲーム】試合は水農が終始硬くなり、繰出した3人の投手陣がことごとく不調で四球を連発。本校は労せずして、勝利を得ることとなった。

▽3回戦

花巻北高	0	0	0	0	1	3	0	5	1	10
盛岡一高	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3

【ゲーム】本校は初回3点を先取し上々のスタートを切った。しかし、二回以降、相手校中村のカーブを打ちあぐんで最後まで追加点をあげられない。逆に花北打線は回を重ねるごとに冴えを見せ、本校の繰り出す三投手を打ち砕き、結局本校の完敗であった。坪井主審は本校の敗因を次のように語った。

「盛岡一は主戦投手女鹿が体の故障のためはじめから出場出来ないのが大きな弱味でもあったが、ことしの盛岡一は非常に荒いプレーが目立っていた」。



昭和30年10月、送別試合にて。
1列目右より野中、岩崎。

白堊随想録— 5

忘れ得ぬ事ども

野中　恒　昭和三十一年卒業

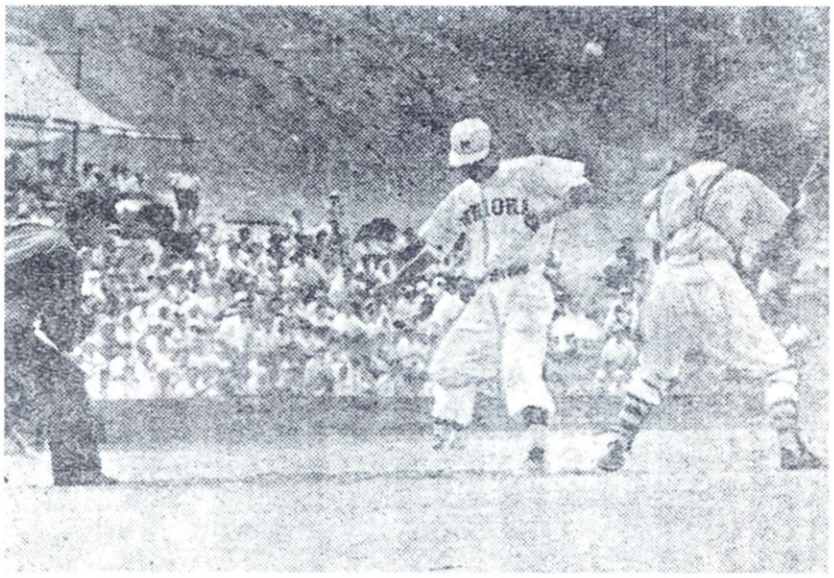
春の県大会盛岡地区決勝の相手はライバル盛商。剛腕佐々木投手（二年、上田中先輩）から二塁打と単打を放つことが出来た。この時使用したバットは、早大監督等をされた石井連蔵氏から寄贈された逸品で、重量、持ち具合、しなり、グリップエンドの形など、私の生涯に握ったバットでは最高のものであったが、惜しくも、詰まった投ゴロで折ってしまい、チーム全員に恨まれてしまった。

その後の県大会では、決勝戦対一関一高に五回か七回で降雨コールド勝ちとなったが、試合後には一関一高用のバスに便乗させてもらった折の乗車態度ついて千田部長と外川監督から、下車後に厳しい叱責を受け、全員自責の念に駆られたこともあり、忘れ得ぬ師の戒めであった。

同年夏、県大会優勝。秋田に於ける北奥羽大会では、能代を破って準決勝に臨み、秋田に零敗を喫して夢が消えた。秋田には、後年東京六大学の中心選手で活躍した選手が六人もいたことを後に知った。

この時には、秋田城址公園内の松風亭に宿泊したが、夜間誰とも不明の数十の一団がストーム風の騒ぎを仕掛けて来た模様で、部屋にも小石が飛び込んで来たりした。

二年生となって温厚で思慮深い鈴木正樹主将の下、勝敗は別として、実に心愉しく存分にプレーに励むことが出来た。この年の特筆は、私と同期の故岩崎惇氏と共に夏の大会対花巻北戦勝利の時、大会一、二号の本塁打を記録できたことである。



昭和31年夏、対盛工戦。接戦をものにしてベスト4入り。

昭和31年[1956]

◆4月　NHKテレビ、視聴契約開始
◆7月　盛岡市の中ノ橋が完成

黒工に快勝し奥羽大会出場

◇30年秋　対盛岡商業戦で大差で敗れた。
▽1回戦（不戦勝）
▽2回戦　3―11　盛岡商業

◇春　秋季大会と同様、初戦の相手は盛岡商業であった。接戦となったが、初回に奪われた1点に泣いた。
▽1回戦（不戦勝）
▽2回戦

盛岡一高	000	000	000	0
盛岡商業	100	000	00×	1

（一）女鹿―本野
（商）岩崎（一）―岩崎（弘）
▼二塁打　平野（一）

◇夏　秋・春ともライバル盛岡商業に敗れ、公式戦の白星なしで臨んだ夏の大会であった。夏に向けての調整がうまくいって、打撃のチームとして力をつけた本校は、三たび当たった盛岡商業を破り勢いをつける。県大会優勝を果たし、奥羽大会出場権を手にした。
▽2回戦

盛岡商業	000	001	000	1
盛岡一高	000	020	00×	2

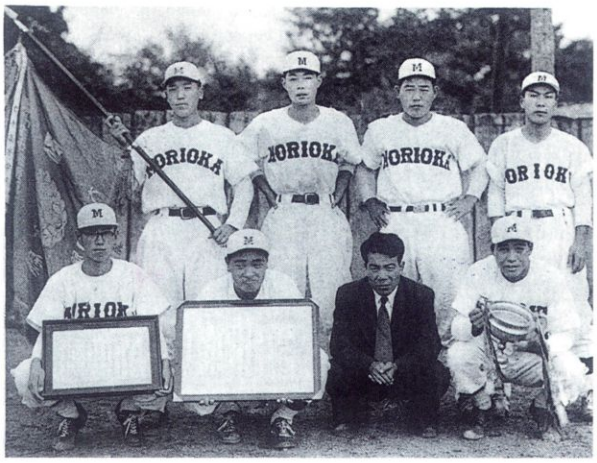
【ゲーム】くじ運のいたずらか、秋・春・夏の3公式戦の初戦で対戦することになった本校と盛商。戦前からの好敵手同士の一戦は、本校女鹿、盛商岩崎（一）の投手戦となった。本校は五回、2安打と敵失で無死満塁とし、この好機を確実に得点に結びつけた。死球と四球をもらって2点を挙げ、盛商をあわてさせる。六回に1点を返されたが、そのまま逃げ切った。
▽3回戦

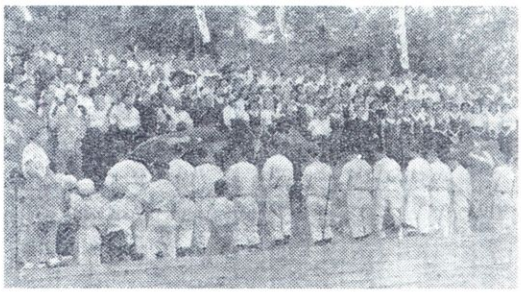
盛岡一高	210	011	001	6
宮古水産	000	000	000	0

【ゲーム】本校打線は11安打を放って、小刻みに加点し快勝した。投げてはエース女鹿が好投。被安打3の上、全員から三振を奪い、完封勝ちでベスト8入り。

この年の3年生部員

三淑敏徹人朗志雄彬勝三夫
健尚博　政発剛寅正友修一
井上村藤藤　木野野原舘田
北工斎槙佐々本平藤西野森


昭和31年のメンバー。


昭和31年夏、岩高を下し奥羽大会出場権を得た本校。

▽4回戦

盛岡工業	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡一高	0	0	0	0	0	1	0	1

【ゲーム】本校は、盛工小野の好投に押さえ込まれていたが、ここ一番の機会に貴重な1点を挙げた。六回、三番女鹿が安打で出塁。四番平野の犠打で二進する。続く佐々木は期待に応え三遊間を破る適時打を放つ。二走女鹿がホームを踏んだ。

▽準決勝

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	2	2
岩手高校	0	0	0	0	0	0	0	0

【ゲーム】九回の本校は、四番平野の二塁打と続く佐々木の安打で無死一、三塁。盗塁で塁をつめたところで、斎藤がスクイズをきちっと決め1点を挙げた。六番下河原の安打で、佐々木が生還し2点目。

▽決勝

黒沢尻工	0	0	0	0	0	0	3	3
盛岡一高	1	5	0	0	0	1	0	8

【ゲーム】本校は二回、4安打に敵失、四球などをからめて5点。エース及川を崩し快勝した。

◇奥羽大会

奥羽大会は秋田市で開催。横手高と当たったが、初回に大量失点。ペースを作れず敗退した。

▽1回戦

横手高校	7	0	0	0	0	0	0	7
盛岡一高	0	2	0	1	1	0	0	4

白堊随想録－6

記憶に残る試合

井上健三　昭和三十二年卒業

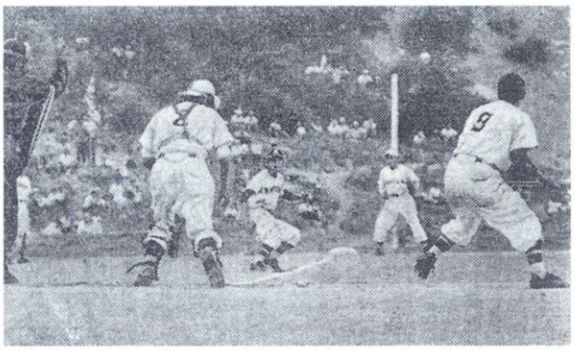
昭和三十一年夏、本野(主将)の入院を際にチームは心機一転して臨んだ一回戦で勝利した対盛岡商業高校との試合は鮮明に記憶に残っています。一塁斎藤、二塁北村、遊撃井上、外野に平野、佐々木、工藤の三年生でした。盛商は優勝候補。前日まで梅雨で、その日はからりと雲一つ無い蒸し暑い夏空が広がった第一試合でした。

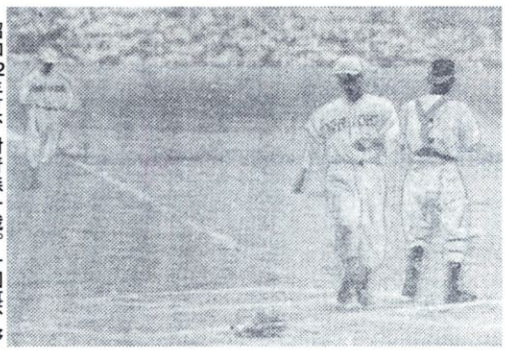
観衆は盛岡市営球場の内外野を真っ白に埋め尽くしていました。七回まで両校無得点のまま緊張の連続でした。七、八、九番打者の安打と敵失で無死満塁となり、一番井上の死球、二番北村の四球で2点を先取し逃げ切った試合でした。

県大会優勝は得たものの北奥羽大会で横手高校に4―7で負けて夏が終わりました。盛岡商業に勝ったので岩手高、盛岡工など盛岡市内の高校と対戦し、高野連の収入増に寄与したそうです。

けだし、同一地域校対戦を忌避する方向で、県高野連はブロック制の採用を検討したと聞きました。

また、当時の社会現象としては社会人野球、六大学野球が華やかでした。我々と対戦して敗れた盛岡商業、岩手高校、盛岡工業の有望選手のスカウトと進路に影響を与えたと、後に直接、その関係者から聞きました。


昭和32年夏、対黒工戦。本校バッテリーがスクイズを見破り走者を三本間にはさんだ一瞬。


昭和32年夏、対青森一戦。一回裏、野田の三塁打で2点目を挙げる。

昭和32年[1957]

◆2月　県下に集団風邪流行し四十数校休校
◆8月　盛岡の電話自動化

2年連続して奥羽大会へ

◇31年秋　初戦は岩手高との一戦となった。1点を争う試合となったが、勝利を手にできなかった。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

岩手高校	0	0	0	1	0	1	0	0	2
盛岡一高	0	0	0	1	0	0	0	0	1

（岩）柳畑、中野―杉村

（一）吉丸、女鹿―佐々木（祐）

◇春　本校は盛岡農業との乱打戦を制し、盛岡商業と地区決勝進出をかけて対戦したが、八回に逆転されて押し切られた。

▽1回戦

盛岡農業	2	1	0	0	0	3	0	0	6
盛岡一高	4	0	0	4	0	0	0	2×	10

▽2回戦

盛岡商業	0	0	0	0	0	0	0	2	0
盛岡一高	0	0	0	0	0	1	0	0	1

（商）岩崎、藤沢―青柳

（一）女鹿―大窪

◇夏　秋・春とも県大会出場を果たせなかったが、本校は夏に焦点をあてた練習が功を奏し、県大会で2年連続優勝した。

▽1回戦

釜石工業	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡一高	0	1	0	0	0	0	0	0×	1

【ゲーム】本校は二回、二死一、二塁から一番野田が右翼線ギリギリに入る二塁打。二走中村が長駆生還した。この1点が決勝点になった。

▽2回戦

福岡高校	0	0	0	0	0	2	0	0	2
盛岡一高	1	0	0	0	2	0	1	0×	4

▽3回戦

宮古高校	0	0	0	0	0	0	0	1	1
盛岡一高	0	0	0	1	0	0	0	1×	2

▽4回戦〔注　盛高は現大船渡高校〕

盛　高校	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡一高	0	0	1	0	0	0	0	0×	1

この年の3年生部員

武　教夫
浦　恵丈
鹿原　肇宏
川本　泰
下山水　清



昭和32年の3年生部員

【ゲーム】九回ピンチを迎えた。相手四番の菊地に中越えの大飛球を放たれたが、中堅手下河原の美技で阻止し、反撃を許さなかった。女鹿が2試合続けて被安打2の好投。

▽準決勝

岩手高校	0	0	2	0	0	0	2
盛岡一高	0	0	0	0	2	0	×	4

【ゲーム】前年当たった岩手と、またも決勝進出をかけて対戦。五回の本校は、大窪と小原がスクイズを決めて同点とした。勢いにのった本校は六回にも2点を奪い逆転。

▽決勝

盛岡一高	0	0	0	0	0	1	0	0	1
黒沢尻工	0	0	0	0	0	0	0	0	0

【ゲーム】本校は六回、一死三塁の好機にスクイズ失敗で試合の流れを逃したかに見えたが、二死からの中前安打で吉丸がホームイン。この1点を女鹿と守備陣で守り切った。

◇奥羽大会

奥羽大会は青森市で開かれた。初戦を突破し、頂点を目指したが、八戸高に敗れた。

▽1回戦

青森一高	0	0	0	0	0	0	0	2	2
盛岡一高	3	0	0	1	0	0	0	×	4

▽準決勝

八戸高校	0	0	0	2	0	0	1	0	3
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0

白堊随想録－7

"盛商"との一戦に備えて

女鹿恵教　昭和三十三年卒業

昭和三十一年の夏の大会で、盛商と一回戦で激突した。

私は一年の秋から投手として投げてはいましたが、公式戦ではまだ一度も盛商相手に勝った事がなく、下馬評では、この一戦に勝った方が優勝すると言われており、なんとしても勝って二回戦に進みたいと考えました。自分もこの一戦に勝つ事だけ考えて対策を練りました。

試合は早朝八時試合開始でしたので、組合せが決まってからは、毎朝六時頃にグラウンドに行き、八時の試合開始にベストの力が出せるようピッチング練習を続け、体を慣らしました。

また、初回をうまく乗り切れば最後まで投げられるタイプでしたので、試合前の練習を多く取るようにしました。

もう一つ難関がありました。トップバッターの福島選手をどう迎えるかという事です。初めての試合でホームランを打たれ、二番から九番まで連続三振を取り、また二巡目もホームランを打たれる等、全く蹂躙されており、対戦成績ではおそらく八割ぐらい打たれていたのではないでしょうか。この対策としては、まず抑えようとしないで低目低目を突き、自然体で対決することと、彼の前にランナーを出さないことだけを考えることとしました。

さて、試合当日ですが、早朝八時というのに市営球場は超満員となり、盛岡市内を二分するようで、今でもその情景は鮮明に残っています。

結局3―1で勝ち、下馬評どおり優勝して、県代表になることができました。もちろん私だけの力で勝てたわけではありませんが、後にも先にもこの時は一番燃えて頑張った時ではなかったかと思っています。

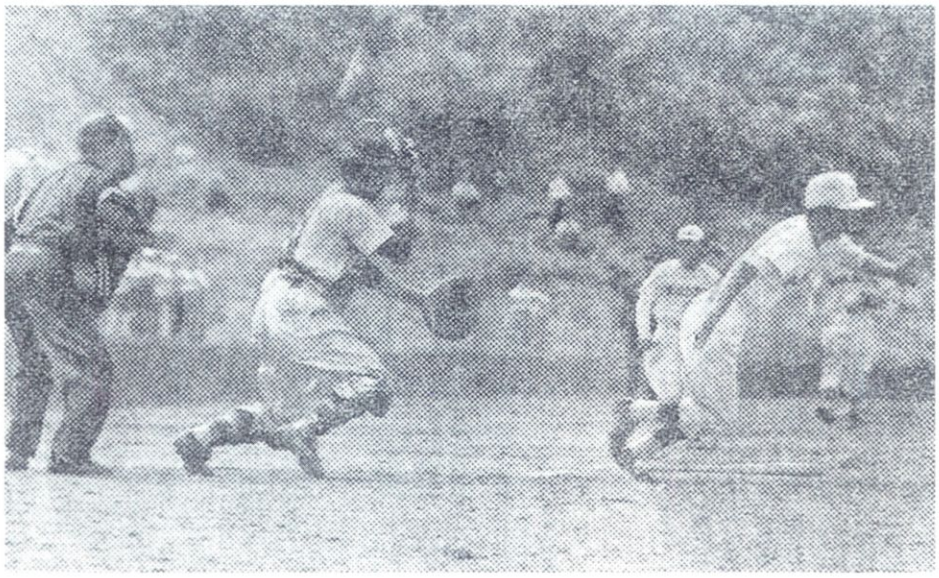
この経験がその後大きな力となり、チームにも自信がつき、自分自身も三年間の充実した高校生活を送ることができました。残念ながら甲子園には駒を進められませんでしたが、いい思い出として今でも大事にしています。

先輩からたくさんの事を教えていただき、またチームメートであった三年生、そして一年生に同級生の皆様にはいつも感謝しております。

現在も同級生等から『"女鹿"のお陰で、高校時代は楽しかった』と言われます。

自慢話になったようで恐縮ですが、この時の練習が『やれば出来る』の基盤となったように思います。

後輩諸君、頑張ってください。



昭和33年夏、対黒工戦。七回裏にスクイズ成功し、同点とする。

昭和33年[1958]

◆3月　選抜都市対抗野球で盛鉄局が準優勝
◆11月　前県知事の国分謙吉が死去

春季大会でベスト4

◇32年秋　2勝して地区決勝へ進んだ本校であったが、盛岡商業に完封を喫した。

▽1回戦

岩手橋高	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡一高	0	1	0	7	5	2	×		15

（七回コールド）

▽2回戦

盛岡工業	0	0	1	0	0	0	1	0	2
盛岡一高	0	0	0	0	4	1	0	0	5

▽決勝

盛岡商業	0	0	4	0	3	0	0	1	8
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0

（商）佐々木―藤川
（一）吉丸、佐々木、吉丸―大窪

◇春　本校は秋季大会に続き、決勝で盛岡商業と対戦。雪辱なって、県大会への出場を決めた。

▽1回戦

盛岡一高	0	4	0	0	2	0	1	2	10
盛岡農業	0	0	0	0	0	0	2	4	6

▽2回戦

盛岡一高	2	0	0	0	0	2	0	4	8
盛岡工業	3	3	0	1	0	0	0	0	7

▽決勝

盛岡一高	1	0	0	0	1	1	1	0	4
盛岡商業	1	0	2	0	0	0	0	0	3

（一）盛合―菊池（孝）、大窪
（商）佐々木、平賀―藤川

県大会は、宮古市で開かれた。本校は地元宮古高に完封勝ちし、四強入りを果たした。

▽1回戦

宮古高校	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡一高	0	0	0	0	0	4	0	0	4

（一）盛合―大窪
（宮）岡崎、佐々木―小林

【ゲーム】県下随一の右腕と評された宮古の佐々木を相手に、気力にまさる本校は六回の集中打で勝利をものにした。

この年の3年生部員

男　重　村　中
行　明　村　田
紀　栄　田　千
弥　一　合　盛
明　祐　窪　大
三　正　田　野
忠　徳　金　府
政　原　小
功　木　佐々
治　川　慶　浅
祐　木　佐々
庫　沢　成　金



昭和33年の3年生部員



応援風景

▽準決勝

釜石工業	0	0	0	2	2
盛岡一高	0	0	0	0	0
	0	0	0	2	2
	0	0	0	0	0
	5	2	2	9	

◇**夏**　2回戦で春季県大会出場の黒沢尻工業と当たった。この一戦を制した方が上位を窺えると予想された。本校は接戦をものにして3回戦へ進んだが、伏兵の盛高に足元をすくわれ、甲子園への道は断たれてしまった。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

黒沢尻工	0	0	0	1	0	0	0	0	1
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	（延長十回）								
							0		1
							1×		2

【ゲーム】十回の本校は、九番盛合が敵失で生き、犠打で二進。二番中村が左前安打し、鮮やかなサヨナラ勝ち。

▽3回戦

盛岡一高	0	0	1	0	0
盛　高校	0	0	0	0	0
	0	1	1	0	0×
					2

【ゲーム】優勝候補の一角と評された本校であったが、得点圏に走者を出しても、ここ一発が出ず、3回戦で姿を消した。

白堊随想録— 8

「戦いの朝」の想い出

野田祐三　昭和三十四年卒業

昭和三十三年、夏。そこは静まり返った早朝の境内であった。決戦を前に我々は必勝を天満宮に祈願するのだ。

その時、後援会長であった「サンコさん」こと瀬川正三郎先輩から、試合に臨むに当たっての訓辞を受けた。

それは今までもはっきり記憶している。

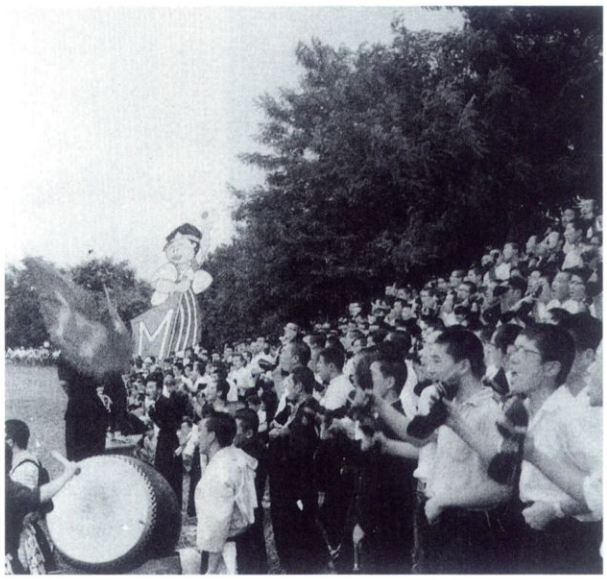
「勝とうと思うな、負けないと思え」の静かな檄であった。声は静寂な空気に凛と響き胸に染み入るようであった。

我々はこの一言で試合前のはやる心がすうっと薄れ、冷静な闘志が湧き出すのを覚えた。

今にして考えれば、先輩のこの言葉は柔道での大勝負、豊かな人生経験から発せられたものであって、我々のはやる心が手に取るようにわかっていたからのことでしょう。

この時の先達の一言とセミ時雨が、今でも私の脳裏から離れない。

四十余前の熱い戦いの夏の一コマとなっている。


応援風景

昭和34年[1959]

◆8月　都市対抗野球で富士鉄釜石が準優勝
◆9月　IBC岩手放送テレビジョンが開局

一戸の打棒に敗る

◇33年秋　岩手高と初戦で当たった。先手をとる試合運びをし、勝利を手にしたかに思われたが、九回、岩手高の粘りの前にサヨナラ負けした。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡一高	2	0	0	0	2	0	0	0	4
岩手高校	0	0	1	0	0	2	0	0	2×	5

（一）三浦、坂本―菊池
（岩）田中、小田島―宮野、吉田

◇春　盛岡地区は、この年初めてリーグ戦方式を採用した大会を行った。本校は2勝2敗（1試合は勝敗不明）で代表の座を占められなかった。代表校になったのは盛岡商業で4勝1引き分けの成績であった。

▽リーグ戦

盛岡農業	1	0	0	1
盛岡一高	0	1	2	3

（日没五回コールド）

（農）吉田、宮野―柳田
（一）三浦、石澤―春山

▼二塁打　坂本（一）

▽リーグ戦

盛岡一高	0	0	0	6
岩手橘高	1	0	0	3

（一）吉田、三浦、吉田―春山
（橘）長沢―中村

▼二塁打　春山（一）

▽リーグ戦

盛岡工業	0	3	0	8
盛岡一高	0	0	2	3

（工）北川、大星―高橋
（一）菊池、中村―春山

▼三塁打　佐藤（一）

▽リーグ戦

盛岡商業	4	1	0	12
盛岡一高	0	0	0	2

（七回コールド）

この年の3年生部員

夫　宥
太田　拓
菊池　孝
宮　義一郎

（商）中村、平賀―石塚
（一）三浦、吉田―春山

▽リーグ戦

盛岡一高　（勝敗不明）　岩手高校

◇**夏**　本校は1回戦で釜石工業を下し、一戸高（春季大会ベスト4）と当たった。先制したが、一戸高の粘り強い打線の前に屈した。

▽1回戦

盛岡一高	1	1 0	0	1 1 0	5
釜石工業	0	0 0	0	0 0 0	0

【ゲーム】本校の最大の勝因は、全員一丸の気迫と吉田の投打にわたる活躍にあった。初回、二死二塁の時、左越え二塁打を放って1点を挙げたのを含め、4打数3安打と大当たり。投げては、内外角にうまく散らした投球をして反撃の機会を作らせなかった。

▽2回戦

盛岡一高	0	3 0	0	0 0 0	3
一戸高校	0	0 2	7	0 0 ×	9

【ゲーム】本校は四回の失点が大きすぎた。失策が重なったところで一戸打線が火を噴いて、大量リードを許してしまった。本校は最終回まで試合を捨てぬ戦いぶりを示したが、得点にはつながらず敗れ去った。



昭和34年の3年生部員

白堊随想録― 9

故、宮義一郎君の想い出

菊池孝宥　昭和三十五年卒業

君に初めて会ったのは昭和三十二年の春。君は上田中学から、私は玉山村の巻堀中学から盛岡一高に入学し、共に硬式野球部に入り、最初の練習の日のグラウンドだった。

当時の君は体も小さく目がパッチリとしたあどけない紅顔の美少年だった。私はあの体で厳しい練習について行けるだろうかと思っていたが、みるみるうちに体が大きくなり、体力もつき、また、皆に追い付こうと自分なりに野球の本を読んで努力していたね。二年になってから、君は私が汽車通学で大変な事を心配し「家に来て一緒に学校に通わないか」と声をかけてくれた。その親切に甘え、卒業するまで君と寝食を共にした。

君は二年の前半に無理な練習から不運にも右太腿に肉離れを起し、満足に野球ができず、かなり悩んでいたようだったね。

昭和三十三年の夏の大会も終わり、一、二年生による新メンバーでの秋の新人戦を迎えることになり、部員は君を除いて二年生が三名、一年生が五名という一高野球部創設以来、大会に出場できないという最大のピンチだった。そこで私は「また一緒に練習をして試合に出ないか」と何度も懇願したところ「じゃ、やるか」と言ってくれた。君のユニホーム姿を見た時は、一緒にプレーできるという喜びと、なんとか大会に出場できるという安堵で胸が熱くなった事を今でもはっきりと覚えている。

それからの君は、大会まで連日の厳しい練習にも耐え、当時、県下でも強豪だった岩手高校戦では四番・ライトで出場し、痛烈なライト前ヒットを打つなど大いに活躍してくれた。結果は残念ながら4―5で逆転サヨナラ負けを喫したが、九名のメンバーであそこまで相手チームを苦しめた事は君が戻ってきてくれたおかげであり、本当に良い思い出を残してくれた。

その後も君の足の具合は良くならず、とうとう野球部から離れて行ってしまったが、短い間とはいえ君と一緒に野球ができた事を、私は一生忘れることはないだろう。

※宮義一郎氏は平成七年九月二十三日に逝去された。


昭和35年夏、対紫波高戦。

昭和35年[1960]

◆5・24　チリ地震で三陸沿岸に大津波発生
◆7月　葛巻町など県下で小児マヒが大流行

大戸を擁する一戸を崩せず

◇34年秋　対盛岡工業戦。1点を先制したが、逆転を喫して初戦で姿を消した。

▽1回戦

盛岡工業	0	0	0	0	0	2	0	0	2
盛岡一高	0	0	0	1	0	0	0	0	1

（工）大星、吉田―小倉
（一）吉田、石澤―春山

◇春　初戦で盛岡商業と対戦。点の奪い合いとなったが、序盤の失点が最後まで響いてしまった。

▽1回戦

盛岡一高	0	0	0	0	3	1	0	0	5
盛岡商業	0	5	2	2	0	0	0	0	9

（一）吉田、石澤―春山
（商）中村―千葉

◇夏　2回戦の相手は、北上農業に大勝した紫波高であった。本校は四回に一挙6点を挙げるなどして、3回戦に駒を進め、優勝候補の一角を占めると言われた一戸高と対戦する。先制点を挙げたが、最終回に一戸打線が火を噴きカブトをぬがざるを得なかった。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡一高	0	1	1	6	0	1	0		9
紫波高校	0	0	0	0	0	1	0		1

（七回コールド）

【ゲーム】本校は、相手先発阿部が制球に苦しんでいるのにうまく付け入った。二回は、4四球をもらって難なく先制点を挙げた。三回は2安打などで2点目。四回には打者十一人を送り出す猛攻をみせた。4四球をからめ、七番石澤の三塁打などで大量得点し試合を決した。二年生投手の石澤は、相手打線を2安打に抑え込む好投だった。

▽3回戦

一戸高校	0	0	0	0	2	0	0	5	7
盛岡一高	1	0	0	0	0	0	0	0	1

【ゲーム】一戸は、前年秋と春季の両大会で準優勝という戦績をあげて、今大会でも優勝候補の一角。本校との一戦は、優勝戦線の行くえを左右

この年の3年生部員

勝　宏
宏　男
川　宣　六
浦　節
本　壮
田
浦
小
三
坂
北
三



盛鉄球場での応援風景。

するものと見られていた。

本校は初回、一戸エース大戸（後に慶大、鐘紡で活躍）からの死球で一番中村が出塁。これを四番吉田の遊撃強襲の二塁打で還し先制した。その後、本校三浦（宏）、一戸大戸の好投で1―0のまま進んだ。五回、本校は無死満塁のピンチに相手のスクイズを見破り三走の仁昌寺をアウトにとった。しかしその後、山本と大戸に2連打され逆転を許した。再び0行進となる。が、九回に一戸打線が猛攻をかけた。疲れの見えた三浦（宏）がつかまり5失点。前年夏の雪辱を果たすことができなかった。選手たちの記憶では、その日の盛鉄球場は「三六度を超す猛暑だった。」という。



昭和35年の3年生部員

白堊随想録―10

部員十人の新人戦

三浦壮六　昭和三十六年卒業

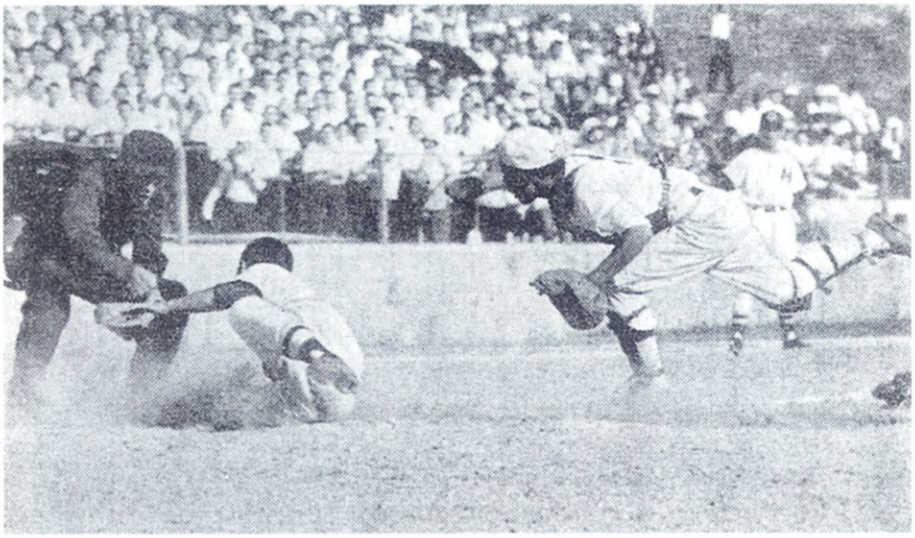
私があこがれの野球部へ入ったのは昭和三十三年の四月であった。当時の三年生にはパワー溢れる人達が多くおり、戦後最高のチームとの期待も高かった。また名だたる先輩の方々が次々と訪れては練習を手伝っていただき、伝統校としての歴史の重みを強く感じたものである。

延長二十四回戦で有名な藤沢栄投手に打撃練習で投げてもらったり、新聞記事なった本野剛志先輩にも時折励ましていただいたりしたが、半ば伝説的な存在の先輩を尊敬のまなざしで見ていた記憶が残っている。坂本、北田、小川、三浦（宏）、田村（後にラグビー部）が同期。

残念ながら部員が少なく一時は部員十人で秋の新人戦への出場も危うい時もあった。しかし、なんとか乗り切った。野球を続けた。ほろ苦い思い出ばかりが多く、夏の予選では、大戸投手（慶大一日石）の一戸高校に、二年連続して完敗してしまった。

しかし、厳しかった練習の明け暮れに悔いはない。当時と同じ夢を、我々は今も見ることができる。

四十年経った今、灼熱の季節が到来すると、後輩の活躍を期待しながら、球場に足を運ぶのが唯一の楽しみとなっている。



昭和36年夏、対福岡高戦。本塁をねらわれたがタッチアウトとする。

昭和36年[1961]

◆1月　全国サッカーで遠野高校が準優勝
◆8月　第二室戸台風で県内のリンゴ大被害

福岡高校に思わぬ大敗

◇35年秋　盛岡商業を相手に初回の1点を逆転できず、地区予選敗退。

▽1回戦　4―2　盛岡工業

▽準決勝

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	
盛岡商業	1	0	0	0	0	0	0	×	1

（一）吉田―春山
（商）吉田―千葉

◇春　地区予選で決勝まで進んだが、地区代表校になれなかった。

▽1回戦

盛岡一高	1	0	0	0	0	0	1	0	2
盛岡商業	0	0	0	0	0	0	0	0	0

（一）吉田―春山
（商）吉田―千葉

▼二塁打　吉田、佐藤、田村（一）

▽準決勝

盛岡一高	2	0	0	0	0	1	2	0	5
盛岡工業	0	0	0	0	0	0	1	0	0

（一）吉田―春山
（工）大星―小倉

▼二塁打　吉田（一）、大星（工）

▽決勝

盛岡一高	0	0	0	1	0	0	0	1	0
岩手高校	0	0	0	0	0	1	2	1	×

（一）吉田、石澤、吉田―春山
（岩）佐藤、斎藤、下河原―佐々木

◇夏　釜石工業をコールドで下し、2回戦に進んだ。対戦相手は福岡高。本校らしからぬ失策が多く出て、一方的な試合になった。

▽1回戦

盛岡一高	1	0	1	0	2	3	0		7
釜石工業	0	0	0	0	0	0	0		0

（七回コールド）

【ゲーム】攻守とも胸のすくようなプレーで、本校がコールド勝ちした。三回、一番杉田が二塁打。これを三番中村の安打で還し1点を加えると五回には、無死から杉田の二塁打、二番春山の三

この年の3年生部員

守　夫
応　己
重　郎
夫　夫
一
邦　昭
徳　勝
信　攻
一　治
禎　健
田　原
原　村
藤　山
田　寺
澤
島　藤
小　中
佐　春
吉　小
野
石


昭和36年の3年生部員

塁打で1点、更に犠飛で一点を加えた。六回には3安打などで3点を加え、余裕のコールドゲーム。本校石澤は変化球をうまく使い分け、釜工打線を1安打に抑える好投で、二塁を踏ませなかった。

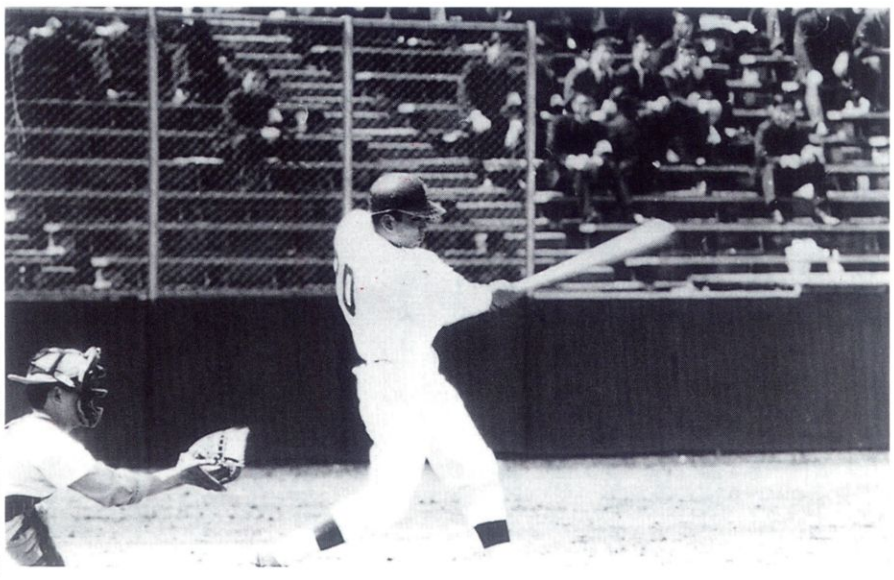
▽2回戦

福岡高校	2	1	1	0	0	1	0	2	8
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0

【ゲーム】本校は思いもよらない8失策で、やらずもがなの点を与え、大差の試合となった。福岡は毎回走者を送り出し、加えて八回を除いて毎回安打を放った。

（福岡高校はこの年、優勝を果たして3年振り8回目の甲子園出場を果たした）

このシーズンの三年生部員に、吉田治夫がいる。吉田は、本校ではエースとして活躍し、早大に進んだ。四年生の秋季シーズンでは、ベストナインに選出される活躍ぶりを示している。


早大で活躍する吉田治夫選手。

白堊随想録—11

一高野球部へ感謝！

春山攻一郎　昭和三十七年卒業

野球は勝負事であるから、もちろん勝って甲子園は大目標であるが、一高三年間の野球部の経験を通して、何かを学び得ること、大きく言えば、人間の基礎力＝人間学（？）を学ぶことではないかと思う。

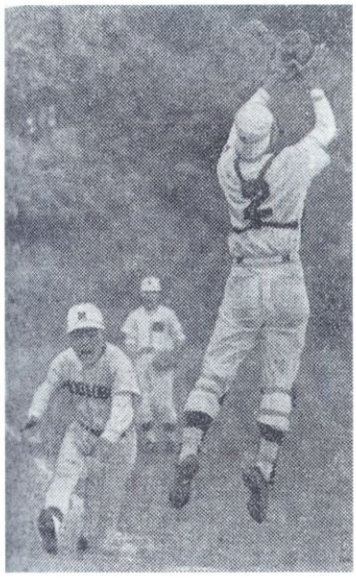
三年間、甲子園を目指して白球を追い、バットを振り、若き熱血の喜怒哀楽を味わったことは、貴重な経験だった。

三年間バッテリーを組んだ四番エース吉田治夫君は、後に早大の三番でベストナインに輝き、クラレの監督を歴任した我等同期の誇りである。

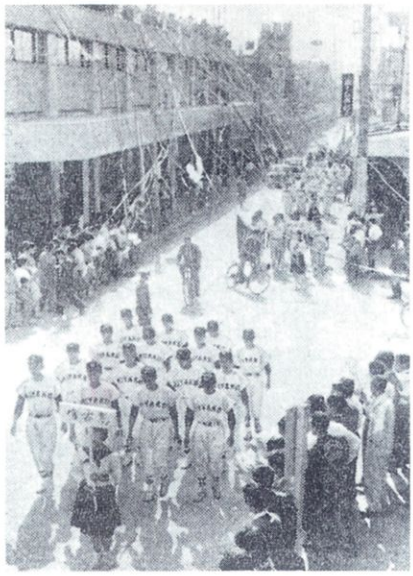
一塁小原、三塁中村、遊撃小野寺、左翼佐藤、中堅島田、右翼石沢と同期は多士済々であったが、甲子園は遠かった。

学校あげての応援、諸先輩の熱心なご指導、卒業後もその時々の一高野球部が話題になることなど、我ら一高野球部への思い入れ、期待の大きさをあらためて感じざるを得ない。

一高野球部百年の歴史の中の一員であったことに感謝し、諸先輩の創られた伝統に敬意を表し、後輩諸君のご奮闘を切に願うものである。



昭和37年春、東北大会の対保原高戦。六回、中村の安打で二走吉田も生還し逆転。



昭和37年春の東北大会。開会式前の市内行進。

昭和37年[1962]

◆2月　東京都の在住人口が一千万人を突破
◆10月　国体ラグビー、高校の部で盛工が優勝

宮古に善戦及ばず

◇**36年秋**　部創設以来、敗れたことの無い岩手橘高に完封を喫した。

▽1回戦

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0
岩手橘高	2	0	0	0	0	0	0	0	2

◇**春**　秋の敗戦を糧にした本校は、大会に向け順調な調整を果たして、盛岡地区を制した。

▽1回戦　7―0　盛岡工業

▽2回戦

盛岡市立	1	0	0	0	0	0	0	0	1
盛岡一高	2	0	0	0	0	0	0	0	2

▽決勝

盛岡一高	0	2	0	0	1	1	0	0	4
盛岡農業	0	0	0	0	0	0	0	0	0

（一）杉田―藤沢
（農）竹田、村上―切金

この優勝に伴い、本校は県大会を経ず、開催地代表校として優先的に東北大会に出場。東北大会の開会式は、市内パレードが行われた後に、岩手公園広場を会場にして催された。劣勢という下馬評だった対保原高戦で競り勝った。東北大会の頂点を目指したが、雨天続きで大会中止になった。

▽1回戦

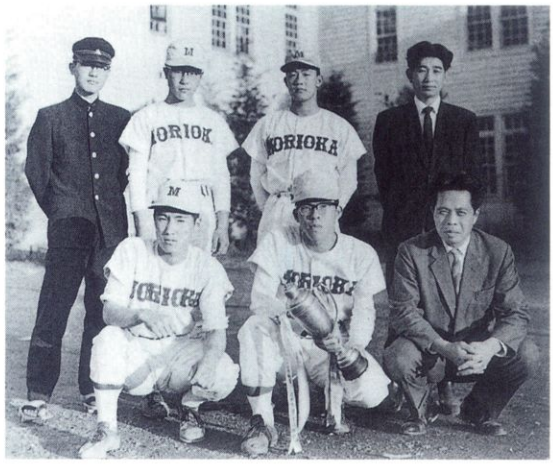
保原高校	0	0	0	0	2	0	0	0	3
盛岡一高	0	0	0	1	0	3	0	0	4

【ゲーム】0―0のまま進んだ試合は中盤に動き出す。先制したのは本校。四回、一死二塁から、伊藤（昌）の三塁打で1点を挙げた。逆転されて迎えた六回には、一死一塁とした後に、伊藤（昌）、吉田、中村と3連打して3点を奪う。強打の保原に五回、3安打2盗塁などで得点されたが2点に抑えこんだのが幸いした。毎回のように走者を出された本校であったが、杉田の巧みな投球と固い守りで大量点を許さず、準決勝進出を果たした。準決勝の対秋田戦は、長雨のため中止のやむなきに至った。

◇**夏**　この年の大会は、選抜甲子園大会で松山商業を苦しめ、春季県大会で優勝を果たした宮古高を中心に展開されると予想された。

この年の3年生部員

毅　男
敏　弘
昌　暢
治　宗
藤　本
村　藤
伊　坂
田　伊
杉



昭和37年の3年生部員

2回戦の相手は秋季県大会準優勝の黒沢尻工業。これを下し、宮古高との一戦を迎えた。善戦し延長戦に入ったが、球運味方せず甲子園への道を断たれた。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

黒沢尻工	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡一高	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1

【ゲーム】安打は両校とも5本。互角の展開となる。〝トラの子〟の1点になった二回の得点は、一死二、三塁から八番田村のスクイズで挙げた。この後、エース杉田は本来の投球を取り戻し、反撃を巧みにかわして勝利。

▽3回戦（再試合）

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
宮古高校	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1

（延長十一回）

【ゲーム】前日は0―6でリードを許したが、雨天のためノーゲーム。本校と宮古がガップリ四つに組んだ展開となった。エース杉田は強力打線に10安打を浴びたが、再三のピンチを固い守備で切り抜け、接戦に持ち込んだ。十一回裏、無死満塁とされ、宮古エース佐々木の一打に敗れ去った。

白堊随想録―12

昭和三十七年の野球部

杉田清彦　昭和三十八年卒業

昭和三十六年の夏、私は二年生。一年生から出場していた優秀な三年生が数多くいて甲子園を狙っていたが球運に恵まれず福岡高校に0―8で敗退、夏の大会は終わった。残された一、二年生は十名足らず。また、校舎移転でグラウンドは無く、とても試合をする状態ではなかった。

秋の大会で橘高校に屈辱の完敗。泥沼状態で野球部解散の話もでる始末。残された道は新入部員を待つだけであった。

年が明け、桜小路新監督のもと多くの新入部員を迎えた春。大会前の練習試合は全敗、それも大差だった。しかし大会では、盛岡工業を二回戦で撃破し新チーム初めての公式戦勝利。準決勝盛岡市立、決勝戦盛岡農業をねじ伏せて盛岡地区で優勝してしまった。

東北大会は盛岡で開催ということで推薦出場。当時開会式は大通りを行進し岩手公園で行われた。街の行進は初めてでちょっとしたスター気分を味わい、おまけに選手宣誓もやらせてもらった。一回戦で福島代表の保原高校に大方の予想を覆して快勝し、勝った我々が茫然。準決勝は秋田高校。しかしここで天のいたずら、雨が止まず大会は中止となった。

さて、夏の大会。一回戦は黒沢尻工業に1―0で辛勝。二回戦で早くも優勝候補の宮古高校と対戦した。試合開始後あっという間に7点取られ、負けるのを待つばかり。ここで意外な味方雨が降ってきた。頼りは雨ばかり。結局はノーゲーム。喜んだら千田玄部長に「ここで喜ぶな。帰ったら喜べ」と温かい注意。

さて再試合。一度死んだものは強い。両校0行進だったが、延長十一回裏、遂に力尽きサヨナラ負けで終わった。後の記憶は無し。

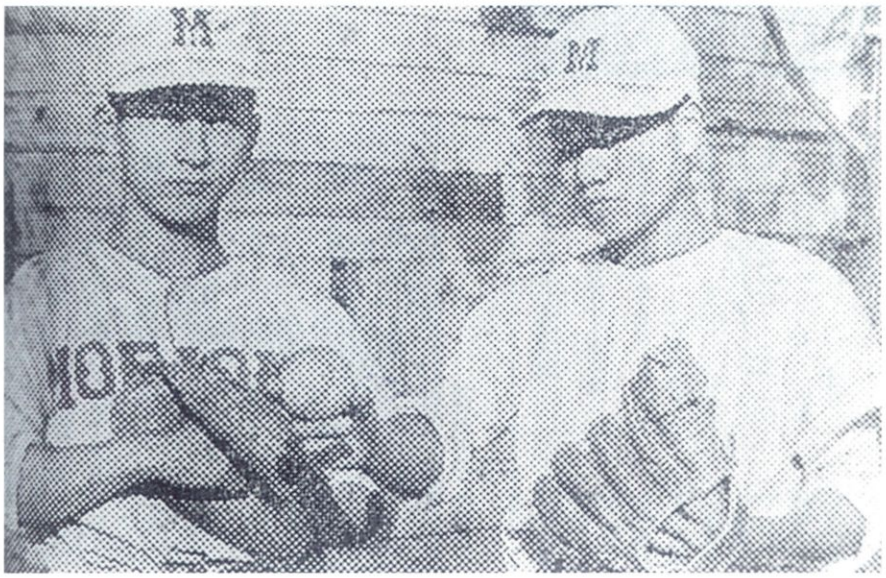
今考えるに、弱体チームがここまでこれたのは監督の力はもちろんだが、全員野球で一つにまとまった結果であったと思う。三年生は四名、私と伊藤(昌)、伊藤(宗)、田村であった。伊藤(宗)と田村は若くして他界、現在は私と伊藤(昌)とそれにマネジャーで陰で支えてくれた坂本、大友がいる。

夏のメンバーは、左記の通りである。

順打	位置	名前	学年
1	6	浦川昌	1
2	7	田村宗	1
3	4	田沢	3
4	1	村	3
5	8	宗	2
6	5	沢	3
7	3	松	3
8	2	緑	2
9	9	村	1
	1	伊藤昌	3
	1	杉	3
	1	吉田	3
	1	伊藤宗	2
	1	藤	3
	1	中	2

最後に、私は母校監督を十年やらせてもらったが、残念ながら甲子園には出場出来なかった。一歩手前は夏二回、秋一回あったが私の力が無く皆様には申しわけないと思っている。現在、私立校の台頭、環境の変化等甲子園への道は険しいと思うが、私が監督の時の信念を記しペンを置く。

中国伝来の兵学に戦略と戦術がある。作戦は、▽一をもって十を制する戦略、▽十をもって一を制する戦術。戦略とは「テコの原理」の応用で、弱者でも強者に勝てるノウハウ。大局的、長期的構想に基づき、好機をとらえ、総力戦で困難を克服して勝つ方法。戦術とは「石の目の定理」の応用で固い石でも石の目という弱い箇所がある。ここを集中的に叩くと、容易に砕ける。つまり、力を分散しないで、的を絞って、一つを確実に勝つ方法。要は目標を持ち、練習で一つ一つを確実に消化し、本番でタイミングを失わず勝つ機会を発見することだと思う。



昭和38年の本校バッテリー。吉田投手（右）と藤沢捕手。

昭和38年[1963]

◆1月　全国大学ラグビー大会で岩手大が優勝
◆7月　佐藤得二氏（本校出身）直木賞受賞

夏、摺沢高校戦で1点に泣く

◇37年秋　1回戦でコールド勝ちを収めた本校であったが、準決勝では吉田の本塁打も及ばず、大敗し県大会への出場を果たせなかった。

▽1回戦

盛岡市立	0	0	0	0				0
盛岡一高	4	0	0	0	0	0	3×	7

（七回コールド）

（一）中村、松浦―寺沢、藤沢
（市）中田―村井

▽準決勝

盛岡農業	0	1	2		13	3		19
盛岡一高	0	1	0		1	0		2

（五回コールド）

（農）竹田―小山田
（一）吉田、中村、松浦―寺沢

▼本塁打　吉田（一）

◇春　岩手高に思わぬ大敗を喫した。

▽1回戦　2―12　岩手高校（五回コールド）

◇夏　この年の本校は、核となる投手が存在しなかった。吉田、松浦、中村の三人の投手陣。久慈高を破って2回戦に進んだが、摺沢高に完封された。

▽1回戦

久慈高校	1	0	0	0	0	0	1	2
盛岡一高	4	0	1	2	0	0	0×	7

【ゲーム】前半、中盤に得点を重ねた本校の快勝だった。本校は吉田―藤沢のバッテリーで臨む。初回、久慈に1点を先行された本校はその裏、相手投手の阿部から3四球で二死満塁とし、六番中川の安打で2点。七番本堂も四球を得て、八番吉田が右翼線に安打し3点目。もう1点加え、すぐ逆転に成功。本校守備陣は、ヒット性の当たりを好捕し、吉田を支えた。

▽2回戦

摺沢高校	0	0	0	1	0	0	0	1
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0

【ゲーム】両校の安打は、共に4本ずつ。本校吉田、摺沢水沢両投手の投げ合い。本校は四回、

この年の3年生部員

斉藤仁志郎
寺沢邦雄
中川敏彦
藤沢富士雄
細川博明
吉田一実

白堊随想録—13

思い出される部室と試合

細川博明　昭和三十九年卒業

三年間の硬式野球生活は伝統の重みを感じながら、プレッシャーもありましたが、今は懐かしい青春の一時期でした。

大正以来の部室も校舎の建て替えと共に無くなり、私たちが最後ではなかったかと思います。

久慈次郎の高校時代に使用していた（と教えられていた）レガーズが部室の壁にいつも飾られていたのが思い出されます。

三年間の試合で一番記憶に残っているのは、我々が一年生の時の村田栄三監督率いる福岡高校との練習試合と県大会での対戦、そして二年生の時の春季東北六県高等学校野球大会で圧倒的に劣勢が予想されていた1回戦を勝ったことです。

最近は野球部同級生が集まることがありませんが、恐らく皆同じ懐かしい思い出であろうと思います。



盛岡一、摺沢に敗れる

黒北、福岡はともに快勝

山の子ら海に歓声

分校の小中生を招待

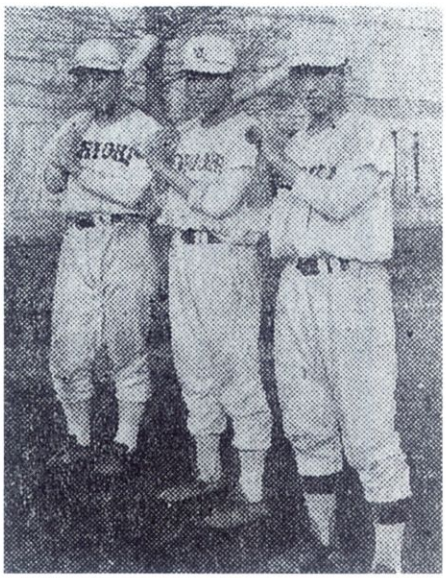
辺地の福祉対策を総合的に

県大会２回戦、対摺沢高に０—１で惜敗。（昭和38年７月26日岩手日報）

相手打線を二死まで追い込んだが、三番佐藤に左中間突破の二塁打、続く水沢にも右中間二塁打を放たれ先制を許す。結局これが、勝敗を分ける1点となった。惜しまれる一戦だった。



昭和38年の3年生部員



昭和39年夏、緑川・中村・松浦の主軸打者。（右から）

昭和39年[1964]

◆4・1　花巻空港が開港
◆10・10　オリンピック東京大会が開幕

高田高校に1点差で涙

◇38年秋　盛岡商業と決勝進出を争うも、完封された。

▽1回戦

盛岡一高	1	1	0	6	0	0	1		9
盛岡市立	0	0	0	0	0	0	0		0

（七回コールド）

▽準決勝

盛岡一高　0―6　盛岡商業

◇春　秋に続いて盛岡商業に苦杯をなめた。

▽1回戦

盛岡一高	1	0	3	0	5	6			15
岩手橘高	0	0	0	0	0	2			2

（六回コールド）

（一）松浦―富山
（橘）吉田、小笠原、東根、国宏―小笠原、佐々木

▽準決勝

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0		0
盛岡商業	2	0	0	3	1	0	0		7

（七回コールド）

（一）松浦、緑川―富山
（商）阿部―赤沢

◇夏　本校はエースが松浦。リリーフとして菊池、緑川を揃え、捕手には、一年生の渡辺を抜てきして、大会に臨んだ。

▽1回戦

盛岡一高	1	0	0	1	1	2	0	0	1	6
前沢高校	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

【ゲーム】本校はエース松浦がカーブ、シュート、重い直球を取り混ぜたうま味のある投球をした。前沢打線は散発7安打で無得点。本校打線は短打主義に徹し切り、走者を出しては適時打を放ち、効率よく加点し、2回戦に進んだ。

▽2回戦

高田高校	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

【ゲーム】本校エース松浦は、胸元をつくシュートで好投。これに対し高田エース村上は外角一杯のカーブ、内角に伸びるシュートを混ぜ合わせ

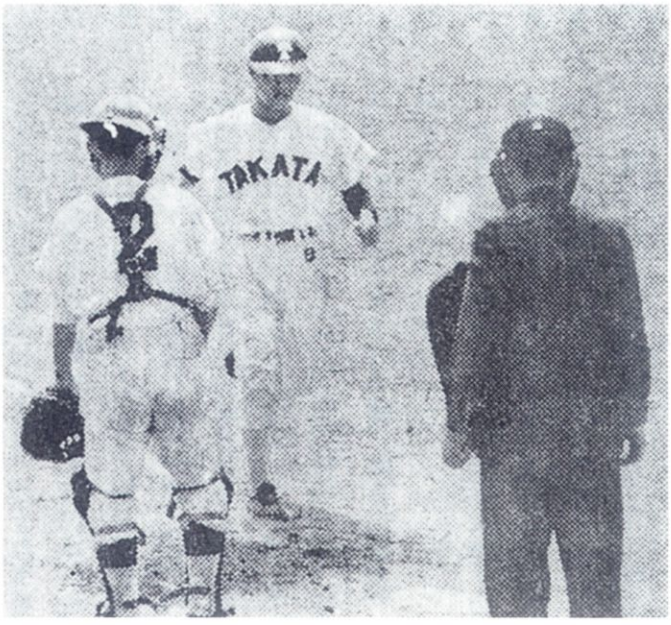
この年の3年生部員

一	夫	秀	正	晃	夫	夫			
純	栄			義	健				
松	浦	田	藤	村	川	山	藤		
松	澤	佐	中	緑	富	伊			



昭和39年の3年生部員

た投球。ゼロ行進の試合は、八回に動く。高田打線は一死後、九番高橋から3連打し満塁と攻めたてた。この後、痛恨の四球押し出しで1点を与えた。本校打線が最後まで火を噴かず惜敗した。



昭和39年夏、対高田高戦。1点に泣く。

白堊随想録—14

グラウンド風景

中村正　昭和四十年卒業

夕焼けが、やけにきれいな青春時代。などと言う表現はあるだろうか。野球部時代を思い起こすごとに浮かぶ光景は、青い空でも真夏の太陽でもなく、なぜか赤く暮れなずむグラウンドでボールを追う同胞が明瞭なシルエットとなって浮かぶ光景である。そこにはサッカー、ラグビーの練習風景も入り交じっており、かなり賑やかでもある。旧校舎へ入学し、新校舎から卒業した私たちは、新校舎の工事、旧校舎の県庁分庁舎利用によるグラウンド難、加えて部員不足の中で野球部活動を続けた時代であった。二年の新人戦（昭和三十八年秋）では、守備についたらダグアウトには監督、部長、マネジャーの三名だけ。かろうじて試合を成立させていたといったこともあった。

そうした中で、とにかく野球部員として公式戦に臨んだ同輩は九名と記憶している。佐藤秀（厨川中）富山義夫、緑川晃、松浦純一、笹川敵雄（下の橋中）伊藤健夫（見前中）沢田栄夫（紫波一中）大平昭政（下小路中）、そして中村正（上田中）である。

入学時は杉田、伊藤（昌）、伊藤（宗）、田村、坂本さんらを最上級生とし、藤沢、吉田、中川、寺沢、細川、斎藤さんがすぐ上。二年になって古川、福田、大矢君がすぐ下。三年時に遠藤（洋）、遠藤（直）、川村、高橋、関、工藤、佐々木、菊池、渡辺君らが最下級生という構成であったと記憶している。

一人一人の顔が明瞭に浮かぶ。様々に個性を学ばさせてもらったとの思いがある。野球への熱い思い。部員確保に心を痛めつつ、募るレギュラー確保への不安との葛藤。生き方。こだわり…など、個々の悩みや思考が全体としてオープンであったように思う。何時でもつるんでいる等といったことが少なくなかったように思うが、今では誰が何処で何をしていようが好きとか、正しいとかといった価値観とは別に殆ど「間違いないこと」と思える。支えは野球部時代がオープンであったのだろうと勝手に決めつけている。そんな一高野球部は、素敵で知的であると今も信じている。

思い出すままに

香村（村松）央子　昭和三十年卒業

私が入学したのは一高の男女共学がはじまって三年目の一九五二年。「忠実自彊の旗」のもと?、急造のトイレその他諸事、女生徒には不自由な環境にもめげず日々を過ごしたものだった。あれから半世紀近く、校歌の「杜陵の健男児」が変わらないのは一高らしいが、野球部で女子マネジャーが活躍するようになったのは当然のことと思える。

私の入学した年のキャプテンは、「さわしょう」こと沢村省三さん。一年上に冬はアイスホッケーで大活躍の島田繁さん、好投手といわれた藤沢栄さんたち。同期には、鈴木正樹、北本誠郎、川田昂などなどの諸兄がいた。当時はまだ、奥羽大会という青森、秋田県勢を相手に戦う更なる関門があり、甲子園への道は遥か彼方だった。

野球部との関わりは、私が一高に在籍したということより、実家の父や兄、いや母も含めた家族ぐるみといっていい。審判をしていた父にくっついて、上田の旧医大グラウンドで見た石川・浅沼バッテリー時代。お米の代わりに配給された赤砂糖で作った「砂糖水」を、やかんに入れて兄たちが練習試合をしている盛鉄球場へ母と運んだ暑い日。下級生だった兄が修理するために持ち帰った糸の切れたボールも、擦り切れて直しようがなくなると解いてゴム跳び用にもらったりと…。

我が家にとって一九四九年、盛岡高校の甲子園出場は、てんやわんやの大喜びのできごとだった。キャプテンとして晴れの舞台に立つ兄のために、母と叔母が徹夜で手編みのストッキングを作ったり、持参するお米の算段をしたり、高校球児を応援するのにも近年の父母たちとはかなり次元の違うものだった。この頃からしばらく市営球場に近い我が家が、大会の際の野球部の更衣所と化した。私はといえば、たまたま観戦していた都市対抗野球で、人手がないからと父に場内アナウンスを手伝わされ、「うぐいす」は後楽園と盛岡だけというおだて?にのって来盛の大毎オリオンズ・東映フライヤーズ戦なども含め、シーズン中はネット裏の主のような有様だった。当然、一高の試合もネット裏。歓声、歓声を押さえつつの三年間だった。

家庭を持ち盛岡を離れ、朝日新聞紙上の地方大会の結果で母校の戦績を辿るようになり、それは六年半の海外在住の間もクーリエ便で届く夏の楽しみであった。帰国



昭和30年、盛岡一高卒業。昭和24年甲子園出場時の主将松村昇氏の妹。いまだに大の一高ファン。

後、得た職場が日本橋で、当時日本銀行本店勤務の鈴木正樹さんたち日本橋界隈の同期の仲間と旧交を温める機会ができた。数年前の三月だったろうか。鈴木さんから野球部が遠征試合に上京して来るから応援に行こうとお誘いをいただいた。多摩川べりにある都立九段高校のグラウンドに着くと、九段高校の攻撃中だったが、投手は兄の友人である好摩の八角先生のご子息とのこと。まわりを見回すと、ああ、あれは○○さん、あれは?とそれぞれに年は重ねても懐かしいお顔ばかりに、しばらくは応援を忘れて話が弾んだ。

振り返ってみると、一高野球部は、部員、OBを貫いている一体感だけではなく、同窓の仲間に盛岡一高全体を連帯させるものを持っている気がする。もちろん、人によって感じる度合いは違うにしても、過ぎたあの夏の何日かを語る声音や眼差しにそれを感じることが多いのだ。

輝く二連覇—女鹿の左腕唸る

清水泰宏

昭和三十三年卒業

三十一、三十二年と二年連続して夏の県大会に優勝した感動は、いまだに心に波打っている。

この時の立役者は、なんといったって左腕の女鹿恵教投手である。

文武両道を標榜し、弊衣破帽に高下駄をひっかけて闊歩できた良き時代、といってもまだ物不足で乏しい時代だったので、蛮カラ風の身なりはお金がかからなくてきわめて好都合だった。

この年六月に、花巻市での高体連大会で九連覇を成し遂げて、全校の意気は「実力四分応援六分」で夏の大会も必勝と盛んになっていた。

女鹿投手は、切れのよい速球に鋭いカーブ、決め球が外角低めの速球だった。この球は、東京六大学の審判坪井さんでなければストライクに判定してくれなかった。

彼は、一年中左肩に肩当てをしていたし、掌の中にはローの塊を握りしめていた。天性の抜群の運動能力に加えて、地道な努力を怠っていなかった。われわれ同期生を代表する誇れるスターであった。



昭和33年、盛岡一高卒業。中央大学商学部卒業。現在は盛岡市で(株)開成パンションを経営、国際交流に一役かっている。

野球を楽しむ

吉田治夫
昭和三十七年卒業

「五番ライト吉田君、盛岡一高」と場内アナウンスの声が神宮の森に響き、心底身震いを覚えた三十数年前を、つい昨日のことのように思い出している。

昭和四十一年四月の東京六大学野球、春のリーグ戦、初戦の対東大戦であった。学生最後のシーズンで、挫折、苦難の末、奇跡ともいえる復活を遂げ、念願のレギュラーポジションを獲得したのである。

想えば仁王小学校四年の早朝野球に始まって、附属中学校、盛岡一高と進み、残念ながら一高では良い戦績を残せなかったが、「杜陵の森の西北」から「都の西北早稲田の森」へと進んだ。私の野球人生の奇跡で最も感動と戦慄の交錯した瞬間でもあった。四十一年春のリーグ戦、打撃は好調で打率三割五分のベストテン八位。終盤の早慶戦までは打率三位で首位打者も狙える位置についていたが、早慶戦の独特の雰囲気に呑まれ、首位打者、ベストナインを逸し、悔しい思いでシーズンオフを迎えた。恒例となっている八月の三週間にわたる軽井沢での夏合宿は、下級生の下積み時代とは天と地ほどの開きがあり、レギュラーとしてマイペースでの調整が可能であった。

秋のリーグ戦は徹底した内角攻めにあい、打率も二割三分と低迷していた。内角を引っ張ってフォームを崩していたが、センター中心の本来のバッテングに戻すことを心掛けた結果、優勝を左右する対法大戦は、初戦を落とし三連戦となったが、四割六分の高打率をマークした。守備においては第三戦の延長十三回、抜ければサヨナラ負けとなる右中間の大飛球を、フェンス際で捕球した時の光景は今でも目に浮かぶ。難関の法大戦で勝ち点をあげ、最終の早慶戦まで好調を持続し完全優勝を達成できた。打率三割三分三厘で六位、念願のベストナインにも選出された。学生最後の年の完全優勝の味は格別で、一緒に汗を流した球友、仲間と美酒に浸った思い出は忘れない。

当時の東京六大学野球には「華」があった。人気、実力とも学生野球の頂点に立ち、プロ、社会人野球の中心選手を数多く輩出している。卒業後は、社会人野球のクラレ岡山の選手、コーチ、監督として都市対抗野球全国大会に六年連続出場を果たすことができた。

私の野球人生の出発点は小学校時代の早朝野球であったが、まず楽しむことが野球の原点ではないのか、との思いは今も変わらない。



昭和42年３月早稲田大学卒業後、４月（株）クラレ入社、岡山工場に７年勤務。クラレ岡山野球部で選手、コーチを５年間経験後、監督を２年務めた。都市対抗６年連続出場し７年目会社の方針により野球部解散。大阪、東京勤務後、現在鹿児島工場勤務。



特集①座談会

「甲子園出場43年組」

出席者／高　橋　　寿（昭和44年卒業）
小笠原　敬　二（昭和44年卒業）
佐々木　典　武（昭和44年卒業）
三　浦　　宗（昭和45年卒業）
駒　木　　進（昭和45年卒業）
司会者／久　慈　勝　浩（昭和55年卒業）

久慈　皆さんは戦後最強チームといわれ、甲子園に盛一旋風を巻き起こした。まず当時のチームの様子や県大会の戦いぶりから話を進めたい。

高橋　入学時のメンバーを見て、三年の時は相当のレベルに行くと思った。というのは中学の時の県大会経験者が多かった。もちろん、成績が下がるので小笠原君と退部するかどうか悩んだこともあるんです。小笠原君と私は汽車通でもあったし…。でも二人で「三年生の時は甲子園を狙えるチームになるのではないか」とよく話しをした。一年の秋は新人戦で優勝、二年の時も相対的にコテンパンにやられた試合は無かった。

小笠原　確かに中学の時の県大会でかなりいい所まで行った選手が多かった。赤沢、森、三浦は準優勝、自分がベスト4。盛岡一高にとっては千載一遇のチャンスで、一年の時から甲子園を狙えるチームだと自負していた。三年の時は春の地区予選で敗れたため、下馬評にも上がらなかったが…。

久慈　最後の夏にチャンスが巡ってき

た。記念大会で一県一校が甲子園の出場権を得る。県大会では高田、大槌、専大北上、水沢一、広田水産、水沢の6試合を戦った。印象深い試合は。

佐々木　2回戦の大槌戦は1―0で勝ったんですが、確か駒木君の二塁打で1点入ったんだよね…。

駒木　初回は二塁打を打ったが、点は入りません。赤沢さんは送りバントできなかったですもの。得点の場面は三回。九番の森さんが四球、自分が二塁打を打ち、一死二、三塁になり、外されたボールを（赤沢さんが）スクイズ、自分も二塁から本塁を突き、間一髪アウトだった。

佐々木　この試合は小笠原君が調子良く、1点入れば決まりという展開だった。確かに相手の瀬戸投手も良かったが、小笠原君の方が安定していた。自分たちのチームは出来てから練習試合を含め3敗しかしていない。ただし3敗はいずれもサヨナラ負け。夏の大会が始まる前に、「負ける時は同じパターンだ。絶対にこういうことがないように」という指導を先生方から受けた。


高橋　寿

久慈　**好投手の瀬戸とぶつかると分かった時、何か練習で工夫はしたんですか。**

三浦　腰より上の球は打てないということで、どこかにゴムを低く張って、素振りをさせられた記憶がある。

駒木　やった、やった。（胸の当たりを上限に手を上げ）こっから、ここのエリアに絞り、やった。盛鉄の堀江、岩崎さんなども練習に来たね。

高橋　我々はノンプロの球を見ていた。大槌戦の要注意は瀬戸の一発だけを警戒していた。アウトローに小笠原の大きいカーブを決めていれば、安全パイだった。確か二塁までランナーは行っていないはずだが…。

駒木　九回一死までノーヒット・ノーランだった。

高橋　春、新人戦は逆転負け。こういうことがぎっちり頭に入っていたから、下駄をはくまで慎重になった。いずれ点取りゲームになると弱いのだから。

久慈　**決勝の水沢戦で何か印象、思い出に残ることは。**

小笠原　五月か六月に練習試合をし、1

—0で勝っている。相手は十分に戦えるという思いだったろうが、我々の調子はその練習試合の時とは雲泥の差だった。我々の思い入れを阻む相手ではなかった。三年間の艱難辛苦を全部掃き出した感じで、コールドゲームがあれば当然、コールドになった試合だ。2回戦を勝った時点で負けることはないと思った。優勝候補の花巻商は別ブロックで1回戦で負けたし。

駒木　決勝は八回当たりからスタンドで寄付集めしているのが見えた。本当にそうなるのだろうか、早く試合が終わってほしいと願っていた。

久慈　**監督が榊貞助さんに代わりましたね。**

高橋　合宿中に監督が決まったからね。関さんから引き継いだ榊監督は機動力重視の野球。駒木、赤沢もいたし…。それで得点力はかなりアップした。

駒木　榊監督の就任は衆目が一致するところだった。関さんの野球をそのまま引き継ぎ、そして連戦連勝。

高橋　七月初旬から得点力は急激にアップしている。夏はほとんど7点差だ。機動力重視に変わった。



駒木　進

佐々木　先制点は必ずとった。

高橋　榊監督には先攻をとれ、と言われた。ウチは小笠原、三浦の二枚看板だったからね。

小笠原　35歳になるまで野球をやったが、ナンバーワンの監督は榊さんだ。自分は大学、社会人でもプレーヤー、監督も経験したが、何をマメにやったかといえば榊さんの思想だった。私も先攻重視。選手は監督の後ろ姿を見て、ついていく。強気一点張りで、最短距離で敵陣に攻め込む、という野球だった。自分に出すサインもただ顔の前に大きなマルを書くだけ。それは、いい球が来れば打てという意味だったが、相手は警戒して外してくるんだよな。

高橋　盗塁もノーサインだったかな。

駒木　私は長打も多かったから…。逆にあまり走るなと言われた。ケガはすごく気にする監督だった。県大会で盗塁のサインが出たのは1回だけ。

小笠原　敗因とか、選手の失敗を一切、問わない人だった。

三浦　私はリリーフ投手だったが、気持

ちはバッターモード。3試合目の専北戦は当日の朝に先発を言われた。決勝はまさか自分が先発するとは思わなかった。榊さんは相手の戦力とこちらをきちんと比較し、大丈夫だとなれば、決断する。監督の立場から言えば、見極めはできても、普通、決断はできないものだが。

高橋　本当に最後の最後まで必死の思いだった。やはり決勝の重みだね。

駒木　実は私は盛岡三と決勝戦をやりたかった。それと、エピソードになるが、決勝で試合前のシートノックが終わった後、向こうのベンチ（水沢）からこちらのベンチに向かい、二人がスライディングしてきた。

小笠原　牽制球だよ。オレを目掛けてきたんだ。練習試合で1―0だったから、いい勝負ができると思っていたんだろう。

三浦　実は水沢のベンチに入っていた部長は従兄だった。三高には負けるが、一高には勝てるという雰囲気だったそうだ。

久慈　**その榊監督の下、十八年ぶりの甲子園出場です。過去7回出場の「伝統」はどんなふうに作用したんですか。**

高橋　マイナスの方が多かった。先輩方



小笠原敬二

の過度の期待、プレッシャーなど精神的な疲労が大きかった。ただ、監督は常に冷静だった。甲子園は本当にアガッてしまった。でも、監督がいつもニコニコし、これが本当に心強かった。芝生だって盛岡市営球場はクローバーも生えていたが、甲子園はきれい。

小笠原　盛一の伝統は気付かない力となっていた。諸先輩に三十五歳までやって、1回も経験のないプレーも教えられた。こうしたことは新鋭校ではできないことだ。

久慈　**県大会決勝から甲子園の初戦までかなり期間が長かった。現地での調整に苦労もあったでしょう。**

高橋　暑いし、練習グラウンドも近場にとれず、肉体的に疲労していた。

佐々木　とにかく気候には慣れることができなかった。

駒木　宿舎に帰るまでタクシーに乗って、窓を開けたら、運転手にたいへん怒られた。盛岡ではクーラーのあるタクシーは走ってなかったからね。

高橋　練習場から宿舎まで歩いて帰る距離でないところも、歩かされた。思い余っ

て、どうしてだ、と聞いたら、寄付が集まらないということだった。でも大阪の夏は暑いし、たいへんな思いだったよな。

久慈　鴨島商戦は先取点をとり、逆転され、そして再逆転し、勝利した。見ている方にすれば、味のある試合だったと思うが。

佐々木　二回の先制点の場面は、実はスクイズのサインだったそうだが、知らなかったな。

久慈　八回に点をとった時は重盗のサインが出ていたのですか。

駒木　あれは確かエンドランだったはず。

高橋　いや違う。あれはスチールだ。

久慈　ともかく初戦突破で、3回戦は強豪津久見戦。

佐々木　相手の練習を見た時は圧倒された。まともに当たって勝てるとは思わなかった。

小笠原　これが最後の試合という気持ちだった。ただ、相手は肩慣らし程度の気持ちだったのではないか。こちらの先取点も相手の野手が飛び込めば、取られる当たりだった。1、2点は大したことない、と思っていたのだろう。ただ相手打線はストライクを投げると、ジャストミート。空振り、振り遅れは無かった。



三浦　宗

駒木　榊采配は勝負にこだわった。実は赤沢さんは甲子園入りしてから二週間、モノが食えず、力が入らない状態で、あの赤沢さんがバントを失敗した。しかし、その一死一塁からどう攻めるのか、という場面で一転、強気のスチールのサインが出て成功した。相手のおごりもあったが、九回までこのまま行くとは思わなかった。

三浦　西武ライオンズに行った太田卓司の打撃はすごかった。とんでもなく打球が速くて。プロとして盛岡に来た時に会ったら、「あの試合だけは忘れない」と言っていた。

高橋　オレは負ける感覚はなかった。やってみないと分からないと思っていた。次の興南戦はたまたまニュースで見て、雰囲気で勝っているようなチームだった。甲子園入りして、初めてこのチームなら勝てると思った。

三浦　普通の精神状態ではプレーできない。アガるし。味付けするのが監督だ。

駒木　味付けするのも難しいと思うが…。

久慈　**興南戦は県大会を含めて、初めて1イニング4失点を記録した。ベンチの雰囲気はどうだったんですか。**

佐々木　続けてエラーが出た。

高橋　先制点を取れなかったのが痛かった。一投一打に沖縄びいきだった。しかし、これが限界だった。体力の限界もあり、自分も小笠原も山本も熱を出し、うなってね。39度ぐらい出た。

三浦　一、二戦は観客が少なかった。沖縄の時は満席。異様な雰囲気だった。

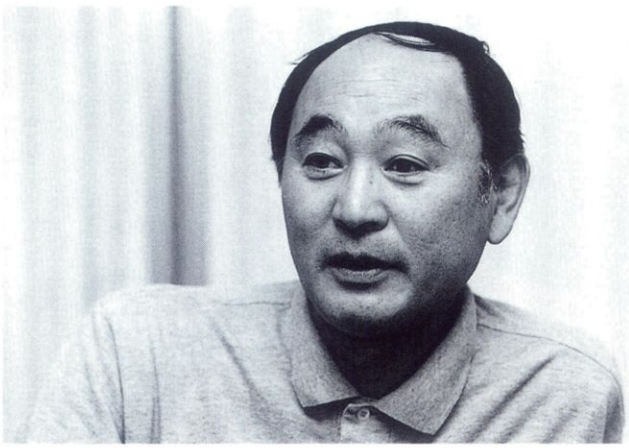
駒木　負けた試合後のバスの中で、大変な吐き気が襲ってきた。次の日、みんなは京都見物に行ったが、自分は行かず、盛岡に戻った。

高橋　大会前に72キロあった体重が、盛岡に帰ったら63キロにまで減っていたよ。

佐々木　居るだけで大変だった。

駒木　最初のうちはカツとかの差し入れにも食欲があったが、そのうち飲み物しか入らなくなった。それがいけないんだけど…。

小笠原　風呂の中で野球をやっている感じだった。甲子園は黒土で照り返しも厳しい。正直なところ自分は1勝すれば、県代表の責任を果たしたと思っていたので、あとはもういい、と帰りたかった。しかし負けた時、甲子園の通路で「盛岡一高、また来いよ」という声がスタンドからかかり、どっと涙が溢れ出してきたのを覚えている。


佐々木典武

駒木　確かに、どこからともなく「よく頑張った」という声を聞いた。自分は二年生だったから、来年も来るつもりで甲子園の土は一切、持ち帰っていない。高校野球ファンに応援団が好まれたのではないか。

佐々木　けっこう評判は良かったよ。最後は沖縄チームだったため、スタンドはほとんどが沖縄応援だったが。

駒木　スタンドは沖縄びいきが90対10、95対5の割合だったかもしれないが、その90、95の観客からも自分たちにさわやかな声があった。

三浦　甲子園は本当に地元の人たちが、よく大会を育てている。

高橋　興南はレベルの高くないチームだったが、その後にノンプロなどで活躍している選手もいるから、結構なチームだったのかな。

駒木　津久見戦でのおごりが自分たちにあったし、体力面での低下という肉体的疲労が敗因だ。

三浦　外野手はスタンドが真っ白で方向感覚もなくなる時があった。

高橋　打たれた12安打はほとんどがポテンヒット。まともに芯に当たった打球は無かった。

佐々木　ただ肝心なところでエラーが出た。

三浦　自分たちは鍛えに鍛えたというチームではなく、打って、投手が抑えるというチーム。負ける時はそういうことだった。

久慈　最後に、これからの一高野球に一言を。

駒木　自分も監督経験者だが、しっかりとした気持ちと足元を固めて、その時、その時に頑張るしかない。私立勢が現実的に強くなっているが、がっちりと足元を固めて一丸となってやってほしい。結果はそれでついて来る。

佐々木　確かに目標は甲子園だが、悔いのない野球をやってほしい。

三浦　なぜ野球をやるのかというモチベーションはそれぞれでいいと思う。野球のスタイルも毎年、変わっていいし、頭と力を使ってやれば、それでいい。

小笠原　県内一の難関を突破してきたという意地がある。それを持ち続けて、受験勉強を隠れみのにしないで頑張ってほしい。

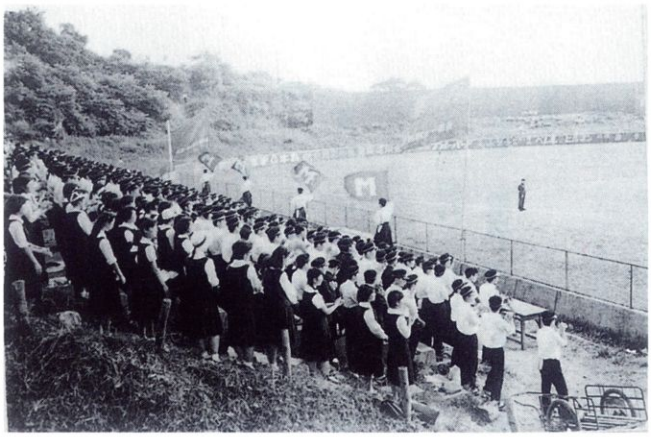
高橋　我々の時代と違い生徒数が少ない。今の一高の制度を考えると、中学校の有力選手を集めるのは不可能だ。例えば体育科をつくるとか、何か方策を考えないと、無理ではないか。中学レベルで野球は決まってしまう。10回目の甲子園出場をしたいのであれば、システムそのものを見直すしかない。ただ、そう言ってしまえばおしまいだ。現役にはそれを打破するためにも、つまらない練習であるキャッチボール、ランニングの基本を徹底すべきだと言いたい。

〔平成十年八月三十日、秀吉本町本陣にて収録〕

（文責・川村公司）



久慈勝浩


昭和40年夏。市営球場での応援風景。

昭和40年[1965]

◆5月　県庁舎が落成
◆10月　電車特急「やまびこ」が運転開始

好投手小田（久慈高校）を崩し切れず

◇39年秋　盛岡工業と対戦したが、大量点を奪われた。

▽1回戦

盛岡工業	2	0	0	0	2	2	1	5	12
盛岡一高	0	0	0	0	2	0	3	0	5

（八回コールド）

◇春　2回戦から登場。龍澤高を13―0で破った盛岡市立と対戦した。競り合ったが、1点に泣いた。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡市立	0	0	0	0	0	0	1	0	1
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0

（市）森―稲荷場
（一）菊池―作山

◇夏　作山―細田のバッテリーを中心に大会に臨んだ。秋・春のうっぷんを晴らすように3連勝し、8年振りにベスト8入りを果たした。代表決定戦進出を目指したが、久慈高の好投手小田を崩し切れず敗退した。

▽1回戦

盛岡一高	1	0	0	1	0	0	1	1	4
軽米高校	0	0	0	0	0	0	0	0	0

【ゲーム】二年前の夏に四強入りした軽米に対し、本校は見事な戦いぶりで勝った。初回、一死一、二塁の時、四番遠藤（洋）の適時打で先取点を挙げた。その後も、得点圏に走者を送ると、その好機を確実に点に結びつけた。四回は相手の失策に乗じ、二走の細田が本塁を陥れる。七回には三番高橋の右犠飛、八回には五番菊池の二塁打を生かし1点ずつ加えた。エース作山は被安打2の快投を見せた。

▽2回戦

盛岡一高	0	1	0	1	0	0	0	0	2
釜石工業	0	0	0	0	0	0	0	0	0

【ゲーム】本校打線は、釜石工安藤の好投の前に苦しんだ。しかし、二回、六番遠藤（直）が二塁打で出塁。続く古川も左中間に二塁打を放って先

この年の3年生部員

之喬郎
智
川田理
古福矢
大


岩手日報　昭和40年7月25日（日曜日）

岩手橋、一関二を破る

盛岡一も準々決勝へ進出

県大会3回戦、対関商工戦。4―1で下し、準々決勝へ進出。（昭和40年7月25日岩手日報）

制点を挙げた。四回には乱れ出した投手安藤から二連続の四球を得た。これを遠藤（直）がバントで送り、二回に続いて安打を放った古川の活躍で、追加点。本校作山は好投し、相手を散発2安打に押さえて逃げ切った。

▽3回戦

盛岡一高	0	0	0	3	0	0	1	0	0	4
一関商工	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1

【ゲーム】安打数は両校とも6本。勝敗を分けたのは四回だった。本校は、一死二塁とした後に五番菊池の左前打で1点目。続く遠藤（直）の右前打で一死一、二塁と攻めたてる。古川の遊ゴロが相手の失策をさそって満塁にした後、八番細田がテキサス安打。さらに、二死から小田中が死球を受け合計3点。九回の反撃を1点にとどめ快勝した。

▽準々決勝

久慈高校	0	0	3	0	1	0	1	0	0	5
盛岡一高	0	0	0	0	0	2	0	0	1	3

【ゲーム】3試合連続して完封勝ちの久慈と、上げ潮ムードの本校の対戦となった。リードを許した本校は、後半に好投手小田を打ち込んだ。3試合無失点できた小田から初の得点を挙げる気迫を見せたが、惜敗した。



昭和40年の3年生部員

白堊随想録―15

O君のこと

古川智之　昭和四十一年卒業

四十一年の卒業は主将のFと私、それにマネジャーのOのたった三名だけである。

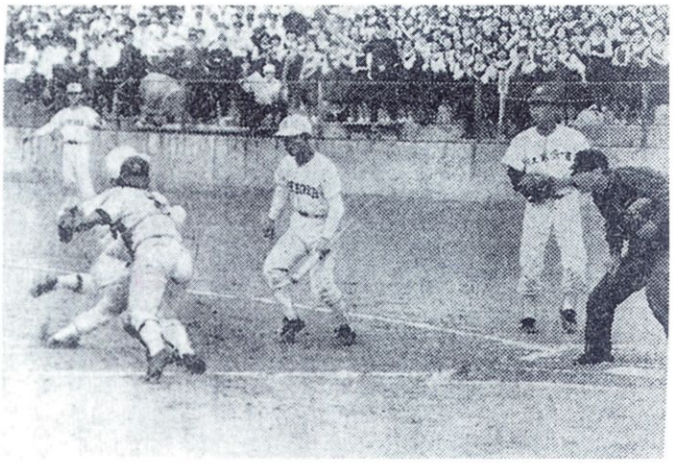
前年に監督から退部を促されて進退を相談した関先輩に「伝統を守るため」と慰留され、自分を捨てて残留した私達は、都合で練習に来られない監督に代わり黙々とノックバットを振ったものである。

辛い練習に耐えたかいあって、大会では軽米高校、釜石商業、一関商工を次々に撃破し久慈高校との準々決勝まで勝ち進んだが、そこまでが精一杯で、私達の夏は終わった。

不思議と「伝統のため」という重い気持ちは失せ、後輩達のお陰で充実した夏であった。

Oは甲子園に行きたくて軟式から移って来たが、体力面の故か自ら進んでマネジャーに専念してくれていた。

彼は卒業後も弱体だった後援会事務局のため奔走し、自分の生活も犠牲にして組織を建て直してくれた。その後の二度の甲子園出場の際も献身的に尽くしてくれた。野球部後援会が今日あるのは彼のお陰と私は思っている。Oとは、大矢理郎君のことである。



昭和41年夏、対水一戦。二回二死二塁の時、安打でホームをねらうも惜しくもアウト。

昭和41年[1966]

◆1・9　全国ラグビー大会で盛岡工業初優勝
◆9月　岩手放送、カラーテレビ放送を開始

花泉高校（春の四強）を破り8強入り

◇40年秋　2回戦で盛岡工業と対戦した。先取点を挙げたが、逆転され1点に泣いた。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡一高	0	0	0	1	0	0	0	1
盛岡工業	0	0	0	0	2	0	0	2

（一）作山―遠藤（洋）
（工）川村―細川
▼三塁打　黒滝（工）
▼二塁打　菊池（一）

◇春　2回戦で岩手高と対戦する。本校は八回に4―4の同点に追い付くも、その裏に1点を許し敗退した。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡一高	0	0	3	0	0	0	1	4
岩手高校	0	0	0	0	0	0	4	1 × 5

（一）作山、菊池、作山―遠藤（洋）
（岩）谷藤、熊谷―鈴木
▼二塁打　遠藤（洋）（一）

◇夏　1回戦では、前年夏の北奥羽大会出場校である水沢一高との一戦。相手に1点しか許さずに勝利を手にした。3回戦では春季県大会ベスト4の花泉高を下しベスト8入りした。続く山田高戦では打線が沈黙、敗退した。

▽1回戦

盛岡一高	1	0	1	0	0	0	1	0	0	3
水沢一高	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1

【ゲーム】前年の代表校に対する本校の闘志はすさまじいほどであった。作山―遠藤（洋）のバッテリーを中心に、固い守りで勝利を手にした。エース作山が力投。水一打線を散発6安打に抑えた。先制点を取ったのは本校。初回、二番小田中が二塁打を放つ。二死となったが、相手野手の一塁への暴投で、1点を挙げた。三回には二死に追い込まれながらも、四番遠藤（洋）が見事な二塁打で追加点。七回の得点で試合を決した。

この年の3年生部員

一平朗邦二豊功雄雄
洋祥史直崇　芳和
藤村遵藤木池藤橋
遠川渡遠佐菊工高関
々



昭和41年夏、対市立高戦。2点目を挙げた本校。

▽2回戦

盛岡一高	0	1	3	0	0	3	1	8
盛岡市立	0	0	0	1	0	0	0	1

（七回コールド）

【ゲーム】本校打線が火を噴いて、快勝した。先発全員安打で15本を放ち、守っては六回から二番手小笠原を登板させる余裕ぶりだった。

▽3回戦

花泉高校	0	0	0	1	0	0	0	0	1
盛岡一高	0	0	2	1	0	0	0	0×	3

【ゲーム】春の県ベスト4を相手にしたが、終始本校のペースだった。1、2回戦と同じく本校が先制し、試合の流れを呼び込む。三回の本校は、四番遠藤(洋)、五番菊池が連続安打するなどして2点を挙げた。四回裏にも一番川村の右中間安打で加点。作山、小笠原の継投も良く、被安打3の好投だった。

▽準々決勝

山田高校	1	0	0	0	0	0	0	1	2
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0

【ゲーム】東和戦で無安打無得点を記録した山田のエース根子の前に、自慢の打線が封じられ惜敗した。



昭和41年の3年生部員

白堊随想録-16

代々の学舎の思い出を享けて

遠藤洋一　昭和四十二年卒業

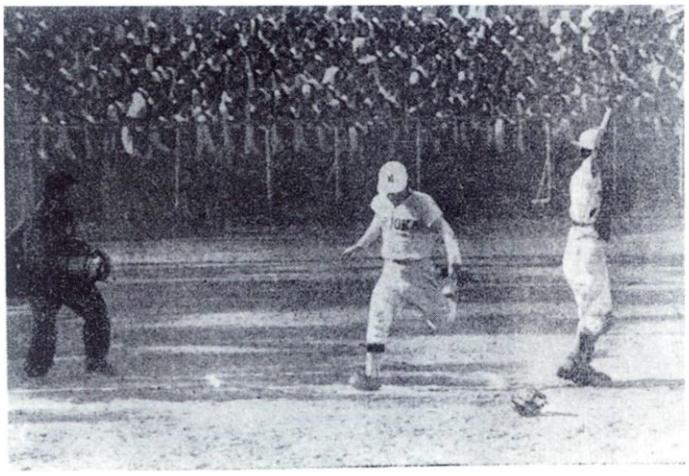
平成十年夏、二年後に迫った学校創立百二十周年に向けて新校舎の建設が開始された。

三十余年前、我々が入学した当時は、敷地西北の新校舎への移転後間もない頃で、白堊校には長年諸先輩が慣れ親しんだ南東の木造校舎と共に二つの校舎が建っていた。

生徒が新校舎に移った後の木造校舎は、白堊校から一足遅れ、同じくそれまでの木造の庁舎から現在の庁舎への建て替えが進められていた岩手県庁が間借りし、県庁舎として利用されていた。

このような校舎移転の過渡期、ある意味では雑然とした雰囲気の中、足しげくグラウンドに通い、それぞれの野球への情熱を我々に伝え、我々を鍛え、支え、そして白堊魂を育てていただいた諸先輩、諸先生方には感謝に耐えません。

二十一世紀に向け新校舎の建設が始まったこの夏、これまで十年余年間コーチとして毎日野球部を支えてきた柳原新監督が、白堊校代々の学舎の思いを享けて、新たな風を巻き起こしてくれることを祈念します。



昭和41年9月、新人戦決勝（対高田高）。初回、高橋の安打で三走細田が生還。

昭和42年[1967]

◆8・8　インターハイ送球で花巻南高が優勝
◆11・12　岩手大学ワンゲル部が岩手山で遭難

秋、初優勝果たし東北大会へ

◇41年秋　作山、小笠原の二枚看板で臨んだ本校は、地区予選3試合を失点1で突破。県大会は粘り強い試合展開で、初優勝に輝く。翌春の甲子園を目標に東北大会に臨んだが、持てる力を発揮できなかった。

▽1回戦（不戦勝）
▽2回戦　7―0　盛岡農業（七回コールド）
▽準決勝　7―0　盛岡三高（七回コールド）
▽決勝　6―1　盛岡商業

県大会は陸前高田市で開かれた。1回戦から延長十回日没再試合という熱戦になった。

▽1回戦

一関一高	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2
盛岡一高	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2
（延長十回）										

▽同再試合

一関一高	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
盛岡一高	1	0	0	3	0	0	0	0	×	4

準決勝では黒沢尻工業が相手。延長戦となったが、十二回に挙げた2点を守り切る。

▽準決勝

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
黒沢尻工	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
（延長十二回）												

【ゲーム】本校は十二回、一死後、四番小笠原の右越え三塁打で一走細田が生還。五番高橋の右犠飛で2点目を挙げ、試合を決めた。

▽決勝

盛岡一高	3	0	0	1	3	0	0	0	0	7
高田高校	0	0	1	0	2	2	0	1	0	6

【ゲーム】初回の本校は、無死一、二塁とすると、続く細田、小笠原、高橋の三連打とスクイズで3点を先取し、主導権を握る。四、五回には、失策と安打で加点し、大量リード。五回から高田の反撃にあうが、作山、小笠原のリレーで逃げ切り、初優勝。

この年の3年生部員

昭一　進博　徹次　夫範
文敬　明　政英　克
山田　橋子　中井　川
作細　松高　金小　田藤　瀬



昭和42年の3年生部員

◇**東北大会**　東北大会は、仙台市で開かれた。評定河原球場において気仙沼高と対戦。本塁打を含む13安打を浴び、残念ながら1回戦で姿を消した。

▽1回戦

盛岡一高	0	0	0	0
気仙沼高	0	6	1	10
	0	2	1×	

（六回コールド）

◇**春**　秋に続いて盛岡地区を制し、県大会ではベスト4入りしたが、一関一高に借りを返された。

▽1回戦（不戦勝）
▽2回戦　8―1　盛岡四高
▽準決勝　4―0　盛岡三高
▽決勝　3―1　盛岡工業

県大会は北上市で開催された。

▽1回戦　7―2　北上農業
▽準決勝　0―3　一関一高

◇**夏**　八強入りをかけた相手は花巻商業。終盤に猛反撃をかけたが及ばなかった。

▽1回戦　10―0　沼宮内高（六回コールド）
▽2回戦　5―0　岩谷堂高
▽3回戦

盛岡一高	0	0	2	6
花巻商業	0	0	0	8
	0	0	3	

【ゲーム】2―8とリードされた八回、山本の適時打などで4点を返した。なお二死満塁の好機に追加点を挙げられなかった。

白堊随想録―17

東北農試グラウンド

作山文昭　昭和四十三年卒業

我々が昭和四十年の春に憧れの盛岡一高に入学した時は、正門を通って程なく「白堊の城」と呼ぶにふさわしい木造の校舎が在り、RC造りの現校舎との二つの校舎に挟まれた、今思えば手狭に感じられる校庭で他のクラブの選手達と交錯しつつ練習したものだった。先輩方もよく激励に来てくださり活気ある練習であったと記憶している。

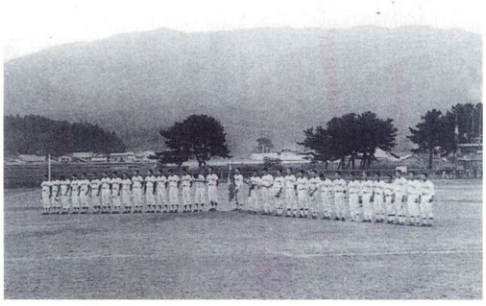
やがて、旧校舎解体、校庭整備の計画が持ち上がり、我々が三年生の春過ぎに着工され、校庭は使用不能となった。

夏の大会に向け心身を充実、錬磨するべき大切な時期だっただけに、部員皆の動揺は隠せなかった。しかし、細田主将の力強いリーダーシップのもと、部長先生や後援会関係者が奔走し確保してくれたグラウンドで心機一転、夏の大会目指して練習に取り組んだ。その思い出深い場所が、厨川の東北農業試験場のグラウンドである。

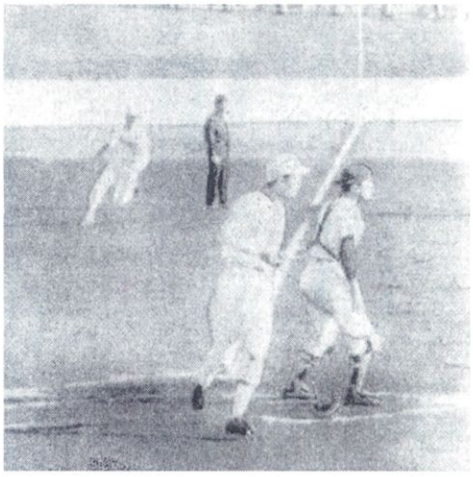
そこは、学校からの移動やグラウンドならしに多くの時間を要するなど、条件的には決して良好とは言い難い場所であったが、夏の大会までの数週間、関監督はじめ熱心なOBの指導をいただき、次第に気概が高揚し、チームワークもより強固になっていったように思い起こされる。

我々の戦績等については細田君の寄稿文に詳しいが、輝かしい伝統の一高野球で培われた我々の情熱の原点は、この東北農試グラウンドに帰結するのではないかと思われてならない。

当時あのグラウンドで汗した仲間は、年次の違いを越え、今もって旧交を温め球友としての絆を強く持ち続けている。



昭和41年、秋季大会で高田高校を下し優勝（高田松原球場）。



昭和42年秋、対前沢高戦。五回、駒木の適時打で先取点を挙げる



昭和43年夏、18年振りの甲子園出場が決まった。ホームベースにかけ寄り、喜び合うナイン。

昭和43年[1968]

◆5・16　十勝沖地震、盛岡は震度5の強震
◆10・17　川端康成にノーベル文学賞

夏の甲子園でベスト8進出！

◇**42年秋**　地区予選で4勝して優勝。
▽1回戦　12―2　盛岡三高
▽2回戦　5―4　盛岡四高
▽準決勝　6―0　盛岡商業
▽決勝　3―0　岩手高校

県大会の会場は、釜石市と大槌町。本校はエース小笠原の好投とたたみかける攻撃で決勝進出。乱打戦となり、サヨナラ負けを喫し、前年に続く優勝は成らず。

▽1回戦　4―0　前沢高校
▽準決勝　5―2　岩泉高校
▽決勝

盛岡一高	2	0	0	3	0	0	1	0	6
花巻商業	0	0	1	0	5	0	0	1×	7

【ゲーム】試合は本校が押しぎみに進めた。安打は、花巻商を上回る11安打を放った。初回は3安打で2点、四回にも5安打を集め計5点としてリードしたが、粘りをみせる花巻商に追いつかれ、逆転サヨナラ負けを喫し、優勝を逃した。

◇**春**　再び県大会出場が期待されたが、盛岡三高に阻まれた。
▽1回戦（不戦勝）
▽2回戦

盛岡三高	0	0	0	2	0	0	0	0	4
盛岡一高	0	0	3	0	1	0	0	1	5

（三）和島、村田―杉山
（一）小笠原―高橋

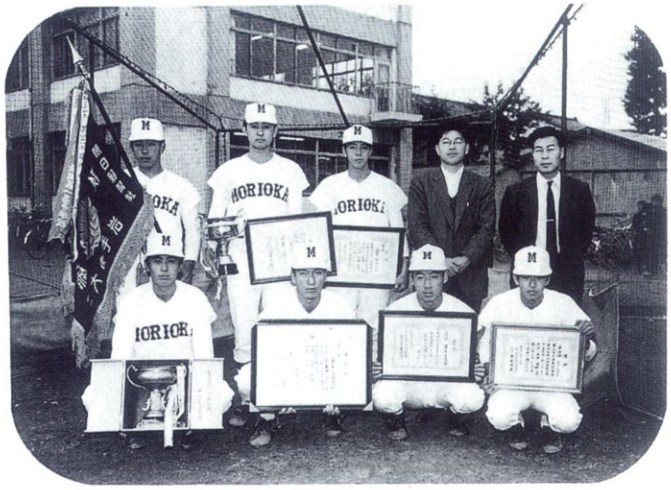
◇**夏**　記念大会のため、一県一代表が甲子園に出場できる年だった。本校は、2回戦で好投手瀬戸（後に盛鉄局野球部）を擁する大槌から1点を奪い勝利を収めた。快勝を続け、18年振り8度目の甲子園出場を成し遂げた。
▽1回戦　8―1　高田高校（七回コールド）
▽2回戦

盛岡一高	0	0	1	0	0	0	0	0	1
大槌高校	0	0	0	0	0	0	0	0	0

【ゲーム】実力校同士の一戦は、本校小笠原、大槌瀬戸の投げ合いとなった。本校は三回、一死

この年の3年生部員

二文寿司武男仁雄
敬敬　敬典秀　孝
笠原沢橋　木本本
小赤高森佐坂山関　々



昭和43年の3年生部員

二、三塁と攻めたてた後、ウエストされた球に赤沢が見事なスクイズを決めた。価千金の1点をもらったエース小笠原は八回まで被安打0の快投。守備陣も無失策で逃げきった。

▽3回戦　7―0　専大北上（七回コールド）
▽準々決勝　5―1　水沢一高
▽準決勝　8―1　広田水産（八回コールド）
▽決勝

盛岡一高	3	1	3	0	0	0	1	2	0	10
水沢高校	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2

【ゲーム】本校は初回から積極的な攻撃をみせた。先頭駒木の二塁打、四番小笠原の二塁打などに失策をからめ3点。三回には、二番手投手から5安打、2四球で3点を挙げた。投げては三浦、小笠原の好投で優勝を決めた。

◇第50回全国高校野球選手権大会

▽1回戦　（不戦勝）
▽2回戦　4―2鴨島商業（徳島）
▽3回戦　9―2津久見高（大分）
▽準々決勝　4―10興南高校（沖縄）

※詳しくは、甲子園特集ページへ。

◇国体　甲子園でベスト8入りした本校は、国体秋季大会に初めて出場した。開催地は福井市。甲子園で16強入りした松山商業（愛媛）との対戦は、初回の1点に泣いた。

▽1回戦（不戦勝）
▽準々決勝

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0
松山商業	1	0	0	0	0	0	0×

1　0

白堊随想録―18

脳裡に残る沖縄興南戦

森　敬司　昭和四十四年卒業

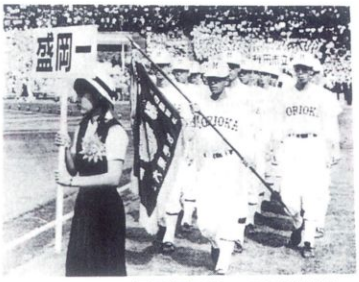
昭和四十三年盛岡一高の右翼手として甲子園に出場できた。部員全員が一丸となり一生懸命に自己の力を発揮したおかげであり、日頃の努力が報われたものだ。岩手県大会では四十一年ベスト8、四十二年ベスト16と勝ち残ることができ、なんとか甲子園に行けるチームづくりをということで、四十二年夏に敗れた次の日から黙々と投げ、打ち、走った。単純な積み重ねだった。当時は暗くなってからも練習を重ね、基本的な動作について十分に吟味し、自信をつけることができたと思う。

四十三年の県予選では順調に勝ち進んでいったが、対大槌高戦は今思ってみても勝ち負けが表裏一体で我ながらハラハラしたものだ。（負ける気はしなかったとの声もあったが）結果的に1―0で勝ったもののしばらくボーッとしてしまった。この試合に限り勝敗を意識したせいかもしれない。

野球でボーッとしたことがもう一度ある。甲子園で沖縄興南に敗れた時だが、その時はどちらかというと、終わってしまったという安堵感があった。甲子園に行ってからは、同じ高校生なのだから無欲で、自分の力を出して戦うよう監督や先輩から言われ、全員が野球のことばかり考えていたので、チームの雰囲気は最高だった。分別ある大人だったのかもしれないし、野球を楽しむ子供だったのかもしれない。最も暑い午後二時頃にかけて練習し、帰ってきてジュース一本飲み、あとは水物厳禁。そんな毎日でもみんなケロッとして過したようだ。

当時のことは、今も忘れない。

（昭和五十一年七月朝日新聞盛岡支局発行選手権岩手大会パンフレットより）


甲子園で堂々の入場行進。



春の県大会決勝で福岡高と対戦するが、惜しくも優勝逃がす。捕手は佐藤誠剛。

昭和44年[1969]

◆6・12　日本初の原子力船「むつ」進水
◆7・29　豪雨のため太田橋が落ち不通となる

秋、春ともに県大会準優勝

◇43年秋　甲子園帰りで新チームとしての練習が十分でなかったが、甲子園のマウンドを踏んだ三浦をエースに据え、好機に確実に得点する試合運びで、盛岡地区で優勝した。

▽1回戦　3―0　盛岡農業
▽2回戦　4―3　岩手高校
▽準決勝　11―0　岩手橋高（六回コールド）
▽決勝　5―3　盛岡四高

県大会は一戸町が会場となった。1回戦は苦戦したがサヨナラ勝ち。決勝では花巻北高に敗れたが準優勝となった。

▽1回戦

福岡高校	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
盛岡一高	1	0	1	0	0	0	0	0	0	3

（延長十二回）

【ゲーム】共に2点ずつ挙げた後は、本校三浦と福岡佐藤の投手戦。十二回裏、先頭駒木が左中間に大会第1号のサヨナラ本塁打を放ち、熱戦に終止符を打った。

▽準決勝

盛岡一高	0	0	2	0	0	0	1	1	1	5
広田水産	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1

▽決勝

盛岡一高	1	0	2	0	0	0	0	0	0	3
花巻北高	0	0	2	0	0	1	0	8	×	11

【ゲーム】本校は初回に先取点を挙げると、三回、一番駒木の好打、好走と三番川村の二塁打などで計3点をリード。が、八回裏の花巻北に、満塁本塁打などで8点を奪われ試合をひっくり返された。本校の東北大会出場は成らず。

◇春　秋に続いて、地区代表となって県大会に進んだ。

▽1回戦（不戦勝）
▽2回戦　1―0　盛岡工業
▽準決勝　6―3　盛岡商業
▽決勝　13―0　盛岡四高

【ゲーム】鈴木の本塁打を含む長打5本などで

この年の3年生部員

宗　二　平　進　博　剛　彦　二
浦　枝　村　木　木　藤　木　田　修　協　和　誠　忠　啓
三　今　川　駒　佐々木　佐　鈴　福

効果的に加点。投げてはエース三浦が完封。

県大会の会場は宮古市であった。宮古高、黒沢尻北高に快勝。決勝では秋季大会で破った福岡高と顔を合わせたが、1点に泣いた。

▽1回戦

盛岡一高	3	0	0	0	0	1	1	0	6
宮古高校	0	0	0	0	3	0	0	0	3

▽準決勝

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	2	1	3
黒沢尻北	0	0	0	0	0	0	0	0	0

▽決勝

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福岡高校	1	0	0	0	0	0	0	0×	1

【ゲーム】秋季大会と同様の熱戦を展開。初回に挙げられた1点を本校が追う形となる。三、六回に安打で走者を出すも後続なし。七回の一死満塁を投ゴロ併殺で無得点に終わったのが痛かった。

◇夏　好敵手盛岡商業のすさまじい闘志の前に、甲子園連続出場はついえた。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

沼宮内高	0	0	0	1	0	0	0	0	1
盛岡一高	1	0	1	0	0	5	0	1×	8

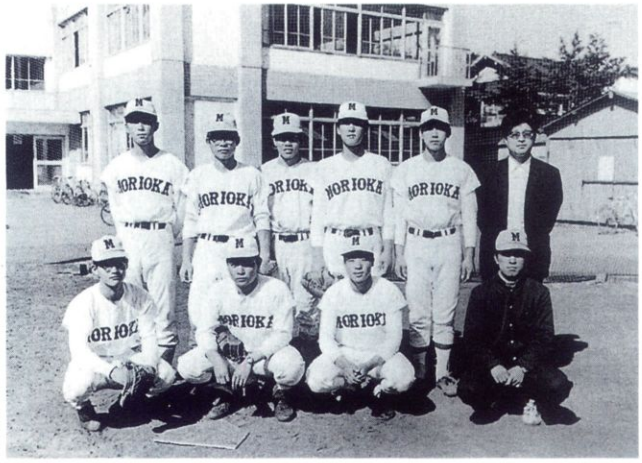
（八回コールド）

▽3回戦

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡商業	5	0	2	0	0	0	×		1

（七回コールド）

【ゲーム】本校は盛商に守備の乱れをつかれ、実力を出し切れぬまま姿を消した。



昭和44年の3年生部員

白堊随想録―19

「王者の道」

佐藤誠剛　昭和四十五年卒業

高校野球の醍醐味（速さ、強さ、勝負に立ち向かう純粋な迫力）に直接肌で接するのが初めてなだけ、一年生の夏の思い出が、翌年の甲子園出場より強く残っている。

昭和四十二年。校庭は工事で使えず、東北農試の畑を踏みならしてグラウンドを作り、関監督の指導のもと、夏に備えた。合宿のうちに、暑い夏の大会が始まった。

三回戦の相手は優勝候補筆頭の花巻商業。細田主将他三年生八名、次年度甲子園出場を果たす二年生七名、一年生三名の一高はダークホース。相手の破壊的強力打線チームと一歩も引かない戦いを演じ6―8で、九回裏の一高の攻撃、二死満塁。打者はこの日十割の一番打者。低めの投球を真芯でとらえて、中堅前に痛打。中堅手が鋭いダッシュから最高の美技で好捕。万事休し、最高のサヨナラ試合を逸した。

試合後、関監督は選手たちを集め、棒で「王者」と地面に大書した。曰く「皆は今日、最高のプレーを尽くした。そして、1点差で負けた。しかし、一高で野球をやった者は、その気概をもって、これまでも、そしてこれからもあくまで王者の道を歩むのだ。一高の野球は、試合に負けてもなお、王者の野球（を尽くす所にその意義があるの）だ。一高で野球をする感動を覚えた一瞬であった。

一高の野球を思うに、常に「甲子園」を口にし、それを目指して、可能な最大限の努力を重ねてきているが、そこにはあくまでも「王者の道」を歩もうとする一高生（とそれを支え応援して下さる方々）が、変わらずにいることに気が付く。一高がいつ甲子園に行っても、当然だと思われる姿勢。即ち「王者の道」を、一層の工夫を加えて追求し、極め続けることを願っている。


昭和45年夏、対福岡高戦。


昭和45年春の東北大会。対磐城高戦。四回、一走の高橋良が盗塁成功。

昭和45年[1970]

◆3・14　日本万国博覧会の開会式
◆10・10　盛岡で第25回秋季国体の開会式

春、東北大会で磐城に惜敗

◇44年秋　地区予選では決勝に進出。対戦相手は、盛岡工業、盛岡商業を破った龍澤高であった。本校はこれを1点差で下し、県大会に進んだ。県大会では四強入りを果たす。

▽1回戦（不戦勝）
▽2回戦　2―0　盛岡市立
▽準決勝　2―0　盛岡三高
▽決勝

盛岡一高	1	0	1	0	0	0	0	0	2
龍澤高校	0	1	0	0	0	0	0	0	1

県大会は花巻市で開かれた。

▽1回戦

盛岡一高	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
千厩高校	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1

（延長十六回）

【ゲーム】本校は六回、二死から挙げた1点を、嘉倉の力投で逃げ切れず、九回に追い付かれた。延長に入り十六回の本校は、安打で出た福島が二盗を成功させ、得点機をつくり、松橋の二塁打で勝ち越し。さらに海野の安打で2点目を挙げた。投げては十二回途中から登板した高橋（良）が要所を押さえ接戦を制した。

▽準決勝

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
花巻商業	0	0	2	1	0	0	0	0	×		3

【ゲーム】リードされて迎えた八回の本校は二死満塁と攻めたて、岩泉が三遊間を破って2点を挙げた。九回にも好機を得たが、松橋の強烈な当たりが相手の美技に阻まれ惜敗した。

◇春　秋に続いて地区大会を制した。東北大会が本県での開催だったので、県大会を経ずに出場権を得た。

▽1回戦　9―8　岩手高校
▽2回戦　11―1　盛岡市立（五回コールド）
▽準決勝　14―7　盛岡工業（八回コールド）
▽決勝　6―2　盛岡商業

この年の3年生部員

統　公　沼　東　泉　野　村　橋
浅　伊　岩　海　川　高
隆　宏　雄　一　一
道　伸　良



昭和45年夏、対黒北戦。相手走者の盗塁で、タッチする大谷二塁手。カバーに入る松橋。



昭和45年夏、対関二戦。六回、岩泉がスクイズを成功させ3点目。

◇**東北大会**　東北大会は、秋季国体のリハーサルも兼ね、新造された岩手県営野球場で開催された。

▽1回戦

盛岡一高	2	0	0	3	0	0	0	0	5
磐城高校	2	3	1	0	0	1	0	0	7

【ゲーム】2―6のリードを許した本校は四回、粘りをみせ3点を挙げた。二死一塁から、高橋（良）が果敢に二盗。松橋の安打でまず1点。3連続四球を得たところで浅沼の安打が出て計3点。しかし猛追もここまで。惜しい試合を落とした。

◇**夏**　秋・春の大会で実戦力に磨きのかかった本校は、ベスト8入り。しかし四強入りをかけた福岡戦は、再三の好機を生かし切れなかった。

▽1回戦

福岡工業	0	2	0	0	0	0	0	0	2
盛岡一高	2	0	0	1	1	0	0	0	4

▽2回戦

盛岡一高	0	0	4	0	0	0	0	0	4
黒沢尻北	0	0	1	0	2	0	0	0	3

▽3回戦

盛岡一高	1	0	0	0	1	4	0	0	6
一関二高	0	0	0	0	1	0	0	0	1

【ゲーム】六回の本校は、一死満塁、岩泉のスクイズで1点を挙げると続けて加点。完全に流れを呼び込んで快勝した。

▽準々決勝

福岡高校	0	0	2	1	0	0	0	0	3
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0

白堊随想録―20

必死だった―だから楽しかった

岩泉　宏　昭和四十六年卒業

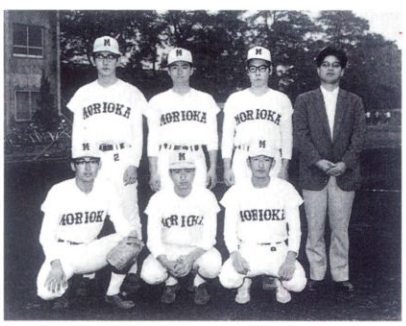
初めての公式試合―バットが全部折れて放棄試合になるのでは…、そんな心配をしなくてはいけない―それが四十六卒のチームのスタートだった。

実際折れて補修の目立たぬ竹バット四・五本をベンチに忍ばせて挑んだ新人戦では、シートノックの時から明らかに相手チームの方が上手だった。しかも頼みのエースはギックリ腰で肘より上に腕が上がらず、無理はきかぬのだから、守るほうは必死だった。レフトの定位置のフライをセンターが取りに行ったり、ショートゴロのカバーに四人も入ったりして、まるでコミック漫画に出てくるようなチームの有様だった。

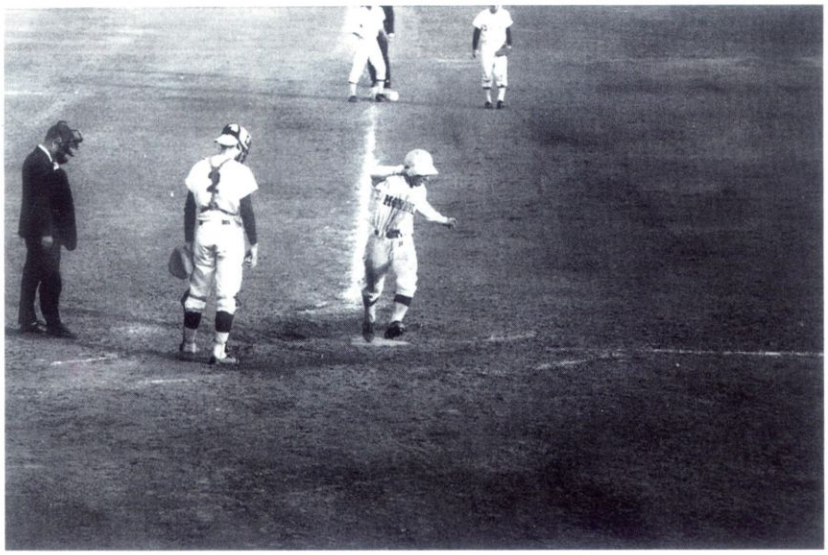
甲子園出場の余波とはいえ新チーム結成までにまともな練習をしてこなかったことを恨みたかったが…。むしろ自分達が下手だと自覚出来たことの方が地区大会優勝という好結果をもたらしてくれた。

何一つとして出来ないまま試合にのぞんだ自分達がその試合中にたった一つだけ出来たもの―それは、たった一つのボールを他人に任かせることなく、全員が必死で追いかけたということだった。丁度、初めて野球を覚えた子供がボールがどこへ飛ぼうと追いかけたように。

秋・春・東北・夏と、どの大会も苦しかったが、秋の新人戦の野球だけは、何故か子供の頃はしゃぎながら野球を楽しんだ感覚を今でも甦らせてくれる。



昭和45年の3年生部員


昭和46年春、対盛岡三高戦。

昭和46年[1971]

◆2・5　アポロ14号が初の月面着陸成功
◆7・30　雫石町で全日空機と自衛隊機が衝突

夏、花巻北（甲子園出場校）と接戦も涙

◇45年秋　本校は2回戦から登場。盛岡農業を5―3（延長十回）で下してきた盛岡商業と対戦したが惜敗し地区予選で姿を消した。

▽1回戦（不戦勝）
▽2回戦　0―1　盛岡商業

◇春　2回戦で盛岡三高と対戦した。秋季大会の盛岡地区優勝校であった盛岡三高に延長の末敗退。なお、盛岡三高は県大会に進み、準優勝した。

▽1回戦（不戦勝）
▽2回戦　4―9　盛岡三高（延長十二回）

◇夏　地区予選で完封勝ちを収め、県大会出場を決めた。

▽地区予選

盛岡農業	0	0	0	0	0				0
盛岡一高	9	3	0	0	×				12

（五回コールド）

県大会では2回戦から登場。水沢農業を相手に本校は果敢な〝足攻〟と、エース嘉倉の好投でコールド勝ちした。続く3回戦は花巻北高との一戦。九回土壇場で追いついたが、延長十回サヨナラ負けし、惜しまれる一戦となった。

▽1回戦（不戦勝）
▽2回戦

水沢農業	0	0	0	0	0	0	0		0
盛岡一高	1	2	2	3	0	1	×		9

（七回コールド）

【ゲーム】本校嘉倉は速球を生かし、水農打線を1安打に抑えこむ好投だった。攻めては13盗塁という〝足攻〟をしかけ、水農投手陣を揺さぶり、着々と点を加えた。二回には3四死球を足が

この年の3年生部員

（農）藤原、主浜―斎藤
（一）嘉倉―荒川
▼三塁打　石川（一）
▼二塁打　松橋、福島（一）

行　宏
美　知
美　誠
等　正
三　正
治　龍
義　公
恒
荒　川
大　谷
小　笠原
嘉　倉
高　橋
高　橋（福島）
松　橋
中　島（渡辺）



昭和46年夏、対水沢農戦。足攻で加点。

かりに、三つの重盗を成功させ2点を追加した。一イニングの重盗3は、岩手県高校野球界でも珍しい記録となった。

▽3回戦

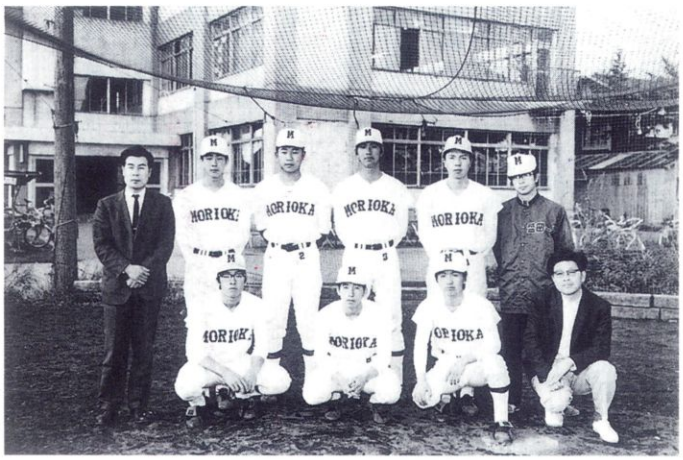
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	1
花巻北高	0	1	0	0	0	0	0	0	0

（延長十回）

0	1
1×	2

【ゲーム】本校嘉倉、花北菊池の好投で、緊迫した一戦となった。本校は三回まで併殺3を喫し、菊池の出鼻をくじくことができなかった。その後八回までに一打同点機を四度作るが、もう一本が出なかった。粘りが通じた九回、五番嘉倉、七番石川の長短打で二死二、三塁と食い下がる。相手内野陣の牽制ミスに乗じ同点とし、試合の流れを変えたかに見えた。花北はしかし延長十回、五番三井の一打が中前に抜けて三走高橋が生還。本校にとって甲子園への道を断たれた重い1点となった。

（花北はこの後、選抜甲子園で活躍した専大北上を下し、その勢いで北奥羽大会も制し3度目の甲子園を達成した）



昭和46年の3年生部員

白堊随想録—21

打倒一高

高橋龍三　昭和四十七年卒業

昭和四十四年度夏、盛鉄球場は雲ひとつない快晴であった。

当時のナインは甲子園トリオを配し、県内に敵なし。敵は豪腕太田幸司のいる三沢高校であると評された。しかし、なぜか重苦しい雰囲気で球場に向かった。相手は、宿敵盛商だ。緊張感でグラウンドに入ると実に圧倒された。相手のナインも応援団も鉢巻をしているのだ。

『打倒一高』『打倒一高』と書いた鉢巻に囲まれた。フェンスの無い球場はそのまま圧迫感となって私たちを取り囲んだ。松橋君の右腕事件で歯車が狂ったのか、チームは盛商軍団の『打倒一高』の前になすすべもなく惨敗した。

二度、セーフティバント失敗で何もできなかった私は、涙が止まらなかった。しかし、今、考えてみると相手の盛商のすざましい気迫、集中力に敬意を表すべきでしょう。

我が一高ナインも、この『打倒』の精神が必要なのかもしれません。



昭和46年秋、東北大会で山形南高と対戦。打者は阿部洋三。

昭和47年[1972]

◆2・19　連合赤軍、軽井沢でろう城事件発生
◆10・28　上野公園へ中国からパンダ贈られる

秋、東北大会に出場す

◇**46年秋**　本校は地区予選で優勝。東北大会の会場が本県であったため、県大会を経ず、開催地代表校として東北大会出場権を手にした。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡農業	0	0	0	0	0	0	1	3	0	4
盛岡一高	2	1	0	0	0	2	1	1	×	7

（農）吉田、主浜―斎藤
（一）女鹿、谷地（孝）―泉舘
▼二塁打　小関（一）

▽準決勝

盛岡商業	0	0	0	1	0	0	1	0	0	2
盛岡一高	1	0	0	2	0	0	1	0	×	4

（商）細川―照井
（一）女鹿―泉舘

▽決勝

盛岡三高	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2
盛岡一高	5	0	0	2	2	1	0	0	×	10

（三）松尾、吉田、高屋敷―細川、斎藤
（一）女鹿、谷地（孝）―泉舘
▼二塁打　赤沢、小山田（一）

◇**東北大会**　東北大会は盛岡市で開かれた。本校は山形南高と対戦したが、持てる力を出しきれず敗退。

▽1回戦

山形南高	2	0	0	0	0	0	0	0	6	8
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

【ゲーム】本校は初回に2点を失ったが、その後に立ち直った女鹿、六回からリリーフした谷地（孝）が相手打線を抑え続けた。しかし、打線は山形南田中の前に泉舘、谷地（克）、山崎の3安打に抑えられ、反撃の糸口をつかめず最後は逆に集中打を浴びた。

◇**春**　秋季大会同様に決勝へ進んだ本校であったが、龍澤高に1点差で逃げ切られた。

▽1回戦　5―2　盛岡三高
▽2回戦　8―1　岩手橘高（八回コールド）
▽準決勝　3×―2　盛岡農業（九回サヨナラ）

この年の3年生部員

三男平克健基信則
洋賀太仙英政
阿部沢川地池野澤川
深石谷菊上和横中

▽決勝

龍澤高校	2	0	0	0	0	0	0	1	0	3
盛岡一高	1	0	0	0	0	0	1	0	0	2

【ゲーム】龍澤エース山口を本校打線がどうとらえるかが勝敗のカギであった。小山田、小関が二塁打するなど一度は追いついたが、惜しくも八回の1点に泣いた。

◇夏　春に対戦した龍澤高が、地区予選の相手だった。気力あふれる本校は、小刻みに加点。反撃を八回の1回に抑えて快勝した。

▽地区予選

龍澤高校	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
盛岡一高	0	0	1	0	0	2	0	1	×	4

【ゲーム】本校は三年生が谷地、石川、阿部の三名だけという若いチームだったが、春の敗戦を糧にし、夏への調整がうまくいって勝利をものにした。

県大会は、2回戦で、岩泉高と対戦した。後半に1点差につめ寄るも、試合をひっくり返せなかった。

▽1回戦（不戦勝）

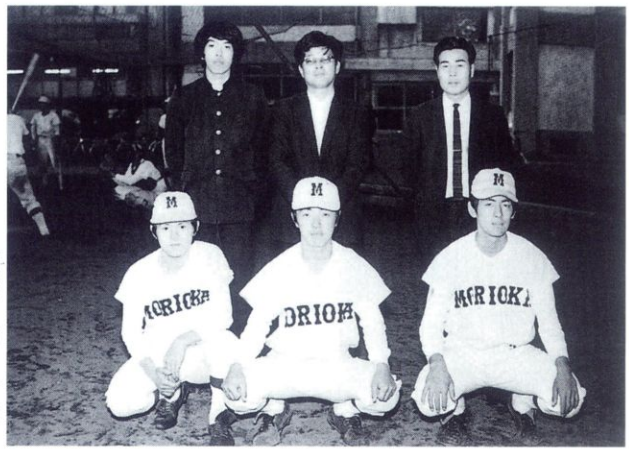
▽2回戦

岩泉高校	2	0	0	0	0	0	1	0	0	3
盛岡一高	0	0	0	1	0	0	0	1	0	2

【ゲーム】四回、谷地（克）の三塁打などで1点を挙げ1―2と迫ったが、その後、1点ずつを取り合い、逆転には至らなかった。



（遊）小山田、（二）阿部、（一）石川



昭和47年の3年生部員

白堊随想録―22

夏の記憶

谷地　克　昭和四十八年卒業

昭和四十五年の夏の練習。私は当時大学生であった三浦、駒木両先輩の猛ノックでもまれた。松橋主将や他の部員が最後のクールダウンへ向かうランニングが始まるのが合図であった。その理由は後日私も酒を飲める年齢になって判明した。「生意気だったお前をたたき直したいのが本心だった」と、だが当時もそれを知らされた日も私の胸にあったのは、炎天下連日鍛え上げて下さった両先輩への感謝の一念だけであった。あの夏の体験と記憶は、今でも私の胸の奥深いところで静かに息づいている。夏だけは他校に負けない鍛練を重ねる盛岡一高硬式野球部員であった証しと誇りとして―。

翌昭和四十六年の夏、新チームの主将となった私は、十一名の仲間と炎天のグラウンドにいた。試合へ臨むならまだしも、一体、十二名がどうグラウンドに散って練習に取り組んでいたものだったか定かではない。ただし、結果として秋の新人戦盛岡地区予選で優勝した。救援投手として弟もいた。一球一魂を信じた記憶が甦える。



昭和47年秋。地区大会で優勝し、応援団席へ向かう選手。

昭和48年[1973]

◆7・20　日航機がゲリラにハイジャックされる
◆10・6　第四次中東戦争ぼっ発

春、県大会ベスト4入り

◇**47年秋**　決勝では後半に盛岡農業の反撃にあったが、逃げ切った。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡四高	0	0	1	0	0	0	1
盛岡一高	1	0	1	0	0	0	3
						1	0×

▽準決勝

盛岡工業	1	0	0	0	0	0	1
盛岡一高	1	8	0	1	0	0	10
						×	

（七回コールド）

▽決勝

盛岡農業	0	0	0	0	0	1	2
盛岡一高	1	0	1	0	0	1×	4

県大会の会場は、宮古市であった。本校は一戸高に見事な逆転勝ちし、ベスト4入り。続く一戦では専北の好投手畠山に終盤猛攻をかけたが、もう一歩及ばなかった。

▽1回戦

盛岡一高	0	0	0	0	0	1	0	3	4
一戸高校	0	0	0	0	1	0	1	0	2

【ゲーム】八回の本校は一死後、八番赤沢が相手の失策を誘って反撃の足がかりとした。二死一、二塁とし、打者女鹿の時に赤沢、小山田が重盗。これに応えて女鹿の三塁打で二者を還し3―2と逆転した。更に1点を加えダメを押した。

▽準決勝

専大北上	0	0	1	0	2	0	3	0	6
盛岡一高	0	0	0	1	0	0	0	1	2

【ゲーム】九回裏、相手投手畠山に襲いかかった。安打で出塁の平原を、千葉が三塁打で還した。更に1点を挙げ2点差。相手を一本上回る9安打を放ったが、畠山を崩し切れず惜しまれる一戦に終わった。

◇**春**　この年から、盛岡地区代表2校が県大会へ出場することになった。本校は盛岡商業と対戦

この年の3年生部員

吾信康之行勝孝弘
信光文浩弘俊　泰
沢舘関田橋鹿地崎
赤泉小小山高女谷山


昭和48年の3年生部員

したが、初戦で敗れ去った。

▽1回戦

盛岡商業	0	1	4	0	0	4	0		9
盛岡一高	1	0	1	0	0	0	0		2

（七回コールド）

◇夏　記念大会のため、地区予選は行われなかった。本校は遠野高、続く沼宮内高を共にコールドゲームで下した。3回戦の対高田高戦は、打線のつながりが無く、無得点に終わった。

▽1回戦

遠野高校	0	0	0	0	0	0	0		0
盛岡一高	1	3	2	0	0	1	×		7

（七回コールド）

【ゲーム】千葉が被安打1の好投で完封。

▽2回戦

沼宮内高	0	0	0	1	1	1	0		3
盛岡一高	4	0	0	1	0	1	4×		10

（七回コールド）

【ゲーム】先発全員15安打の猛攻で大勝。

▽3回戦

高田高校	0	0	2	0	0	2	2	0	6
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0

【ゲーム】秋・春の県大会を制した高田と2試合コールド勝ちの本校。相手投手熊谷の両サイド低めぎりぎりの球にバットが合わず、散発4安打に終わった。



昭和48年夏の開会式。

白堊随想録－23

春の苦杯

小山田浩之　昭和四十九年卒業

我々、昭和四十九年卒業の野球部員は八名。最後まで頑張り抜いた部員に限らず、当初三十名ぐらい在籍した部員は、四十三年の甲子園でベスト8と大活躍した盛一野球に憧れて入部した者です。私も、グラウンドで甲子園組の先輩がコーチに来られると、胸がドキドキした、そんな想い出が今でも忘れられません。

成績としては秋季大会県ベスト4が最良の思い出であり、逆に春季大会地区予選で盛商に大敗した試合が、夏季大会三回戦敗退以上につらい想い出として、私には残っています。ここ二～三年、後輩の試合でも同様のケースがあり、選手達の焦燥を察すると、もっと春季大会を重要視した取組が必要ではと思います。

最後に、三年間盛一硬式野球部で活動出来た自負と、社会人になっても気軽にお付き合い出来る多くの先輩・後輩方は私の人生に間違いなく大きなプラスとなり、支えとなっています。どうか盛一球児の皆さん、甲子園に挑戦出来るのは今しかありません。最後まで諦めず、頑張ってください。



昭和49年春、対関商工戦。七回、代打松岡の安打で1点を返す。


昭和49年夏、対花泉高戦。二回、安打で二走松岡が一挙ホームをねらうもタッチアウトとなる。

昭和49年[1974]

◆3・22　盛岡商業高校の体育館が全焼
◆11・26　金脈問題で田中角栄首相が退陣表明

春、東北大会で磐城に善戦

◇48年秋　本校は1、2回戦を大勝し、準決勝（代表決定戦を兼ねる）に進んだが、惜敗。

▽1回戦　14―0　岩手高校（六回コールド）
▽2回戦　8―1　雫石高校
▽準決勝

盛岡一高	0	0	1	0	0	0	1	0	2
盛岡商業	1	0	0	0	0	1	1	0×	3

【ゲーム】本校は千葉が三塁打、小岩と紺野が二塁打を放ったが、代表校の座を占められなかった。しかし、秋季大会を通して、千葉、平原の継投ラインが出来あがってくるという収穫を得た。

◇春　本校は、秋から春にかけてのオフシーズンの練習が功を奏し、県大会に出場。更に東北大会出場権を手にし、磐城高と対戦。先制機を逸したのが響き勝利を逃したが、大健闘。

▽1回戦　11―1　平舘高校（五回コールド）
▽2回戦　1―0　盛岡三高
▽準決勝　3―1　龍澤高校
▽決　勝　2―3　盛岡商業

東北大会が盛岡市で開かれるため、盛岡商業は直接の出場権を得た。これに伴って本校は地区第1代表となり、地区3位の龍澤高と共に県大会に進んだ。本校は4試合のうち3試合が接戦となったが、勝利への執念と勝負強さを存分に発揮した。

▽1回戦

一関商工	0	0	0	1	0	1	0	0	0	
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	2	0	0	
	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3
	0	1	0	0	0	0	0	0	1×	4

（延長十八回）

【ゲーム】本校千葉、関商工志田（夏の甲子園投手）との投げ合い。十八回の本校は、送りバントを決め二死二、三塁の好機を作り、三番平原にすべてを託した。平原は期待に応え右前にはじき返して、三走小岩が勇躍ホームを踏む。

▽2回戦　4×―3　住田高校（九回サヨナラ）
▽準決勝　6―2　岩泉高校
▽決　勝　0―1×　黒沢尻北（延長十回）

この年の3年生部員

池　彦一郎
遠　孝収敏
小　阪藤岩野藤葉原川岡田
紺　衆新郎彦恒行裕
佐　愛一光義義
千
平
細
松
山



昭和49年の3年生部員

【ゲーム】試合はむしろ本校が押していた。黒北エース高橋を相手に、得点圏に走者を送ること七回。が、決定打が出ず、惜しまれた一戦。

◇**東北大会**

▽1回戦

磐城高校	0	0	0	1	0	1	0	0	2
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0

◇**夏**　地区予選で盛岡農業を下して県大会に駒を進めた。花巻北高をコールドで下し、快調な滑り出しを見せたものの、続く花泉高戦で苦戦。延長十回、力尽きた。

▽地区予選

盛岡農業	0	0	0	1	0	0	0	0	1
盛岡一高	1	0	3	0	0	0	0	0	0 ×

2
4

▽県大会

▽1回戦

花巻北高	0	0	1	3	2				6
盛岡一高	12	0	4	2	×				18

（五回コールド）

▽2回戦

盛岡一高	1	0	1	0	0	0	0	0	2
花泉高校	0	1	0	1	0	0	0	0	0

（延長十回）

【ゲーム】本校千葉と花泉佐々木の投げ合い。惜しむべきは、二、五、九回の三度、本塁憤死を喫し追加点を奪えなかったことである。優勝候補の一角と評価された本校だったが、甲子園出場は成らなかった。

白堊随想録—24

延長十八回

平原光彦　昭和五十年卒業

昭和四十九年（一九七四年）五月二十五日、春の県大会一回戦において、我々は一関商工と対戦した。場所は水沢市営球場。ツツジの花がやけにきれいだった。試合開始は八時。ホームベースをはさんで整列した時「なんてでかい奴等だろう」と驚いたことを覚えている。

先攻は一関商工。先頭バッターが打席に入った瞬間、いやな予感がした。その直後、鋭い打球がセンターへ飛んできた。この一打がこの試合を象徴していた。これほど強いチームだとは思いもよらなかった。千葉がこんなに打たれるなんて…。試合開始直後の守備位置（私はセンター）と九回終了時の守備位置を比べると五メートル程深くなっていた。守っていて手のひらに汗をかき、何度もグラウンドの砂をつけたりで、ユニフォームで拭ったりするのは最初で最後の経験だった。

試合は圧倒的に押されながらも九回を終わって2—2。延長に入り雰囲気が微妙に変わってきた。千葉が本来の調子を取り戻し、それと反比例するように相手投手に疲れが見えてきた。十一回表、一点を奪われたが不思議とベンチは落ち着いていた。十一回裏二死から松岡が起死回生の同点打。その後十八回まで淡々と試合は進んでいった。

十八回裏、ベンチには全く気負いが無い。一死後、小岩が四球で出塁。池阪がきっちりバントで送った。私に打順が回ってきた。打席で投手を睨んだ。弱気なそぶり。初球、ボール。監督を見る。「エンドラン」のサインが出ている。勝負だ。小岩を見る。目が合う。小さく頷くのが分かった。投球モーションに入ったと同時にスタートした。外角高めのストレート、夢中で振った。打球はセカンドの頭上を越えていったような気がした。一塁ベースを踏んだ直後のベースコーチの手荒い祝福で「勝った！」と実感した。試合終了後、時計を見ると十二時をとうに回っていた。

この延長十八回の戦いは、この年の夏の甲子園に出場した一関商工にとって、春・夏の県大会を通じて唯一の敗戦だったのである。

「王　者」

細田敬一
昭和四十三年卒業

我々の年度を振り返った時に敢えて特筆するとなると、やはり昭和四十一年の盛岡一高初の秋季県大会優勝のことだろう。翌夏を経て昭和四十三年、一緒に汗した後輩達が実現してくれた十八年ぶりの甲子園出場の伏線とも思えるからだ。

昭和四十年、四十一年の夏は、いずれも優勝候補を倒してベスト8に進出し、その後がわれわれのチームだったが、作山投手を除けば、二年生は皆一七〇センチ以下の非力なちびっ子軍団。まわりに夏の戦力をそのまま残したチームなど、有力チームのひしめく中で、まして当時の盛岡一高は、例年秋は部員数も少なくやっとの思いでチームを編成しており、地区代表さえおぼつかない状況であった。

そんな中、関行雄監督に率いられて地区大会を勝ち上がり、高田松原球場における県大会で戦前の予想を覆し、見事優勝してしまったものである。負けて帰れば白旗を揚げて定期試験を受けなければならない状況の中、幸いにも豪雨のため大会が延期となり、帰るべき鉄道も落石で不通。思い掛けない天の助けも得てこつこつと戦っていたら、最後まで残ったのがあの優勝である。

高田松原の松並木の上に出た満月に祝福され、優勝旗を手にした爽やかな感動は、自分達の打ち込んだ高校野球の証として今も鮮やかに胸に甦る。

しかし悔やまれるのは、関監督に、その時の優勝の延長線上にあるともいえる後輩達の四十三年甲子園出場を、墓前でしか報告ができなかったことである。

関さんは、甲子園出場、関西六大学のリーディングヒッターとしての球歴はもとより、その懐の深さ、人格には、先輩、後輩を問わず皆が全幅の信頼を寄せていた。四十二年七月二十二日、ベスト8を前に追撃及ばず6―8で強豪花巻商業に敗れた直後、当時の盛鉄球場の三塁側ダグアウト前で選手に円陣を組ませ、地面に『王者』と指で記したのが関さんにとって最後の夏である。翌四十三年の夏、大会を前に、あの一高旋風を巻き起こした故榊貞助監督にすべてを託し、四十九歳の若さで不帰の人となった。

『王者』、それは勝敗を超えた、一高野球部員のありようを示した文字だったのではないか。後にも先にも何の説明もなかったが、そんな気がしてならない。四十二年組はもちろん、一年後輩の四十三年組も、そして今年(平成十年)の夏母校を率いた三浦宗監督も、あの場面と無言で地面をなぞる関さんの姿は忘れられ



昭和43年、盛岡一高卒業。在学中は主将で捕手。2年生の秋、県大会で優勝して東北大会に出場。現在、県警察本部総務課長。

ないだろう。

三年間の間にご指導をいただいた関監督、榊監督、北村監督、横山先生、チームメイトの瀬川克範君に合掌。

瀬川「ご辞退君」のこと

遠藤　弘
昭和四十三年　野球部長

昭和四十一年秋、新人戦を目前にしてのことである。部員数が少なく練習もままならない状況をみて、主将の細田に声をかけた。「野球部に入るやつを見つけてこないか」。数日後、新入りの選手の姿がグラウンドにあった。ピンチヒッターをかってでた瀬川である。水泳部所属。だぶだぶのユニホーム姿でレーキを持つ、機敏にボールを拾いに行く。裏方に徹し切った姿は立派だった。

こうしたサポートの選手や故障者をも含めて、十五名が大会に参加、地区で優勝し陸前高田市開催の県大会へ初めての出場を果たした。県大会の相手校は関一。九月二十三日の開会式直後の第一試合と決まった。選手たちにとっては、二十五日からの中間テストが気がかりで、関一戦に敗れればテストを受けねばならない。教科書は持ってはきたものの、開く気にもならない。細田らの決断は速かった。勝てばいいんだろう。まさしく背水の陣といえた。

試合は関一先攻で始まり九回表まで1―2とリードを許していた。九回裏、四番小笠原の二塁打で一打同点までこぎつけたが、すでに二死。しかし、なんとしても二塁走者を還さなければならない。1点をとれば、天候からみて日没引き分けは確実と思えた。勝負だ。代走はいないか。関監督は腕を組み「瀬川、代走だ」―瀬川は二、三歩あとずさり。手を顔の前で左右に振り、なんと「ご辞退します」と言ったのだ。



昭和41年から47年まで本校の野球部長。昭和43年夏、野球部長として甲子園出場。もと盛岡南高校長。現在、仙台市在住。通称「エンピロ」

打者は右翼手松田、並行カウント。次のボールは三塁ベンチからは、ど真中に見えた。松田のバットはぴくりともしない。一瞬、ベンチは静まり返った。判定はボール。コースを外れていたのか。いよいよ大詰め。松田の打球は中前へと飛んだ。瀬川は三塁をけって猛然と走る。本塁のかなり手前でダイビング、ついに―ついに一点をとった。延長十回は共に無得点、日没引き分けに終わった。

試合後、すっかり暗くなった松原の砂浜に腰を下ろし、だれ言うともなしに「公欠になったなあ…」。テストの重圧から解放され

甲子園に白聖旋風
ベスト8進出

小笠原敬二　昭和四十四年卒業

（昭和四十三年夏）

我が同級生は有望選手が多く、甲子園出場は千載一遇のチャンスと周囲から期待されていた。秋季の優勝（一年）準優勝（二年）をはじめとする好成績にも最終目標達成には至らず、最後の夏を迎えようとしていた。

「昔日の面影今はなく」。大会直前の盛一チーム紹介の新聞の見出しである。我等の怒りはついに頂点に達していた。入学以来の学業低下、偉い諸先輩の叱責、監督の逝去、メディアの攻撃等々…。十八歳の若者には重過ぎる伝統の重圧であった。誰一人として〝甲子園〟を口にするチームメイトはなく、それは胸の内の執念と化していった。

大会に入り我等の怒りは爆発した。対戦相手を完膚無きまでに力でねじ伏せ、圧倒的な強さで五試合を連破した。決勝は水沢高校を10―2で退け十八年振り八度目の甲子園出場権を獲得したのであった。

全国大会に駒を進めた一高は、一回戦が不戦勝。二回戦では、強豪ひしめく徳島代表鴨島商高に4―2で逆転勝ち。三回戦では、優勝候補の津久見高（大分）に9―2で快勝した。実に、四十七年振りにベスト8進出を果たした。準々決勝では、興南高（沖縄）に4―10で敗れ〝戦後岩手県最強チーム〟の夏は終わった。

ベスト8進出と共に話題をまいたのは、肉声を中心としたバンカラ応援。大観衆の絶賛の的となり、映画「青春」の一コマに登場した。

最後に、いろいろと悩みを持ちながらも、勉強と運動を両立させ、がんばっている後輩の皆さん。今、一生懸命打ち込んでいることは、若い「今」だからできることなのです。悔いのない青春を謳歌して下さい。

十八年ぶりに甲子園出場を果たしたのは、この大会から二年後の夏のことである。

してしまった。

その関監督も、瀬川の「ご辞退君」も、今はもういない。

関監督は以来、瀬川のことを「ご辞退君」と呼び、このニックネームはすっかり定着した喜びを、全員でかみしめているのだった。



昭和44年、盛岡一高卒業。
昭和43年夏、甲子園出場、投手、4番。
ベスト8進出で白聖旋風を巻き起こす。
49年3月、慶応大学卒業、4月岩手銀行入行。同銀行野球部の投手（後に監督兼任）として活躍する。

「応援冥利」

佐々木裕

昭和四十三年　応援団長

昭和四十三年春。ある日マネジャーの黒田正孝君が「生徒会則では、応援委員の任期が七月までとなっている。このままでは、甲子園に行くとき応援委員がいないことになる。我々が甲子園に行くように会則を改正しなくてはならない。」と言い出した。生徒総会で、今年は甲子園に行くとブチあげて、改正案はただちに可決。甲子園へという気運は全校的に盛り上がっていた。

球場でOBと一体となって応援するのも我が一高ならではでないだろうか。船山先輩を始め、外野席でM旗を振っている先輩たちとのエール交換は恒例だ。応援団席の最前列には「敵千万人と雖も我行かん」と墨で書かれた大きなバットを持った米内先輩がいる。有楽泉の佐藤優先輩には、委員全員お招き頂いて、麦ジュース付きの激励会慰労会をしてもらった。

甲子園に向かう真夏の東海道新幹線に、あの破れた帽子をかぶり、あの学生服をきて、足駄をはき、真紅のM旗を持って乗り込んだ。胸は「我々が甲子園に出場した盛岡一高生だ」という誇りでいっぱいだった。まさに応援団冥利に尽きる。

宿舎は京都。目の前は、広々とした境内を有する東本願寺である。ちょうどよい所があったとばかりに、境内に整列して美声(?)を張り上げた。勿論、退去命令を頂戴するまでに何分もかからなかった。

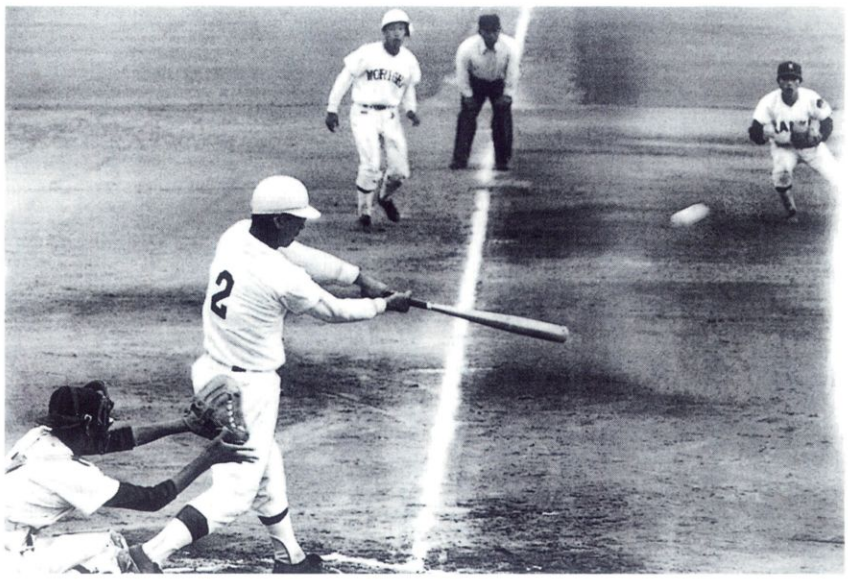
甲子園で強く印象に残っているのは、対津久見戦と興南高校戦における球場の雰囲気の落差である。津久見は優勝候補。誰も勝てるとは予想もしなかった。盛岡からの応援団も少なかったが不思議なほど声がよく通る。球場全体が我が校の味方をしてくれている感じだった。



昭和44年、盛岡一高卒業。在学中は応援団長。昭和43年夏、甲子園で応援の指揮をとる。東京都在住。

しかし、第三戦の対興南高校戦は逆だった。大会本部からは、「洋太鼓やブラスバンドはいいが、和太鼓は使ってはならない」という通達まで来る。太鼓をはずしたら応援にならないではないか。この通達は、マネジャー預かりにさせてもらった。とにかく、沖縄返還の直前で、球場全体が、敵方という感じだった。「天の時、地の利、人の和」というが、まさに人の念の強さを感じさせられた試合だった。負けたのは悔しかったが、皆、思い残すことはなかった。まさに、野球部の活躍のお陰で頂戴した、貴重な青春の一コマが終わったのであった。

あれから既に三十年の時が流れた。記憶が、日々セピア色にあせていくなかで、甲子園は忘れようのない青春の記念碑となっている。



昭和50年夏、対一関一戦。初回、金野が走者一掃の三塁打を放つ。

昭和50年[1975]

◆5・7　エリザベス英国女王が訪日
◆7・23　作家鈴木彦次郎氏（本校出身）死去

秋、八年ぶり二度目の優勝

◇49年秋　順調に県大会へ出場。
▽1回戦　7―2平舘高校
▽2回戦　3―1盛岡三高
県大会は盛岡市で開催された。
▽1回戦　7―3一関二高
▽2回戦　6―2一戸高校
▽準決勝

盛岡商業	0	0	1	0	0	0	0	1	0	2
盛岡一高	0	0	1	1	0	0	0	1	×	3

【ゲーム】一点を争う白熱したゲームを本校は長打力で手中にした。八回表に2―2とされた本校はその裏、先頭の伊藤が中前にたたき高野の送りバントで一死二塁。続く金野は、カウント1―2後の外角球を引っ張り、三塁ベース上を抜く二塁打を放ち、伊藤が決勝のホームを踏んだ。
▽決勝

盛岡一高	0	0	7	0	0	0	0	1	1	9
高田高校	1	0	0	0	1	0	0	0	0	2

【ゲーム】三回打者十一人を繰り出す猛攻で大量得点。初回に先攻された本校は、三回金野の走者一掃の二塁打などで大勢を決め、さらに最終回、林の大会第1号本塁打などで2点を加え、守ってはエース林が巧みなコンビネーションで高田打線を2点に抑え楽勝した。八年ぶり二度目の優勝。
◇秋季東北大会
▽1回戦　4―1山形電波
▽準決勝

盛岡一高	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
日大山形	3	0	2	0	0	1	0	0	×	6

【ゲーム】9安打6四球で11残塁をした本校が6安打の日大山形に惜しくも敗れる。
◇春
▽1回戦　16―0盛岡北高
▽2回戦　4―3龍澤高校
▽準決勝　9―4盛岡商業
▽決　勝　7―1盛岡四高
打棒の振るった本校が地区大会優勝し、県大会へ。加えて夏の県大会へのシード権を得る。

この年の3年生部員

靖　健　順　浩　郎　彦　男　幹
生　野　藤　野　　川　藤　木
大　金　後　高　林　古　佐　松
ヶ　　　　　涛　秀　悦


昭和50年の3年生部員

▽1回戦

盛岡一高	0	0	0	0	0	1	0	3	0	4
一関一高	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1

【ゲーム】1―0で迎えた八回、本校は中前打の松木が高野の右越三塁打でかえり、四番金野が大会第1号の本塁打で快勝した。

▽2回戦

黒沢尻工	2	0	1	0	0	0	1	0	0	4
盛岡一高	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1

【ゲーム】本校強力打線が沈黙。

◇夏

▽2回戦　10―0一関一高（五回コールド）

▽3回戦　6―4花北商業

▽準々決勝

専大北上	1	0	0	0	0	0	1	0	0	2
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	2	3	×	5

【ゲーム】専北・村上投手の好投に、六回まで外野飛球はわずか1本だったが、終盤、セーフティーバント、盗塁とゆさぶりをかけて劇的な逆転勝ちをした。七回、八回と「ピッチャーおかわり来い」の本校得意の大合唱が球場全体に響き渡った。

▽準決勝

盛岡一高	1	0	4	2	0	3		10
一関商工	0	0	0	0	0	0		0

（六回コールド）

【ゲーム】前年優勝の関商工を相手にだれが本校の大勝を予想しただろうか。技術以上に本校の気力が関商工を圧倒していた。あと1勝で念願の甲子園である。

▽決勝

伝統校同志の激突、盛岡を二分しての決勝は、盛岡商業を秋・春破っていたが、盛岡商業エース滝村の「44イニング無失点」という記録の前に我校は甲子園への切符を手にすることができなかった。

盛岡商業	0	0	0	0	0	0	2	0
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0

白堊随想録―25

甲子園めざして

金野　健　昭和五十一年卒業

昭和四十九年夏、甲子園目指し新チームが動き出した。二年生八名、一年生四名。十二名で杉田監督、小山部長のもと、谷地、小山田両先輩コーチと酷暑の中での猛練習が開始された。この夏での練習が、後の戦果につながるとは知る由もなかったが、甲子園目指し一心に練習に励んだ。

秋季大会では、骨折組を含めて総勢十二名で県大会を制覇した。東北大会では、準決勝まで進んだ。翌年の夏の大会でも、最後のあと一つまで登りつめた。

その決勝の盛商戦、これまでの対戦成績は3勝1分。誰一人として勝利を疑うものはいなかった。しかし、準決勝まで当たっていた打線に快音は聞こえなかった。

ファイター松木、ニヒル高野、エース林、ナイーブ大ケ生、ガッツ古川、ダンデー後藤、ジェントルマン佐藤、そして、ホット北條、ファイン伊勢沢、トーコン伊藤、サゴーイ宮、十二名の友と目指した甲子園は夢と消えたが、青春を燃え尽きさせてくれた高校野球、すばらしい時であった。


昭和51年夏、ノーヒット・ノーランを達成した石黒投手（対宮水戦）。

昭和51年[1976]

◆1・31　鹿児島県で五つ子が誕生
◆7・17　モントリオール五輪大会が開幕

春に強い高田を下し四強へ

◇50年秋　2回戦で盛岡農業と対戦。中盤に追い付いたが敗退した。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡農業	0	0	0	0	8	0	3	2	13
盛岡一高	0	5	0	0	0	3	0	0	8

◇春　本校は石黒―田巻の二年生バッテリーを軸にして地区予選に臨んだ。決勝で盛岡商業に敗れはしたが、同校と共に県大会出場。

▽1回戦　7―0　岩手橘高（七回コールド）

▽2回戦　7―0　盛岡四高（七回コールド）

▽準決勝　9―4　岩手高校

▽決勝

盛岡一高	2	0	0	0	0	0	2	0	4
盛岡商業	2	0	1	2	0	1	0	1×	7

県大会は、釜石市で開かれた。本校は、「春に強い」と言われる高田高に快勝。続く宮古高にその勢いをぶつけたが、要所を締められ敗退。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

高田高校	1	0	0	0	0	0	0	0	1
盛岡一高	0	4	1	2	0	0	0	0×	7

【ゲーム】本校石黒がコーナーを丁寧に突く投球に徹し、7安打を浴びながらも大量点を与えなかった。加えて無四球の記録を残した。打線も好投に応えて9安打。二回裏、三塁打で出塁した田巻を、五番塚原の安打で還しすぐ同点とし、この回計4点を挙げる。流れを呼び込んだ本校が快勝しての四強入り。

▽準決勝

盛岡一高	0	0	1	0	0	0	0	0	1
宮古高校	0	0	2	0	0	0	0	0×	2

【ゲーム】本校はピッチャー返しの短打主義に徹し、相手の二倍の8安打を放ちながら敗れた。三回一死後、一番北條二番伊勢沢が連続安打。すかさず重盗を決め、相手投手田鎖に揺さぶりをかけた。その後、二死から四番田巻の安打で1点を挙げたが追加点を挙げられなかった。

この年の3年生部員

伊勢沢　信之
宮　丈彦
北條　俊則
伊藤　和幸



昭和51年の3年生部員

◇**夏**　地区予選は、盛岡三高と初めて県大会出場をかけた一戦となった。先制されたが、終盤地力を発揮し逆転。そのまま逃げ切った。

▽地区予選

盛岡三高	1	0	0	1
盛岡一高	0	0	0	2

県大会では、2回戦から登場。2、3回戦と完封勝ちを収めた。準々決勝は、春季県大会優勝校久慈高を乱打線で下した高田高であった。高田エース金野の前に、決定打を放てず敗れた。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

宮古水産	0	0	0	0
盛岡一高	2	0	2	7

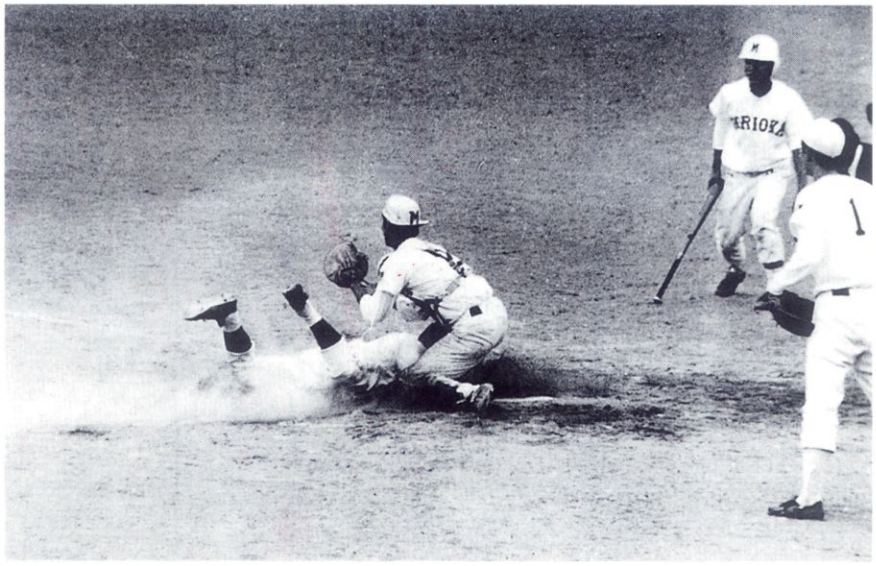
（七回コールド）

▽3回戦

大東高校	0	0	0	0
盛岡一高	0	0	0	4

▽準々決勝

高田高校	0	0	3	3
盛岡一高	0	0	0	0



昭和51年夏、対盛三戦。

白堊随想録－26

十二名の新人戦

北條俊則　昭和五十二年卒業

昭和五十年春の選抜甲子園出場は、あと一勝の東北大会準決勝で夢破れた。当時の部員が十二名、うち我々一年生は四名の危機的所帯だった。

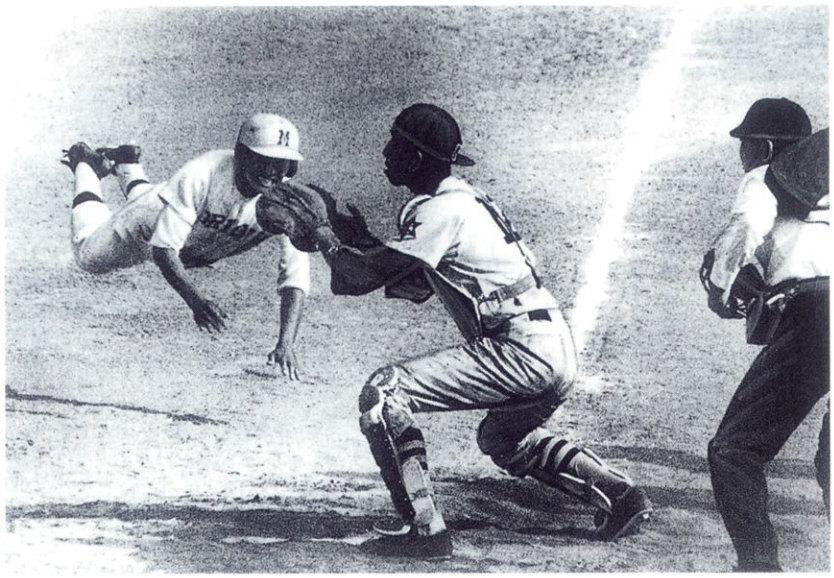
開会式では岩手代表十一名の入場行進（一名は前年準優勝の花巻商業の代理で行進）した。

試合が始まり守備につくとベンチには監督・部長先生を含めてわずか五名、しかも選手二名は負傷中なので控えは実質一名、攻撃に入ると先頭打者と一塁、三塁のコーチャーが抜け計七名で円陣を組んでいた。

初戦の山形電波高校に快勝し、次の日大山形戦で敗れたわけだが、勝てば甲子園だったのに、失望感よりは充実感が大きかったのを覚えている。

本来一年生がやるべきことを引退した三年生や若いＯＢの方々にしていただいた。チームワークと集中力は、少ない人数だからこそ先輩とともに培うことができた。

試合直前までトランプ遊びに興じたこと、各県選手の訛りが象徴的だったこと、山寺の階段は凄かったことなど、高校一年の秋、楽しく想い出深い山形遠征だった。



昭和52年夏、対盛工戦。延長十回2点を奪う。ダイビングで、ホームをねらう西村。

昭和52年[1977]

◆4・16　深夜に岩手高校で火事。二棟焼失
◆9・5　王貞治(巨人軍)に国民栄誉賞1号

難敵盛岡工を延長で下す

◇51年秋　地区予選決勝で延長の末、盛岡商業を破り県大会出場。

▽1回戦

岩手高校	0	0	0	0	0	1	1
盛岡一高	0	6	1	0	2	2×	11

(六回コールド)

▽2回戦

盛岡四高	0	0	0	0	0	2	0	0	1	3
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	4	0	×	4

▽決勝(代表決定戦)

盛岡商業	0	1	0	1	0	0	0	2	0	4
盛岡一高	0	0	0	2	0	0	1	0	1×	5

(延長十回)

【ゲーム】石黒―田巻の本校バッテリーが、1点を争う好ゲームを我慢強く勝利へと結びつけ、九回裏に同点、その勢いで十回にサヨナラ勝ちを収めた。

▽県大会
黒沢尻工業、青木投手を打てずノーヒットノーランを喫す。

▽1回戦(不戦勝)

▽準々決勝

黒沢尻工	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

◇春　二試合連続コールド勝ちで県大会へ。

▽1回戦(不戦勝)

▽2回戦　8―0盛岡三高(七回コールド)

▽決勝(代表決定戦)

盛岡商業	0	0	0	1	0	0	0	0	1
盛岡一高	0	2	1	2	0	0	1	2×	8

(八回コールド)

▽県大会1回戦

住田高校	1	0	0	1	0	1	0	0	0	3
盛岡一高	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2

【ゲーム】本校エース石黒の被安打は5。無念の敗退であった。

この年の3年生部員

之晃　信
浩司　時
健明　拓
美剛　昌
史行　雅
田巻　義
本野　
黒水　
村岡　
根井　
郷橋　
平石　
清西　
松名　
細



中学時代からバッテリーを組んで活躍した石黒・田巻両選手。



昭和52年の3年生部員

◇夏

▽地区予選

龍澤高校	0	0	0	0	2	0	0	0	2
盛岡一高	0	5	0	0	2	0	0	0	9

▽県大会1回戦

盛岡一高	0	3	1	1	3	3	0		11
水沢農業	0	0	0	0	1	2	0		3

（七回コールド）

▽2回戦

盛岡一高	0	0	0	0	1	0	0	0			1
一関工業	0	0	0	0	0	0	0	0			0

【ゲーム】本校はエース石黒の好投で、1点を守り辛勝した。本校は五回敵失、四球で無死一、二塁とし、清水が手堅くバントで二、三塁に送った。二死後、細井が一、二塁間をゴロで破り、貴重な先取点が決勝点となった。

▽3回戦

岩泉高校	2	3	0		0	1	0		0	0	6
盛岡一高	2	0	6		0	0	0		0	0	8

【ゲーム】予想を覆えす大乱戦となった試合だったが、前半の点の取り合いの後、後半よりリリーフした北條の力投で逃げ切った。

▽準々決勝

盛岡一高	0	0	1		0	2	0		0	0	3
盛岡工業	0	1	0		0	0	0		0	2	3

（延長十回）

息詰まる三時間十五分の試合を制した。

▽準決勝

福岡高校	1	0	0		0	1	4		1	0	7
盛岡一高	0	0	0		0	2	0		0	0	2

伝統校同志の激突、甲子園の夢消える。

白堊随想録—27

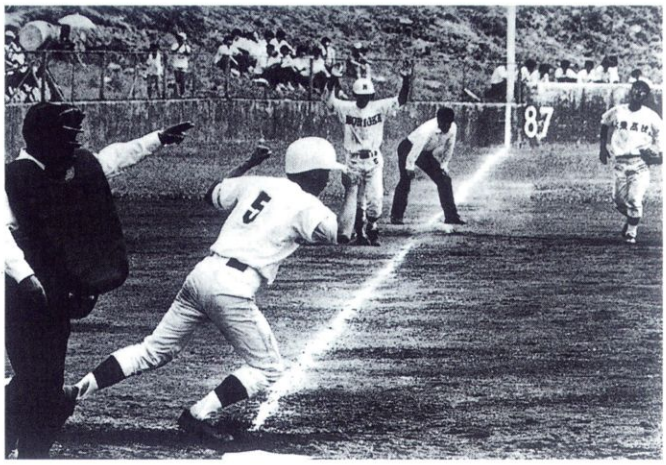
決勝戦に合わせて全員で映画を観に行く

細井義行　昭和五十三年卒業

五十三年組は入学時十名で、一名も欠けることなく卒業した。メンバーを紹介したい。投手は剛腕石黒健。県内随一の剛速球投手だった。捕手は主将の田巻晃。フェンス直撃の単打を反省していた。指導者で甲子園を目指す。一塁手は画家の橋本時浩。乱れに乱れる送球を捕り続けた。二塁手はド根性の清水明。シートノックが彼の番で個人ノックとなった。三塁手は強肩西村昌実。死球の受け方を研究していた。左翼手は熱血松岡剛。気迫でナインを激励した。同じく左翼手で天才平野拓司は常に主席。現役で東北大医学部に入学した。中堅手は重戦車岡田信之。連発でテニスコートに打ち込んだ。そして右翼手が快速細井義行。ロードレース大会で優勝し部の面目を保つ。主務は正義感の名郷根雅史。練習ノートを綴っていた。

監督は天才勝負師杉田清彦氏。春は島田繁氏だった。部長は迫力の小山卓也氏である。

夏、準決勝で敗れた。空白を埋めたのは決勝戦に合わせて全員で観た映画「八甲田山」だった。


昭和53年夏、大東戦。苦戦したが押し出しで決勝点を挙げる。


昭和53年、対黒工戦。代打正木の逆転三塁打で3点目を挙げる。

昭和53年[1978]

◆6・13　宮城県沖地震、本県被害三十四億円
◆8・3　うなる県土、花巻で38・1度を記録

気迫で10年ぶり甲子園出場

◇52年秋　3位決定戦にまわり雫石高を破り、かろうじて県大会への切符を手にする。

▽1回戦　11―3盛岡農業
▽2回戦　0―4盛岡工業
▽3位決定戦　9―3雫石高校

県大会

▽1回戦

盛岡一高	0	0	3	0	0	1	0	0	3
黒沢尻北	0	0	1	0	0	0	0	0	0

1　7

▽2回戦

盛岡一高	3	3	0	0	0	0	0	0	0
久慈高校	0	0	0	0	0	0	0	0	0

6　0

▽準決勝

花巻北高	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡一高	1	0	0	3	1	0	0	0	×

5　0

▽決　勝

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	1	0
黒沢尻工	0	3	3	1	2	0	0	0	×

9　1

東北大会は岩手県営野球場で行われた。

▽1回戦

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	2
弘前実業	2	0	1	0	0	0	0	0	×

3　2

◇春

▽1回戦　3―4盛岡四高（延長十二回）

◇夏

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

専大北上	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
盛岡一高	4	0	1	0	0	0	0	1	×		6

▽3回戦

一関商工	0	2	0	1	0	0	0	0	0
盛岡一高	2	0	0	0	2	1	0	2	1

5　3

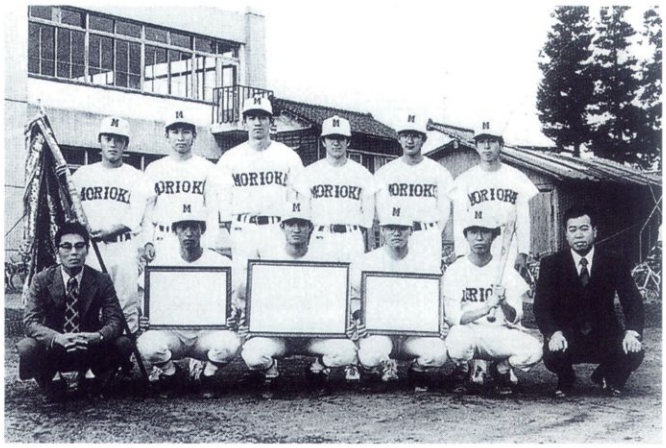
▽4回戦

盛岡一高	2	3	1	2	0	2	1			11
東和高校	1	1	0	0	0	0	0			2

（七回コールド）

この年の3年生部員

均一　達潔　義弘　義司　浩司
伸　彰敏　昌真
川原　井條　舘崎　村川　田村
石塚　照北　泉山　川小　松木



昭和53年の3年生部員

▽準々決勝

大東高校	0	0	0	0	0	0
盛岡一高	0	0	0	0	1×	1

【ゲーム】打撃戦の予想を覆し、大東高菅原と本校北條の緊迫した投手戦となった。しかし八回菅原に心理的な揺さぶりをかけ、昨年に続き準決勝に進んだ。

▽準決勝

盛岡一高	1	1	0	3	0	0	14
黒沢尻北	0	0	0	0	0	0	0

（五回コールド）

▽決勝

黒沢尻工	0	0	0	0	0	1	1
盛岡一高	0	0	0	0	0	3	3

【ゲーム】五回まで本校右腕北條は大きなカーブで黒工打線を内野ゴロに仕留め、黒工左腕米沢は7三振を奪う力投での投手戦であった。先手は六回黒工が待望の1点を上げ、本校は七回の攻撃を迎える。七回の攻撃は見事だった。先頭北條のピッチャー返しの打球は高いバウンドになり、ジャンプして捕った米沢の一塁送球が高くセーフ。続く八重樫が2―1から一、二塁間を破ると、永井は初球バントを決めて二、三塁。ここで吉田はスクイズバントの構えをとった。黒工は遊撃、一塁手が打者のすぐ前に構える極端なバントシフト。吉田は4球目、その裏をかいて一塁手定位置付近にポトリと落ちるうまい安打で三塁走者を迎え入れ、同点。正木の劇的な逆転三塁打へとつなげた。気迫で十年ぶりの甲子園出場を果たした。

◇第60回全国高校野球選手権大会

▽1回戦　0―7報徳学園

※詳しくは甲子園特集ページへ。

白聖随想録― 28

二十年経た今…

泉舘彰義　昭和五十四年卒業

毎年夏になると口ずさみたくなる曲『栄冠は君に輝く』。

二十一年前の夏、私は甲子園にいた。結果は一回戦敗退。前回出場時のような結果は残せなかった。

開会式。雲は湧き、高く真っ青な空。蒸し暑く、じりじり照りつける太陽の下、各代表校は精悍で強く思えた。入場行進は練習通りうまくできたと思うが、一塁から本塁間はテレビが気になり特に緊張したことを覚えている。また、スコアボードでの国旗、大会旗の掲揚は、今も鮮やかに思い出される場面だ。

一回戦の対報徳学園戦。岩手県と全国的ネームバリューの差を感じた試合だった。展開は五回まではほぼ互角。六回一挙6失点で、結果0―7。瞬時の二時間だった。県大会の延長、普段通りのプレーができなかったことがいまだ非常に悔やまれてならない。

数年後社会人となり、偶然にも報徳学園硬式野球部出身者とチームメイトとなり、一度、何を目標に練習していたのかを聞いたことがある。『甲子園で勝つこと』しかも『百人はいるであろう部員全てが』と言うことだった。

三年の春の練習終了後のこと、森監督の指示により『甲子園に行こうぜ』というフレーズの掛け声を大声で叫んだ。部員誰もが心には思っても声に出すことに恥ずかしさという抵抗があったと思うが、毎日繰り返すことで習慣となり、出場することが既成事実になっていくように感じたものだ。応援団も、その掛け声を持ってエールを贈るまでなっていた。

この掛け声には大変感謝している。何故か。それは目標を明らかにしてくれたことであり、練習の意義づけができたことに集約されると思うからだ。ただ残念なのは『出場』と『勝利』の違いだけだ。前者には全国レベルが見えないが、後者には意欲と向上心が要求されるという点だと思う。

甲子園から遠ざかることはや二十年。おこがましいが甲子園『出場』から『優勝』へ目標を定めよう。そうすれば道が開けるはずだから。栄冠は君に輝いて『校歌』を皆で歌いたいものだ。後輩諸君の健闘を祈る。



昭和54年夏、優勝旗をかかげての入場行進。

昭和54年[1979]

◆8・13　画家橋本八百二（紫波町出身）死去
◆10・20　台風20号で、県内の被害続出

甲子園連続出場ならず

◇53年秋　甲子園を経験した選手を核にして臨んだが、盛岡北高に足元をすくわれ、県大会出場は成らなかった。

▽1回戦

岩手橋高	0	0	0						0
盛岡一高	2	0	2	6	×				10

（五回コールド）

▽2回戦

盛岡一高	0	1	1	0	0	0	1	0	3
盛岡北高	0	0	0	2	0	0	1	2	× 5

◇春　準決勝（代表決定戦を兼ねる）で盛岡北高を破り、秋季大会の雪辱を果たした。

▽1回戦

盛岡三高	0	0	0	0	1	0	0	0	2 3
盛岡一高	0	0	3	0	0	1	2	0	× 6

▽2回戦

盛岡一高	3	1	1	0	0	0	0	4	0 9
雫石高校	0	0	0	0	4	0	0	0	0 4

▽準決勝

盛岡北高	0	0	0	0	1	0	1	0	3 5
盛岡一高	1	1	0	0	1	0	0	4	× 7

▽決勝

盛岡一高	0	0	0	0	1	0	0	0	1
盛岡工業	1	1	0	0	1	2	0	0	× 5

本校は、好投手田鎖（後に西武ライオンズ）を擁する盛岡工業と共に、地区代表となり県大会に臨んだ。開催地は二戸市であった。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

花巻北高	0	2	0	0	0	1	2	2	0 7
盛岡一高	0	0	0	4	0	0	0	0	0 4

【ゲーム】本校は、小笠原、佐藤（明）、中山と三投手でつないだが、相手下位打線につかまり逆転を喫した。被安打は12本であった。

◇夏　地区予選は、三たび盛岡北高との対戦になった。新チームになって、公式戦で1勝1敗。接戦が予想されたが、本校が圧勝した。

この年の3年生部員

永井修人
小笠原洋記
森田常治
吉藤寛彦
佐久間公浩



昭和54年夏、三塁ベースでのクロスプレー。



昭和54年の3年生部員

▽地区予選

盛岡一高	0	1	0	0	2	0	3	1	7
盛岡北高	0	0	0	0	0	0	0	0	0

（八回コールド）

県大会1回戦は、大船渡工業が相手だった。

▽1回戦

大船渡工	1	0	0	0	0	0	2	0	3
盛岡一高	1	2	0	0	0	6	0	0	9

【ゲーム】3―1のリードで迎えた本校は六回、二塁打2本を含む6安打を放って6点を挙げた。9―1とリードした七回、本校は投手を先発の森(常)から中山に代えた。2点を返されたが、そのまま押し切って勝利をものにした。

2回戦の相手は、春季大会準優勝校の水沢高校だった。

▽2回戦

盛岡一高	0	0	0	1	0	1	0	0	2
水沢高校	0	0	0	0	0	1	0	2	3

【ゲーム】前年夏優勝校と第2シード校との組み合わせとなり、好勝負を展開したが、2―1のリードで迎えた八回、四球と犠打、相手下位打線の長打などで2点を失い、逆転負けを喫した。試合は、本校森(常)、水沢大槻の両好投手の投げ合いだった。本校が先手を取った。四回、二死二、三塁の時、七番小笠原の左前適時打で1点。六回には、二死二塁から六番岩崎の安打で1点を加えた。追加点を奪えなかったのが痛かった。

白堊随想録― 29

甲子園連続切符を逸す…。

森常記　昭和五十五年卒業

甲子園出場の翌年、また、森雄一監督采配の二年目など、何かと注目された年であった。

吉田、永井、正木、森、八重樫、小笠原の甲子園組に加えて、急成長の沼倉、岩崎、澤村の布陣で県下有数の強力打線と称され、優勝候補の一角にも挙げられていた。

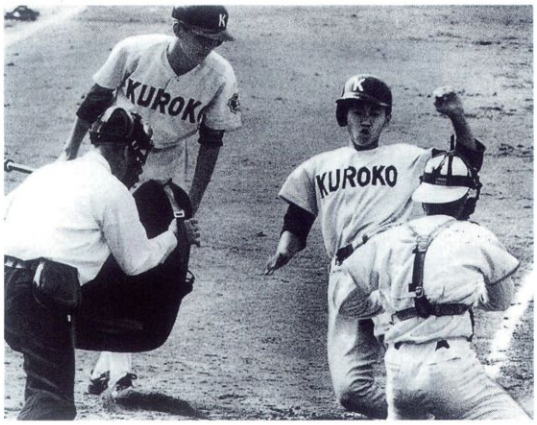
しかしながら、このベストメンバーでは夏の県大会には出場していない。吉田の負傷である。当時は県大会の前に地区予選があり、試合そのものは自慢の強打で大勝したものの、吉田が相手選手にスパイクされ大けがをした。結局は攻守の要を欠き、大幅に打順、守備位置の変更を余儀なくされ、ベストとは言えない状態での県大会となった。

初戦の大船渡工戦は思惑通りの展開となり、14安打の猛攻で圧勝した。しかし、二回戦で春の準優勝校で屈指の左腕大槻を擁する水沢に2―3と敗れ、二年連続優勝の夢は実現しなかった。

「吉田がいれば…」と思っていたのは、当時の選手全員だけでなく、何よりも本人が一番感じていた事であろう。



昭和55年夏、対関一戦。延長戦のピリオドは押し出しの四球で。



昭和55年夏、対黒工戦。本盗を試みた作戦を見破りアウトに。

昭和55年[1980]

◆7・17　内閣総理大臣に鈴木善幸指名される
◆10・23　県高次救急センター落成

甲子園出場経験校を3連破

◇54年秋　地区予選は、1回戦で盛岡商業と対戦した。4―0でリードしていたが、惜しくも逆転を喫した。

▽1回戦

盛岡一高	0	0	1	3	0	0	1	0	1	6
盛岡商業	0	0	0	3	1	2	0	2	×	8

◇春　準決勝（代表決定戦を兼ねる）で盛岡三高と対戦した。延長十回表に1点を加えられ、そのまま逃げ切られてしまった。

▽1回戦

盛岡一高	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
盛岡商業	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1

▽2回戦

龍澤高校	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
盛岡一高	1	0	3	4	1	0	×			9

（七回コールド）

【ゲーム】本校打線は二塁打を5本（八重樫、大志田2本、森（常）、澤村）放つなどして快勝。

▽準決勝

盛岡三高	0	0	0	0	1	0	2	0	0	3
盛岡一高	3	0	0	0	0	0	0	0	1	4

（延長十回）

◇夏　岩手県高野連創立三十周年ということで岩手記念大会となり、地区予選なしで開かれた。本校は、1回戦から3回戦まで、甲子園出場経験校と当たり続けたが、チーム一丸で連破した。

▽1回戦

一関一高	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
盛岡一高	1	0	0	0	0	0	0	0	1×	2

（延長十回）

【ゲーム】本校岩崎、一関一小松代の両先発の投げ合いとなり、1点を争う好試合となった。本校は十回、先頭の三番澤村が安打で出塁。続く四番八重樫の二塁打で無死二、三塁とする。五番岩崎が四球で無死満塁。一死後、久慈が四球を選び

この年の3年生部員

高	大	佐	佐	牧	正	阿	小	八	岩	久	松	森	沼
橋	田	藤	藤		木	部	原	樫	崎	慈	島		倉
俊	志			洋	祐	康	公	永	徹			雅	明
也	研	彦	聡	一	輔	弘	一	規	哉	勉	稔	之	彦


昭和55年の3年生部員

サヨラナ勝ちした。

▽2回戦

黒沢尻工	1	0	0	0	0	0	1	0	2
盛岡一高	1	0	0	0	3	0	0	0×	4

【ゲーム】二年前の県決勝と同じ顔合わせとなった。本校は五回、見事な集中攻撃を見せた。無死満塁とした後、森（常）がレフト前に安打を放ち2点。更に1点を加え、4―1とリードを広げた。八回、2点差に詰め寄られ、さらに九回、一死二、三塁のピンチを迎えたが、森（常）の美技で大谷の痛烈な打球を阻み、併殺で試合にピリオドを打った。

▽3回戦

盛岡一高	0	4	3	0	0	0	0	0	7
花巻北高	0	0	0	0	0	1	0	0	1

【ゲーム】本校打線が気を吐き、相手投手陣の乱れにも乗じ快勝した。二回は、3短打と3四球で一挙4点、三回にも3点を取り、試合を決めた。

▽4回戦

盛岡一高	1	0	0	0	0	1	0	0	2
盛岡市立	2	0	0	0	0	0	0	1×	3

【ゲーム】1―2とリードを許した本校は六回、無死四球の八重樫が盗塁を決めた。岩崎が右中間に流し打ちし同点にした。七回には一死満塁と攻めたが、得点できずに終わった。九回、盛岡市立四番北島の二塁打をきっかけに無死満塁とされ、七番佐藤に初球スクイズを決められてサヨナラ負けした。

白堊随想録― 30

14名それぞれがめざした甲子園

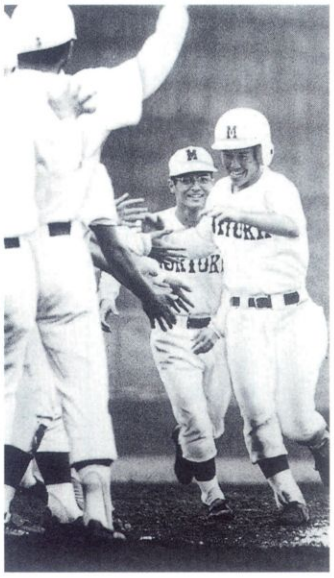
大志田研　昭和五十六年卒業

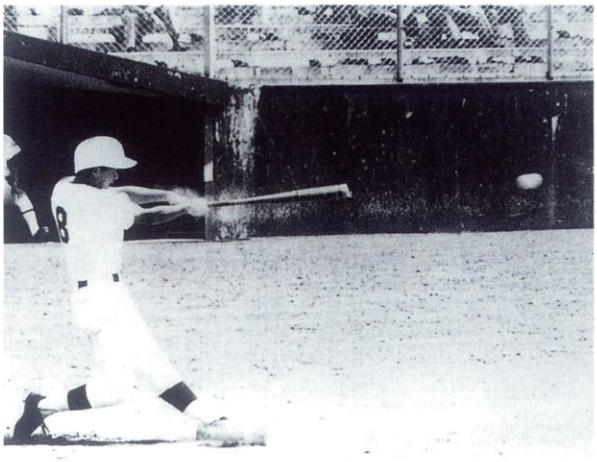
昭和53年4月、我々14名は「甲子園出場」の夢を抱き、意気揚々と盛岡一高野球部の門をたたいた。その年、2年先輩の泉舘主将を中心として見事9回目の「甲子園出場」を決めた。同期からは1年生ながら、八重樫（後に東京大野球部主将を務める）がサードを守り、正木が決勝戦の逆転三塁打を放ち、岩崎が守備固め要員としてベンチ入りするなど「甲子園出場」に大きく貢献した。この年の「甲子園出場」は、我々にとって大きな財産となっている。その後、10回目の「甲子園出場」を果たすべく森雄一監督、佐藤信重コーチのもとで厳しい練習の日々を送ることとなる。

二年生の秋を迎えると、我々が中心となる新チームが結成された。特に思い出深いのは、先輩方が歴史を築いて下さった「八戸高校との定期戦」、「秋田高校、仙台一高との三高リーグ戦」の復活である。「八高定期戦」においては、森、久慈、佐藤明彦らの活躍により、終盤まで一方的な試合運びをしていたものの、終わってしまえば8―8で引き分け。めでたくお互い末広がりでよかった等地元八戸の観衆を沸かせることとなった。（当然ながら試合後、森監督にこっぴどく怒られる始末。）

冬の練習で忘れていけないのは、一高グラウンドの脇に脈々と湯を沸かせ続けた今はなき「有楽泉」の2階で、練習後、夜遅くまで村松大先輩を講師に招いて行った「ルール講習会」である。大志田、小原、牧、松島らは、難問、奇問に悲鳴を上げたものである。その「有楽泉」の息子といえばレフトを守る佐藤聡である。「ルール講習会」の後は、反省会と称し「あまから」に立ち寄り、酒ではなく「サイダーとたこ焼き」で杯を交わし、阿部、沼倉、高橋の面々を中心として明日の英気を養ったものだ。

そして、迎えた夏の岩手県大会。一関一、黒工、花北を撃破し「創立百周年に甲子園へ」の望みをつないだが、盛岡市立に最終回スクイズを決められ涙をのむ。我々14名の夏が終わった。しかし、この経験は、何ものにも代えられない我々の思い出として生涯生き続けるものである。


昭和56年夏、対花北商戦。中山のサヨナラ3ランでベスト8入り。


昭和56年夏、対盛岡市立戦。打者は澤村。

昭和56年[1981]

◆4・7　盛岡の旭橋開通
◆10・19　福井謙一（京大）にノーベル化学賞

花北商戦でサヨナラ3ラン

◇55年秋　地区予選は、中山―橋田のバッテリーで臨んだ。生活学園戦では、2本の本塁打などでコールド勝ちした。盛岡工業と共に地区代表になる。

▽1回戦

生活学園	0	0	0	0	0	0			0
盛岡一高	0	4	3	2	0	2	×		11

（六回コールド）

▽2回戦

雫石高校	0	0	0	1	1	0	0	0	2
盛岡一高	0	0	0	0	0	2	0	1	× 3

▽代表決定戦

盛岡一高	0	0	1	0	1	0	2	0	3
盛岡北高	1	0	0	0	0	0	1	0	0 2

県大会は、宮古市と山田町で開催された。本校は、ベスト4入りを果たした。

▽1回戦

花巻農業	0	0	0	0	0	2	0	3	0 5
盛岡一高	0	0	0	0	0	5	0	0	1 × 6

【ゲーム】本校は相手打線に苦しめられつつも耐えて、勝利をものにした。六回に三塁打を足がかりに2点先制された。その裏に逆転するも、八回、五番阿部に3ラン本塁打で追いつかれた。本校は九回、二死一、三塁の時、相手投手正木の暴投の間に、三走西郷が本塁を踏みサヨナラ勝ちした。

▽準々決勝

山田高校	0	0	0	0	0	1	0	0	1
盛岡一高	0	0	0	0	1	2	0	0	× 3

▽準決勝

広田水産	1	2	0	1	0	0	0	0	4
盛岡一高	1	0	0	0	0	0	0	0	1

【ゲーム】初回に1点を先取された本校は、その裏、中山のタイムリー二塁打で同点としたが、この大会の優勝投手になった佐々木に、その後3安打に抑えられ、チャンスを作れず敗退した。

◇春　盛岡工業に阻まれ、県大会出場は成らなかった。

この年の3年生部員

司晃　一樹　郎元　篤逸人
英　　広信一　省祐
武郷　英田　野田　山村　藤
清西　杉森　坂橋　中澤　遠



昭和56年夏、本塁でのクロスプレー。背番号2は清武。

▽1回戦

龍澤高校	0	1	0	0	0	0	0	0	1
盛岡一高	0	0	3	0	0	0	0	0	3

▽2回戦

盛岡工業	1	1	4	0	0	2	0		8
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	1		1

（七回コールド）

◇夏　地区予選で盛岡農業を下し、県大会出場。

盛岡一高	1	0	0	0	4	0	1	0	7
盛岡農業	0	0	0	1	0	0	0	0	1

県大会は、2回戦から登場した。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

軽米高校	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡一高	0	0	2	0	1	0	0	×	3

▽3回戦

花北商業	0	0	0	0	0	0	0	1	0		1
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	1	0	0		1

（延長十一回）

								0	0		1
								0	3	×	4

【ゲーム】本校中山、花北商菅原両投手の投げ合いとなった。本校は10安打・7四死球を得て、押し気味に試合を進めた。そして、11本目の安打が中山の劇的なサヨナラ3ランであった。

▽準々決勝

盛岡市立	2	0	0	0	0	2	0	1	0	5
盛岡一高	0	0	0	1	0	0	1	0	1	3

白堊随想録－31

生存率三割

澤村省逸　昭和五十七年卒業

我ら五十七年卒組は、盛岡一高が9回目の甲子園出場を果たした翌年の入学である。そのせいか野球部に入部した者は例年になく多い二十四名にのぼった。しかし、ある者は勉強との両立に悩み、ある者は過酷な練習に打ちのめされ、またある者は人間関係につまずき、気がつけば同期生は八名になっていた。

その八名の高校球児も、今や三十路を過ぎて、それぞれの道を懸命に生きている。投手の中山篤は一高に優秀な選手を送ろうと中学野球の指導に精を出す。捕手の清武英司はバットを鐓（たがね）とハンマーに持ち代えて芸術家となった。一塁手の橋田元は地球物理学者として南極にて越冬中。

二塁手の森宏樹は銀行マンとなり超低金利で貧乏人を救っている。遊撃手の西郷晃はハンドボールにホッケーと中学生を鍛え上げている。左翼手の杉田英一は高校野球の監督として現役時代に果たせなかった夢を追う。右翼手の坂野信一郎は在阪一流商人（あきんど）となった。中堅手の澤村省逸は「科学的根性」をモットーに相も変わらずスポーツに携わっている。

何はともあれ、一高野球部に鍛えられ、育てられ、多くの財産を築き上げることができた。これからも多くの優秀な人材を輩出していくであろう母校野球部に乾杯。



昭和56年の3年生部員



昭和57年夏、対盛商戦。先発全員安打で宿敵に圧勝する。高橋のヒットで8点目。

昭和57年[1982]

◆2・8　ホテル・ニュージャパン大火
◆6・23　東北新幹線大宮―盛岡間営業開始

福岡高校と死闘4時間

◇56年秋　地区予選は、盛岡商業に終盤逆転を許し、2回戦敗退となった。

▽1回戦

盛岡四高	0	0	0	0	2	3	0		5
盛岡一高	3	0	1	3	0	4	1×		12

（七回コールド）

▽2回戦

盛岡一高	0	0	0	0	2	1	0	0	3
盛岡商業	0	2	0	0	0	1	3	0×	6

◇春　秋季大会と同じく県大会出場は成らなかった。

▽1回戦

岩手橋高	0	1	0	1	1	3
盛岡一高	9	2	1	4×		16

（五回コールド）

【ゲーム】本校は、2本塁打（高橋・孤崎）と、一戸の2三塁打などで、五回コールド勝ちした。

▽2回戦

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	1	1
盛岡工業	0	3	3	0	0	0	0	0×	6

◇夏　地区予選では、秋季大会で敗れた盛岡商業との対戦となった。秋季・春季は県大会に出場できなかった本校だが、夏季大会に向けての仕上がりは順調だった。下馬評では、この一戦を制した学校は、県大会でも上位進出が可能と言われた。

盛岡市営球場で行われたこの試合は、五千人を超す応援団、ファンの見つめる中で展開された。

▽地区予選

盛岡一高	3	0	0	1	1	0	2	1	8
盛岡商業	0	1	0	0	0	0	0	1	2

（一）川村―一戸
（商）渡辺、高橋―佐々木
▼三塁打　澤口（一）
▼二塁打　照井、澤口、一戸、川村（一）
熊谷、上平、佐藤（商）

この年の3年生部員

美順充也之範人之行則信隆生行秀
泉澤高福小昆高千一菊吉飯照下津
英　敏雅佳嗣博俊義勝　史栄彰
館口橋井山野畑葉戸池田岡井田田
志



昭和57年の3年生部員

【ゲーム】戦前からのライバルとの一戦は、本校が初回二死から3得点するなどリードを奪い着々と加点、先発全員安打を記録した。勝負強さを十分に発揮して、県大会出場権を得た。

県大会の1回戦では、福岡高校と対戦した。

▽1回戦

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	3	0
福岡高校	0	0	0	0	0	1	0	2	1×
	（延長十一回）								4

【ゲーム】本校川村（二年生）、福岡柳畑（一年生）の両先発が力投し、五回までゼロ行進となった。1点を追う本校は八回、四球を足がかりに、3安打で3―1と逆転に成功したが九回に追いつかれ、試合は延長に入った。十一回裏、福岡は、無死一、三塁から三番和山の一振りがレフト前に落ちた。試合時間が4時間5分の死闘だった。



昭和57年夏、駒木監督を中心に円陣を組む一高ナイン。

白堊随想録― 32

忘れられないゲーム

高畑嗣人　昭和五十八年卒業

我々、五十八年卒業は、全部で十七名の大所帯だった。人数の多さと共に個性的で、遊び好きという特徴を持った学年である。だから、まとまりには欠けるが、勝負度胸のあるチームであった。その本領を発揮したのが、夏の大会の地区予選、対盛商戦である。

大会前、「一高は、地区予選で敗退したことがない」という事実が重いプレッシャーとなってのしかかっていた。対戦相手は、よりによって秋の県大会ベスト4の強豪で、秋の地区予選で対戦し敗れていた盛商である。抽選会から帰ってきた主将の一戸のくじ運のなさをみんなで恨んだ。

いよいよ決戦の日。普段は冗談ばかり言っている十七人は、まさに一つになっていた。その気合たるや、すさまじいものであった。結果は8―2の完勝。県大会の決勝戦より観客の入った市営球場（県営球場が改装のため使用できなかった）での忘れることのできない試合である。


昭和57年秋、対岩谷堂戦。工藤の二塁打で二走塚原が生還


昭和58年夏、春の東北ベスト4入りの高田と対戦し、これを下す。

昭和58年[1983]

◆4・9　県立盛岡南高が開校
◆4・27　久慈市で大規模な山林火災

候補高田高校を下し8強

◇57年秋　夏季大会でマウンドを守った川村(公)に佐々木(智)を加えた二枚看板で臨んだ。捕手は川村(憲)であった。

▽1回戦(不戦勝)

▽2回戦

盛岡三高	3	1	1	0	0	0	0	2	0	7
盛岡一高	0	1	0	1	7	0	0	0	×	9

▽代表決定戦

盛岡一高	0	0	3	4	0	2	0	0	0	9
岩手高校	0	2	1	0	0	0	0	2	1	6

県大会は、盛岡市と紫波町で開かれた。

▽1回戦

岩泉高校	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡一高	3	0	0	3	0	0	0	0	×	6

【ゲーム】エース川村(公)が、岩泉打線を4安打に抑え、守備陣も無失策で完封勝ちした。

▽準々決勝

岩谷堂高	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
盛岡一高	0	1	0	1	0	3	0	0	×	5

【ゲーム】本校佐々木(智)の被安打4の好投で、ベスト4入りを果たした。

▽準決勝

花北商業	1	1	1	2	0	0	0	0	0	5
盛岡一高	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1

◇春　代表決定戦で1点差に泣く。

▽1回戦

岩手高校	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
盛岡一高	1	1	0	0	4	5	×			11

(六回コールド)

【ゲーム】本校打線が火を噴いて快勝した。樋口が2点本塁打。平野と佐々木(智)が三塁打。佐々木(智)と塚原が二塁打を放った。

▽代表決定戦

盛岡工業	2	0	1	1	1	0	0	0	0	5
盛岡一高	3	0	0	0	0	1	0	0	0	4

◇夏　記念大会のため地区予選は無かった。この年は、春の東北大会でベスト4入りした高田高校中心の展開になると予想されていた。本校は2

この年の3年生部員

将之　俊二　一則　昭文　弘学　司之
猛昌　隆裕　俊義　敏晴　憲公　浩
林田　藤木　田原　岡田　村野　村
小横工佐々鎌塚長福川平川森

回戦で高田高校を破り、決勝へ上りつめるかと思われたが、伏兵の水沢工業に屈した。

▽1回戦

葛巻高校	1	0	0	1
盛岡一高	12	2	3	2×

19

（五回コールド）

▽2回戦

高田高校	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡一高	0	0	0	0	1	0	0	0	1×

1

【ゲーム】本校は五回、先頭の七番佐藤が右中間を破る二塁打。続く長岡は三塁線に送りバントをきちっと決める。四球で一死一、三塁となった。打順はトップに返り畠山。レフトへの犠牲フライで決勝の1点を挙げた。当時の『岩手日報』は、「点差はともかく盛岡一の完勝だった」と、本校の試合運びを高く評価した。

▽3回戦

胆沢高校	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡一高	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0×

3

▽4回戦

盛岡一高	4	1	2	2	1	1	0	0	2		
久慈高校	4	0	0	0	6	0	2	1	0		

（延長十二回）

13

▽準々決勝

水沢工業	0	0	0	0	1	0	0	0	2		
盛岡一高	0	0	1	0	0	0	0	0	0		

（延長十一回）

											0	1
											0	0

1　2



昭和58年の3年生部員

白堊随想録－33

昭和五十八年・夏

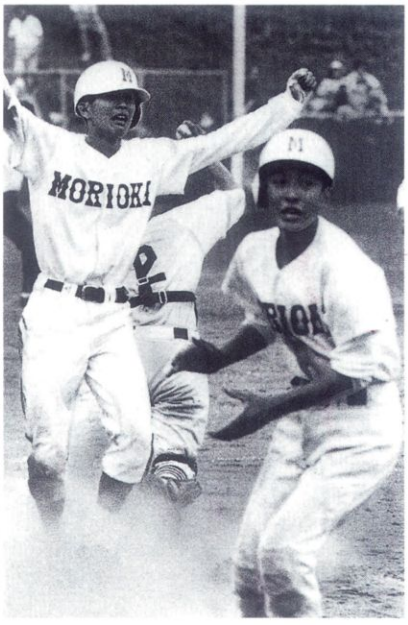
川村公司　昭和五十九年卒業

最後の夏。二回戦で春の県大会優勝の高田と激突した。試合前の控え室。相手は緊張感を吹き飛ばすかのように大はしゃぎの様子だったが、わが方はまるで針が落ちる音も聞こえるほどの「静寂」に包まれていた。

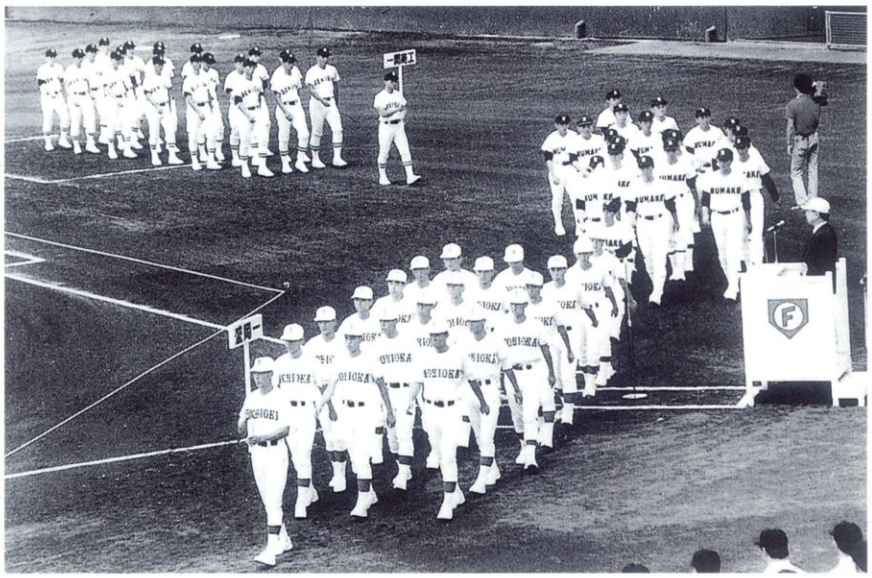
新チーム結成後、前年の夏休みは一日十時間以上に及ぶ猛練習。「あれだけやった」という思いが悲壮感を生み、それだけ神経も研ぎ澄まされていたのだろう。結果は1―0で勝利。この勢いで「最後」まで駆け抜けたかったが、準々決勝で涙を飲んだ。

当時、三年生は十二名。艱難（かんなん）辛苦を乗り越えた仲の良さが長所の学年だった。残念ながら夏は三名がベンチ入りから外れた。しかし、彼らのひたむきに練習に励む姿がチームの大きな支えになったことは、今さらながら頭の下がる思いである。

負けたその日。学校に戻り「この仲間たちともう野球ができないのか…」と、悔しさと悲しさが入り交じった気持ちで最後のブルペン整備をした。今も、忘れない。



昭和58年夏の対久慈戦。九回、佐々木（智）の安打で同点に追いつく。



昭和59年夏、入場行進する一高ナイン。

昭和59年[1984]

◆4・1　三陸鉄道が開業
◆9・11　「エフエム岩手」設立

秋、大船渡高（選抜大会ベスト4）に善戦

◇58年秋　地区予選を順調に勝ち上がり、県大会に出場した。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡一高	1	1	4	0	0	0	3	9
平舘高校	0	0	0	0	0	0	0	0

（七回コールド）

▽代表決定戦

盛岡一高	2	0	0	1	0	0	0	3
盛岡三高	0	0	0	1	0	0	0	1

【ゲーム】本校は初回、一死一、三塁の好機に、三番藤原が三塁打を放ち1点。続く四番佐々木も右前打し2点目を挙げた。エース佐々木が好投。要所をカーブでかわし、相手打線の反撃の糸口を阻止した。

県大会は盛岡市で開かれ、本校は優勝候補の大船渡高校と対戦した。大船渡のエース金野正志は、地区予選で、1死球だけのノーヒット・ノーランを達成した好投手であった。

▽1回戦

大船渡高	0	0	0	0	4	3	0	0	7
盛岡一高	0	1	0	0	0	2	0	0	3

【ゲーム】本校は二回、先取点を挙げ、幸先良いスタートを切ったかに見えた。が、相手打線は、本校エース佐々木に襲いかかった。五回には3長短打を浴び4点を失い、六回には失策がからみ3点を奪われた。大船渡は先発全員安打の11本。これに対し本校は6安打。三番佐藤が4打数3安打と気を吐いたが及ばなかった。大船渡高は、翌春の選抜甲子園大会に出場し、ベスト4に進出した。

◇春　地区予選で姿を消した。

▽1回戦

盛岡一高	1	0	0	0	1	1			12
生活学園	0	0	0	0	0	0			0

（五回コールド）

▽2回戦

紫波高校	0	0	2	0	0	4	0	0	6
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	1	1	2

この年の3年生部員

誠生　治一　学進　之明　猛久　和義　太郎　真之
作山　典宏　金　　裕英　尻　靖宏　正耕　智
角掛　村田　原橋　皿　葉寺　藤口　藤木
柳吉　藤高　木土　井階　千小　野工　樋佐　佐々



昭和59年の3年生部員

◇**夏**　地区予選は、岩手高校が相手だった。佐々木が完封し、県大会に臨んだ。

▽地区予選

岩手高校	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡一高	0	0	1	0	0	4	0	0	× 5

【ゲーム】本校バッテリーは、佐々木―佐藤であった。打撃では、佐々木、吉田、作山が二塁打を放った。

県大会は2回戦から登場した。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

一関商工	2	0	2	0	2	0	0	0	6
盛岡一高	0	0	1	0	1	0	0	0	2

【ゲーム】本校は三回、一死一、二塁の時、一走畠山が挟殺される間に二走松田がホームを踏んで、1点を返した。その後、五回には一死満塁の好機に、三番畠山の右犠飛で2点目を挙げた。しかし相手校エース山崎の荒れ球に的を絞れず、2安打に終わった。



昭和59年夏、力投する佐々木智之。

白聖随想録― 34

ありがとうございます

佐藤真　昭和六十年卒業

合格の喜びがようやく一段落した四月初め、僕等は出会った。赤く短いジャンパーを着ている者、雫石中学校のユニフォームを着ている者、他人の遅刻をやたらと咎める者、等々、様々な個性が集まった。

数ヶ月経ったある日、一年生だけで練習する機会があり駒木監督が「この調子で伸びれば甲子園で三つぐらい勝てるぞ」とおっしゃったことを鮮明に記憶している。事実、一学年上の先輩と紅白戦でも互角以上に戦うことがあったり、二年生秋の練習試合ではあの大船渡高校に勝利したり（ただし金野正志投手は登板せず）と決して弱くはなかった。

だが、三年の夏、あえなく二回戦敗退。相手は一関商工。不思議と悔しさは無かった。

話は変わるが、チームメートの中に家庭の事情で、野球道具を持ってない男がいた。グラブはもとより、帽子からソックスまですべて部室及びその周辺に捨てられていたもののリサイクル活用。だが、彼のグラブは誰のものよりも黒光りしていた。何よりも感心したのは、野球ができることそのものに感謝していたことである。私なぞは当然の如く野球をやり、時として「今日は球にさわりたくない」などと思ったものだ。これじゃ野球の神様も味方するわけがない。あれから十数年経ち遅きに失した感はあるが、「盛岡一高で野球をさせていただき、ありがとうございました」と神様に、母に、かつての球友たち、監督をはじめとする諸先輩方に、そして私を取り巻く一切の人々に御礼申し上げるものである。

六十回の暑い夏

昭和53年野球部長
小山卓也
昭和三十二年卒業

岩手のみならず、北の日本での野球の始まりは、おそらく、盛岡一高の前身であった岩手中学（盛岡中学の前）であることは、高野連四十年史を執筆するとき、及び白堊百年のときの資料収集から越えていないようである。

と、すれば、岩手の野球のゲームとしての始まりは、明治三年横浜に上陸して十六年後の明治十九年であると思われる。十九年という年は、学制改革も含めて、いろんな人々のいろんな意味合いのある年であるが、今限られた紙面では根拠として示す余裕がない。いずれ、このことを書かずして、明治三十二年を起点にした百年史は成り立たないことを、最初に言いたかったのである。

さて、白堊百年を前後して野球に携わった私であるが、正直、同窓職員としての百周年業務と野球顧問の仕事は、英語教師として、学級担任として、教師小世界の範疇を出るものであった。それでも生徒諸君を先頭に、母校を、盛一野球を愛する人々に、陰に陽に助けられ、いろんな思い出深い日々に明け暮れることが出来たことに、この紙面を借りて改めて感謝申し上げたい。

白堊百年、白堊野球八十年を前にして、県内伝統校との定期戦に加えて、八戸高校との復活定期戦、そして、仙台一高、秋田高校との三校対抗戦を岩手県営野球場で開始出来たことは何より嬉しいことである。この対抗戦がきっかけとなってか、仙台を除く三校が甲子園につながった幸運は、時が経つにつれて増幅されてくる。とくに、三校対抗戦は、久慈次郎先輩たちに遡る、東北中学野球大会の復活を心したものであり、同時に、今日の甲子園野球地方予選の嚆矢として定義ある大会を意識したものであったから尚更である。

昭和五十三年夏の甲子園出場は、決して決して強力チームではなかったが「負けない盛一野球」が「あと一つ」の壁に何度か涙をのんだ末に、北国には暑すぎる夏を逆手にとって、チーム一丸、本領を遺憾無く発揮出来た幸運の白堊健児たちであった。甲子園大観衆の坩堝にあって、「世に謳われし浩然の…」が一条の清冽な調べとなって甲子園ベンチに流れてきたときの感動は今も残余のぬくもりと共に体から消えない。

あれからの歳月に「再び」がない。いつしか母校は百二十周年である。自身、教職を去る春、白堊を愛する先人先輩後輩に、感謝千万、幸あれ。



昭和32年、盛岡一高卒業。昭和50年から54年まで母校の野球部長。昭和53年夏、野球部長として甲子園出場。前盛岡四高校長。

夢舞台甲子園へ

松本正勝　昭和五十三年　応援団長

第六十回全国高校野球大会岩手県大会の決勝が行われた昭和五十三年七月二十九日は、三〇度をはるかに超える暑さだった。夢のような一日だった。

優勝決定の瞬間、沸き上がる歓声は県営野球場を揺るがした。三塁側スタンドでは全校生徒教職員のほとんどが、右翼後方からバックスクリーンにかけて外野スタンドいっぱいには一高ＯＢが、そしてバックネット裏スタンドのほとんどともいえる一高ファンが、皆、手を取り合い、喜びの涙を流した。

閉会式を終え、一高の校庭にはステージが急きょつくられた。野球部員が壇上に、その周りを応援団が取り囲んで選手にエールをおくる。そして皆が肩を組み、ストーム凱歌で勝ち閧をあげた。引き続き行われた優勝パレードは、ジープに乗った優勝メンバーを先頭に在校生、ＯＢの提灯行列となった。百メートルにも及ぶ大行列は、市民の祝福の声の中、校歌、応援歌を大合唱しながら、上田通りから本町通り、内丸、大通りを練り歩いた。

この年のチームは前年の秋季大会で準優勝しており、実力はあった。泉館主将を中心に良くまとまったチームだったと思う。しかし、下馬評では黒工の方が一枚上で、大方が「順当ならば黒工の二年連続優勝」を予想していた。それを覆しての優勝で、喜びもひとしおだった。

我々応援団からすれば、応援のしがいのあるチームだった。大東高戦１―０の僅差の勝利では応援する者に緊張感を持たせ、準決勝での黒北戦のコールドゲームでは連打で満足感を与えてくれた。一試合ごとに応援団の雰囲気が盛り上がっていったのを覚えている。



昭和54年、盛岡一高卒業。在学中は応援団長。昭和53年夏、甲子園で応援の指揮をとる。盛岡市在住。

カットバセ、バットエール、オカワリ。試合の流れの中で、タイミング良く出していく。応援委員は、応援団を盛り上げることで選手の志気を高め、さらに選手のリズムと応援のリズムが一つになることを願っていた。決勝戦は六回のピンチで左翼手塚原の奇跡的とも言える背走好捕。七回好機での正木の逆転三塁打。選手と応援団が一体となる瞬間だった。

甲子園球場で歌った校歌は、一生忘れられない。我々が歌う校歌と銀傘にこだまする校歌、そしてＯＢのテンポの速い校歌は、寄せ返る波のように球場全体に響きわたった。

応援委員、応援団にとっても、甲子園は夢舞台である。

「一生の宝物」

中山　篤
昭和五十七年卒業

昭和五十四年度入学組は、延べ三十人が野球部の門を叩いたが、最後まで残ったのは八人だった。

ベスト16で敗退し、三年生が引退した。バッテリーを含め内・外野手のレギュラーが六人残り、監督交代も含めた新体制でのスタートがスムーズにできた。夏休みの練習には、多くの先輩たちがグラウンドに顔を出し、その成果もあり、練習試合初戦の岩手大学に圧勝し、新チームとしての好スタートを切ることができた。

新人戦地区大会の初戦は、生活学園（現盛大附属）戦を中山の二打席連続ホームランなどでコールドゲームでものにすると、その後も攻守とも好調を持続し、盛岡四高、盛岡北高と順調に地区大会を勝ち上がることができ、県大会へとコマを進めることができた。県大会の会場は宮古市。

一回戦花巻農業、二回戦山田高校を退け何とかベスト4に勝ち進んだ。県内ナンバーワンの左腕佐々木を擁する広田水産高に1―4で敗れ東北大会出場を逃したが秋の時点で県ベスト4は大きな収穫であった。

秋の好成績もあって冬場の練習にも力が入り、順調に春を迎えつつあった。そんなとき、思いもよらないハプニングが我々を襲った。レギュラーの一人がある事情で一年間試合に出場できなくなったのだ。その事を整理できずにチームは、まさかの春の地区予選敗退、夏の県大会シード権どころか県大会出場も厳しい状況に追い込まれた。しかし、チームがまとまるためには、今思えばいい敗戦だったかもしれない。

夏の地区予選の相手は盛岡農業。前半に澤村を中心に打線がつながり7―1で勝ち、県大会出場はなんとか果たした。県大会ではチームも上々の仕上がりを見せ、初戦の軽米高校を中山が三安打無四球で完封し3―0で勝ち進んだ。次はシード校の花北商業。この試合は中山、菅原の投手戦となり、1―1のまま延長戦にもつれ込み、十一回裏に中山の劇的なサヨナラスリーランが飛び出し、ベスト8一番乗りを果たした。

結局、準々決勝で盛岡市立に3―5で敗れ、甲子園出場の夢はかなわなかった。

それでも、盛岡一高硬式野球部での思い出や、出会った指導者や先輩・後輩そして同期の仲間は、『一生の宝物』になった。

最後に、後輩達の健闘と、いつの日にか甲子園に出場することを祈って結びとします。



昭和57年、盛岡一高卒業。在学中は投手。3年夏の県大会で劇的なサヨナラ3ランを放つ。仙台大学卒。現在、黄海中学校教員。

白聖野球部

第三部―昭和期④【昭和60～63年】

百年の軌跡



昭和62年夏、対釜石工戦でホームランを打った岡村を迎える一高ベンチ。


昭和60年春、対盛南戦。大形のスクイズ決まり臼沢が逆転の生還


昭和60年夏、対沼宮内戦。小松のヒットで13点目を挙げる

昭和60年[1985]

◆1・15　釜鉄ラガー、七年連続の日本一
◆12・1　国鉄盛岡工場閉鎖

盛岡市立を崩せず

◇59年秋　3試合すべて畠山―川村のバッテリーで臨んだ。県大会では、宮古商業に上位進出を阻まれた。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

龍澤高校	0	0	2	0	0	0	0	0	2
盛岡一高	0	0	0	2	0	1	0	5×	8

【ゲーム】本校の畠山は二塁打を3本放って気を吐き、逆転に貢献した。

▽代表決定戦

盛岡一高	1	0	1	0	1	3	1	0	7
盛岡南高	0	0	0	0	0	0	0	3	5

県大会は、盛岡市で開かれた。

▽1回戦

宮古商業	0	1	0	0	0	0	1	1	4
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	1	1

【ゲーム】本校は四回、一死満塁の好機を迎えたが、逆転に結びつけられなかった。続く五回の一死三塁も無得点に終わり、逆に宮古商に、小刻みに1点ずつ挙げられ、試合を引っくり返せなかった。

◇春　秋季大会に続いて県大会出場を果たす。

▽1回戦

平舘高校	0	0	0	0	0	0	2	0	2
盛岡一高	0	2	0	0	0	0	1	0×	3

▽2回戦

盛岡工業	0	0	1	0	3	0	0	5	9
盛岡一高	2	0	4	0	4	0	0	0×	10

【ゲーム】秋季大会で県ベスト4の盛岡工に対し、初回に2点を挙げ先制。三回、五回と盛岡工に点を奪われたが、その直後に加点し、常に主導権を握って試合を運び、強敵を下した。エースの畠山は冷静な投球をした上に、本塁打も放った。橋本は三塁打を2本放った。九回の反撃に冷や汗。

▽代表決定戦

盛岡南高	1	0	0	0	0	1	0	0	2
盛岡一高	0	0	1	0	0	0	3	0×	4

この年の3年生部員

教生之司勉慎基剛樹一一弘孝嗣
英和信恵　博大潤修公康和健
本村間形沢松上山市原田村原黒田
橋中岩大臼小川畠岡下松川萩中吉



昭和60年の3年生部員

県大会は二戸市で開かれた。

▽1回戦

宮古北高	0	0	0	0	0	0	5	0	5
盛岡一高	0	1	0	2	1	0	0	0	4

【ゲーム】4―0で逃げ切るかと思われた本校だったが、八回、宮古北に6安打を集中されて、逆転を喫した。

◇夏　春季県大会に出場したので、シード校として、県大会に出場した。

▽2回戦

沼宮内高	0	1	0	2	0				3
盛岡一高	8	4	1	4	×				17

（五回コールド）

【ゲーム】本校は初回、打者十二人を送り8点を挙げると、毎回得点で圧勝した。本校の六番小松が本塁打を放っている。

▽3回戦

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡市立	0	0	0	1	0	1	0	2	× 4

【ゲーム】本校は、制球が今一つ定まらない盛岡市立のエース引屋敷につけ込み、二回から八回まで走者を出した。しかし、ここ一番に決定打が出ず、川村祥平監督をして「百点満点のピッチング。あんな畠山は見たことがない」と言わせたエースの好投を援護できなかった。

白堊随想録―35

お米も野球もPR

荻原康弘　昭和六十一年卒業

テレビ局（IBC岩手放送）に勤めていると、いろいろ面白い映像にぶつかる。自分が一年生から三年生まで野球部に在籍していた時の夏の大会の映像も見つけることが出来た。

先輩達と一緒に、私の同期生も映っているが、最も多く登場するのは卒業後立教大学野球部に進み優勝メンバーとなった畠山剛君で、一年からレギュラーだったこともあり頻繁に画面に出てくる。

中には補助員として外野席の入場券を売りながら、辞書を開いて英語の勉強をしている岡市大樹君の姿もあり、こいつこんなに勉強が好きだったのかと、記憶違い？を反省したりする。

あの『お米ブラザーズ』の臼沢君の真面目な姿も妙に懐かしい。『コールドで勝たなきゃ、俺ら氷ルド！』などと公式戦の真っ最中に大声を強り上げる駄洒落の得意な二塁手だった。県庁入庁後は染之助・染太郎の芸風を取り入れた、全身白タイツ姿で岩手の米を全国にPR。その捨て身の、いやいやその至芸で一高野球部を甲子園でPRして貰いたい。

そのためにも、頼むぞ後輩。


昭和61年夏、対花北戦。好投手新田から柳原が三塁打を放つ。


昭和61年夏、対関商工戦。満塁のチャンスに桜がヒットを放つ。

昭和61年[1986]

◆4・13　平泉で八百年特別大祭開幕
◆6・7　広島カープ衣笠が二千試合連続出場

夏、8年振りの決勝進出

◇60年秋　地区予選1回戦は高橋―村田、続く2回戦は岡村―村田のバッテリーで臨んだ。

▽1回戦

盛岡一高	0	0	1	0	0	0	0	1	4	6
雫石高校	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2

▽2回戦

岩手高校	2	0	0	2	1	0	0	0		5
盛岡一高	0	0	0	0	0	2	0	1	0	3

◇春　地区予選を順調に突破した本校は、県大会でベスト4入りを果たした。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡一高	0	0	0	5	0	0	0		5
岩手高校	2	0	0	0	0	0	0		2

▽代表決定戦

盛岡四高	0	0	0	0	0	0	0		0
盛岡一高	3	1	2	1	1	0	0	×	8

県大会は、釜石市と大槌町で開かれた。

▽1回戦（不戦勝）

▽準々決勝

岩泉高校	0	0	0	0	1	0	0	0	1
盛岡一高	0	0	2	1	3	0	0	×	6

▽準決勝

大船渡高	0	1	0	2	0	0	4	2	1	10
盛岡一高	0	0	0	3	0	0	0	0	0	3

【ゲーム】3―3の同点で迎えた七回、大船渡に4安打と2失策を生かされ、4点を奪われ流れをもっていかれた。本校は先制されながらも四回、大船渡の失策絡みから3点を取ったが、大船渡宮原に六回以降1安打に抑えられた。

◇夏　シード校の本校は、2回戦から登場。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡一高	1	0	2	1	2	0	0		8
専大北上	0	0	0	0	0	0	2		2

▽3回戦

広田水産	3	0	0	0	1	0	0	0	4
盛岡一高	2	0	0	4	0	0	0	1	7

この年の3年生部員

桜	鈴	高	村	柳
	木	橋	田	原
克	伸	直		和
宏	宏	人	忍	久



昭和61年の3年生部員

▽4回戦

水沢高校	2	0	0	0	1	2	6
盛岡一高	1	0	0	0	2	0	1×	7

▽準々決勝

花巻北高	0	0	0	0	0	0	0
盛岡一高	0	0	0	0	0	2	0×	2

【ゲーム】好投手新田を擁する花巻北をむこうにまわし、本校エース高橋は被安打2本の好投をした。本校は六回、二死から四球と中前安打で一、二塁とし、七番柳原が右中間三塁打を放ち2点を奪い、優勝候補を下した。

▽準決勝

盛岡商業	0	0	0	0	0	2	2
盛岡一高	0	0	0	2	1	0	0×	3

【ゲーム】本校は四回、2三塁打で先取点を挙げた。2点目は四番桜の投前スクイズでもぎとった。五回には、二死から八番女鹿、九番佐々木(傳)、一番鈴木の三連打で決勝点を挙げた。

▽決勝

一関商工	0	1	1	0	0	0	3	0	5
盛岡一高	0	0	3	1	0	0	0	0	4

【ゲーム】2点を追う本校は三回、一死満塁の好機に、四番桜の安打で同点とした。なお一、三塁で高橋が一前スクイズを決め逆転。四回には失策に乗じて加点、本校ペースにもち込んだが、関商工渡辺の好リリーフの前に追加点を奪えず、逆に八回3点を奪われ逆転で甲子園を逃がした。

白堊随想録－36

一つの勝利

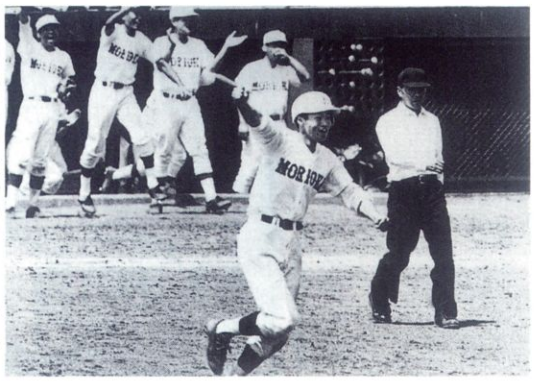
高橋直人　昭和六十二年卒業

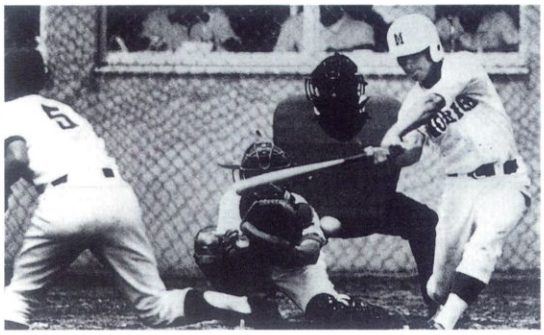
ギラギラと照り続ける太陽と球場にこだまする大歓声は、十二年経った今でも昨日のように思い出す。甲子園まであと一歩まで迫った昭和六十一年の夏は、私たちにとってひときわ"熱い夏"だった。

私たちは三年生が五名と少なく、大会前の新聞や関係者の下馬評は高くなかった。しかし、川村祥平監督の絶妙な采配と選手の気持ちが一体となり快進撃。初戦の専大北上を8―2で撃破すると広田水産を7―4、水沢を7―6と下してベスト8に進出した。

準々決勝は優勝候補の筆頭で豪腕新田を擁する花巻北。六回に柳原和久の三塁打で挙げた2点を守り切った。準決勝の盛岡商を3―2で下し、決勝は一関商工と対戦。惜しくも4―5で敗れた。

夢はついえたが、私たちは二年半の練習の成果を十分に発揮できた。それは高畑嗣人コーチをはじめとする多くの先輩たちと一、二年生の支えのおかげであり、何よりも私たちがおごる事なく憶する事なく『一つの勝利』を積み重ねた結果だと確信している。


昭和62年夏、対釜工戦。岡村が2ラン本塁打を放ち、思わずガッツポーズ。


昭和62年夏、対黒北戦。松田が2点目を挙げるタイムリー安打を放つ。

昭和62年[1987]

◆2・27　県立中央病院が新築落成式
◆4・1　JR東日本が発足

春・夏ともにベスト8

◇**61年秋**　代表決定戦まで進んだが、粘り強い試合運びをする盛岡三高の前に敗れた。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡一高	2	0	0	3	1	3	0	9
盛岡農業	1	0	0	1	0	0	0	2

（七回コールド）

【ゲーム】7長打を含む猛攻で本校は快勝した。三塁打は、吉田、佐藤、松田。二塁打は、佐藤、細川、岡村、小松であった。

▽代表決定戦

盛岡三高	0	1	0	1	0	0	0	5	7
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	6	0	6

【ゲーム】本校は八回、女鹿の死球を足がかりに、5長短打で6点を挙げ試合を決したかに見えたが、九回、4長短打に失策がからみ逆転を喫した。

◇**春**　本校は松田―川村のバッテリーで、春の3ゲームを戦った。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡北高	0	0	1	0	0	0	0	0	1
盛岡一高	0	1	0	0	3	0	3	0×	7

▽代表決定戦

盛岡南高	0	0	2	0	0	0	0	0	2
盛岡一高	0	3	0	2	0	0	1	1×	7

県大会は大船渡市で開かれた。本校は初戦で前年夏の決勝で当たった一関商工と対戦。

▽1回戦（不戦勝）

▽準々決勝

一関商工	1	0	0	0	2	0	1	1	5
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0

【ゲーム】本校は守備のリズムをつかめぬ上に、関商工エース渡辺（前年の甲子園投手）の前に、散発の6安打に終わった。

◇**夏**　シード校として本校は、2回戦より登場した。

▽1回戦（不戦勝）

この年の3年生部員

菊池拓治　吉田賢渡　小松久宣　松田誠　杉田寛　中村哉　阿部計也　佐々木伸亨　岡村淳　伊藤彦　佐藤洋亨　小野寺巨　和山文　女鹿芳



昭和62年の3年生部員

▽2回戦

盛岡一高	0	0	0	1	1	4	11
釜石工業	2	0	0	0	1	0	6

【ゲーム】2点を先制された本校は、中盤逆転に成功した。四回、本校エース岡村が自らの二塁打で、まず1点。五回には、九番佐々木(傳)、一番細川の連続長打で2―2に追いついた。六回には一挙4点を挙げ、釜石工の反撃を抑え込んだ。合計15安打のうち、長打は9本。岡村と佐藤の本塁打をはじめ、3三塁打と4二塁打。

▽3回戦

盛岡一高	1	0	1	0	0	0	5
黒沢尻北	0	1	0	0	0	0	2

【ゲーム】同点で迎えた三回、本校は三塁打の細川を松田が還して1点を挙げた。七回には黒北リリーフ高橋から4四球で押し出しの貴重な追加点。2回一死からリリーフした杉田が好投した試合だった。

▽準々決勝

盛岡一高	0	0	0	0	0	2	2
宮古北高	1	3	1	1	1	0	9

(八回コールド)

【ゲーム】本校投手陣は、宮北打線に11安打を浴びた上に、12四球を与えてしまい、大量点を失った。本校は一回から五回まで、得点圏に走者を出しながら生かせなかったのが響いた。

第六十九回大会、私たちの最後の夏は、ベスト8という成績で終わった。あれから十二年たった今、大きな敵と戦った一年は、我々しか経験できないものであり、この百年の歴史の中でも自負できるものであり、誇りに思っている。

白堊随想録― 37

もう一つの大きな敵

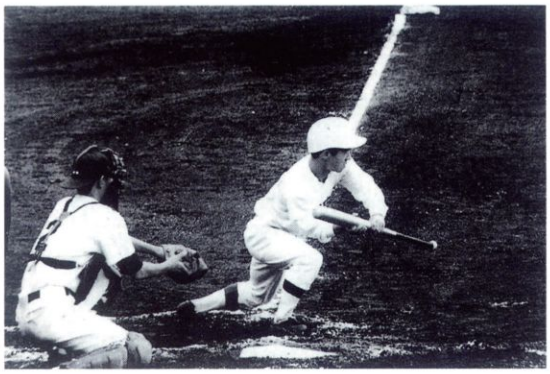
女鹿　芳文　昭和六十三年卒業

私たち昭和六十二年卒の部員は、試合で戦う相手校の他にもう一つの大きな敵と常に戦いながら最後の一年を過ごした。部員の誰も口には出さなかったが、誰もが戦っていたに違いない。

昭和六十二年の夏、良き五名の先輩達と共に県大会準優勝という経験をした。この年の夏が終わるととともに、大きな敵との戦いが始まった。

前年度に準優勝、しかも県大会では私たちの代からも選手としてプレーをしたものがいる。周囲の期待は、否応なしに高まる。また、我々も意識した。しかし、前年度のチームのようなプレーができない。主将であった私もチームづくりができない。焦燥の思いだけが募る毎日であった。私自身、主将でありながら野球部をやめたいとさえ思った。


昭和63年夏、対宮商戦。


昭和63年夏、対宮商戦。

昭和63年[1988]

◆4・10　県立不来方高校が開校
◆11・29　新日鉄釜石野球部が休部

夏、宮古商業に惜敗す

◇62年秋　本校は山口―高橋のバッテリーで、地区予選に臨んだ。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡一高	0	0	1	0	0	0	0	1	0	2
盛岡市立	0	0	0	0	0	0	2	0	×	3

◇春　代表決定戦を圧勝し、県大会に進んだ。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡一高	1	0	1	1	0	0	0	0	3	6
雫石高校	0	0	0	3	0	0	0	0	0	3

【ゲーム】本校の長打は計3本だった。細川（琴）（本塁打、二塁打）と清水（三塁打）が放った。

▽代表決定戦

盛岡一高	0	0	2	0	1	1	5	2	2	13
盛岡四高	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1

【ゲーム】両校合わせ28本の安打が飛びかった。本校の安打は18本だった。七回には、盛岡四二番手酒井から2四球、3長短打で5点を挙げ、圧勝した。

県大会は、北上市と和賀町で開かれた。

▽1回戦

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
宮古高校	0	1	0	1	0	4	0	0	×	6

【ゲーム】本校は松本―川村のバッテリーで臨んだ。本校は四、五回に同点、逆転の好機を迎えた。四回には無死満塁としたが一本が出ず、走塁ミスが重なって無得点。続く五回は、スクイズ失敗。七回にも得点圏に走者を出したが、宮古エース石田の前に3連続三振に終わった。

◇夏　第七十回記念大会であった。春季県大会出場校すべてがシードされ、本校は2回戦から登場した。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

宮古商業	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

この年の3年生部員

也	仁	文	幸	兆	樹	康	二	文	志	紀	晃	輝
琴		康	則	傳	成		英	雪	一	博	正	真
川	村	木	口	木	水	川	本	橋	田	藤	藤	橋
々	々	々	々	々	々	々	々	々	々	々	々	々
細	川	佐	山	佐	清	細	橋	高	島	伊	加	高



昭和63年の3年生部員

【ゲーム】本校松本、宮古商北舘の投手戦だった。被安打は松本3本、北舘2本。初回に1点を先制された本校は、四回にも失策から2点目を奪われた。本校は二、八回に得点圏に走者を出して粘ったが、反撃し切れなかった。



昭和63年夏、円陣を組む一高ナイン

白堊随想録—38

伝統から未来へ、世界へ

島田一志　平成元年卒業

平成九年四月二日、盛岡一高対大阪府市岡高校の練習試合が、滋賀県の某校グラウンドで行われた。両校の対戦は、大正十年の第七回全国中等学校優勝野球大会以来であるから、実に七十七年振りということになる。

市岡高校とその前身である市岡中学校は、佐伯達夫氏(前の全国高野連会長)をはじめ多くの野球人を輩出した名門である。一方、盛岡中学出身の選手にも、戦前までの日本野球界をリードした多くの人材がいた。

明治三十五年、早大野球部は初めてアメリカへ遠征し、バントやスクイズプレーなど、近代野球の基礎となる多くの技術を日本に持ち帰った。この時のメンバーに、盛岡中学出身の小原益遠、獅子内謹一郎の両氏が含まれていた。また、昭和九年に全米大リーグ軍が来日した時、これと対戦した全日本軍の正捕手は、盛岡中学校出身の久慈次郎氏であった。沢村栄治、久慈のバッテリーは、静岡草薙球場で行われた試合で、0—1と惜敗するものの、ベーブ・ルースやルー・ゲーリックといった当時世界最高の打者を連続三振に仕止めた。このように、日本野球の歴史的場面には、常に盛岡中学校出身の姿が在ったのである。そして、このような選手が持ち帰った技術により、白堊の野球は進歩を続けてきたのである。

盛岡一高野球部は、今年(一九九八年)を以て、遂に二十年間夏の甲子園から遠ざかることになってしまった。端から見れば、沈黙の時代に感じられるかもしれない。しかし、東京六大学をはじめとする、大学野球リーグの記録を見ると、盛一野球部出身が多くの選手の名前を見つけることができる。その中にはリーグのベストナインに選ばれ、個人タイトルを獲得し、そしてリーグ優勝のメンバーとなった選手も存在する。

現在、これらの諸先輩はしめ、多くの方々の指導により、盛岡一高野球部は新たな発想や技術を体得しようとしている。明治時代より脈々と受け継がれてきた白堊の野球、それは、常に先駆的であろうとし、自己革命を続けてきた軌跡である。今も続けられるこの努力の成果が結実する時、盛岡一高野球部に再び黄金時代が訪れるであろう。そして、その中から近い将来、オリンピックや米大リーグでプレーする選手が現れ、更に新たな視野の野球を後輩に伝えてくれることを願う。

特集②座談会
「一高野球今昔」
―明日に向かって―



出席者／長沢正夫（昭和７年卒業）
森雄一（昭和26年卒業）
安嶋信雄（昭和27年卒業）
杉田清彦（昭和38年卒業）
金野健（昭和51年卒業）
司会者／村松昇（昭和25年卒業）

村松　長沢さんは昭和7年卒業ですね。その頃というのは、今と違って東北6県で大会をやって、奥羽大会、東北大会とそうなる過渡期だと思いますが、当時の状況からお話し願えれば…。

長沢　私の時は東北は仙台でやっていました。それから、5年（16回大会）が盛岡中学でやったのかな。あの頃は、盛岡中学そのものが花巻の方々が多かったですね。山田五郎さんにしてもショートの島功一さん、セカンドの三浦卓夫さん、それからサードの三又六郎さんは石鳥谷。ファーストの畠忠夫さんは大迫。センターの方も花巻ということで、大正15年の時には花巻勢で優勝していくんです。その後、ピッチャーが佐藤源蔵といって私の同級生ですが、これも花巻です。あの頃は花巻は中学校がなかったものだから、みんな盛岡に集まってやっていたわけです。

村松　大正時代というのは、当時の盛中と関中が交互に出たんですね。その後、福岡中学が台頭してきて…。

長沢　10年頃からかな、福岡がチームを作ったのが…。だから、中津川という明大

に入った左ピッチャーがいましたが、その後、戸来誠というのが出てきて大正15年に盛岡と決戦をやったわけです。福島でね。そして、盛岡が勝って行ったと。私らの盛岡中学は、毎年優勝候補だったんです。

村松　県大会では優勝してはいるんだけれども、東北大会に2チーム出て行って負けたというのがありますね。

長沢　8年にまた行っているでしょ。その優勝候補の当時、私はいたんだけれどもとうとう行けなかったんです。

村松　惜敗してるわけですか。8年は弟さんの常人さん、そして海野さん。

長沢　そうそう。海野君がピッチャーで行ったんですよね。海野君をリリーフした吉田。それらで行ったはずです。

村松　こういう話があるんです。甲子園で浪商とぶつかるんですね。2回に10点取られたんです。そしたら、当時、亡くなった関さんがファーストで出てて、もう途中で帰りたくなったんだそうです。そういう話を関さんから聞いたことがあります。

長沢　第1球を海野が投げたら、バックネットにぶっかったんですよ（笑）。



長沢正夫

村松　当時マウンドがなかったそうですね。校庭だから…。甲子園に行って初めてマウンドに上がったという話もありますね。

長沢　とにかく私らの時は夏1本だけだから。春4月から練習して、負けるとすぐ夏から秋はずっと練習して、また翌年の夏まで何もないわけです。ただ練習、練習でやってきたんです。

村松　しかも今お話しした通り、グラウンドも盛中の校庭で。

長沢　そうそう。校庭でやっていたんです。だから、私らが入った当時は、下級生が時間を見つけてグラウンド整備をしなければならないわけです。ベースを持って行って、バックネットを張って、水を汲んで行って、ダイヤモンドの石拾いをして、先輩に「さあどうぞいらしてください」というようにしてやってきたものです。

村松　我々の時は、県大会が花巻でした。

長沢　あれも1回きりで止めてしまったんですよ。

村松　そしてずっときて、14年からですね、盛岡市営球場を使ったのは…。

長沢　そうですね。13年にできたから、

14年です。

村松　それがいわゆる歴史的、一高にとっては悪夢の大会だったわけですね。例の7―4でリードしていたのが、8回、9回でやられたという…。結局、敵性スポーツだということで中断があり戦後に入って、森さんとか安嶋さんたちの時代になってくるんですね。

長沢　私は帰って来て22年から審判をやりましたが、翌23年まで盛鉄を使ったわけですね。あの時の決勝は一関とどこだったかな。

森　福岡は強かったですね。横館、高木とかいてね。そこに勝つつもりだったんですよ。前の日バント練習をしていて、怪我のためエースが出られませんでした。

安嶋　ちょうど森さんたちが中学3年生で、あの時は強かったですね。

森　吉沢、若柳とかいましたしね。しかし、学制改革で高校野球になって進級できないのが出てきた。それで、我々が高校1年の時に、軟式野球部から河野さんとかいろいろ集めてようやく出たんです。村松さんが2年生でしたね。

村松　部員はたくさんいるんだけれど、学制改革の絡みで出られない部員がいるんですよ。

安嶋　私たちの頃は10人ぐらいいましたね。下級生がいないから、私たちより下はいないんですよ。学制改革のおかげで、盛岡中学で野球を6年間やったのは私ぐらいのもんじゃないですか。

森　私は20年に盛岡中学に入って剣道部だったんです。野球なんてやったことがありませんでした。中学1年の時にThis is a pen.を習ってすぐ動員ですよ。今の外山牧場…。そこで、テニスボールでキャッチボールをやったのが初めての野球経験でした。帰って来まして8月に終戦でしょ。そしたら予科練帰りが来たんですよ。先輩が…。石川さんとか小川清さんとか…。それで、応援歌練習の勧誘に来た時に、一番怖そうだったのが野球部の上級生でした。とっさに「野球部に入ります」と言ったのが野球をやった要因でした（笑）。あの当時の野球は、内野は体で止めて前に落としてファーストで殺すという指導が多かったですからね。今みたいな軽快なフットワーク

なんていうのは、全然信じられないです。

長沢　わたしはサードをやったんですが、とにかく腹で落とせ、それから投げれば間に合うんだという…。

村松　私は21年の春に野球部に入ったんです。20年の冬はバスケットをしていたんです。

森　村松さんは1級上だけれど、あの当時からこのくらいの体格でした。圧倒的に体格がよくて、走ってよし、投げてよしでね。最初から大きかったです。

村松　話は前後しますが、長沢さんは22年に復員というか、昔の満州から引き上げて来たんですよね。

長沢　満州ではなくシベリアです。シベリアに1年半いて4月10日に帰って来て11日からはもう審判でした。盛岡で市内の大会をやってましたから。

村松　町内対抗か何かだったんでしょうかね。下の橋とかあの辺の校庭を使ってやってましたね、あの頃は…。

森　ところで私らが入った頃は、「ネット前」と呼んでいたキャッチボールがあった。とにかく10人ぐらい並んで1人立ってやるんですよ。先輩で肩の弱い人は5歩ぐらい前に進んで、その代表が宮川清さんでしたが（笑）…。それで、グローブのボールの殺し方とか覚えた。



安嶋信雄

村松　ネット前用のグローブというのがあるんですよね。薄いやつ…。

長沢　私はファーストをやっていたから、ワンバウンド、ワンバウンド練習でした。

村松　今そういうのをやらせたら、非科学的とかなんとか言われるだろうけれど、そういう練習も常時というのではないけれど、やっぱりあってもいいんじゃないかと思いますね。

金野　私も村松先輩のおっしゃる通りだと思います。合理的な練習が全て技術につながるかと言えばそうでもないですね。がむしゃらに球に食いついて、必死に練習に取り組む中で知らず知らずに身に付くものが沢山あると思います。私も一高時代にネット前キャッチボールや大学時代ファーストコンバートされた時のワンバウンド練習をいやなほどやらされましたが、それが身について、一度も後逸したことがなかったと思います。

長沢　我々の時代は片手取りというのは、絶対なかった。今はみんな片手取りでしょ。ゴロだって体を持って行けばいいものを横で取ったり…。

森　道具がよくなったせいですかね。グローブから指を出したりしてるものね。昔だったら指を出したらすごいから…（笑）。

長沢　そりゃもうぶん殴られるんだもの。片手取りなどやったら…。

安嶋　当時は用具がなくて…。とにかく毎日ボールを縫いにうちに持って帰った思い出があります。

村松　長沢さんの頃は、ボールなんていうのは豊富にあったんですか。

長沢　ないない。私も縫い方をしましたもの。

森　糸も弱かったんじゃないですかね。

村松　スフだもの。わかりますか。スフというの…。

安嶋　うちにある糸が1番強いっていいましたね。ボタンをつける糸が…。麻にロウを塗ったやつ…。だから、必ずいつも3つぐらい持って帰った。随分縫わされた。

長沢　私の時は木綿の太い糸でしたね。

森　2、3球打つとすぐほどけましたね。国産は…。そして、進駐軍のは丈夫なんだよね（笑）。

安嶋　縫い目が固くてね。

村松　だいたい我々は終戦後だから物ももちろんボールもないし、そうすると、先輩が戦前にもらったサインボールとかで練習したものですね。今ではかなり高価なボールになるんじゃないかな。

安嶋　私も野球部に入ったら、高橋直治さんという先輩がいたでしょ。あの人から甲子園に行った時のユニホームをもらったんですが、大きいわけですよ。そしたら、すぐ取り返されましてね（笑）。

長沢　直治さんは営林署でしたね。

安嶋　そうです。隣同士でしたから。野球部に入ったら、俺が甲子園に行った時のユニホームをあげるからと…。

村松　最初の頃はスパイクも何もなかったですよね。

長沢　審判はないです。私は軍靴を履いて審判をやりましたよ。

村松　長沢さんたちが選手の頃は、審判

はどういう人たちがいたんですか。

長沢　私の兄貴とか金田一さんとか、坂本さんとか飯岡さんとか、私たちをコーチしてくれた人たちがやったりしてました。

村松　坂本金吾さんも審判をしていたんですか。

長沢　審判にも立ったことがあるかもしれないね。

森　私たちがやっていた頃は、ほとんど盛岡中学の先輩がチーフでした。今は協会で育ててやるというのだから、コンピューター的で厳しいでしょ。我々の時の審判は、野球をやった人が多いからボールが伸びて来ると外れても取るんですよね。審判の癖をつかむのも監督の一つのあれですね。アウトサイドに甘いとかインサイドに甘いとか、そこら辺まで勉強しておかないと大変なような気がしますね。

長沢　今のはアメリカ式でね。

村松　あの頃は6大学から審判を呼んで来たんですよね。

長沢　そうです。東北大会は6大学が来てやったんです。

安嶋　私たちの時は、岩手県大会も坪井さんが来てやってましたよ。



森　雄一

村松　大事な試合は長沢兄弟に決まってましたから。みんなそれが当然だと思ってるわけです。だから今でも思い出すんですが、我々が甲子園に行った時に、黒沢尻高校とやった時のチーフも長沢さんでした。

長沢　黒沢尻のエースは佐藤だった。

村松　それから、こっちが田頭でしょ。後で聞くと、田頭の球は今で言えばスライダー。あの頃はシュート。それを田頭は「長沢さんがとったから俺は勝ったんだ」と（笑）。

長沢　かかってきたのはとらなければならない（笑）。

村松　43年のベスト8の時に大槌に瀬戸というピッチャーがいて、あれと2回戦でぶつかったんですよ。そして1―0で勝った。小笠原と瀬戸の投げ合いでした。その時も長沢さんでした。

長沢　私がやったと思います。それから、岩泉とも延長戦をやったんじゃなかったかな。

村松　あの頃は、盛中の試合となると誰もする人がなかったんです。

長沢　村松武雄さんが「長沢、お前がやれ」と言うから…。

村松　金野さんの頃になると、我々の仲間がやっていたんですよね。

金野　特に記憶に残っているのは猪狩さんと石川さんですね。盛岡商業との決勝戦での主審は猪狩さんでした。結果からも判るように相性がもうひとつというか。一方、石川さんが主審の時は、私達にとっていい試合ができたというような思いはあります。

森　あのへんは有名だったからね。癖は分かりましたね。

長沢　戦後では木村というのはいいピッチャーだったね。宮古のね。

安嶋　あの時は宮古は強かったから…。

森　私らは奥羽大会で一関に勝ったんですが、1回戦の青森のピッチャーはよかったですね。背が大きくて…。私はあの時絶好調だったんですが、あれには三振取られました。

村松　石田といって、当時の近鉄パールスに行ったんですよ。あれも長沢さんが球審をしたんじゃないですか。

長沢　私がやったかもしれないな。

村松　とにかく決勝は長沢さんでしたね。

長沢　決勝は私がやったんです。

森　黒沢尻の佐藤君がすっかり疲れて来て助かりましたね。3点取りましたよね。黒沢尻から…。

長沢　やっぱり田頭はうまかったね。

村松　あれは、守備を含めてうまかったですね。

森　今で言えば「ピッチャー屋」でしたね。素質があって、自由自在の投球ができる選手です。シュートもあったしカーブも入るし、真ん中は来ないしね。

長沢　でも、木村は棒球だったけれど、宮古の佐々木勝利というのがいたね。

安嶋　広島に行きましたね。

長沢　あれは2年の時が1番よかったね。

森　話は全然変わりますが、最近、プロ野球がグリップをあけてやるのに、高校生はバットをずいぶん長くもっているのでチェックはないのかなと、いつもネット裏で見ているんですが…。去年も盛岡一高の試

合を見ましたが、なんであんなに長く持っているのかなと思いました。

金野　そうですね。それからプロ野球選手のバッティングフォームのまねが多いですね。自分の体力に合うようなフォームやバットの長さがあると思うのですが、それらをもっと自分で工夫し、また監督、コーチが指導するべきと思います。また、試合に勝つためにどんなことをしなければならないかが徹底されていないですね。負けるときは、四死球、エラーがほとんどの原因ですね。これらの対策にもっと力を入れるべきではないでしょうか。

村松　昔は短打主義と称してましたね。

長沢　スピードボールが来れば、必ず短く持てと言われてたけどね。それと投手のことで言えば、私たちの時は、左なんていなかったんですよ。左にぶつかったらもうだめと頭から決めてました。

安嶋　私たちの時は、岩高の小武方がいたし秋田高校にも左腕の良い投手がいましたね。けっこういましたよ。

長沢　戦後はね。戦前、私たちの時はほとんどいなかったね。だから、弘前の東奥義塾の左ピッチャーが来た時、誰も打てる人がいなかったんですよ。



金野　健

村松　戦前八戸中学の大下というのは…。

長沢　あれはやはり剛球ピッチャー。私は、社会人の盛岡実業に入ってから打ったことがある。

森　ところで、基本というのはいろいろあるだろうけれど、どんなふうに思われますか。

金野　野球をする上で、捕る、投げる、打つ、走るの動きのなかで、特に重要視されるのは、投げると走るだと思っていますが、特にも確実に捕球し、正確に投げることが高校野球の基本だと思います。ですから、キャッチボールやボールまわしが重視されるのではないでしょうか。

長沢　キャッチボールなんかもね、私は3年の時だったかに春の合宿で早稲田に行ったんです。その時、伊丹さんが私たちのキャプテンをやって、あの方からキャッチボールの基本を教わったんです。そしたら戦後、川上氏がＮＨＫの学童の指導で来て、同じことを教えているんだよね。だか

ら、キャッチボールの基本はそのまま生きているんじゃないのかなと思っているんです。今、プロ、アマ合同の練習でも広岡がキャッチボールの基本ということを指導しているんです。どういうことを指導しているか、昔どおりではないのかな。キャッチボールを見直せということをプロもやっているようですよ。我々の時代は、バットを振るにしても投げるにしても、とにかく一生懸命だった。

村松　冬はどういう練習をやっていたんですか。

長沢　冬はほとんどやっていません。だから、私はスキーをやっていましたよ。体を鍛えろっていうことで…。

安嶋　私たちは、森さんに「競馬場をひと回りして来い」って言われて走って来て、バットを素振りして終わりでした。

長沢　3月に入ればランニングをするようになりましたね。バット振りというのは私たちの時は、朝出かける前に50本、家に帰ってから50本振れということで、晩飯を食べるのは9時過ぎでした。私は下米内だから1里くらいありましたから、そこへ歩いて帰ってそれから50本振りました。

森　今はキャッチボールの時間も短いですよね。もう少し長くすればもっといいボールを放れるかもしれないね。我々のようにへたくそで野球やったことがないのがやっても、ある程度放れるようになったから、すごくキャッチボールを長くやったんですね。

金野　私たちはとにかく走りました。毎日5キロから10キロほど走ってから、短い距離のダッシュを繰り返しました。ただそれだけでは飽きるので、サッカー・ミニサッカー・バスケット等を盛り込み、楽しみながら練習をした覚えがあります。気温の高い日はキャッチボールもしましたし、ティーバッティングは極力多くやったと思います。

村松　とにかく冬はボールを握るな、寒いところではボールを扱うなと昔は言われてました。すぐに肩にくるから…。水泳に行ってはだめとか…。

長沢　私たちの時は川に入るなと言われたよ。

森　だいたい水を飲むなって言われまし

たよね（笑）。大学に行ったら、じゃんじゃん水を飲まされて塩をなめさせられてやりましたが…。

長沢　水を飲むなと言えば、夏に汗が白くなるんですよ。１００本ノックなんてやられると、もう塩になって白くなるんです。それでも水を飲ませられなかったね。

安嶋　飲ませられないでかけるだけでしたね（笑）。

長沢　それで、目的がたった夏の甲子園1本だけなんです。

森　現在の一高の場合は、他の高校と違って勉強の方でも疲れるだろうし、他の高校と同じ練習をしていたら、一生甲子園には行けないというのが私の持論なんです。一高の生徒は野球が好きで来ているから、甲子園に行きたいという願望も強いし、だからその目標を生かすようにもっと効率よい教え方をすれば、岩手県内だったらばまだチャンスはあると思います。ピッチャーがある程度2つか3つ、いいボールがあってストライクが入れば、まだまだ一高は（甲子園に）行けるという可能性はありますね。



秀吉本町本陣にて

村松　だんだん薄れてはきましたが、まだ岩手県のレベルなら私はチャンスはあると思います。

森　1人ずつ見れば全然落ちます。24年に黒沢尻に勝った時も1人ずつ見ると雲泥の差です。53年に行った時も黒沢尻工業と見るとご存じの通り、相手はノンプロに行っても活躍してる連中ががばっといるんですものね。プリンス高橋とか、経済連畠山とかみんなすごいんですよ。そこに勝つためには、普通の練習をやっていたのではだめですね。最近そう思いますね。毎年負けて悔しい思いをして、解説していてものもしゃべられなかったです。だけどあの時は善戦でしたね。岩手日報の記者をしているピッチャーで高橋の時（昭和61年）は…。あの時は本当にいい試合をしましたね。

村松　あの頃はまだ招待試合をやっていたんですよ。箕島が来て試合をして6―1で負けたんですよ。ところが尾藤監督が「うちのやつらが、あのピッチャーの球を打てないのが不思議だ」と言うんですよ。見た目は普通で、ところがわずかにシュートするか変化する球があったわけです。そ

ういうピッチャーかなと思って「お前、自信をつけろよ」と言ったんです。それがよかったんですね。

森　腕の振りが早いようで来るボールが遅いんですよ。だから、タイミングが合わないんです。

村松　昔はどのくらいピッチングをしたもんですか。

長沢　昔はどのくらい投げ込んだものかな。バッテリーは離れた方でやっていたからね。

村松　その頃はバッテリーコーチとかピッチャーコーチとかは特にないんですよね。

長沢　ないんだね。誰かが来た時にはついてやってもらっていたけど…。背番号1は初めからバッティングピッチャーだね。同級生がみんな打つまで投げなければならなかった。

村松　金野さんの時（昭和50年）にも、最初の招待試合で東海大相模とやったんですよね。

金野　はい、そうです。原君、津末君がいた春の選抜大会で準優勝の東海大相模と昭和50年の4月に県営野球場で試合をしました。2、3週間前まで雪かきをしながら選抜大会を見ていた私達が、思いもよらない全国準優勝チームとの対戦でしたので、こてんぱんにやられました。またその上、我が岩手県の女性ファンも全員、原君に捕られてしまいました。

村松　そしたら原監督がその時、盛岡一高のバッテリーをほしいと言うわけですよ。あそこはあの時、はっきり言ってピッチャーが弱かったんです。一高のバッテリーだったら計算できると言うんです。全国大会に連れて行ってシャットアウトはできないけれどただ計算はできる。うちはバッティングはあるから…。うちのピッチャーはそれができない。特にキャッチャーが素晴らしい。私がサインを出すのをちゃんと気をつけて見ている。ああいうのは、高校生では珍しいと言うんです。絶対、大学でも社会人でも行けばよくなるよと言われたんです。そしたら、その通り、林、金野のバッテリーはそれぞれ大学でキャプテンをやった。

夏に強い盛中

安嶋　宿敵だった盛商の思い出を何か…。

金野　夏の大会まで新チームになってからは、大会、練習試合では負けたことがありませんでした。ただ、完勝ではなかった。何か嫌らしさのあるチームでした。唯一夏の大会決勝での敗退の伏線があったのでしょうか。

長沢　昭和6年に盛商と練習試合を5、6回やって、勝ったことがなかった。それが1回戦でばっちりぶつかってしまったんですよ。商業には負けてられない、なんとしても勝たなければならないというので、とうとう勝ったんです。決勝で福岡に負けたけれども、とにかくあの時の気迫と言ったら、盛岡中学はたいしたものでした。

村松　昔はそういうあれ（気迫）がありましたよね。

森　夏に強い盛岡中学って評判だったんですよね。昔は嫌がられたものですよね。

村松　本番になったら絶対負けないぞという気があったわけです。私らの時も分かれて商業とぶつかって…。あの時のチーフは誰がやったんですか。

安嶋　坪井さんですね。

森　野球協会も考えて、商業と一高だと坪井さんあたりにやってもらわないと…。

安嶋　だから新聞を見ても、批評を坪井さんが書いてましたね。

村松　ちょっと後になってプロの審判をやった平光。彼も来たことがあるんです。奥羽大会で平光が球審をしたんですよ。そしたら「審判は、盛岡の方がうまいぞ。お前はどこのやつだ」なんて言われてね。そういうこともあったりして、親父に「呼ぶことはない」って言ったことがあるんです。あの頃の審判は今とは違って、長沢さんを始め常人さん、斎藤一雄さん、藤原さんと私と、だいたい盛中でしょ。あとは、盛商の連中でしょ。そうするとぶつかった時に、やっぱりそのつもりはなくても人の目というのはえこひいきに見られるから、だから上手、下手でなくて呼ぶんだということを言ってましたね。

長沢　我々にとっては気休めで、我々だけでやってもいいんだけれど、中央から来られたという人をそこに入れて、休むとい

うことなんですよ。

森　その審判の問題なんですが、日程をもう少し余裕をもって雨降りにやらないようにしてもらわないと、選手もかわいそうだけれど指導者もかわいそうです。福岡の欠端が行った時は大変でした。市営球場で…。あの時は解説をしながら見ていたんですが、田圃でやっているような感じで、欠端のところは負けるとこでしたものね。甲子園に行った年…。

長沢　私のせがれ（長沢佳彦）がコーチをやっていたんですよ。福岡で…。

安嶋　相手は住田高校ですね。

森　よかったですね。あの時は福岡が勝ってくれて…。

村松　あの時はあと1回すれば、コールドゲームで福岡が勝つなという時だったんです。そしたら降って来て、もう止められなかったんです。7対6に追いつかれて…。

長沢　雨降りに弱い学校もあるんだよね。私たちの時は、雨よりは風の方が嫌で雨は大丈夫でした。風の強い時のゲームは嫌だったね。

村松　確かに風が強い時は嫌ですよね。

長沢　今は軟式なんかは、雨降りの時でも全部やらせますよ、全国大会でも。台風が来たってやるんだから（笑）。

安嶋　1球ごとにボールを変えるんですよね。

長沢　甲子園で今年は休ませたようですが、高田高校が行った時かな。あの時はひどかったですね。

村松　でも今はいいですよ。ほとんどナイター設備があるから。それに今は楽ですよ。1日3試合で9時開始ですからね。

長沢　私たちの時は1日4試合（審判）やりましたからね。サマータイムの時は、5試合やりましたよ。

村松　7時半開始で最終が4時40分頃ですか。

長沢　そうそう。4時を目安にと言うんだけど、どうしても遅れるんですよ。だからその時は、球審を1、3、5と3試合やるんです。

遠投をもっと

森　最近3、4年学校に練習に行っていないんですが、遠投というのがなくなりましたね。それからピッチャーも設備のいいピッチング練習場でそこだけの距離でやっているし、もう少し遠投とティーバッティングぐらいはやって、すっかりフォームを直してやった方がいいと思います。遠投は必要だと思いますよ。社会人の連中もみんな遠投をやっていますよ。

村松　やっぱりキャッチボールが基本ですよね。

森　遠投でスナップがかかって、ボールが1ベース半から2ベース行けば素晴らしいですね。そうすればマウンドに上がった時に楽じゃないかな。

村松　金野さんは、例えばこれから一高の監督をやったとして、明治の経験を生かしてどういうふうにしますか。

金野　やっぱり基本的なことじゃないですか。

長沢　今、高等学校では、体をほぐすのはどの程度やっているんですか。

森　体操なんかはあまりやらないんじゃないですか。

長沢　社会人だと、何時プレーってなると、1時間は体のほぐし方をずっとやっているんですよ。「8時半プレーですよ」と言うと、7時には来て1時間は体をほぐして、あと30分はキャッチボールをやるんです。というような具合でやっているんですが、高等学校はどのようにして体のトレーニングをやっているのかなと思いましてね。

村松　明治の練習は、どのようにやっているんですか。

金野　明治大学の練習は、特別なことはしていません。基本的なキャッチボールやバントの練習を繰り返し行い、実践で確実にプレーできるように練習しています。これは、高校野球にも通ずることですが、まだまだ徹底されていないですね。この辺のところや野球に取り組む姿勢など教えたいものですね。

村松　それぞれのコーチがついてやるんですか。

金野　コーチはついてないです。

村松　自分たちでやるんですね。

金野　はい。あとは、3年生、4年生に教育係がいて、その人たちがノックをしたりします。

村松　そういう人たちは、それなりに研究をしてコーチ係をやっているんですね。

金野　野球をやって来て、レギュラーを断念してそれをやっているんです。技術は持っている人たちです。

復活に向かって

村松　そうすると、例えば高校に来て指導するんだったら、レギュラーの選手よりもそういう人がいいかもしれませんね。いろいろ話していただきましたが、百周年を機に、できるだけ早い時期に盛岡一高が甲子園に出場する、それが最終的な目的でしょうから、そういう意味でそれぞれみなさんから、現在を踏まえて、落ち込んだところを復活させるためにどうしたらいいかお聞きしたいと思います。

森　なかなか非常に難しいと思いますが、私の場合、バッティング面での指導をうんとチェックすればいいと思います。体に合わない打ち方でそのまま野放図にやるよりも、どういうふうにしたらインパクトが早くいくかという素振りの仕方から教えて行かないと。中学校でやって来た野球を全部変えて…。

村松　杉田さんはずっと解説をして、だいたい見ているでしょうから…。

杉田　技術的なことも少しは教えなくてはいけないと思いますが、指導者、監督というのは、あくまでも補佐役なのでその選手の特徴を早くつかんで、悪いところを直すのも必要なんですが、いい方を伸ばしてやって、特徴のある選手が、どうやったらひとつにまとまって相手を倒せるかというのを工夫してやらないと…。一対一では勝てないけれど、相手の大きなチームを倒すにはまとまってどう欠点を探して相手を叩くか…。高校野球は1本勝負ですので、絶対かなわないと思っても、どこかすきを見つけて工夫しながら…。夏の大会を目標にする場合に4月の段階で、こういうチームを持った時にどうやったら夏の大会でいい成績を挙げられるかということを念頭に置いて、1日、1日訓練して行くというのが

大切ではないでしょうか。

村松　トータルで見れば、結局今は1年生が入って来たと言っても、3年生になれば3年の夏で終わりですから、やるのはいいとこ2年ですものね。そういう点からいくと、長沢さんの頃は中学校で一貫した教育というか長いわけですよね。同じ練習の期間というか…。そのへんも今と違って来てますよね。

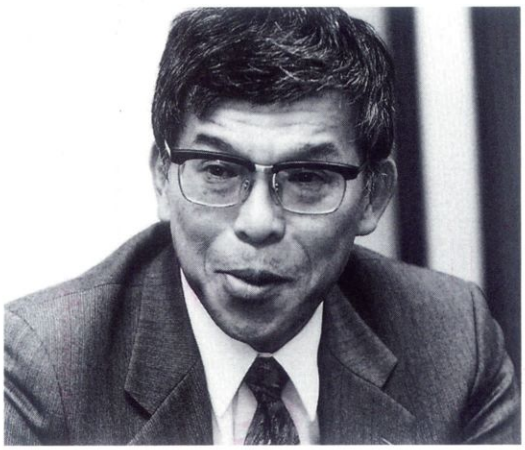
長沢　全然違うんじゃないかな。昔のことを今どうこう言えないと思いますよ。今はマシンとかあってボンボンやっているでしょう。それを我々が代わりになって、ストライクを投げて打たせていたんですから…。それで肩を壊してしまったんです。

杉田　ある程度、昔も今も基本的なことは同じなんですよね。

村松　同じだと思いますよ。

長沢　野球に打ち込む気持ちじゃないのかな。例えば私は、家に帰るのが9時になっても、家に入る前にバット振りを50本して、朝も早く起きてバット振りをしてから学校に出て来たものです。

杉田　本人がやっぱりがんばらないと、



杉田清彦

昔も今も…。さっきも言いましたが、監督コーチはあくまでも補佐的な役目で、あとは本人がある程度がんばって力をつけないといけませんね。チームが勝つための最低条件として、ストライクを投げられるピッチャーがいないとだめです。今の高校野球を見ていると、県内90チームありますが70チームから80チームはストライクが入らずフォアボールで負けます。いくらいいと言っても平均10個ぐらい出しますからね。まずフォアボールをその試合で2つか3つに収めれば、ある程度の計算はつくと…。ベンチに入っていつも思うんですが、フォアボールくらいズシンとくるものはないですよ。

村松　今年の秋の大会を見ても、準々決勝は全部コールドゲームでしょう。

長沢　ピッチャーは何人いるんですか。

杉田　ピッチャーと名がつくのは3、4人いるでしょうが、一つ上のレベルのピッチャーとなれば0だと思うんですよ。まず1人作ってそれを見てだんだん育って行くんですが、まだその段階まで行っていませんね。だから、森さんの甲子園でも、今ま

でいいところまで行ったのを見ても一高の場合、1人でもストライクの入るピッチャーを持っていたということです。北條にしろ高橋直人にしろ八角にしろ、すごいというほどではないけれどストライクが入るもんだから、ある程度計算はできるということです。

村松　150キロ級を投げても、ボールはボールですからね。手を出さないのか出せないのかは別として、ボールとしては変わりないですからね。

杉田　150キロを投げられたら「待て」のサインしか出さないですよ。真ん中に来て「打て」と言っても打てませんから…。

村松　それともう1つ考えられるのは、シーズンオフになってからどういう練習をするか、どこに目標を置くかというのが大切だと思うんですよ。春の選抜を目指して、このチームだったらどうかというようなことですね。そうなってくると、同じ練習をするにしても秋になって来ると時間がないわけですからね。そのへんのことも考えてやって行かないと…。

楽しめる練習を

森　まずは遠投、キャッチボール。ある程度の力がないと力負けしますよ。

村松　金野さん、シーズンオフの練習で何かこういうふうにすればいいんじゃないかというのがあったらお話ししてください。

金野　私たちの時はランニングはやりましたが、あとは楽しみながらやる練習でした。ミニサッカーとかバスケットボールとか…。12人しかいなかったのでそれを3チームに分けて、1時間半ぐらいずっとやりっ放しでした。俊敏性とか体力がつきますし瞬発力がつきます。そうやって楽しみながらやる練習を取り入れた方がいいんじゃないですか。

村松　その中で体力をつけていくようにね。

金野　ただ走ってばっかりでも飽きますし、たまにはサッカーをやったりバスケットをやったり…。

長沢　そうなんだよね。楽しさもあってそこに練習も入るということですね。

村松　今いろいろ聞いてみると、ただ単なるトレーニングではだめだと、野球には野球の練習があると。そういう専門と言っても一高の場合無理でしょうが、少なくてもそういうのに詳しい人を呼んで来て、練習させる必要があるんじゃないでしょうか。

安嶋　逆に一つ言えば、あまりにも今の子供たちは野球を知らないのではないでしょうか。テレビで見ている割りには…。

金野　基礎も覚えないで、上のかっこいいところばっかり覚えてますよね。

村松　野球とはこういうものだというようなことを、選手同士でディスカッションをする場はあるんでしょうか。やっぱり必要だと思うんです。安嶋さんが言ったように野球を知らない生徒が多いですよね。

安嶋　そして、あまりにも試合を見ないしね。もう少しゲームを見て自分のポジションを見て、こういうふうに動くんだなということを、見るだけでも違うと思いますね。

長沢　要はピッチャーを育てなければならないということだね。

森　一高の場合はピッチャーを育てなければ…。ピッチャーがよくなれば、自然に周りのレベルも上がって行くんですよ。リズムが出て来てバッティングも自然に上がって行きます。

杉田　ピッチャーで99パーセント決まるというのも、1本勝負の場合言えることだと思います。今の高校野球を見ていると、中学校でやって来たから即ピッチャーだと言いますが、入って来た時点で誰がピッチャーとして1年後、2年後に大成するかというのを、まず見つけていかないといけないと思います。

村松　それは大切だと思いますよ。

森　それは、まず球ばなれのいい選手、それからある程度肩のある選手、というのを見つけて来るんですよ。外野手の送球がいい選手、キャッチャーの送球がいい選手、キャッチャーよりピッチャーの方が大事ですから、キャッチャーをピッチャーにするとかコンバートも必要だと思います。

森　春先の練習試合が多すぎますね。私が監督を受けた時も、1カ月ぐらいのローテーションが決まっていたんです。それで

先生を怒ったんです。ピッチャーができていないのに練習試合と言っても困ると。

杉田　それは私も監督の時にも話をしたんです。学校の方の付き合いなんです。

森　部長同士の付き合いですね。盛岡一高とやって勝てば、寄付が集まるんだそうです（笑）。私は反対に練習試合が組まれていれば、連れて行きません。学校に残して必要な奴だけ行けと。

村松　さっき杉田さんが言ったように、うちのチームはどういうチームなんだと、私はこういう試合をするんだということを選手たちに浸透させることが大事ですよね。

杉田　4月のチーム編成の時に、夏のためにこうやるからということをきちんとさせておく必要がある。練習もランニング、キャッチボール、トス、フリー、あと3年生から順序にやって行けば時間はそれで終わりというような、そんなばかな練習をするからだめなんですよ。全体練習が6時頃までならば、個人練習を1時間ぐらいやってもらわないと…。まず個人を少しレベルアップしないと、全体の練習をやってもなかなか向上しないと思うんです。工夫が必要ですよね。一高は工夫しないと、ずっと同じことをやっていてはだめですね。

村松　私は全員野球っていうのは反対なんです。ピッチャーが投げてみんなでカバーができますか。監督がそばについて投げ方を教えられますか。結局は自分で自分を鍛えてやらなくてはいけないんですから。

杉田　全員野球というのは、試合の時は全員でやりましょうということで、練習で全員野球なんていうのはあり得ないんです。

村松　ショートゴロが来たからといって、みんなで取ってくれるわけではないのだから自分で処理しなければならないんです。そうすると、自分を鍛える以外にないと思うんです。

杉田　途中までは個人競技だと思います。試合そのものは全員野球でいいんですよ。ところがみんな勘違いしているんです。

村松　全員野球だとかチームワークだというのは分かります。しかし、結局自分しか頼るものはないんですよ。

金野　村松先輩がおっしゃる通り、スポ

ーツ全般において個人競技であれ、団体競技であれ、チーム力は個人の力量にかかわっているものだと思います。個人の技量が上がればチーム全体の力も上がりますし、そこにお互いの結びつきと勝負への執着が増すことによって大きな力が結集される。だから高校野球には多くの人を引きつけるものがあるのだと思いますね。

村松　野球のこととなると話は尽きませんが、一高野球部のさらなる飛躍を願いながら、温かくそして厳しく見守っていきたいと思います。

（平成10年11月10日、秀吉本町本陣にて収録）



村松　昇



白聖野球部
第四部―平成期
百年の軌跡



「さぁ、行こう！」



平成元年夏、対黒北戦。

平成元年[1989]

◆9・4　盛岡市制百周年記念式典
◆11・7　盛岡市アイスアリーナ完成

春、候補黒北を完封し8強

◇63年秋　この大会から、盛岡地区代表校は3校から4校に増えた。本校は、盛岡南高と乱打線を繰り広げた。七回に4点、九回に3点を挙げる猛追を見せたが、サヨナラ負けを喫した。

▽1回戦

盛岡一高	0	0	2	0	2	0	4	0	3	11
盛岡南高	0	1	0	6	0	1	2	1	1×	12

◇**春**　この年から、地区代表校が秋季大会に準じて4校に増加した。本校は秋と同様、中野―阿部のバッテリーで大会に臨み県大会出場を果たした。

▽1回戦

盛岡農業	0	1	0	0	3	1	0	0		5
盛岡一高	4	0	1	0	1	0	3	3×		12

（八回コールド）

▽代表決定戦

盛岡一高	0	0	0	1	3	1	0	0	1	6
雫石高校	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1

県大会は、花巻市と和賀町で開かれた。2回戦で、黒沢尻北高と対戦した。黒沢尻北高は専大北上と並び、この大会の優勝候補であった。が、本校エース中野が巧みな投球をみせた上、攻撃も少ない好機を見事に生かし、ベスト8入りした。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

黒沢尻北	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡一高	0	0	0	2	0	1	0	0×		3

【ゲーム】春の練習試合で0―15という大敗をした黒北を相手に、本校は公式戦で雪辱を果たす。強力打線を誇る黒北を散発4安打、8三振に切ってとったのは本校中野。これに応えるように、四、六回の好機を確実に生かした。四回は一死一、二塁で、佐藤の二ゴロを二塁悪送球の間に、本宮が生還し1点。さらに五番吉田、六番中野の連続安打で2点目。六回には三番畠山の適時二塁打でリードをひろげた。

▽準々決勝

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
久慈商業	0	0	0	2	3	3	0	×		7

（七回コールド）

この年の3年生部員

草　喜　諭　一　仁　志　義　健
菅　原　藤　本　澤　目　山　部　内
白　松　戸　生　田　畠　阿　柴
幸　幸　健　徳



平成元年の3年生部員

【ゲーム】久慈商エース広崎の投球がさえ、本校は11三振を喫した。散発5安打で三塁を踏めず試合を終えてしまった。

◇**夏**　昭和四十四年から採用されていた地区予選制度が、この年から廃止された。春季大会の8強がシードされた上、組み合わせ抽選が行われた。2回戦で黒沢尻北高と顔を合わせる。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0
黒沢尻北	0	0	0	0	2	3	0	0	×	5

【ゲーム】安打は本校5本、黒北6本であった。本校は七回、やっと三塁に送った唯一の好機も生かせなかった。計9三振を喫した。


平成元年夏、対黒北戦での応援風景。

白堊随想録－39

想い出

松本論　平成二年卒業

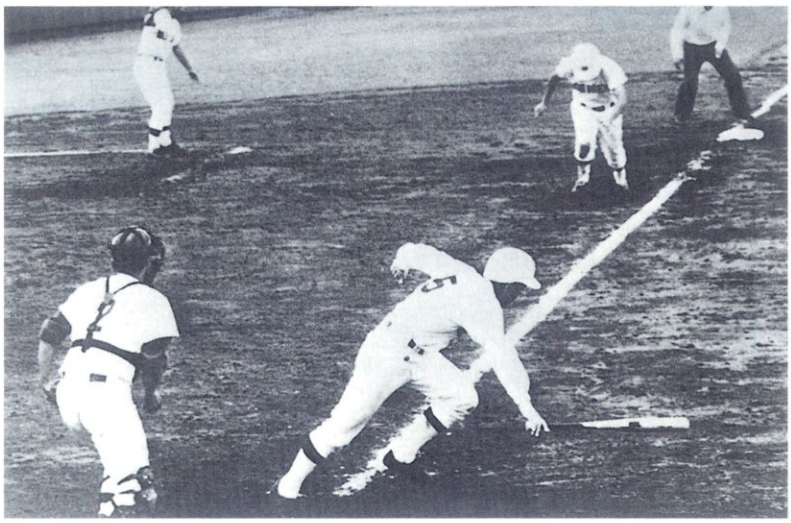
この度の盛岡一高野球部創設百周年を迎えるに際し、平成二年卒の部員一同を代表し、心よりお祝いを申し上げたい。また、その百年の歴史の中で、我々が友と共に白球を追いかける時期があったことを本当に光栄に思う次第です。

さて、我々の学年は部員8名。決して多くはないが団結は堅かった。二学年の夏までは川村祥平先生、秋からは佐藤誠剛先生の下で、甲子園で母校の校歌を聞かせようと厳しい練習を重ねた。

数々対戦した中で、思い出に残る学校と言えば黒沢尻北高校である。練習試合でも公式戦でもよく戦った相手であった。春季県大会では、優勝候補と言われた黒沢尻北に対し二年生投手中野が踏んばり、ベスト8で夏の大会シード権を獲得。その夏の大会でまたもや黒沢尻北と対戦することになった。黒沢尻北にとって雪辱戦、我々も絶対に負けるわけにはいかない試合であり、両校とも全校応援という学校対決でもあった。

我々は、投手生田目がかわすピッチングで黒沢尻北打線を翻弄していたが、途中つかまってしまい、打線の方も何回かの満塁のチャンスに一発が出ず、結局0―5で夏は終わってしまった。この年、お隣の盛岡三高に甲子園を持っていかれる悔しさも味わった。

最後の夏から何年も経ったが、野球部で得た経験は今でも貴重な財産である。以下、白球に命をかけた仲間を紹介する。主将畠山健志、阿部徳義、柴内健、白藤幸喜、菅原章、戸澤幸一、生田目仁、最後に私、副主将松本論である。


平成2年夏、対遠野緑峰戦。吉田がタイムリー安打を放つ。

平成2年[1990]

◆1・20　盛岡インターハイスケート開幕
◆9・19　台風19号、本県を通過

好機を生かせず盛商に惜敗

◇**元年秋**　岩手橘高戦では三回1イニング23点という記録的得点を挙げ圧勝。が、代表決定戦で敗れた。

▽1回戦

岩手橘高	0	0	0	1	0				1
盛岡一高	0	1	23	13	×				37

【ゲーム】本校は川又が本塁打を放った他、五人の選手で6二塁打。得点を重ね大勝した。

▽代表決定戦

盛岡工業	1	0	2	0	0	0	1	0	2
盛岡一高	1	0	0	0	0	0	0	0	1

◇**春**　秋季大会と同様、盛岡工業と地区代表を争ったが、惜敗した。

▽1回戦

雫石高校	0	0	0	0	0	0	2	0	2
盛岡一高	0	0	0	0	0	1	0	7	8

▽代表決定戦

盛岡一高	0	0	1	0	0	2	0	1	4
盛岡工業	0	0	1	1	0	0	×	2	5

◇**夏**　本校はノーシードながら、1、2回戦をコールド勝ち。3回戦では終盤に一挙6点を挙げるなどして快勝した。4回戦の相手は盛岡商業。接戦に持ち込んだが、1点に泣いた。

▽1回戦

盛岡一高	0	1	0	0	0	3	3		7
一戸高校	0	0	0	0	0	0	0		0

（七回コールド）

【ゲーム】本校投手中野が、一戸打線を散発4安打に封じ込めた。また、初回には、安打と四球で出塁した相手走者を、見事なけん制を二つ続け、一戸の先制機をつぶした。本校は10安打を放ってコールド勝ち。

▽2回戦

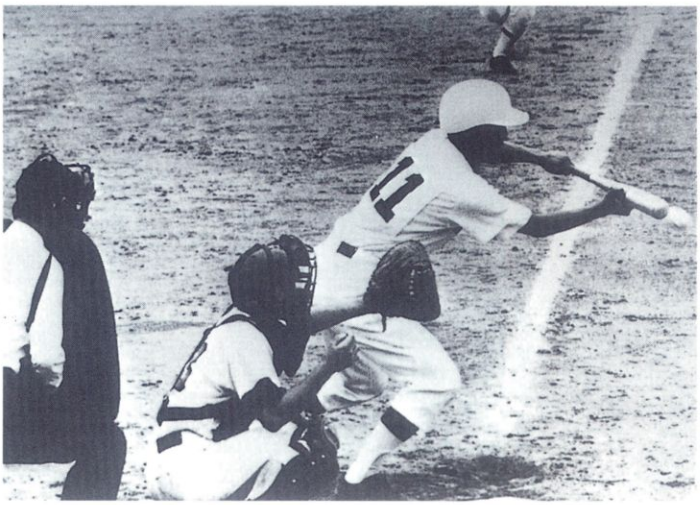
盛岡一高	6	1	0	1	0	4			12
遠野緑峰	0	0	0	0	0	0			0

（六回コールド）

【ゲーム】本校は岩動、栗谷川の継投で、緑峰打線を3安打無得点に抑えた。

この年の3年生部員

佐藤博明　川又克規　高橋志一　吉田宏彦　中野淳　細田文宏　本宮行　天間将朋　栗谷典一　筒井崇　岩動昌繁　長野一恭　小寺慎一　大森



平成2年夏、対釜南戦。野崎のスクイズ（内野安打）で2点目。

▽3回戦

盛岡一高	0	0	0	0	0	1	6	0	0	7
釜石南高	1	0	1	0	0	1	1	0	0	4

【ゲーム】劣勢に追い込まれた本校であったが、七回、一気に集中攻撃をかけて試合の流れを変えた。四番佐藤の安打をきっかけに無死満塁とすると、野崎、菅原の2連続スクイズが共に内野安打となった。九番小野寺、一番本宮が連続安打し計4点。さらに攻撃の手を緩めず、二番長野のツーランスクイズで釜石南のリズムを崩し、勝利を手にした。

▽4回戦

盛岡一高	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
盛岡商業	0	0	0	0	0	1	1	0	×	2

【ゲーム】本校は六回、二死二、三塁の好機に、四番佐藤が三遊間を破り、待望の1点を挙げた。が、盛岡商はその裏に同点とすると、七回に二死から1点を加えた。本校は、三回の無死三塁と八回の一死満塁を生かし切れなかった。



平成2年の3年生部員

白堊随想録－40

盛岡一高野球部へ感謝の言葉

中野俊一　平成三年卒業

平成十一年をもって、野球部創設百周年を迎えるにあたり、その百年間の三年分に、青春のすべてを投入して過ごすことができたことを、心から誇りに思う。

一年間、浪人してまで盛岡一高の野球部に入って、甲子園出場を夢見た。

結果的には、在籍中、甲子園出場どころか、優勝争いにも参加できなかったが、この三年間、本気で泣いたり、喜んだり、悩んだり、励まし合ったりしながら、盛岡一高野球部に育てていただいたことは一生忘れないつもりである。

最後に、ここ二十年間、甲子園出場が遠のいている状態だが、必ずチャンスが来るはずだ。高校スポーツでの勝負は、技術以上に精神的なものがウエイトを占める。一試合、一打席、一球で、高校生は自信をつけるものである（私自身がそうだった）。

盛岡一高は、主に夏の大会で注目されがちだが、初の選抜甲子園出場も果たせるよう心から応援している。



平成3年夏、対西和賀戦。西和賀走者を併殺する。

平成3年[1991]

◆4・1　新北上市が誕生
◆6・15　東北新幹線、東京駅乗り入れ

西和賀、岩手を連破す

◇2年秋　野崎―野内のバッテリーで大会に出場。前半の失点が響いて、後半の追い上げも及ばなかった。

▽1回戦

盛岡一高	0	0	0	0	2	1	2	0	0	5
雫石高校	0	0	5	1	0	0	0	0	×	6

（一）野崎―野内
（雫）久保田、中居―関沢、中村
▼三塁打　村上（雫）
▼二塁打　鈴木（雫）、千葉、野崎（一）

◇春　代表決定戦に進んだが、不来方高に敗れた。

▽1回戦

岩手橋高	0	0	1	0	1				2
盛岡一高	2	8	6	0	×				16

（五回コールド）
（橋）吉田―坂本
（一）野崎―野内
▼本塁打　野内（一）
▼二塁打　野内（一）

▽代表決定戦

不来方高	4	1	0	0	0	0	0	3	8
盛岡一高	0	0	0	0	0	1	0	0	1

（八回コールド）
（不）岩崎―高橋
（一）野崎―野内

◇夏　4回戦まで進出したが、花巻東高エース外舘を崩せず涙を飲んだ。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

西和賀高	1	0	0	0	0				1
盛岡一高	1	1	0	8	1	×			11

（五回コールド）

【ゲーム】2―1のリードで迎えた四回、本校は猛攻をみせた。この回、一死満塁からスクイズ（相手の野選）と安打で、2点を挙げた。二死となってからも五番野内、六番藤原の連続長短打などで6点を加え、大勢を決した。

この年の3年生部員

一史剛太彦
伸敦俊良
崎内崎島原
長野野松藤



平成3年夏、対岩高戦。野崎がダメ押しになるヒットを放つ。

▽3回戦

岩手高校	3	1	0	0	0	0	1	0	5
盛岡一高	1	0	0	0	5	0	0	0	×	6

【ゲーム】3点をリードされた本校は五回、5安打を集め、大量5点を挙げた。一死後、二番阿部、三番千葉の連続二塁打で1点を返し、六番藤原のライト線を破る三塁打などで6―4と逆転した。

▽4回戦

花巻東高	0	2	0	0	0	0	3	0	1	6
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

【ゲーム】本校打線が、花巻東外舘の投球に1安打完封を喫し、ベスト8入りは成らなかった。

白堊随想録―41

これからのチームに期待すること

藤原良彦　平成四年卒業

私の学年で、現在盛岡で生活しているのは、私だけということもあって、今回筆を執った。

野球部時代の想い出といっても数えあげると切りがないので、今回はこれからのチームというよりも選手一人一人に期待することを、三つほど述べてみたい。

一つ目は、基本をしっかり身につけてほしいということだ。特にキャッチボールをしっかり練習してほしい。

二つ目は、真剣に、そして楽しくやってほしいということだ。

三つ目は、野球と勉強の両立を図ってほしいということだ。

私自身も仕事や野球を頑張っていきたいと思っている。



平成3年の3年生部員



平成4年夏、対大原商戦。タイムリー安打を放った八重樫。

平成4年[1992]

◆2・26　W杯スキー盛岡・雫石大会開幕
◆4・1　都南村を合併し新盛岡市が誕生

夏、35年振りに福岡を制す

◇3年秋　1回戦は、先制と効果的な追加点で逃げ切った。代表決定戦では、盛岡商業に大敗し、県大会出場は成らなかった。

▽1回戦

盛岡一高	2	0	3	2	1	0	0	1	0	9
平舘高校	1	0	0	0	0	1	2	0	2	6

（一）市川―坂井
（平）田村―遠藤
▼三塁打　八重樫、佐藤（朋）（一）、佐々木（平）
▼二塁打　坂井2、市川（一）

▽代表決定戦

盛岡一高	1	0	0	0	0	2	0	0	3
盛岡商業	0	4	1	0	2	0	1	2×	10

（八回コールド）
（一）八重樫―市川、坂井
（商）川畑―吉田
▼三塁打　千葉（一）、土井（商）
▼二塁打　千葉（一）、竹田（商）

◇春　1回戦で盛岡三高と対戦。三回4―4の同点に追いついたが、四回に1点を失い、初戦で姿を消した。

▽1回戦

盛岡三高	1	0	3	1	0	0	0	0	5
盛岡一高	0	0	4	0	0	0	0	0	4

（三）田村―中村
（一）市川、八角―坂井

◇夏　2回戦は、十年振りに宿敵福岡高と対戦。本校はチーム一丸となって戦い、コールド勝ちした。ベスト8をかけた4回戦は盛岡市立高と対戦。先制しながら逆転された。

▽1回戦

大原商業	0	1	2	0	0	0			3
盛岡一高	4	2	2	0	4	1×			13

（六回コールド）
【ゲーム】本校は初回、打者一巡で4点を挙げ、大勝した。先発の市川は五回を被安打3の好投。その後1イニングを投げた沼崎（宏）もつけ入るすきを与えなかった。

この年の3年生部員

也	史	晋	透	生	哉	俊	寿	博	史	光
俊	佳			純	朋	勝	康	一	博	
川	葉	藤								
千	佐	藤	井	我	重	樫	藤	木	部	井	塚	治
佐	曽	八	佐	佐	々	木	部	井	塚	治
市	千	佐	曽	八	佐	佐	阿	坂	平	矢



平成4年夏、対福岡戦。坂井が三塁打を放つ。

▽2回戦

盛岡一高	0	0	0	3	5	7	15
福岡高校	0	0	0	0	1	1	2

（六回コールド）

【ゲーム】前半は両校とも0行進で、好試合が期待された。が、本校は四回に五番坂井の三塁打で2点を挙げ、打線が目覚めた。五回には打者10人で5点を取り、福岡の反撃の勢いをくじいた。更に六回に7点を加えて大勝。本校は夏の対福岡戦では、実に三十五年振りの白星を挙げ、3回戦に進んだ。

▽3回戦

盛岡市立	0	0	0	2	1	1	4	8
盛岡一高	1	1	0	0	1	0	0	4

【ゲーム】本校は、二回、一死満塁と攻めたてたが、押し出しで得た1点にとどまったのが後の攻撃に響き、盛岡市立を崩せなかった。



平成4年の3年生部員

白聖随想録－42

甲子園での母校取材を夢見て

佐藤晋　平成五年卒業

最後の夏。二回戦は宿敵福岡。今は使用しなくなった盛岡市営球場はスタンドに人があふれ、守備につくと隣の中堅手新谷（二年）の声も聞こえない大声援に包まれた。

前評判は福岡。春の定期戦はやっとの思いで引き分けだった。しかし、バンカラ風＋ブラスバンドの軟弱化した相手応援団には「意地でも負けるな」との蛮声に押され、終わってみると16―2の六回コールド勝ち。

試合で活躍したことがない主将（小生）の「伝統校同士で絶対負けられなかった。甲子園に行きます」のコメントが夕方のニュースで放送された。結局、次の盛岡市立戦であっさり姿を消したが、夏における福岡戦の勝利は三十五年ぶりだったと後で耳にした。

我々の代は熱血漢・畠山剛コーチの「意気に感じろ」の指導を意気に感じすぎたのか、一高の伝統や自分たちの勝ちたい気持へのプレッシャーに負けた。結果として弱いチームだったが、社会人として今、そこから学んだことの大切さを思う。しかしなお、高校野球は甲子園がすべてだとも思う。今は岩手日報記者。甲子園をわかせる母校の取材を早くしたい。



平成5年夏、対久慈商戦。六回裏、ガッツポーズで同点のホームインをする渡邉。

平成5年[1993]

◆7・12　北海道南西沖地震が発生
◆10月　国民文化祭いわて開催

15年振りの甲子園、目前で涙

◇4年秋　本校は代表決定戦で盛岡四高に完封負けを喫した。

▽1回戦

盛岡農業	0	0	0	0	0	0	1	1
盛岡一高	4	3	1	0	0	0	×	8

（七回コールド）

▽代表決定戦

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡四高	0	0	1	0	2	0	1×	4

◇**春**　盛岡中央高に2本塁打などで大量点を奪われ、初戦で姿を消した。

▽1回戦

盛岡中央	1	4	2	0	0	0	1	1	0	9
盛岡一高	0	0	0	2	0	0	0	1	0	3

◇**夏**　第75回記念大会であった。本校はシード校ではなかったが、杉田監督の采配の下、チーム一丸となって一戦一戦を制し、決勝で第1シード校久慈商業と対戦。甲子園から遠ざかって十五年となったが、ノーシードからの準優勝は、本校野球部に久々にカツを入れた。

▽1回戦

盛岡一高	3	3	0	3	2				11
浄法寺高	0	0	0	0	1				1

（五回コールド）

▽2回戦

東和高校	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡一高	2	0	0	0	0	2	0	0×	4

▽3回戦

久慈高校	0	0	1	0	0	0	0	1
盛岡一高	1	0	0	0	2	0	5×	8

（七回コールド）

▽4回戦

大船渡高	0	0	0	0	0	2	0	0	2
盛岡一高	1	1	0	0	1	0	0	0×	3

【ゲーム】本校の八角―沼崎（光）が見事な配球で、大船渡の強力打線を2点に抑えた。加えて、七回には二塁走者を2度刺し相手反撃の芽を摘んだのも勝因。敵失に付け込み加点し逃げ切った。

この年の3年生部員

人　史　健　司　徳　聡　紀　隆　明　介　孝
正　貴　　俊　崇　　有　史　祥　俊　正
賀　崎　沼　部　下　谷　角　邉　田　葉　原
平　宮　大　安　高　新　八　渡　多　千　藤



平成5年夏、対久慈商戦。同点の二塁打を放った新谷。

▽準々決勝

一関一高	0	0	1	1	0	0	0	0	2
盛岡一高	2	0	4	1	0	0	1	0×	8

【ゲーム】一戦ごとに上げ潮ムードの本校はシード校一関一との一戦も快勝した。機動力と勝負強いバッティングが十分に発揮されたのは初回。二死一、二塁から、果敢に重盗を決めると、五番沼崎(光)の安打で2点を挙げた。三回には、6安打を集め4点を加えて圧勝。

▽準決勝

花北商業	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡一高	3	2	0	4	0	0	0	×	9

(七回コールド)

【ゲーム】本校エース八角が、被安打2の好投で二塁をも踏ませなかった。本校打線は、渡辺、多田の三塁打を含む計11安打でコールド勝ちした。

▽決勝

久慈商業	0	1	0	0	0	1	0	2	8	12
盛岡一高	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3

【ゲーム】秋季・春季の両県大会を制覇した久慈高。本校は今大会、勢いに乗って決勝まで進み対戦した。0—2とリードされた六回裏、4安打に敵失をからめ3点を挙げ逆転。試合の流れを呼び込んだかに見えたが、第1シードの底力の前に甲子園を逃がした。

白堊随想録—43

「集中力」の一高野球

平賀正人　平成六年卒業

あの頃、僕たちのチームが監督やコーチによく言われていたことがある。

「試合は最初の三回で決まる。特に初回は、攻撃も守備も一番集中しなければならない」「お前らは弱いんだ。技術も体力も無い。それでも相手に勝つには、集中力で勝つしかないんだ」

この言葉が忘れられない。一高で百年も続いてきた野球とは、このような野球ではないだろうか。気迫で相手に勝ち、苦しい場面で耐え、チャンスに集中力を発揮する野球。格好悪くてもいい。必死で走り、白球を追いかける野球。

最後の夏に向け、一人一人が「集中する」ことを意識して練習に取り組んだ。試合前の気持ちの高め方も身につけていった。そして知らぬ間に、春までとは見違えるほどチームにまとまっていた。甲子園出場はできなかったが、一高の野球を見せることができたと思う。

僕たちは先輩方の姿を見て一高の野球を教わってきた。僕たちの経験が後輩たちの力になってほしい。



平成5年の3年生部員



平成6年夏、対水工戦。藤村のヒットで二走我妻も長駆生還。



平成6年夏、対水商戦。初回、我妻がタイムリー安打を放つ。

平成6年[1994]

◆9・20 「かけはし」「ゆめさんさ」が誕生
◆12・29 三陸はるか沖地震で盛岡震度5

秋・夏ともにベスト8へ

◇5年秋 九年振りに地区代表となり、県大会ベスト8入り。

▽1回戦

盛岡商業	0	0	0	1	0	0	0		1
盛岡一高	0	1	2	0	1	0	0×		4

▽代表決定戦

盛岡工業	1	0	0	0	0	0	0		1
盛岡一高	0	3	1	4	0	0	×		8

（七回コールド）

県大会は、盛岡市と雫石町で開かれた。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

大野高校	0	0	0	0	0	0	0		0
盛岡一高	0	0	5	0	2	0	×		7

（七回コールド）

【ゲーム】沼崎（宏）、藤村の投手リレーで、被安打3の完封勝ち。

▽準々決勝

盛岡一高	1	0	0	0	4	0	0		5
水沢高校	0	3	1	0	5	0	0×		9

【ゲーム】本校は逆転されて迎えた五回、4点を挙げ再逆転に成功した。無死満塁とすると、四番沼崎（光）、五番小野家の連打で2点。七番我妻の三ゴロは、相手野手の悪送球を誘い、更に2点を挙げた。後半は、水沢佐藤の好投の前に追加点を奪えずに終わった。

◇春 盛岡三高に敗れ、秋に続いての県大会出場は成らなかった。

▽1回戦

盛岡一高	0	0	0	1	0	9	5		15
平舘高校	3	0	0	0	0	0	0		3

（七回コールド）

▽代表決定戦

盛岡三高	0	0	2	2	0	0	5		9
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	2		2

（七回コールド）

この年の3年生部員

行大志祥祥文真浩
博　高光宏康徳康
野柏
紺大鏡
沼崎崎賀沼村
沼佐田
藤


平成6年の3年生部員

◇夏　ノーシードで臨んだ大会だったが、沼崎（宏）―沼崎（光）の双子バッテリーを軸に、ベスト8入りした。

▽1回戦

水沢工業	0	0	2	0	4	0	2	9
盛岡一高	0	4	0	3	2	0	2	11

▽2回戦

盛岡一高	0	0	9	0	1	1	2	15
一戸高校	0	2	0	0	0	3	3	9

▽3回戦

盛岡一高	0	0	0	8	4			12
岩谷堂高	0	0	2	0	0			2

（五回コールド）

▽4回戦

水沢商業	0	0	0	1	0	0	0	1
盛岡一高	2	0	0	0	3	3	×	8

（七回コールド）

▽準々決勝

高田高校	4	1	0	8	1			14
盛岡一高	0	0	2	1	1			4

（五回コールド）

【ゲーム】本校は二回、高田の三番伊藤に本塁打を浴び、四回には大量8点を失った。


平成6年夏、対高田戦。声をかけあう沼崎宏―沼崎光の双子バッテリー。

白堊随想録－44

双子バッテリーを支えてくれた6名の仲間達

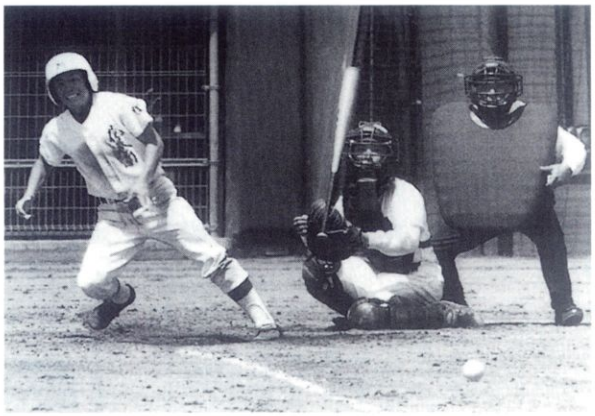
沼崎光祥　平成七年卒業

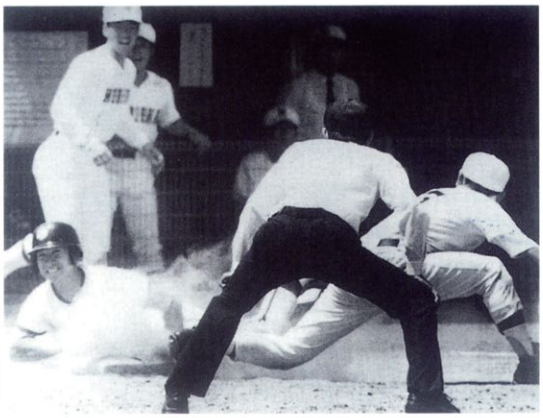
連続真夏日記録を更新し、衰えることを知らない猛暑が容赦なく我々選手を襲う過酷な条件の中、私は乾き切ったグラウンドで、リリーフ藤村の後を受けて再びマウンドに登った弟宏祥に、ゆっくりとサインを出していた…。

第七十六回大会準々決勝、対高田戦。前年の準優勝に続き二年連続でベスト8に駒を進め、意気上がる我が一高は、練習試合では勝っていた高田にここまでリードを許し、苦戦を強いられていた。

秋、春、夏とエースナンバーを背負い、一度も私のサインに首を振ったことの無いそのエースは、この時もやはり一度で頷いた。小学校以来ずっとそうであった。そして自慢のコントロールを生かし、全力で私のミットに投げ込んできた…。

私の夏は佐賀、田沼、大柏、鏡、藤村、紺野、そして弟宏祥の汗と涙の結晶と共にベスト8という形で終わった。しかし、校歌を高らかに歌った感激と最後に流した涙は一生忘れることはないだろう。


平成7年夏、対花南戦。


平成7年夏、対盛岡中央戦。

平成7年[1995]

◆1・17　阪神・淡路大震災
◆この年　サリン事件

春、延長11回関商工を破る

◇6年秋　佐川―舟山のバッテリーで臨んだ本校だったが、近年実力を伸ばして来ている盛岡中央高に代表決定戦で敗れた。

▽1回戦

岩手高校	0	0	0	0	0	0				0
盛岡一高	2	5	4	4	×					15

（五回コールド）

▽代表決定戦

盛岡一高	0	0	0	0	0	1	1	0		3
盛岡中央	2	0	2	1	0	0	1	0	×	6

◇春　地区予選では、前年夏の甲子園出場校盛岡四高を破り、六年ぶりの地区代表。

▽1回戦

盛岡農業	5	0	0	0	0					5
盛岡一高	0	3	10	10	×					23

（五回コールド）

▽代表決定戦

盛岡四高	0	0	6	0	1	3	1	0	0	11
盛岡一高	2	3	0	1	5	0	2	0	×	13

県大会は、大船渡市、陸前高田両市で開かれた。本校は1回戦で一関商工と激突。延長十一回裏、一死満塁の好機に、六番舟山が中前打を放ち、熱戦にピリオドを打った。続く釜石南を完封し、ベスト8入り。

▽1回戦

一関商工	0	0	0	0	1	0	0	0			1
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1 ×	2

（延長十一回）

【ゲーム】本校が、前年秋の四強関商工を下した。関商工の強力打線に対し、本校三田は丁寧な投球に徹し切った。結果は被安打4、1四球のピッチング。本校打線は10安打を放ち、三田の好投に応えた。

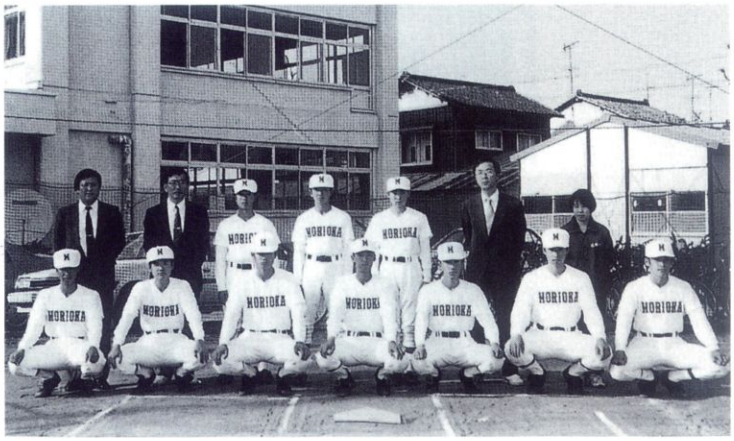
▽2回戦

盛岡一高	3	0	0	0	0	0	3	2		8
釜石南高	0	0	0	0	0	0	0	0		0

（八回コールド）

この年の3年生部員

彦樹洋久慶士翼剛明章子
俊将拓克　泰　範聡
妻山家沼田山山戸沼川石
我畠野小新三小舟明大佐重



平成7年の3年生部員

▽準々決勝

盛岡一高	1	0	0	1	1				3
大船渡工	8	2	0	0	3×				13

（五回コールド）

◇夏　4回戦まで進んだが、盛岡中央高の粘りに屈し、目前だったベスト8を逃した。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

花巻南高	0	1	2	0	0	2	0	0	5
盛岡一高	0	1	0	0	3	3	1	4×	12

（八回コールド）

▽3回戦

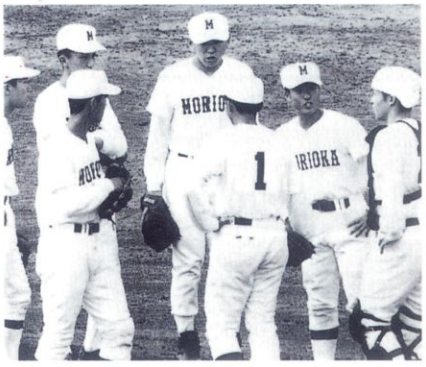
水沢工業	3	0	0	1	0	0	2	0	6
盛岡一高	1	0	1	0	2	7	0	2×	13

（八回コールド）

▽4回戦

盛岡一高	0	1	0	1	0	0	0	0	2
盛岡中央	0	0	0	1	0	0	0	2×	3

【ゲーム】秋の大会で3―6で敗れた盛岡中央との一戦は、先制した本校のペースで試合が進んだ。しかし、2―1で迎えた九回裏、二死まで追いつめたが、守備が乱れて手中の白星を逃した。



平成7年夏、新調の純白のユニホームでゲームに臨む一高ナイン。

白堊随想録―45

これからの野球部に期待すること

三田　慶　平成八年卒業

「一高に入って頑張って野球をやれば、甲子園に行ける」そういう思いで私は、盛岡一高野球部に入部しました。そのように思うようになったのは、昭和六十二年（私が小学三年生の時）の夏、一高が準優勝したのをテレビで見ていたのがきっかけでした。一関商工との決勝戦で敗れたことが、自分にとってとてもショックだったのを覚えています。それ以来、私は一高野球部に入って、甲子園に行くことを夢見るようになったのです。

それから七年後、一高野球部に入部し、甲子園を目指して練習に励んだのですが、二年生の春の地区予選で盛岡三高にコールドで負けた後、コーチの畠山剛さんがおっしゃった話が、それまでの自分の意識を大きく変えたのを思い出します。「こんな試合をして恥ずかしくないのか。スタンドで見ていた子供達ががっかりしていたぞ」という話を聞いて、私ははっとさせられました。自分は強い一高に憧れて入部したのに、自分達が一高を弱くするわけにはいかないと思ったのです。

私に限らず、一高の野球部員は皆一高で野球をすること、そして甲子園へ行くことを夢見て入部すると思います。そういった意味で、これから一高でプレーされる選手には、自分の夢に向かってひたむきに努力すること、ひいてはそうすることが、多くの子供達に夢を与えることになるということを忘れないでやってほしいと思います。

一人でも多くの小学生や中学生が、一高の野球部に入れば甲子園に行けるんだ―と思えるような野球部であってほしいと願っています。



平成8年夏、対盛岡四戦。4回、村田がホームランを放つ。

平成8年[1996]

◆7月　0—157菌による集団食中毒事件
◆9・17　大リーグで野茂が無安打無得点達成

前沢に連続の苦杯

◇7年秋　地区予選で盛岡南高、盛岡北高を連破し、二年振りに県大会に出場した。

▽1回戦

盛岡南高	0	1	0	0	1	0	0	3	5
盛岡一高	1	0	0	0	1	0	0	3×	6

▽代表決定戦

盛岡一高	0	1	2	2	0	1	0	3	9
盛岡北高	3	0	1	0	0	0	0	0	4

県大会は、盛岡市と雫石町で開かれた。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

宮古工業	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡一高	1	0	0	0	0	0	0	0×	1

【ゲーム】本校の勝因は、投手森のスタミナ配分を工夫した丁寧な投球と守備陣のがんばりであった。宮古工は七回以外は毎回走者を出し、安打数は本校と同じ8本だった。本校は初回、二番佐々木の二塁打を足掛かりに一死二、三塁とし、四番工藤（哲）の遊ゴロの間に、好スタートを切った三走佐々木が本塁を踏み、この1点を守り切った。

▽準々決勝

前沢高校	3	0	4	1	2	0	0		10
盛岡一高	1	0	0	0	0	1	0		2

（七回コールド）

【ゲーム】前沢に与えた7四球と4失策に8安打を絡められ、本校は大量点を失ってしまった。前沢を上回る12安打を放ったが、得点機にここ一打が出ず、コールド負けした。

◇春　盛岡工に敗れ、県大会出場は成らなかった。

▽1回戦

盛岡一高	1	0	0	0	3	0	1		5
盛岡工業	1	2	0	0	3	4	2×		12

（七回コールド）

（一）森、赤松—吉田
（工）三浦—斎藤

▼三塁打　村田、我妻（一）、三浦（工）
▼二塁打　佐藤（一）、田村（工）

この年の3年生部員

人　也　郷　範　人　洋　仁　康　弘　沙
哲　尚　信　正　健　英　克　宗　敏　里
藤　田　木　葉　藤　合　　橋　野　邉
工　村　鈴　千　工　堀　森　高　上　渡


平成8年の3年生部員

◇**夏**　3回戦で対戦した相手は、秋季大会で四強入りを争った前沢であった。最後まで粘りを見せたが、及ばなかった。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

盛岡四高	0	0	0	0	3	1	4
盛岡一高	2	0	2	5	0	1×	11

（七回コールド）

【ゲーム】前半、中盤と着々加点した本校の快勝だった。本校は三回、二死から五番我妻の二塁打で2点。四回には、一番村田の2点本塁打など一挙5点を加えて試合の流れを決め、結局、16安打で圧勝した。

▽3回戦

前沢高校	1	0	4	2	1	0	4	12
盛岡一高	0	0	0	3	0	0	2	5

（七回コールド）

【ゲーム】本校投手陣が、前沢打線に13安打を浴びた。中でも三回には、六番原田の2点本塁打などで4点を失った。本校は中盤から反撃をみせたが、前沢安部の前に4安打に抑え込まれた。


力投するエース森

白堊随想録－46

夏への思い

村田尚也　平成九年卒業

夏という季節は高校野球を経験した者の何かを刺激する力を持っているのだろうか。そういう私も、組み合わせ抽選会の頃になると、心は母校のグラウンドへ、そして歓声に包まれる球場へと飛んで行く。

私はまだ卒業してから日が浅いせいもあるだろうが、野球部の面々と電話したりすると、いつの間にか野球の話になっている。そして四、五名が集まろうものなら野球談義に花が咲く。試合の話、コーチや先輩の話、そして、あの一球といった細部にわたる所まで話題は尽きない。

高校野球を志した者なら誰でもそうであろうが、高校生活を野球を抜きにして語ることはできない。私は高校三年間という貴重な時期に盛岡一高野球部員として在籍できた事をとても幸せに思う。

そしてOBとなった今、願う事はただ一つ、甲子園で母校の校歌を聞くことである。また夏がやって来る。そして私の心は、また母校のグラウンドへと飛んで行く。


平成9年夏、対水一戦。ソロホームランを放った吉田を迎えるベンチ。


平成9年夏、三浦監督の指示を受けるナイン。

平成9年[1997]

◆4・1　消費税の3%が5%にアップ
◆11・16　サッカーW杯大会に日本初出場決定

秋季大会で22年振りに優勝

◇8年秋　二年連続して地区代表。岩手高戦では、我妻と佐藤が本塁打を放つなどして快勝した。

▽1回戦

岩手高校	0	0	0	0	0	0	0	0
盛岡一高	0	0	0	0	0	2	1	2×	5

▽代表決定戦

盛岡北高	2	0	0	0	1	0	4	0	7
盛岡一高	2	3	1	0	0	0	0	1×	8

県大会は、盛岡市、雫石町、滝沢村で開かれた。本校は、難敵との対戦が続いたが、自分たちの野球に徹し、22年振り3度目の県チャンピオンに輝いた。大会後、三浦監督は「リードされても、試合を壊さないチーム」と高く評価した。

▽1回戦

前沢高校	0	0	0	0	0	2	0	0	2
盛岡一高	0	0	0	0	1	0	0	2×	3

【ゲーム】公式戦で2連敗中の前沢との対戦。本校佐々木が三振12個を奪った上、少ない好機を生かし、逆転勝ちした。

▽2回戦

伊保内高	0	0	0	0	0	0	0	1		1
盛岡一高	3	5	0	0	3×					11

（五回コールド）

▽準々決勝

盛岡一高	2	0	0	3	2	1	0	4		
宮古高校	0	0	0	0	0	0	4	0		4

（八回コールド）

【ゲーム】七回に打者一巡で4点を取って反撃に出た宮古だったが、本校はその直後に、三番佐藤の3点ランニングホームランなどで突き放した。

▽準決勝

花巻東高	0	1	2	0	2	0	0	0	5
盛岡一高	0	0	1	2	0	2	0	1×	6

【ゲーム】常に先手を取られる苦しい展開だったが、本校は花巻東の二人の好投手多田、三田から合計14安打を放ち、見事な逆転を果たす。

この年の3年生部員

規	平	透	哉	介	建	史	輔	文	勘
夫	創	祐	平	美					
知	理		卓	祐		崇	顕	紘	
一	川	洋	亮	智					
本	場	田	原	澤	木	藤	原	藤	澤
原	瀬	松	塚	川					
坂	道	吉	小	笠	々	佐	佐	藤	斉
中	小	小	赤	大	松				
亀									



平成9年の3年生部員

▽決勝

水沢高校	1	0	1	0	0	3	0	0	5
盛岡一高	0	1	2	1	0	1	0	0	1× 6

【ゲーム】九回裏の本校は、三番佐藤が安打の後に二盗。この好機に四番我妻が二塁打を放って劇的なサヨナラ勝ち。

東北大会は仙台市で開催された。春の選抜出場は成らず。

◇**東北大会**

▽1回戦

盛岡一高	0	1	0	0	0	0	0	0	1
平　工業	0	0	0	0	5	2	0	1	× 8

（八回コールド）

◇**春**　秋のような粘りを出せず、初戦敗退。

▽1回戦

盛岡商業	1	0	1	0	1	1	0	1	5
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0

◇**夏**　2回戦で好投手田野風を擁するシード校宮古商業と対戦。中盤まで同点だったが、八回に3連打され突き放された。

▽1回戦

水沢一高	1	0	0	0	2	0	0	2	5
盛岡一高	0	1	2	0	0	0	0	6	× 9

【ゲーム】本校は3―5とリードされた八回、3四球で満塁の好機を迎え、敵失と2安打で、6点を挙げ、試合をひっ繰り返した。

▽2回戦

宮古商業	0	0	0	1	0	0	0	2	0	3
盛岡一高	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1

白堊随想録―47

盛一のパワー

吉田透　平成十年卒業

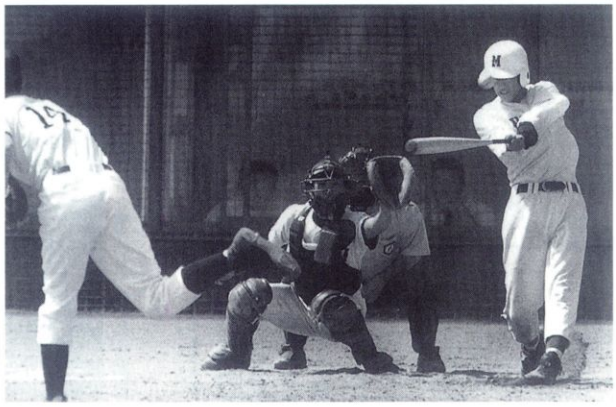
小学校から野球を始めて高校まで十年間、野球に接してきた。私は中学の頃から、高校野球を見るために、県営球場へしばしば足を運んでいた。噂には聞いていたが、目の前で見るバンカラ応援の迫力、スタンドを埋めつくす観衆の多さ。言いようのない、場内にあるもの全てを味方にしてしまうかのような一高独特の雰囲気。小さい体ながらも引けをとらないナイン。そして長い伝統を受け継ぐえんじ色と純白のユニホーム。盛一の野球に大きな魅力を感じ、盛一で野球がしたいとそう思っていた。

最高学年として迎えた新人戦。二十二年ぶりの優勝という成果を得られたが、その過程は決して易しいものではなかった。ここ数年、私立勢の台頭が目覚ましく、一人一人の技術を見てもその差は一日瞭然であった。

新人戦の準決勝、対花巻東戦。この試合は、私の高校野球生活の中で最も印象に残るベストゲームであった。まさしくあの試合は、私が中学の頃に見た、あの全てを味方にしてしまうかのような雰囲気であった。

一高には、他校に無い、このような言いようのない絶大なパワーがあると思う。古くからの一高ファンもいる。先輩方も数知れない。バンカラ応援もある。大変心強く、やりがいだって大いに感じられるはずである。

甲子園において、再びそのパワーを感じたい。



平成10年夏、対大槌戦。三回、ツーランホームランを放った我妻。



平成10年夏、対盛岡中央戦。捕手高橋。

平成10年[1998]

◆2月　長野冬季オリンピック大会開幕
◆この年　岩手山火山活動活発化

盛岡中央の壁厚く…

◇9年秋　地区予選は1回戦盛岡南高、2回戦盛岡市立に快勝し、3年連続の県大会出場となった。

▽1回戦

盛岡南高	0	0	0	0	0	0	0	0	1
盛岡一高	3	0	0	0	0	0	0	2×	5

（南）藤枝―大畑
（一）我妻（康）―高橋

▽代表決定戦

盛岡市立	0	0	0	0	0	0	3	0	3
盛岡一高	2	1	0	0	0	2	0	3×	8

（市）大平―熊谷
（一）日向、我妻（康）―高橋

▼三塁打　戸羽、我妻（康）（一）

県大会は、盛岡市、雫石町、滝沢村で開催された。県大会二連覇を目指したが、伏兵の千厩に阻まれた。

▽1回戦（不戦勝）

▽2回戦

花北商業	0	0	0	0	1	0	0	0					
盛岡一高	1	0	0	0	0	0	0	0	（延長十三回）	0	0	0	1
										0	0	1×	2

【ゲーム】二時間四十五分の熱戦になった。本校我妻（康）、花北商菅野の投手戦。被安打は我妻（康）が8本、菅野は11本であった。ともに守備陣のがんばりで1―1のまま延長に入った。十三回裏の本校は二死から粘って一、三塁とすると、五番高橋がレフト線を破り、三走我妻（康）がサヨナラの本塁を踏んだ。

▽準々決勝

盛岡一高	0	0	0	0	0	0	0	0	0
千厩高校	0	0	3	0	2	1	1×		7

（七回コールド）

◇春　成長著しい盛岡中央高と対戦し、コールド負けを喫した。

この年の3年生部員

資生　弘顕　成武　紀啓　介好
健史　康　泰文　崇　祐伸
橋月　妻　平村　羽松　向田　嶋
高望　我　小木　戸小　日西　北


平成10年の3年生部員

▽1回戦

盛岡中央	0	0	0	2	0	5	2		9
盛岡一高	0	0	0	0	0	0	2		2

（七回コールド）

（中）府金、深井、佐藤―門脇、高橋

（一）日向、我妻（康）―高橋

◇**夏**　2回戦の相手は春に続いて盛岡中央高となった。雪辱を期して臨んだが、苦い敗戦に終わる。

▽1回戦

大槌高校	0	0	0	1	0	0	0	1	2
盛岡一高	1	0	3	0	1	1	0	2×	8

【ゲーム】本校投手我妻（康）がカーブをうまく使って好投。打っては、初回の先制打、三回の2点本塁打と活躍。その後も打線が好機を生かして着々と点を加え、好投する我妻（康）を盛り立てた。

▽2回戦

盛岡中央	0	3	5	0	0	1	0		9
盛岡一高	0	0	0	0	0	1	0		1

（七回コールド）

【ゲーム】盛岡中央打線に12安打を浴び、攻めては併殺で序盤の得点機を逃し、攻撃リズムをつかめないまま終わった。

白堊随想録―48

仲　間

高橋健資　平成十一年卒業

私達、平成十一年の卒業生は10名です。その十名の仲間と土にまみれ、暗くて見えなくなるまで白球を追い、バットを振り続けた。一人ひとりの個性が強く、時には衝突することもあったが、お互いに助け合いながら、あこがれの甲子園で野球をすることを夢みて過ごした三年間。今まで生きた人生の中で最も思い出深く充実した日々だった。

ここで、素晴らしい10名の仲間を紹介しようと思う。ずば抜けたバッティングセンスと素質を持つ我妻。体は小さいが、人一倍負けず嫌いの日向。安定した守備力としぶとい打撃の戸羽。夜遅くまでバットを振り続けた努力家、木村。きれいなバットスイングでクリーンヒットを放つ小平。広い守備範囲と俊足を生かし、セーフティーバントの上手な小松。常にチームのことを考えながらプレーのできる西田。持ち前の明るさで、チームを活気づけるムードメーカーの北嶋。気持ちを表に出さないが、三年間努力した望月。強肩、俊足でチームを引っ張る主将の高橋。

そして、この10名の個性をつぶさずに指導して下さった三浦監督、和雄先生。夜遅くまで一生懸命指導して下さったコーチの方々。そして、各方面で御支援下さった球親会、後援会の方々には大変感謝しています。

我々の『夢』は達成することができなかったが、10名の仲間と三年間野球ができたことは大きな思い出となり、財産となったと思う。

最後に仲間へ。

「またいつか、どこかで一緒に野球をしよう」


平成10年夏、対大槌戦で勝利。校歌を斉唱するナイン。



白堊ドームで練習に励む野球部員たち

平成11年[1999]

10年10月　宮古高が2度目の花園出場を決める
10年11月　遠野高が17度目の選手権出場を決定

新たな伝統づくりに向かって

◇10年秋　盛岡市立高と対戦したが、序盤の失点が大きく響き、本校は六回に1点を返すにとどまった。

▽1回戦

盛岡市立	1	0	4	1	0	0	2		8
盛岡一高	0	0	0	0	0	1	0		1

（七回コールド）

（市）及川、池田―野田
（一）佐々木、荻野―渡邉

▼二塁打　田中、重石（一）

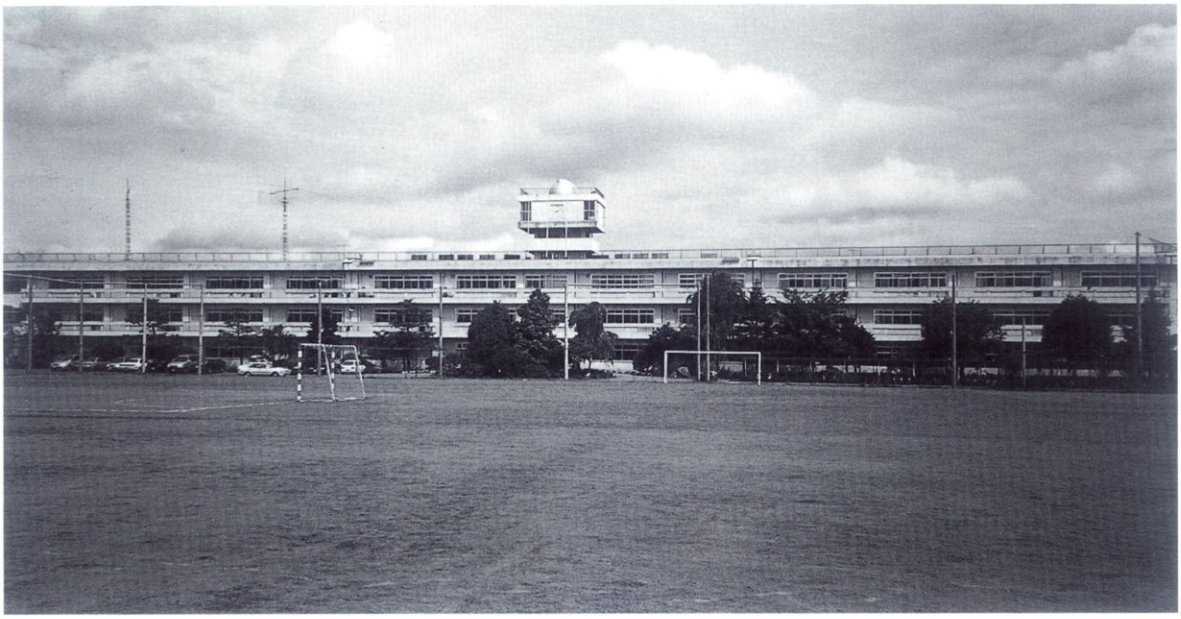
現在、新校舎が建築中である。それに伴って自校のグラウンドを使用できないので、部員たちは他の場所で練習をし、10度目の甲子園を目指し汗を流している。



新3年生（平成12年卒業予定）

この年の3年生部員

佐竹　研彦
松村　国雄
立花　寛也
田中　裕也
渡邉　昌一
荻野　真悠
菅原　達徹
梅村　泰真
重石　宏優
加藤　児大
佐々木　志幸
佐々木　健
細川　星
高前田
前澤





平成13年度には新しいグランドが



新2年生（平成13年卒業予定）

この年の2年生部員

菊	池			瞬	嗣				
品	川	橋		清	欣	高		太	郎
高	橋	葉		田	木	藤		原	村
千	葉	田		木	藤	川		東	木
亀	田	木		藤	川	東		木	妻
白	木	藤		原	村	笠		面	
伊	藤	原		村		田		藤	
小	木	曽		根		原		村	
安	池	遠		及		司		田	
我	秋	吉		近		大		佐	

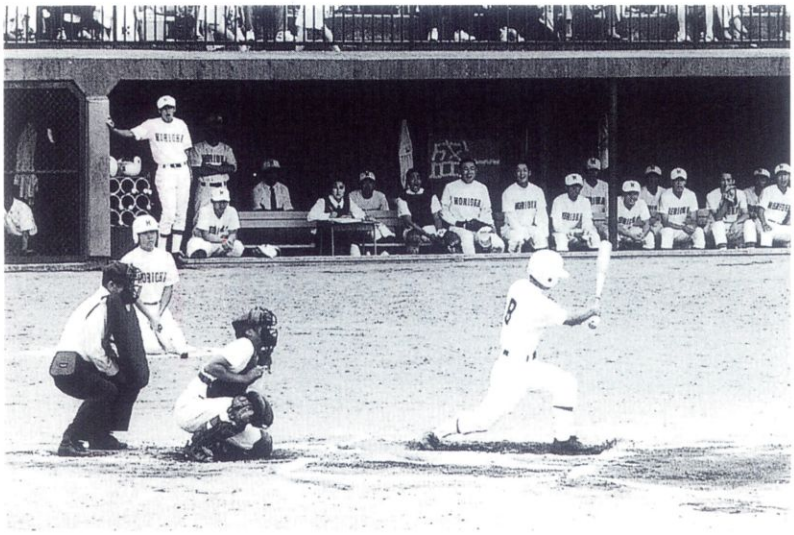
悠	博	二	孝	幸	輔	嗣	之	光	也
真	健	達	賢	嘉	紀	謙	智	広	隆
真	慎	秀	大	誠	賢	真			
弥	弥	徹	之	郎	子				
太	希								



女子マネジャー三代記

旧制中学の伝統を受け継いでいる高校の野球部は、女子マネジャーを置くまでに長い年月がかかっている。本校も例にもれなかった。とりわけ、バンカラな校風を強く残し続けていることも、その背景にあるのだろう。本校初の女子マネ誕生は平成六年のことである。その初代重石聡子（平成八年卒業）に続き、第二代が渡邉理沙（同九年卒業）。そして、第三代は松川智美（同十年卒業）である。

彼女たちは、〝十人目の選手〟として、一高野球部で汗を流した。今はまた、女子マネジャーは存在しなくなった。しかし、再び登場する時が来るかもしれない。百年の歴史のうちの三年間を支えた彼女たちの声に耳を傾けたい。



選手でも指導陣でもない立場から

平成八年卒業
重石聡子



私が野球部に入部したのは、高校二年の夏の終わりでした。それまで女性マネジャーを採らなかった一高野球部に、一年後輩の女の子が入部したと聞いて、すぐに監督の所へ飛んでいったのです。当時、私は野球に関してそれほど詳しい訳でもなく、一高野球部の知り合いも数人でした。その私を監督の下へ走らせたのは何だったのか、うまく表現はできません。「憧れ」というか、「夢」というか、ただただ高校一年の夏に観た決勝戦（平成五年）の空気が忘れられなかったのです。

初めは何をしたらいいのかも分からず、そして何もできずに戸惑うばかりでした。部員との間に距離も感じました。同学年の部員は十名いたのですが、今まで一年以上も同じ汗を流してきた十名の輪に入るのは、少し時間がかかったような気がします。ただ、毎日が楽しかった。苦しい練習に耐えてきた選手達には少し不愉快な表現かもしれませんが、私は毎日の部活の時間がとても楽しみでした。私を仲間として迎え入れ、今も友達としてつき合ってくれる選手達、支えてくれた三浦監督、高橋部長、畠山コーチ、その他大勢の方々に本当に感謝しています。あんなに充実した時間を過ごせたのは、皆さんのお陰です。

マネジャーというのは選手でもなく指導陣でもない、その中立的な立場で、両者の苦しみや言い分が分かります。しかし、どうすることもできないという自分の無力さを感じた時が一番辛い時でした。高校野球は、その取り上げられるスケールの大きさ、関わり合う人の多さの分、難しいもののような気がします。様々な意見、様々な要件の限界、それらを統括し、戦力へ結びつけることの難しさ。ただ一つ確かな事は、皆「甲子園」という夢に思いを馳せているという事。私はそんな高校野球にかかわりを持てた事をうれしく思っています。

そして盛岡一高野球部に少しの間ではありますが、一部員として、かかわっていられた事を誇りに思います。

これからも変わらぬ思いで、一高野球を応援し続けるつもりです。そして、一高球児達が再び甲子園のグラウンドに立つ日を楽しみにしています。

プロフィール
平成六年、新チーム結成後、マネジャーとして盛岡一高硬式野球部入部。
平成八年、盛岡一高卒業。現在、東北大学経済学部在学中。

かけがえのない日々

平成九年卒業
渡邉里沙



私がマネジャーとなったのは、平成六年の夏の大会終了後である。

当時私は、一年生だった。今まで一高の野球部に女子マネジャーが存在しないことは分かっていたが、どうしても「高校野球」をしたくて当時の高橋部長に頼みこんだのである。一高野球部に女が入ることへの批判もかなりあったのであろう。それでも入部を認めてくれた三浦監督、高橋部長、コーチの方々、後援会の方々に深く感謝している。野球部に入れたおかげで、とても充実した高校生活が送れた。

入ったばかりの時は部室が無いためトイレで着替えたり（部長には外で着替えられる覚悟で来いと言われていた）、野球部内のルールも分からず、立っているだけであった。又、珍しそうにいろんな人に話しかけらた。マネジャーといっても、洗濯などをしたことはなかった。それは“自分の管理は自分で”という部長の方針があったからである。私がした仕事は、ボール渡し、スコアつけ、麦茶づくり、水まき、救急箱の管理、部長の秘書、そして授業ノートのコピー（特定の人たちだけである）であった。お手伝いさんではなく選手がプレーしやすい状況を作るのが役目であった。

野球部に入ってから帰る時間も遅くなったし、自由な時間が少なくなった。それでも、高校野球の側にいられるだけで嬉しかったし、部員たちとも仲良くやっていたのでよかった。だけど、いくら近くにいても私はグラウンドには立てず、見ていることしかできなかった。何時間もノック、怒られている姿、そして負け試合。どんな時でも私は見ていることしかできず、助けることはできなかったと思う。元気づけなくてはいけない私が、逆に部員たちのプレーを見ていつも励まされていた。結局、私は何もできなかったと思う。そこが悔しいところである。

私が在籍した二年間は、ベスト8が最高であった。私は幸せであった。大好きな野球とそれをする部員たちと過ごした日々は、とても楽しくかけがえのないものである。特に、私のことを女扱いしなかった平成九年卒のメンバーには感謝している。ありがとう。

現在、マネジャーがいなくなって残念であるが、それが一高らしいと思う。しかし、また私みたいな人が現れることをひそかに願っている。

プロフィール
平成六年、新チーム結成後、女子マネジャー第一号として盛岡一高硬式野球部入部。
平成九年、盛岡一高卒業。現在、明治学院大学社会学部在学中。

野球との出会い

平成十年卒業
松川智美



今回、この原稿を書くにあたり、九六年秋から九七年夏までの記録「逆転の譜」のページを久しぶりに捲った。様々な記憶が甦り、時に笑みがこぼれ、時に涙が溢れた。そんな想いと共に、野球部での思い出を綴ってみようと思う。

私が夏の大会の野球応援で選手の雄姿に憧れ、初めてグラウンドに足を踏み入れたのは一年生の冬、家族の反対を押しきってのことだった。伝統ある野球部、結束も固いであろうその集団の中に、自分のようなルールもろくに知らない人間が混じっても良いものかというこの時の思いを、私は後々まで引きずった。入部初日、部員達のユニホーム姿が怖く見えた。

野球部は他のどの部より部員同士の仲が良く、近寄りがたい雰囲気を持っていた。一日を通して部員が同じ時間を共にすることが多く、自然と教室や廊下でも固まっていた。朝練に始まり夜遅くまで続く平日の練習に加え、週末は一日がかり、時には泊まりがけでの練習試合の繰り返し。我ながらよく頑張ったなと、今思うと自分でもびっくりしてしまう。そういえば部活動の過密時期には、授業中もみんなで仲良く眠っていた。

というように、厳しいながらも結束した野球部であったが、私としては一つ心残りがある。それは部員と野球の話をあまりできなかったことである。原因は私の知識不足であったが…。部員の目に私はどのようなマネジャーに映っていたのだろうか。マネジャーの存在意義について少々問題になった学年だけに気になるところなのである。もし一人でも「マネジャーがいて良かった」と感じてくれている人がいるならば、私は幸せだ。

私の人生は野球部に入ったことで少なからず変わったと思う。それだけ大きな出来事だった。入部を許してくれた皆様に心から感謝する。本当に良い経験をさせて頂いた。

前向きに練習に励む姿に何度も心を打たれた。そんなみんなと一緒だったから秋の県大会優勝はもう最高に嬉しかったし、今でも、これからも、ずっと忘れない。私の高校時代は終わったけど、これからも高校野球にどんな形であれ、関わっていきたいと思う。「本当にありがとう‼」

プロフィール
平成七年、新チーム結成後、マネジャーとして盛岡一高硬式野球部入部。
平成十年、盛岡一高卒業。現在、東北生活文化大学家政学部在学中。

特集③座談会
「現役高校監督・部長からみた一高野球」



出席者／花北商業高校監督
田巻　晃（昭和53年卒業）
花巻南高校監督
杉田英一（昭和57年卒業）
盛岡北高校監督
千葉靖久（昭和60年卒業）
盛岡南高校副部長
角掛典生（昭和60年卒業）
盛岡一高監督
柳原和久（昭和62年卒業）
大船渡工業高校監督
伊藤淳（昭和63年卒業）
司　会／沼宮内高校部長
佐藤誠剛（昭和45年卒業）

佐藤　自己紹介と日頃の高校野球部指導で、生徒に伝えたい思いをお話していただきたいと思います。

田巻　現在、花北商業高校の監督の田巻です。大学を卒業して一年目が葛巻高校。その次が久慈高校で七年、沼宮内高校が七年、そして現在の花北商業が二年です。まず、生徒になめられないようにということ。そのために、技術でも野球に対する考え方でもつねに最高のものを勉強していきたい。もう一つは、生徒にうそをつかない。親身に当たるということを大事に考えてやっています。

杉田　花巻南高校で監督をしています杉田です。初任は、遠野農業高校という名前だったころに四年、校名変更で遠野緑峰高校になってからは五年いました。それから花巻に来て八年がたちました。最初の一年は部長をして、翌年から監督になりました。在職中に母校との試合は二試合です。一試合目は、緑峰と校名が変わった年に試合をしまして、0―12でした。それから、花巻に移って一度。惜しいところまで押したんですがこれも負けていますので、ぜひ

母校に勝つところまで野球を続けていきたいと思います。子供たちには、野球というのはもっとシンプルな心を込めてやって答えが出るものなんだということを教えたい、結果に出したいと思っています。

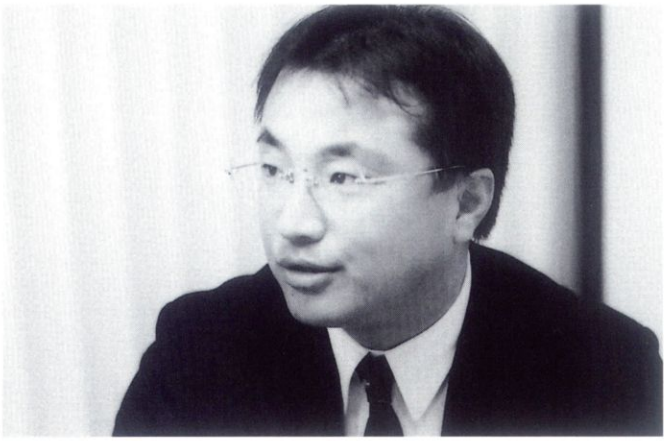
角掛　盛岡南高校で副部長をしています角掛です。盛岡南高校に来て二年たちました。最初は釜石工業高校に七年いました。最初の二年間はサッカー部の顧問で、三年目から野球部の副部長、部長です。高校生の時もレギュラーにはなれなかったので、子供たちに何を教えるかというと、野球を好きになることと、勝ちたいと思わせることです。勝ちたいと思えば、あとは勝つためにはどうしなければならないかということが、自ずと見えてくるので、とにかく勝つためにがんばっているんだと感じさせたいと思っています。あとは、暇さえあればグラウンドに出て、とにかくつき合うことですね。休みの日でも子供たちが練習をしたいと言えば、出て行ってつき合います。

伊藤　大船渡工業高校の伊藤です。初任で来まして、一年目は副部長をやっていたんですが、秋から監督をやって四年目に入りました。自分は高校時代も大学時代もさほど技術を持った選手ではなかったので、指導するときは何らかの誠意を持ってやっていかなければならないと思います。一生懸命指導していく中で、大事だなと思ったことは、高校の野球は本当に基礎的な部分、どうやったらうまくなるかというところを教えて、高校を卒業してからの身の振り方まで考えていますが、なかなか思うようにはいっていません。今、うまい生徒だけではなくて、野球が好きな生徒が入って来ています。がんばっている選手を全面的に使いたい。うまい選手というよりも、一生懸命やっている選手というところで指導しているつもりです。

柳原　現在盛岡一高の監督を務めております柳原です。大学在学中からコーチとしてがんばってきて、今年の夏に三浦監督からバトンタッチしました。指導の信念は自分たちで考えて野球をやってほしいということと、あとは、おもいきってプレーをしてほしいと思うので、一つ二つのエラーでしょげることなく元気にやってほしいということで指導をしています。

佐藤　これも高校野球を考える上で、自主性というか考える選手を育てることが必要ですね。

千葉　現在盛岡北高校で監督を務めております千葉です。盛岡北高校は五年目になります。二つ目の学校です。初任は大船渡高校で、最初の三年間は、例の選抜ベスト4の佐藤監督がまだいらっしゃいまして、その下で部長、副部長を務め、野球を勉強させてもらいました。じつは、野球の指導がしたくて教員という職業を選びました。佐藤監督が転勤しまして、大船渡高校で二年間監督を務めさせていただきました。大船渡高校の最後の年でしたが、弱いチームを叩き上げて自分なりには自信を持ったチームをつくりました。勢いをつけて勝ち上がったんですが、4回戦で盛岡一高に2―3で敗れました。一高は決勝に行きましたが、いまだに夏の一番悔しい敗戦が、その一高との1点差での負けであります。現在は北高で指導をしていますが、立派な指導理念というのはありません。春、新入部員に対しどこまで勝ち上がれるかは時の運だからわからないが、現役生活が終わった時


千葉靖久

点で、礼儀正しさと忍耐強さだけは残っているはずだから、覚悟してがんばりましょうという話を毎年しています。いまだに勉強中で、地区予選で負けても春の県大会は極力見に行って目を肥やしている最中です。どのくらい野球の指導ができるかわかりませんが、与えられたチャンスは確実に生かして行ければと思っています。

佐藤　これも監督、指導者の条件の一つで、選手以上に伸びたりするんじゃないかと思いますが、私の場合、野球の指導者には全然縁がなかったんです。最初のスタートは福岡高校でした。転勤で宮古北に行って、野球をやれということでそこが初めということになります。グラウンドに出るということだけは毎日やっていました。楽しかったことは、練習が終わったグラウンドで三十分ぐらい、自分と合わせて四人の顧問で、生徒のことや野球のことも含めて人生論まで話す時間が非常によかったです。これも野球を広げる一つかなと思いました。その後一高に来て、遠藤先生と川村祥平先生とやりまして、大変楽しい思いをしました。勝つためにはそれではだめだ、勝

つためにはということを負けてから感じました。大切なことは、指導者がここまで強くなろうとか、ここまで勝とうと思うと方向が見えて来るという思いがしています。指導者の役割として、頭の部分と技術の部分の両方が一人のところにかかわってきたりしますので、信念を最後まで曲げないでほしいです。次に、一高で学んだことをどういうふうに野球に生かしているかということを話していただきたいと思います。

田巻　私は、自分で経験したことをなかなか越えられなかった思っています。私は杉田監督に教えられたのですが、あまりものを言われなかった。だから怖かった。それで必死にやりました。生徒とのコミュニケーションについて、あまり重視していませんでした。指導を始めて十年以上たってから自分の思っていることを生徒に伝えなくてはならないと思い始めました。それからです。私自身が変わったなと思ったのは。指導者には、伝える能力というのが非常に大切だと思っています。去年「インディペンデンスデイ」という映画を見た時に、大統領の最後の演説シーンのような、



田巻　晃

人を奮い立たせる態度や言い方はぜひ必要だと思いました。なんとか生徒を奮い立たせるような方法は絶対必要だと思います。杉田清彦監督はものを言わないけれど、私は奮い立ちました。でも、その方法しかないわけじゃない。私は私なりの方法で、どうやって生徒とコミュニケーションをとって奮い立たせるかということを考えています。一高野球部で学んだことは、杉田監督流の教え方だったと思います。それで同じ方法をとろうと思ったのが、私の間違でした。私は私の方法でということが大事なんだろうと思っています。でも、一高野球部は敵として見た場合は、イメージとして知能・技術のレベルが高いチームと感じてしまうことだろうと思います。それは相手にしてみれば手ごわいだろうなと。私は、今の高校生は相当いい力をもっていると思うんですが、一高野球には及ばないだろうと思います。だから一高野球に学ぶ部分があるとすれば、相手校にいやなチームとイメージされることだと思っています。

佐藤　ありがとうございます。生徒の力を素直に出させる、別な言葉で言うと動機

づけということになると思います。

田巻　十年以上前は、野球選手はやる気があって、うまくなるためにやっているだろうと思っていたので、経験したことを熱っぽく教えようと思っていたんですが、いつも教える前で終わってしまいました。野球がうまくなるために、最初にぐいぐい言わないとだめだということがわかりましたね。無理矢理やらせて、その中から気持ちを奮い立たせるということです。どうやればうまくなるかということで、最近いい指導書がいっぱい出ていますが、それらを読むと、自分が思っていたことを立派な人も言っています。だから自信を持って実行しています。

佐藤　選手の気持ちを奮い立たせる、やる気を十分につくってやる、それが指導者の役割。ある意味では、自分でその気持ちをつくれるというのはあるかもしれませんね。先ほど基本的な部分で、普段の在り方とか練習に向かう気持ちのことを言ったと思うんですが、具体的な場合だと、試合などで選手の気持ちを育てる場面は別にあるんでしょうか。


角掛典生

田巻　いえ、同じです。あの「インディペンデンスデイ」の中の演説というのは、試合前にやるべきことだと思うんですね。野球は、力や技術をつけて自分の力を発揮できるようにすれば間違いなく勝てると思ってきたんですが、そうではないこともずいぶんあります。だから奮い立たせるような監督の声や話や態度があれば、大いにやらなければならないと思います。

杉田　私が駆け出しのころ、ゲーム前にどういうふうに気持ちをつくっていこうかということもわからない状態の時に、久慈高の選手と田巻先生のやり取りの様子を見て勉強させてもらった時があります。最近、同じ地区になったので、先ほどの本なんかも紹介していただいたりして教えていただくことも多いんですが、直接口頭で教えられることもあるような気がします。

佐藤　試合前の気持ち、心をつくらないと野球にならないんですよね。もう一つおもしろいなと思ったのは、足が速い、打てる、投げられるというようないい選手を育てても勝てるわけではない、という趣旨のことも述べていましたね。

角掛　そうですね。私はそうだと思って顧問に就きました。顧問に就いてから監督と「がみがみやってもしょうがないんだから、笑いながらやらせてみましょう」という話をしました。それで、ピッチャーに口癖のように「つらかったらマウンドで笑ってみろ」「好きな野球をやっているんだから楽しいでしょう」「ランナーを背負わないで野球をやったらつまらないし、ノーアウト満塁を0点で抑える方が楽しいんじゃないですか」という話をします。エースと呼ばれる子だったらそのくらいの気持ちがあってもいいんじゃないかなと思います。周りも「あいつが投げているんだからこのくらい…」となった場合、それがチームワークなんだと思います。私が一高で学んだこともそういうことだったんじゃないかなと思います。

佐藤　おもしろいですね。気持ちづくりというのが優先するようになってきたということですね。

田巻　気持ちが大事ということではないですね。私は、走ったり、取ったり、投げたり、打ったり、それがない選手はだめだと思うんですね。だから、練習と試合の場面に分けて言えば、練習ではとにかく力をつけたり、投げたり、技術を高める。与えられたものはそこにあるのだからそれを最大限に伸ばすこと。どのチームに行ったって、低かろうが高かろうが考えなければいけないことだから、正しい方法で技術を高める。試合になった場合は、今まで培ったものをそのまま発揮できるようにするために、ここでは気持ちの持ち方が大きいと思います。いろんな監督の話し方や態度を知っていますが、それを真似したからといって絶対できない。森監督のやり方で私がやっても甲子園には行けませんからね。暗示のかけ方とかいろんな方法がありますが、それはその人独特のものだから、私は私の独特のものをつくらなければ勝てないなと思います。



佐藤誠剛

佐藤　さらに深めたいんですが、練習の部分と試合の部分とやや違うところがあります。気持ちという言葉で全部一色端にしていたんですが、練習をつくる気持ち、試合をつくる気持ちなど気持ちづくりの意義がとても大きいと思いますが。

伊藤　一高の野球部は頭がいい生徒がそろっていると言われるんですが、野球は頭でやるんだと、野球に携わっている人が全部そういう言い方をします。他校の生徒にとっては、それがコンプレックスになっているんですね。そういう意味で一高というのは得をしているんでしょうね。うちの大船渡工業は春はずば抜けて強いんですよ。なぜここの学校が甲子園に行ったことがないのかなと考えた時に、仮に五月に甲子園の選手権があれば絶対行っているんですよね。ところが、七月までの二ヶ月の間で緊張感を持った練習とか試合をしていないんです。春の大会に行って思うことは、緊張感のないところでは勝てるんですよ。まだ一高とは試合をしたことがないのでやってみたいとは思うんですが、まず一高に対するコンプレックスを取り除いてあげる。一高でやっていた人間からすれば、野球部はたいした練習はしていないんですよ。不思議だったのは、柳原さんたちは自分たちより一つ上なんですが、決勝で一関商工に八回に逆転されてしまったんですね。あのチームが決勝まで残っていたのが驚きでした。それが今の指導の自信につながっていると思います。どんな選手でも、そんなに力を入れた練習をしなくても、普通の練習してても勝てるんじゃないか。だからどこの学校にも可能性はあると思うんです。ただし、気持ちの面でそういうコンプレックスというのが、一番試合の結果を左右するんじゃないかなと思います。さっき田巻さんが言った試合の前に魔法のようなものをかける、それで選手の緊張をほぐしてやる。でも、練習の中の実力というのも確かに大事だと思います。最終的には九回のツーアウトからのワンアウトというのが、すごい緊張感を持ってやる中で、その緊張感が普通の練習とか練習試合とか、もっと言えば授業とかでも、あと一分で授業が終わるという時にどこまで集中力を持って取り組めるのかというところが、一高の生徒とほかの学校の生徒の違いではないかと思います。

佐藤　普通の練習でチャンスはあるのだというとてもいい話だったんですが、選手の立場からどういうことで決勝に行けたのか、それは本当に気持ち一つなのか、やっ

ぱり一年、二年、三年で力がついてきた技術という裏づけのある気持ちなのか、実際指導してみてのお話をお願いします。

柳原　私としては今までやってきて必要なことはやる。新たなものは新たなもので勉強してそれなりに彼らに教えて、今まで通りに練習して行こうと思います。一高は頭で理解する能力はほかのチームよりはあると思います。その中であとはそれを経験することで身につけていく、ということだと思います。そのへんは一高のチームはたけているんだと思います。精神的な面も、年々語り継がれていく部分があるのかなと思っています。

千葉　最初に柳原監督が、少しでも生徒に自分たちで考える野球をやってほしいと言ってましたが、私は夏の大会や地区予選で何度か一高を敵に回して感じるのは、一高の生徒は単純なメンタルトレーニングの最も必要のないチームなんじゃないかなということです。緊張感がどうして一高にはないのかなと思う時に、対戦してみれば、ベンチの中の雰囲気や、選手が自分でする動きを十分考えて行動しているのが伝わり、他のチームのように監督に動かされているというイメージは全く見えませんでした。自分が現役で一高の野球部にいる時は、そんなことは自覚したことがなかったんですが、外に出て対戦してみてわかりました。大船渡高校にいた時は練習量とか気合を入れた練習では絶対負けるわけがないと思っていました。とくにも苦しいゲームをものにして勝ち上がって、ここはチャンスだと私自身がすっかり自信を持って臨んだ時に、うちの選手が一高を目の前にして何かを感じているんです。試合が終わってから聞いてみたら、「一高は県大会の雰囲気を出していない。平然とやっている」というようなことを言っていたんです。私が高校を卒業して十四年たっていますが、その間に二回決勝戦に行ってますよね。やっぱりそれにはそれなりの理由はあると思います。正直言って私は一高に入学した時点で、ほかの八十九校にはない何か自信のようなものが備わって、そこにうまく指導者の先生方が火をつけてしまえば、甲子園まであと一歩というところまでいっているわけですから…そういう意味で、一高と対戦



柳原和久

するのはいやですね。

杉田　私は花巻の球場に役員として行く機会が多いので、母校が来た時にはスタンドに上がって応援しています。OBの方もたくさん見えられます。結果的には一高が勝ったゲームだったんですが、ゲームを見ながら「特別なことをするな」ということをOBの方々がしきりに言うんです。確かに特別なことをしなくてもチャンスがきて、ノーアウト満塁になって点数をもらった感じでした。そういうシーンが続いてゲームが流れて行ったように記憶しているんです。一高を相手にする心理は私も敵になったことはあるのでわかるんですが、「何かするぞ」とか「何か考えているぞ」とか「何かあるぞ」というようなことが、何もしなくてもプラスの方になっていったりするわけです。最初にシンプルにという話をしましたが、私は森監督と川村祥平先生に教わったんですが、動の方と静の方という感じでした。練習の時にもゲームの時にも言うこと、やることがいたってシンプルで、自分が卒業してから見たゲームの中でも、しきりに求めることはシンプルにやること、特別なことはやらなくていいんだということだったというのを、思い出します。やっぱりプラスアルファというのが盛岡一高にはありますね。だからこそあまり特別にしてはいけないんじゃないかなと思ったりする場面は多かったような気がします。

千葉　大船渡に限らず、高田にしても釜石にしても宮古にしても、気象条件は恵まれてますからそれをどんどんプラスにして、体力面も技術面も練習はたくさんします。私は自分が大船渡高校でやってきて、夏に弱いと思ったことはないんですが、私が監督をしていたころは練習がつまらなかったと思います。なぜかと言うと、人生の中で一番緊張した時にヒット一本を打てるかどうかで決まるんだからということを部員にとにかく言うんですよ。常にそういうことを言われているから、練習そのものはつまらなかったんじゃないかなと思います。夏の大会で県営野球場で試合をした時に、一高が一番緊張感なく試合をやっていると私は思っていましたので、それに近い形でやらせたいと思えば、練習はつまらな

くなると思います。そして、私は1週間以上前からつまらない緊張感を切って、そこまでの時点で、選手が自分たちで輪をつくってしゃべり出して試合をつくっていける雰囲気ができた時には勝てると思います。

佐藤　選手の中から話し合いの雰囲気が出てきて、大会への雰囲気とか勝つ雰囲気が生まれてくるというのは、貴重な話ですね。

伊藤　春になぜ強いかということなんですが、確かに気象条件もあって一ヶ月くらい早くできるというのはメリットなんです。それ以上に、選手がみんなでホームラン競争をやっているんですよ。誰も見ていないと選手の中には、遠くに飛ばしたいとか、ピッチャーでない選手がピッチャーをやったりしてブルペンで投げているんですよ。基本的なことで、遠くに飛ばすとか球を速く投げたいというのが、技術の向上になり春に強いんだと思うんです。ところが夏の本番になった時に、みんなホームランを狙いに行かないんですよ。逆に当てにいったり、ピッチャーもフォアボールを出さないように腕が縮こまったりするところが弱点なんですよね。大船渡工業が甲子園に行くためにどうすればいいかと言うと、ホームラン競争をしながら非臨場感を持てればいいんじゃないかと。選手の力を押さえるのではなくて、力を伸ばしつつ、かつ緊張感を持った、試合で通用するバッティングをしていけば勝てるんじゃないかと思うんですが、そういう指導は不可能に近いというのが現状です。



伊藤　淳

佐藤　ホームラン競争しているんですか。

伊藤　やれとは言わないんですが、生徒の中でやっているんです。練習半分、遊び半分なんですね。

佐藤　おもしろい、楽しい、飛んだ、投げれるというのは野球の原点ですね。

千葉　沿岸の生徒はそういうところから入って行けるから強いのかもしれませんね。

田巻　私が好きなことは生徒を教えることなんですね。選手を強くすることですね。選手を強くすることとゲームで勝つことは違うんですね。でも私は、生徒を教えることとゲームに勝つことをしなければな

らないんだけれど、今の段階ではゲームに勝つことがそうとうおろそかになっていますね。小さな話になりますが、私がキャプテンを選ぶと、どうしてあれがキャプテンなんだと言われるんです。私は野球を見てキャプテンを選びますからね。ほかの先生方は授業を見てますよね。見方が全然違うんです。

千葉　キャプテン選びがうまくいくとチームがよくなりますね。私が決めるのではなく生徒が決めます。

佐藤　二十一世紀の野球はキャッチャーの時代だという流れにもなっています。高校生の野球はいろいろあるにしても、一高の野球はこういうことを心がけてほしい、夢、いい野球ということを話していただきたいです。私が高校生の時、関さんがいて、たった一つしか覚えていないんですが、バントは悪いと教えられました。相手にアウトを一つやるということは、いい野球に反する。相手にアウトをやらないような野球をしろ。そういう意味で、送りバントはなるべくやりたくない。それは、野球を見ながらでも教える場合でも、バント自体はするけれど相手にアウトはやらない。そういうねらいを込めてバントをする。ということはしきりに話していました。

伊藤　バントとスクイズを始めた人は、ランナーを送るとか打てなくても返すということで、弱いチームでも勝てるという考え方から始めたのかなとも思うんですが、さっき言われたように、バントは相手にアウトを与えるという考え方と、なんとしても送りたいという、最終的には選ぶのは監督の決断になるわけですね。バントを失敗した、スクイズを失敗したとなると、最終的には監督批判になってしまうわけですね。成功すれば選手の力量。そういう野球以外のところで、監督に対するいろいろな批判をなんとか和らげる方法はないのかなと思いますね。監督によって考え方は違いますよね。判断を下した監督に対する一言を和らげてあげることが、柳原監督を押し上げていく一つの材料ではないかなと思うわけです。

角掛　部員に対し技術は確かに上手になってほしいし、強いチームになってほしいんですが、グラウンドに対する感謝と道具

に対する感謝の気持ちを、人前でも恥ずかしがることなく表せるような子供たちに育ってほしいなということだけ望みます。

千葉　私も同じです。道具とか物への感謝は、昔からちゃんとやらなければならないと言われていたことですが、今は物が簡単に手に入るので、それほど大事にしなくてもいいと思っているようなことを、一高が率先してやるようになると以外と影響力は大きいのではないかと思います。過大評価かもしれませんが、一高は影響力とか浸透力というものは、公立の中では大きいのではないかなと思っていました。最近忘れられているようなことに最初に目を向けて、行動に表してほしいです。

佐藤　あらゆる面でとは言わないけれど、姿勢の面でいいモデルになってほしいですね。どこの指導者も、野球というスポーツを通じていい人間になってほしいと願っているはずです。具体的には、あいさつができるとか、返事ができるとか、言葉使い、掃除というようなことは、最初にチームをつくる時の選手との約束事項ですよね。それを含めてのところが、どうしても



杉田英一

勝ち負けのあとについてくる感じがするので、繰り返し繰り返し言わなくてはいけませんね。野球に取り組む姿勢の部分では、どのチームも切磋琢磨してほしいと思います。

田巻　盛岡一高の場合にはいい選手がいっぱい入ってくるわけではないので、いい選手もそうでない選手も全部力を伸ばすようにする。もっと恵まれた方法は、いい選手ばかり入部させて、競争に勝ち残った者だけ使って勝つという野球があるだろうけれど、一高の場合はそうはいかないだろうから、入ってきた者は全部最大限に伸ばすようにしていけば、いいチームにまとまります。3、4人でも優れた選手がそろったら勝負をかけてください。

杉田　一高の野球部が勝つ道があるとすれば、突出した選手が入ってくる見込みはあまりないわけですね。その中で、技術の面、戦略の面で新しいことを編み出していく以外行き着くところはないのかもしれません。戻るところは、用具のことやグラウンドのこと、精神的なことなどになるわけです。突出した選手が来れば一番いいんで

すが、来ない時こそさまざまな環境整備ができるのかもしれません。そういう年に勝つことを別個に考えられるのが、一高というとこかもしれないので、いい選手が入って来た時はいい選手たちをもとにして強いチームをつくればいいし、そうでない年はそうでないものを鍛えて、鍛える中で、戦略に走る私立の学校が目を向けられないようなところに目を向けながら戦えればいいのかなと思うんです。

佐藤　昭和四十三年の一高の特徴は何かというと、突出した選手ではなくて、チームのバランスというのが特徴だと思います。

田巻　突出した選手はいましたよ。やっぱりうまい選手がいっぱい入ってこないと勝てないんじゃないでしょうか。日常的には下手な選手が多くて、うまい選手がそろった時に行くという意味で…。

佐藤　そういう意味ではそうかもしれないね。一高の標準から見ると上だったかもしれないね。甲子園出場のチーム中で見れば、いたって平均的なチームで、チームの特徴はと聞かれたら、チームのバランスがいいということですね。

田巻　私が突出した選手がいると言ったのは、いい力の選手がいた時だと思うんですね。

佐藤　岩手県で言うと、中学校の優勝、準優勝チームの有力な者、それくらいの選手が来ないと一高としても苦しいわけですよね。

田巻　そうです。そういう選手は来るから、来た時にがんばってほしいです。

佐藤　一高の目指す方向ということで確認できたのは、グラウンドで野球ができることに感謝するということが形として見えるように、一高でも、今自分がいるチームでもちゃんとしましょう。そうすればいい野球につながるんじゃないかということが、皆さんから出されました。それから、選手の一定のレベルを保つ努力をした上でチャンスを待ちましょうという話も出ました。

田巻　もう少し点検する項目はあると思いますね。いつでも保てるもののレベルを上げていかないとだめだと思います。グローブやスパイク磨きは小学生でもできますからね。つねに、一高はこれはできるというレベルをどんどん上げていけば、相当な

ところに行けると思います。どういうものを保てるかということです。保てるものをやる中で、いい選手が来た時に甲子園に行ける。一番の基礎のところを増やしていけば…。

佐藤　技術面、体力面、生活面の項目を確かめてみる。それを一つ上げるだけでモデルになるような、プラス岩手県で勝つことが差し当たって目標ですので…。この課題は一高だけではなくて、今預かっているチームが即、明日からできることでもありますので、お互いに切磋琢磨してやっていければと思います。

柳原　最終的な目標は甲子園で、それを目指すために努力して行かなければならないと思います。その中で、技術的、体力的、精神的な問題を維持することはできる。素材がいいとか悪いとかということは、あまり問題ではない。毎年志を持って一高に入ってくるんでしょうから、その中で目標に向かって風を吹かせて、帆を上げて風を受けて甲子園に向かって行くことだと思います。どういう風かということになると、いい選手がたまたま入って来た時なのか、たくさん入って来た時なのか、何が風になるかわかりませんが、その風をうまく利用する必要性はあるかなと思います。風を吹かせるためには、何か努力しないといけないわけですから、それが今出てきた、道具の手入れをするというようなことが、風が吹くための一つの要素になるのかなと思います。ただ今の学校の中で、そういう時間が彼らに残されているのかという疑問はありますが…。最終的に彼らがそういうことが必要なんだと考える必要性があると思います。自主性があれば、勝運というものにつながるのではないかと思います。自分たちでやれる部分はきちんとやる。そして最後に結果をどういう形で残すか…。思い切って野球をやって夏の大会に臨んで、それまでの過程を大事にして夏の大会で答えを出してほしいと思います。



秀吉本町本陣で収録

佐藤　今、物理的な環境が、一高百年の中で一番条件が悪いかもしれないので、逆にそれを意識すれば選手の意識づけがワンランク高まるのかもしれません。

母校の甲子園出場を願って結びたいと思います。

資料編



盛岡一高野球部略年表

明治32年（一八八九）		野球部創設（月日は未詳）
	7月	仙台一中（現仙台一高）と対抗戦を行う。降雨のためノーゲーム。
35年（一九〇二）	7月	一関中学（現一関一高）と対戦する。32―2で勝利。県内の中学同士の試合第一号。
37年（一九〇四）	7月	遠野中学（現遠野高校）と初めての対戦。27―9で勝利。
	10月	八戸中学（現八戸高校）と初対戦。13―4で勝利。現在行われている両校定期戦のきっかけとなる。
38年（一九〇五）	7月	秋田の大館中学（現大館鳳鳴高校）と初対戦。13―0で完封勝ち。
39年（一九〇六）	8月	遠征をして仙台二中（現仙台二高）と初対戦。7―1で勝利。
42年（一九〇九）	8月	大館中学と試合をし、0―1で敗れる。創部以来、初めての敗戦。
43年（一九一〇）	8月	遠征をして来た早稲田大学二軍と対戦。延長15回の熱戦の末、0―1で惜敗する。
	8月	福岡形水会チーム（福岡中ＯＢ）と対戦し、19―1で圧勝。
44年（一九一一）	11月	第一回東北六県中学連合野球大会に出場する。2戦2勝。
45年（一九一二）	7月	盛岡農学校（現盛岡農業高校）と対戦。7―0で勝利。
大正2年（一九一三）	10月	第二回東北六県中学連合野球大会に出場する。3戦し2勝1引き分け。
3年（一九一四）	秋	岩手師範学校（現岩大教育学部）と試合を行う。本校が勝つ。
4年（一九一五）	夏	第一回全国中等学校優勝野球大会が大阪の豊中球場で開催。本校は不参加。
5年（一九一六）	6月	盛岡高等農林学校（現岩大農学部）主催の「岩手県下野球大会」に出場し、優勝。
	8月	第二回全国中等学校優勝野球大会の東北予選に初参加。決勝で一関中学に敗れる。
6年（一九一七）	8月	念願の全国大会に出場。鳴尾球場で初めての開催。ベスト4となる。
7年（一九一八）	8月	米騒動のため全国大会中止。
8年（一九一九）	8月	2度目の全国大会出場。ベスト4となる。

10年（一九二一）	8月	3度目の全国大会出場。及川要一選手が岩手県人初のホームランを打つ。
14年（一九二五）	8月	東北地区が二分され、岩手、宮城、福島の三県で東北予選を争う。決勝で仙台二中に敗れ甲子園出場ならず。
15年（一九二六）	夏	5年振り4度目の全国大会出場。初めて甲子園の土を踏む。
昭和2年（一九二七）	夏	福岡中学（戸来誠―村田栄三）の前に決勝で惜敗。
4年（一九二九）	夏	岩手県予選で優勝するも全国大会出場ならず。
6年（一九三一）	夏	県大会、東北大会とも福岡中学に敗れる。
7年（一九三二）	夏	県大会で遠野中学を破り優勝するも、東北大会で宮城工業に敗れ全国大会出場ならず。
8年（一九三三）	夏	7年振り5度目の甲子園出場なる。
10年（一九三五）	夏	決勝で秋田商業に敗れる。
15年（一九四〇）		戦前最後の公式ゲームとなる。
16年（一九四一）		
～		第二次世界大戦のため、大会は中止となる。
20年（一九四五）		
21年（一九四六）	夏	全国中等学校優勝野球大会復活。県大会優勝。奥羽大会でも決勝に進んだが、一関中学の前に敗れる。
23年（一九四八）		学制改革が実施され、校名が盛岡一高となる。全国大会も全国高等学校野球選手権大会と改められた。
24年（一九四九）	4月	校名が盛岡高校となる。（昭和26年に盛岡一高にもどる）
	8月	奥羽大会（岩手）で決勝に進み、黒沢尻高を破り16年振りの全国大会出場なる。
25年（一九五〇）	8月	全国大会1回戦で平安高校（京都）と対戦、敗れる。
	8月	2年連続して全国大会に出場。2回戦から登場し米子東高校と対戦。惜敗する。
	9月	盛岡市営球場15周年記念「東北高等学校招待野球大会」が開かれ、優勝する。
26年（一九五一）	夏	県大会優勝。奥羽大会（青森）では決勝で青森高校と対戦。延長24回、0―1で敗れる。
27年（一九五二）	春	春季県大会優勝。
	夏	県大会優勝。奥羽大会（秋田）準決勝で秋田高校に敗れる。
31年（一九五六）	夏	県大会優勝。奥羽大会（秋田）1回戦で横手高校に敗れる。

32年（一九五七）	夏	2年連続で県大会優勝。奥羽大会（青森）準決勝で八戸高校に敗れる。
36年（一九六一）	春	決勝で盛岡商業に敗れる。
37年（一九六二）	春	盛岡地区大会優勝。東北大会（岩手）に出場。
41年（一九六六）	秋	県大会優勝。東北大会に出場。
42年（一九六七）	春	盛岡地区大会優勝。
	秋	盛岡地区大会優勝。県大会決勝で花巻商業（現花巻東高）に敗れる。
43年（一九六八）	夏	県大会で優勝し、甲子園に出場。ベスト8進出。
	秋	盛岡地区大会優勝。県大会決勝で花巻北高に敗れる。
44年（一九六九）	春	初めて国体秋季大会出場。初戦で松山商業に0―1で惜敗。
	秋	盛岡地区大会優勝。県大会で福岡高校に敗れる。
45年（一九七〇）	春	盛岡地区大会優勝。
46年（一九七一）	秋	盛岡地区大会優勝。東北大会（岩手）に出場。
47年（一九七二）	秋	盛岡地区大会優勝。東北大会（岩手）に出場。
49年（一九七四）	春	盛岡地区大会優勝。
	秋	決勝で盛岡商業に敗れる。県大会決勝で黒沢尻北高に敗れる。東北大会に出場。
50年（一九七五）	4月	県大会決勝で高田高校を下し、初優勝。東北大会でベスト4入り。
	春	第一回県高校招待野球に出場。東海大相模と対戦したが1―7で敗退。
	夏	盛岡地区大会優勝。
52年（一九七七）	春	県大会決勝戦で盛岡商業に0―2で敗れる。
	夏	盛岡地区大会優勝。
	秋	県大会準決勝で福岡高校に敗れる。
53年（一九七八）	夏	県大会決勝で黒沢尻工業に敗れる。東北大会（岩手）に出場。
	9月	県大会決勝で黒沢尻工業に勝ち、10年振り9度目の全国大会出場。1回戦で報徳学園（兵庫）と対戦し、敗れる。盛岡一高―八戸高校定期戦が50年振りに復活。8―8の引き分け。

54年（一九七九）	5月	三県三校野球対抗戦の第1回大会開催。（秋田高校、仙台一高、本校の3校）
	春	決勝で盛岡工業に敗れる。
55年（一九八〇）	秋	盛岡地区代表。
56年（一九八一）	6月	日米親善高校野球が盛岡で開催。岩手選抜チームに川村祥平教諭がコーチ、中山篤、高橋充が選手として参加。
57年（一九八二）	秋	盛岡地区代表。
58年（一九八三）	5月	岩手・埼玉両県交流高校野球が盛岡で開催。市内選抜チームに川村祥平教諭が監督、川村公司、佐々木智之が選手として参加した。
	秋	盛岡地区代表。
59年（一九八四）	秋	盛岡地区代表。
60年（一九八五）	春	盛岡地区代表。
61年（一九八六）	春	盛岡地区代表。
	6月	県高校招待野球に出場。招待校は箕島高校。本校の村田忍選手のホームランも及ばず2―5で惜敗。
62年（一九八七）	夏	県大会決勝で一関商工に4―5で敗れる。
63年（一九八八）	春	盛岡地区代表。
平成元年（一九八九）	春	盛岡地区代表。
5年（一九九三）	春	盛岡地区代表。
	夏	県大会決勝で久慈商業に敗れる。
7年（一九九五）	秋	盛岡地区代表。
	春	盛岡地区代表。
	秋	盛岡地区代表。
	秋	白堊ドーム（雨天練習場）が完成。
8年（一九九六）	秋	盛岡地区代表。県大会で優勝し、東北大会（宮城）に出場。
9年（一九九七）	秋	盛岡地区代表。

全国高等学校野球選手権大会の記録

（表の見方）

・〔回戦〕……準々決勝の名称を原則として使用しないことにしたが、便宜上、準々決勝に相当する回戦のところに、その名称も記した。また、一カ所だけ準決勝の名称も同様の扱いをした。

・〔勝〕〔敗〕……全国高等学校野球選手権大会における通算勝利数および通算敗戦数を記した。対戦校の棄権によって得た勝利も、通算勝利数に加えた。

・〔学校名〕……対戦後に、校名を変更した学校もあるが、当時の校名のままとした。

年	回数	大会名	回戦	白望校	スコア	対戦校	勝	敗	地方代表校	全国大会優勝校	全国参加校数
大正4年（一九一五）	1	東北		盛岡中	大会開催を知らず不参加				秋田中	京都二中	73
大正5年（一九一六）	2	東北	2回戦（準々決勝）	盛岡中	11—0	仙台一中	1				
			準決勝	盛岡中	18—1	福島師範	2				
			決勝	盛岡中	1—4	一関中		1	一関中	慶応普通部	115
大正6年（一九一七）	3	東北	2回戦（準々決勝）	盛岡中	11—1	仙台二中	3				
			準決勝	盛岡中	7—5	秋田中	4				
			決勝	盛岡中	5—2	一関中	5		**盛岡中**		
		全国	1回戦	盛岡中	5—1	香川商	6				
			2回戦（準々決勝）	盛岡中	2—1	慶応普通部	7				
大正7年（一九一八）	4	東北	準決勝	盛岡中	0—1	関西学院中等部		2		愛知一中	118
			準決勝	盛岡中	4—7	一関中		3	一関中	米騒動で中止	137
大正8年（一九一九）	5	東北	2回戦（準々決勝）	盛岡中	14—0	小樽中	8				
			準決勝	盛岡中	（棄権）	一関中	9				
			決勝	盛岡中	21—1	函館商	10		**盛岡中**		

年	回数	大会名	回戦	白堊校	スコア	対戦校	勝	敗	地方代表校	全国大会優勝校	全国参加校数
		全国	1回戦	盛岡中	4—3	同志社中	11				
			2回戦（準々決勝）	盛岡中	1—0	松山商	12				
			準決勝	盛岡中	0—8	神戸一中		4		神戸一中	134
大正9年（一九二〇）	6	東北	1回戦（準々決勝）	盛岡中	5—1	福島中	13				
			準決勝	盛岡中	3—4	仙台一中		5	一関中	関西学院中等部	157
大正10年（一九二一）	7	東北	1回戦	盛岡中	15—2	築館中	14				
			2回戦（準々決勝）	盛岡中	10—0	盛岡商	15				
			準決勝	盛岡中	11—0	仙台二中	16				
			決勝	盛岡中	9—0	秋田中	17		盛岡中		
		全国	2回戦	盛岡中	5—4	市岡中	18				
			3回戦（準々決勝）	盛岡中	2—5	豊国中		6		和歌山中	207
大正11年（一九二二）	8	東北	1回戦	盛岡中	16—6	安積中	19				
			2回戦	盛岡中	5—3	横手中	20				
			3回戦（準々決勝）	盛岡中	2—8	秋田中		7	秋田中	和歌山中	229
大正12年（一九二三）	9	東北	1回戦	盛岡中	16—0	宮城師範	21				
			2回戦	盛岡中	12—1	磐城中	22				
			3回戦（準々決勝）	盛岡中	14—7	仙台工	23				
			準決勝	盛岡中	5—15	仙台一中		8	仙台一中	甲陽中	243
大正13年（一九二四）	10	東北	1回戦	盛岡中	13—1	仙台商	24				
			2回戦	盛岡中	6—5	盛岡商	25				
			3回戦（準々決勝）	盛岡中	5—3	大館中	26				
			準決勝	盛岡中	0—6	秋田中		9	秋田中	広島商	263
大正14年（一九二五）	11	東北	2回戦	盛岡中	13—3	福島師範	27				
			3回戦（準々決勝）	盛岡中	10—7	仙台一中	28				

| | | |

年	回数	大会名	回戦	白堊校	スコア	対戦校	勝	敗	地方代表校	全国大会優勝校	全国参加校数
昭和7年（一九三二）	18	東北	準決勝	盛岡中	7—6	福岡中	47				
			決勝	盛岡中	4—1	遠野中	48				
		第2次予選	1回戦（準々決勝）	盛岡中	5—2	福島商	49				
			準決勝	盛岡中	2—8	宮城工		18	遠野中	中京商	660
			準決勝	盛岡中	2—6	盛岡商		19			
		第2次予選	1回戦（準々決勝）	盛岡中	7—3	宮城工	50				
			準決勝	盛岡中	7—4	磐城中	51				
昭和8年（一九三三）	19	東北	決勝	盛岡中	8—4	育英中	52		盛岡中		
		全国	1回戦	盛岡中	3—12	浪華商		20		中京商	671
		奥羽	1回戦（準々決勝）	盛岡中	2—1	黒沢尻中	53				
昭和9年（一九三四）	20	岩手予選	準決勝	盛岡中	0—5	遠野中		21	秋田中	呉港中	675
			2回戦（準々決勝）	盛岡中	17—1	一関中	54				
			準決勝	盛岡中	14—0	花巻中	55				
昭和10年（一九三五）	21	奥羽	決勝	盛岡中	16—12	福岡中	56				
		岩手予選	準決勝	盛岡中	14—0	青森師範	57				
			1回戦（準々決勝）	盛岡中	2—1	秋田中	58				
		第2次予選	準決勝	盛岡中	1—7	秋田商		22	秋田商	松山商	666
昭和11年（一九三六）	22	奥羽	決勝	盛岡中	15—5	黒沢尻中	59				
		岩手予選	1回戦	盛岡中	9—2	宮古水産	60				
			2回戦（準々決勝）	盛岡中	4—5	盛岡商		23			
			準決勝	盛岡中	5—14	秋田商		24	盛岡商	岐阜商	665
		第2次予選	1回戦（準々決勝）	盛岡中	12—7	八戸中	61				
昭和12年（一九三七）	23	奥羽	岩手予選	2回戦（準々決勝）	7—8	盛岡商		25	秋田中	中京商	654
昭和13年（一九三八）	24	奥羽	岩手予選	2回戦（準々決勝）	7—8	盛岡商		26	青森師範	平安中	633

| | | |

年	回数	大会名	回戦	白堊校	スコア	対戦校	勝	敗	地方代表校	全国大会優勝校	全国参加校数
昭和25年（一九五〇）	32	全国	1回戦	盛岡	7—18	平安		34		湘南	1365
		奥羽	1回戦	盛岡	12—2	岩手	77				
		岩手予選	2回戦	盛岡	17—7	胆沢	78				
			3回戦（準々決勝）	盛岡	9—3	黒沢尻	79				
			準決勝	盛岡	12—1	一戸	80				
			決勝	盛岡	10—0	一関	81				
			1回戦（準々決勝）	盛岡	10—5	金足農	82				
		第2次予選	準決勝	盛岡	8—0	秋田工	83				
			決勝	盛岡	5—1	本荘	84		盛岡		
昭和26年（一九五一）	33	全国	2回戦	盛岡	2—3	米子東		35		松山東	1536
		奥羽	2回戦	盛岡一	2—1	釜石	85				
		岩手予選	3回戦	盛岡一	1—0	福岡	86				
			4回戦（準々決勝）	盛岡一	4—0	尾崎	87				
			準決勝	盛岡一	7—6	盛岡三	88				
			決勝	盛岡一	2—1	岩手	89				
		第2次予選	1回戦（準々決勝）	盛岡一	7—1	青森工	90				
			準決勝	盛岡一	7—6	秋田南	91				
			決勝	盛岡一	0—1	青森		36	青森	平安	1633
昭和27年（一九五二）	34	奥羽	2回戦	盛岡一	0—2	黒沢尻工		37	盛岡商	芦屋	1653
		岩手予選	2回戦	盛岡一	11—1	平館	92				
昭和28年（一九五三）	35	奥羽	3回戦	盛岡一	13—0	高田	93				
		岩手予選	4回戦（準々決勝）	盛岡一	6—1	花巻北	94				
			準決勝	盛岡一	6—0	黒沢尻	95				
			決勝	盛岡一	5—0	遠野	96				

| | | |

年	回数	大会名	回戦	白堊校	スコア	対戦校	勝	敗	地方代表校	全国大会優勝校	全国参加校数
昭和35年（一九六〇）	42	北奥羽	2回戦	盛岡一	9—1	紫波	116				
		岩手予選	3回戦	盛岡一	1—7	一戸		45	青森	法政二	1903
昭和36年（一九六一）	43	北奥羽	1回戦	盛岡一	7—0	釜石工	117				
		岩手予選	2回戦	盛岡一	0—8	福岡		46	福岡	浪商	1941
昭和37年（一九六二）	44	北奥羽	2回戦	盛岡一	1—0	黒沢尻工	118				
		岩手予選	3回戦	盛岡一	0—1	宮古		47	青森一	作新学院	1996
昭和38年（一九六三）	45	岩手	1回戦	盛岡一	7—2	久慈	119				
		（記念大会）	2回戦	盛岡一	0—1	摺沢		48	花巻北	明星	2107
昭和39年（一九六四）	46	北奥羽	1回戦	盛岡一	6—0	前沢	120				
		岩手予選	2回戦	盛岡一	0—1	高田		49	花巻商	高知	2270
昭和40年（一九六五）	47	北奥羽	1回戦	盛岡一	4—0	軽米	121				
		岩手予選	2回戦	盛岡一	2—0	釜石工	122				
			3回戦	盛岡一	4—1	一関商工	123				
昭和41年（一九六六）	48	北奥羽	1回戦	盛岡一	3—1	水沢一	124				
		岩手予選	2回戦	盛岡一	8—1	盛岡市立	125				
			3回戦	盛岡一	3—1	花泉	126				
			4回戦（準々決勝）	盛岡一	3—5	久慈		50	八戸	三池工	2363
昭和42年（一九六七）	49	北奥羽	1回戦	盛岡一	10—0	沼宮内	127				
		岩手予選	2回戦	盛岡一	5—1	岩谷堂	128				
			3回戦	盛岡一	6—8	花巻商		51	花巻北	中京商	2415
			4回戦（準々決勝）	盛岡一	0—2	山田					
昭和43年（一九六八）	50	岩手	1回戦	盛岡一	8—1	高田	129				
		（記念大会）	2回戦	盛岡一	1—0	大槌	130				
			3回戦	盛岡一	7—0	専大北上	131				
								52	東奥義塾	習志野	2460

| | | |

年	回数	大会名	回戦	白堊校	スコア	対戦校	勝	敗	地方代表校	全国大会優勝校	全国参加校数
			準決勝	盛岡一	10—0	一関商工	151				
			決勝	盛岡一	0—2	盛岡商		60	盛岡商	習志野	2798
昭和51年（一九七六）	58	岩手		盛岡一	2—1	盛岡三	152				
		盛岡地区	2回戦	盛岡一	7—0	宮古水産	153				
		県大会	3回戦	盛岡一	4—0	大東	154				
			4回戦（準々決勝）	盛岡一	0—3	高田		61	花北商	桜美林	2893
昭和52年（一九七七）	59	岩手		盛岡一	9—2	龍澤	155				
		盛岡地区	1回戦	盛岡一	11—3	水沢農	156				
		県大会	2回戦	盛岡一	1—0	一関工	157				
			3回戦	盛岡一	8—6	岩泉	158				
			4回戦（準々決勝）	盛岡一	5—3	盛岡工	159				
昭和53年（一九七八）	60	岩手	準決勝	盛岡一	2—7	福岡		62	黒沢尻工	東洋大姫路	2985
		（記念大会）	2回戦	盛岡一	6—1	専大北上	160				
			3回戦	盛岡一	5—3	一関商工	161				
			4回戦	盛岡一	11—2	東和	162				
			5回戦（準々決勝）	盛岡一	1—0	大東	163				
			準決勝	盛岡一	14—0	黒沢尻北	164				
			決勝	盛岡一	3—1	黒沢尻工	165		盛岡一		
		全国	1回戦	盛岡一	0—7	報徳学園		63		PL学園	3074
昭和54年（一九七九）	61	岩手	1回戦	盛岡一	7—0	盛岡北	166				
		盛岡地区	2回戦	盛岡一	9—3	大船渡工	167				
		県大会									
			2回戦	盛岡一	2—3	水沢		64	久慈	箕島	3170
昭和55年（一九八〇）	62	岩手	1回戦	盛岡一	2—1	一関一	168				
		県大会	2回戦	盛岡一	4—2	黒沢尻工	169				

| | | |

年	回数	大会名	回戦	白堊校	スコア	対戦校	勝	敗	地方代表校	全国大会優勝校	全国参加校数
昭和63年（一九八八）	70	岩手（記念大会）	2回戦	盛岡一	0—2	宮古商		73	高田	広島商	3958
平成元年（一九八九）	71	岩手県大会	2回戦	盛岡一	0—5	黒沢尻北		74	盛岡三	帝京	3990
平成2年（一九九〇）	72	岩手県大会	1回戦	盛岡一	7—0	一戸	188				
			2回戦	盛岡一	12—0	遠野緑峰	189				
			3回戦	盛岡一	7—4	釜石南	190				
			4回戦	盛岡一	1—2	盛岡商		75	花巻東	天理	4027
平成3年（一九九一）	73	岩手県大会	2回戦	盛岡一	11—1	西和賀	191				
			3回戦	盛岡一	6—5	岩手	192				
			4回戦	盛岡一	0—6	花巻東		76	専大北上	大阪桐蔭	4046
平成4年（一九九二）	74	岩手県大会	1回戦	盛岡一	13—3	大原商	193				
			2回戦	盛岡一	15—2	福岡	194				
			3回戦	盛岡一	4—8	盛岡市立		77	一関商工	西日本短大付	4059
平成5年（一九九三）	75	岩手（記念大会）	1回戦	盛岡一	11—1	浄法寺	195				
			2回戦	盛岡一	4—0	東和	196				
			3回戦	盛岡一	8—1	久慈	197				
			4回戦	盛岡一	3—2	大船渡	198				
			5回戦（準々決勝）	盛岡一	8—2	一関一	199				
			準決勝	盛岡一	9—0	花北商	200				
平成6年（一九九四）	76	岩手県大会	決勝	盛岡一	3—12	久慈商		78	久慈商	育英	4071
			1回戦	盛岡一	11—9	水沢工	201				
			2回戦	盛岡一	15—9	一戸	202				
			3回戦	盛岡一	12—2	岩谷堂	203				
			4回戦	盛岡一	8—1	水沢商	204				
			5回戦（準々決勝）	盛岡一	4—14	高田		79	盛岡四	佐賀商	4088

| | | |

硬式野球部後援会会則

（名称）
第1条　本会は岩手県立盛岡第一高等学校硬式野球部後援会（以下「本会」という）という。
（事務所）
第2条　本会の事務所は会長の定める場所に置く。
（目的）
第3条　本会は野球活動を通じ岩手県立盛岡第一高等学校（以下「一高」という）および一高野球部の発展を期する為、一高野球部に対し活動資金や技術の提供など必要な援助を行なうことを目的とする。
（事業）
第4条　本会は前条の目的を達するため次の事業を行なう。
(1) 岩手県立盛岡中学校野球部、岩手県立盛岡高等学校および一高野球部についての記録、資料等の収集、整理に関すること。
(2) 一高野球部活動に要する経費および施設、設備の整備などの援助に関すること。
(3) 一高野球部の指導、助言に関すること。
(4) その他目的達成のため必要な事業。
（組織）
第5条　本会は白堊同窓会会員で野球を愛好し、本会の趣旨に賛同するものをもって構成する。
（役員）
第6条　本会に次の役員をおく。
会　長　1　名
理事長　1　名
副理事長　3　名
理　事　若干名
監　事　若干名
事務局長　1　名
前項に定める者の他に顧問若干名をおくことができる。
第7条　本会の役員は総会において選任する。
（役員の職務）
第8条　(1) 会長は本会を代表し、会務を総理する。
(2) 理事長は会長を補佐し、会長に事故ある時または欠けた時はその職務を代行する。
(3) 理事長は会長を補佐し、会長の命を受け常務を掌理する。
(4) 副理事長は理事長を補佐し、常務を処理する。
(5) 理事は会務を処理する。
(6) 監事は会務を監査し、その結果を総会に報告する。
(7) 事務局長は事務局員を監督し、事務を処理する。
(8) 顧問は総会の同意を得て会長が委嘱し、本会の重要事項について諮問に応ずる。
第9条　(1)役員の任期は2年とする。ただし重任を妨げない。
(2)補欠役員の任期は前任者の残任期間とする。
第10条　本会の会議は総会および理事会とする。
（総会）
第11条　総会は会長が招集し、その議長となり次の事項について審議決定する。
(1) 会則の制定および改廃に関すること。
(2) 役員の選任に関すること。
(3) 事業の決定に関すること。
(4) 予算の決定に関すること。
(5) その他重要な事項に関すること。
（理事会）
第12条　理事会は必要に応じて会長が招集し、その議長となり次の事項について審議決定する。
(1) 総会から委任された事項に関すること。
(2) 総会を招集する暇のない緊急事項に関すること。
(3) 総会に付議する事項に関すること。
(4) その他必要な事項に関すること。
（会計）
第13条　本会の経費は会費、寄付金その他の収入をもってあてる。
第14条　本会の会計年度は毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。
（その他）
第15条　本会則施行について必要な事項は、会長が理事会にはかり別に細則を定める。
（付則）
この会則は平成8年4月24日より施行する。

歴代部長・副部長名簿

年度	部長	副部長		
明31				
32				
33	夏井　庄六			
34				
35	小林吉太郎			
36	渡邊　捨吉			
37				
38	塩谷庸二郎			
39	塩谷庸二郎			
40	米原　弘			
41	門岡　速雄			
42	斎藤　彰			
43	斎藤　彰			
44	斎藤　彰			
大元	斎藤　彰			
2	斎藤　彰			
3	斎藤　彰			
4	斎藤　彰			
5	斎藤　彰			
6				
7				
8	斎藤　彰			
9	斎藤　彰			
10				

年度	部長	副部長		
11	斎藤　彰			
12	斎藤　彰			
13	斎藤　彰			
14	斎藤　彰			
昭元	斎藤　彰			
2	斎藤　彰			
3	澤邊　赫			
4	澤邊　赫			
5	澤邊　赫	甲斐　久生		
6	瀬川正三郎	甲斐　久生		
7	瀬川正三郎	甲斐　久生		
8	瀬川正三郎	甲斐　久生		
9	甲斐　久生	石川　浩	村松　正	
10	甲斐　久生	石川　浩	村松　正	
11	甲斐　久生	石川　浩		
12	甲斐　久生	小島　競	陣ヶ岡市郎	
13	柏木　重興	小島　競		
14	柏木　重興	杉本　良二		
15	甲斐　久生	石川　浩	塩山清之助	
16				
17				
18				
19				
20	石川　浩			

年度	部長	副部長		
21				
22				
23				
24	上館　馨文			
25				
26				
27				
28	千田　玄			
29	千田　玄	千葉　吉雄		
30	千田　玄	千葉　吉雄		
31	松島　真蔵			
32	千田　玄	小原房之助		
33	千田　玄	小原房之助		
34	千田　玄	小原房之助		
35	千田　玄	小原房之助	千葉条助	
36	千田　玄	小原房之助	阿部　栢	
37	千田　玄	横山栄次郎	成田　浩	
38	横山栄次郎	遠藤　弘	千葉　吉雄	
39	横山栄次郎	遠藤　弘		
40	横山栄次郎	遠藤　弘		
41	遠藤　弘	安富　有恒	横山栄次郎	
42	遠藤　弘	安富　有恒		
43	遠藤　弘	安富　有恒		
44	遠藤　弘	安富　有恒		
45	遠藤　弘	安富　有恒		
46	遠藤　弘	安富　有恒	猪原　利昭	
47	遠藤　弘	安富　有恒		

年度	部長	副部長		
48	石川　景三	安富　有恒		
49	石川　景三	小山　卓也		
50	小山　卓也	佐藤　憲男	小原　省佑	
51	小山　卓也	三田　信一		近江　昭
52	小山　卓也	三田　信一	後藤　利一	
53	小山　卓也	三田　信一	後藤　利一	
54	小山　卓也	三田　信一	川村　祥平	
55	三田　信一	小山　卓也	川村　祥平	
56	三田　信一	後藤　利一	川村　祥平	
57	三田　信一	佐々木龍孝	川村　祥平	
58	三田　信一	佐々木龍孝	川村　祥平	
59	三田　信一	佐々木龍孝	川村　祥平	上原鉱四郎
60	上原鉱四郎	佐々木龍孝	川村　祥平	
61	石田　洵	佐々木龍孝	川村　祥平	
62	佐々木龍孝	村上　正男	川村　祥平	
63	遠藤　洋一	村上　正男	川村　祥平	
平元	遠藤　洋一	佐藤　誠剛	川上　圭一	菅原　基
2	遠藤　洋一	佐藤　誠剛	川上　圭一	中村　豊
3	遠藤　洋一	佐藤　誠剛	川上　圭一	中村　豊
4	遠藤　洋一	佐藤　誠剛	川上　圭一	
5	遠藤　洋一	佐藤　誠剛	川上　圭一	
6	三浦　宗	佐藤　誠剛	川上　圭一	高橋　和雄
7	高橋　和雄	三浦　宗	川上　圭一	
8	高橋　和雄	三浦　宗	佐藤　有	
9	高橋　和雄	三浦　宗	佐藤　有	
10	高橋　和雄	三浦　宗	佐藤　有	在原　眞
11	佐藤　有	三浦　宗	高橋　和雄	小原　由紀

歴代野球部監督名簿

監督	在任期間
坂本　金吾	昭和26年～昭和27年
桜小路善治	昭和28年～昭和30年
島　功一	昭和31年～昭和33年
沢藤善兵衛	昭和34年～昭和35年
浅沼　康一	昭和36年～昭和38年
岡本賢四郎	昭和39年～昭和40年
佐藤　優	昭和41年～昭和42年
宮川　清	昭和43年
桜小路善治	昭和44年
北村　尚淑	昭和45年
関　行雄	昭和46年～昭和52年
榊　貞助	昭和53年～昭和55年
千田　栄紀	昭和56年
海野　典	昭和57～昭和59年
杉田　清彦	昭和60～平成元年
森　雄一	平成2年～平成4年
川村　祥平	平成4年～平成6年
駒木　進	平成6年～平成10年
川村　祥平	平成10年～
佐藤　誠剛	
杉田　清彦	
三浦　宗	
柳原　和久	

盛岡中学のスタンドコーチ

大正時代の中等野球では「スタンドコーチ」と呼ばれる人がおり、全国大会が始まった大正四年から同十一年まで存在した。スタンドコーチとは、現在の監督に当たる役割を担った。日ごろ部員たちの練習を指導してきたＯＢなどが、公式試合の際、自校のベンチ近くの見やすい場所に陣取り、選手への采配を振った。

大正十二年から試合の実戦指導をする人物のベンチ入りが許可され、スタンドコーチは姿を消す。そして、ベンチコーチが誕生する。これ以前は、大会主催者側から「競技者席に着席し得る者は、ユニホームを着けた選手と補欠、監督一名に限る」という厳しい規定があった。この「監督」とは、学校が派遣した監督者を意味した。その人たちは、実際にベンチで作戦指揮を取ることはほとんどなかった。

本校のスタンドコーチをした人は、川島民蔵、久慈次郎、永野重次郎（後に藤田と改姓）、獅子内謹一郎氏ら、早稲田大学で活躍した先輩たちである。

部員名簿一覧

◆明治三十三年卒業
＊小野寺　真平
＊田中館　広

◆明治三十四年卒業
＊小原　益遠
＊室岡　翁三
＊弓舘　芳夫
＊渡辺　静男

◆明治三十五年卒業
＊上田　耕一
＊熊谷　巖（弥兵衛）
＊坂本　省三
＊両川（八重樫）藤次郎
＊板垣　征四郎

◆明治三十六年卒業
＊岩動　康治
＊一条　友吉
＊小野崎　正三
＊小泉（小原）多三郎
＊小瀬川　浩策
＊獅子内　謹一郎
＊瀬川　惣太郎
＊丹下　秀夫
＊中村　貞治
＊目時　政忠
＊吉田　与平治
＊瀬川　壮太郎
＊藤田　松太郎
＊小山田　舜二
＊瀬川　惣次郎

◆明治三十七年卒業
＊稲村　賢三
＊久慈　忠
＊駒ケ嶺　哲
＊田沼　甚八郎
＊対馬　小次郎
＊中島　米八
＊村井　一郎

◆明治三十八年卒業
＊泉山　専太郎
＊小笠原　清七
＊滝川　清十郎

◆明治三十九年卒業
＊川村　四郎
＊菊地　八十吉
＊中津山　栄一
＊長岡　六之助
＊駒ケ嶺　秀
＊内田　直
＊金矢　光一
＊島田　小次郎
＊二見　直三

◆明治四十一年卒業
＊伊藤　憲二
＊野々村　納
＊福田　哲三

◆明治四十二年卒業
野坂　直治
＊皆川　弘一

◆明治四十三年卒業
＊石川　正
＊菅野　五郎
＊佐藤　緑郎
＊藤沢　金平

◆明治四十四年卒業
＊小本　五郎
＊川村　松助
＊谷地舘　要一
山口　保
荒川（石井）余一
＊瀬川　正三郎
＊中村　俊二
＊中村　竜雄
＊平井　直衛
＊山懸　義信
＊山口　弘
＊米内　貞斉

◆大正二年卒業
＊遠藤　政次郎
＊小笠原　政美
＊小川　時雄
＊帷子　一郎
＊山口　武男

◆大正三年卒業
内山　茂兵衛
＊久慈　学
桑原　勝郎
＊瀬川　貞蔵
＊長沢　雄二
＊梅内　克己
＊小田島　八五郎
沢藤　公介
＊細越　健

◆大正五年卒業
＊石井　禎二
＊小笠原　二郎
＊鈴木　彦次郎
＊村井　徳治

◆大正六年卒業
＊久慈　次郎
＊大坊　憲吉
＊深澤　省三
＊山口　徳治郎
＊山本　兵四郎

◆大正七年卒業
＊帷子　康三
＊菊地　正
＊久保田　禎
＊照井　政夫
＊円子（小川）得二郎
＊米内　英春

＊印は故人

◆大正八年卒業
＊藤田（永野）重次郎
＊八幡権三郎
＊山本常雄
江刺家宗紀
＊平川良夫
＊吉田道太郎
菊池彦一郎
＊金矢忠志
◆大正九年卒業
＊荒木田家寿
＊下山恭一
藤村松之助
＊水原友二郎
荒木田定雄
◆大正十年卒業
＊小田時雄
＊生内昌孝
久保慶蔵
＊黒沼忠亮
＊晴山要一郎
吉田芳郎
田鎖直江
◆大正十一年卒業
＊泉田弘道
＊及川要一
＊大内充
＊小田島忠雄
＊斉藤浩
＊関口八兵衛
田鎖雄三
＊村井清八
＊山口尚男
鳥崎雄
＊武藤常吉
◆大正十二年卒業
＊太田定治
＊佐藤智寿
＊平井啓二
＊淵沢武夫
＊宮部哲郎
＊森嘉兵衛
＊鵜飼一
＊深澤忠
◆大正十三年卒業
＊小山田三郎
＊笹川俊吉
＊高瀬勝治
◆大正十四年卒業
及川太一郎
＊鈴木小弥太
＊長岡常三
古沢浩一
◆大正十五年卒業
＊飯岡慶三
＊今淵宗次
＊坂本金吾
＊沢藤悦郎
＊庄司広志
＊松原泰雄
森宇太郎
◆昭和二年卒業
田村藤兵衛
＊中島康吉
＊吉田健次郎
＊吉田（菊池）保雄
＊阿部清次郎
松村哲二
◆昭和三年卒業
浅野金治
＊江渡要次郎
＊和賀祐助
◆昭和四年卒業
＊上野善雄
＊島功一
＊藤沢万佐雄
＊三浦卓夫
＊山田五郎
◆昭和五年卒業
＊阿部理八
＊上田実
大島常次郎
＊畠忠夫
◆昭和六年卒業
＊河原崎陸郎
＊工藤弥太郎
＊斉藤善七
＊谷藤端
田村米造
千田耕資
◆昭和七年卒業
＊佐藤源蔵
＊佐々木子之吉
＊島欣也
長沢正夫
＊松尾徳四郎
奥村吉三
◆昭和八年卒業
＊小原三郎
＊北田善三郎
＊遠山富夫
三浦好雄
◆昭和九年卒業
＊海野典
＊藤田秀男
八幡長吉
＊吉田弘四
◆昭和十年卒業
＊高橋直治
＊長沢常人
◆昭和十一年卒業
＊秋広（菅野）宥
＊坂下（佐藤）幸吉
＊佐々木哲夫
＊皿井英治
＊外川孫次郎
＊村井六郎
◆昭和十二年卒業
＊河原崎浜夫
瀬川仁
＊関行雄
＊松本義雄
＊松田豪仁
◆昭和十三年卒業
江袋（えたい）（篠原）島吉

＊吉田宇八
＊内村幸雄
＊大衛史郎
◆昭和十四年卒業
＊飯岡貞夫
大ヶ生昌一
＊上館馨文
＊工藤巌
＊後藤力
＊佐々木好作
＊細川重夫
＊細川良男
◆昭和十五年卒業
＊北田鉄郎
＊佐藤優
＊高橋淳
＊千田玄
成島忠光
＊川村荘四郎
◆昭和十六年卒業
＊北田康三
岡本(外川)賢四郎
＊畠隆一郎
星合剛
◆昭和十七年卒業

斉藤一雄
澤藤時雄
長崎幹雄
船山賢一
◆昭和十八年卒業
石川克二郎
佐藤謙載
＊横澤信一
吉田正
◆昭和十九年卒業
斉藤清
小川時幸
川村弘二
斉藤陞
桜小路(佐々木)善治
藤原敬吉
和久井光雄
◆昭和二十年卒業
＊藤原良二
川村裕志
浅沼康一
村上国雄
山崎時男
＊岩動峻夫
＊永井利正
斎藤實

内藤裕一
高橋暢
◆昭和二十二年卒業
石川泰三郎
小川清
伊藤良巳
中川信
◆昭和二十四年卒業
青山光佑
＊斉藤登治
＊榊貞助
＊宮川清
村田武
＊盛合要道
藤倉昌
＊岡田栄二
◆昭和二十五年卒業
小川雄三
川村裕志
久我伸也
河野弘義
船山喬
村松昇
平野陽司
八角正司

昆克省
◆昭和二十六年卒業
藤村明朗
森雄一
◆昭和二十七年卒業
鈴木雄一
一戸秀光
細川豊亮
安嶋信雄
小川圭介
下山寛
中村亀治
＊向井田精八
小原泰昭
◆昭和二十八年卒業
澤村省三
藤原勉
鈴木浩
谷藤繁
◆昭和二十九年卒業
島田繁
野田一郎
奥栄二
笹森公夫
岩崎瞭

日景晃
土川伍朗
工藤(柳舘)繁
臼井伝
藤沢栄
◆昭和三十年卒業
小田島劭
川村泰之
鈴木正樹
北本誠郎
繁野健
川田昴
斉藤紀夫
石川高穂
諏訪(千葉)貞三
◆昭和三十一年卒業
＊岩崎淳
野中恒
◆昭和三十二年卒業
井上健三
＊北村尚淑
工藤博敏
斎藤徹
槙政人
佐々木発朗

＊本野剛志
平野寅雄
藤原正彬
西舘友勝
野田修三
森　一夫

◆昭和三十三年卒業
三浦　武
女鹿恵教
下川原丈夫
山本　肇
清水泰宏

◆昭和三十四年卒業
中村重男
田村明行
千田栄紀
盛合一弥
大窪　明
野田祐三
府金正忠
小原徳政
佐々木　功
＊浅川慶治
佐々木　祐
金沢成庫

◆昭和三十五年卒業
太田拓夫
菊池孝宥
＊宮　義一郎

◆昭和三十六年卒業
小川　勝
三浦　宏
坂本宣宏
北田節男
三浦壮六

◆昭和三十七年卒業
島田邦守
藤原昭夫
小原徳応
中村勝己
佐藤信重
春山攻一郎
吉田治夫
小野寺禎夫
石澤健一

◆昭和三十八年卒業
伊藤昌毅
坂本暢男
＊田村治敏
＊伊藤宗弘

◆昭和三十九年卒業
斉藤仁志郎
寺沢邦雄
中川敏彦
藤沢富士雄
細川博明
吉田一実

◆昭和四十年卒業
松浦純一
澤田栄夫
佐藤　秀
中村　正
緑川　晃
富山義夫
伊藤健夫

◆昭和四十一年卒業
古川智之
福田　喬
大矢理郎
遠藤洋一
川村祥平
渡邉史朗
遠藤直邦

◆昭和四十二年卒業
高橋　寿
森　敬司
佐々木典武
坂本秀男
山本　仁
関　孝雄
三浦　宗

◆昭和四十三年卒業
作山文昭
細田敬一
松田　進
高橋明博
金子　徹
小田中政次
藤井英夫
＊瀬川克範

◆昭和四十四年卒業
小笠原敬二
赤沢敬文

◆昭和四十五年卒業
荒川知行
＊大谷誠宏
小笠原正美
嘉倉正美
高橋　等
高橋（福島）龍三
松橋公治
中島（渡辺）恒義

◆昭和四十六年卒業
浅沼公統
伊東　隆
岩泉　宏
海野道雄
川村伸一
高橋良一

◆昭和四十七年卒業
小笠原正美
嘉倉正美
高橋　等
高橋（福島）龍三
松橋公治
中島（渡辺）恒義

◆昭和四十八年卒業
阿部洋三
杉田清彦

◆昭和四十九年卒業
佐々木崇二
菊池　豊
工藤　功
高橋芳雄
関　和雄

◆昭和五十三年卒業
今枝修二
川村協平
駒木　進
佐々木和博
佐藤誠剛
鈴木忠彦
福田啓二

◆昭和五十六年卒業
浅沼公統
伊東　隆
岩泉　宏
海野道雄
川村伸一
高橋良一

◆昭和五十七年卒業
荒川知行
＊大谷誠宏

深沢太賀男
石川仙平
谷地克
菊池健
上和野基
横澤英信
中川政則

◆昭和四十九年卒業

赤沢信吾
泉舘光信
小関文康
小山田浩之
高橋弘行
女鹿俊勝
谷地孝
山崎泰弘

◆昭和五十年卒業

池阪孝彦
遠藤収一
小岩敏郎
紺野衆
佐藤新
千葉愛一郎
平原光彦
細川恒

松岡義行
山田義裕

◆昭和五十一年卒業

大ヶ生靖
金野健
後藤順
高野浩
林壽郎
古川秀彦
佐藤悦男
松木幹

◆昭和五十二年卒業

伊勢沢信之
宮丈彦
北條俊則
伊藤和幸

◆昭和五十三年卒業

岡田信之
田巻晃
橋本時浩
平野拓司
石黒健
清水明
西村昌美
松岡剛

名郷根雅史
細井義行

◆昭和五十四年卒業

石川均
塚原伸一
照井達
久慈勉
泉舘彰義
山崎敏弘
川村昌義
小川真司

◆昭和五十五年卒業

松田浩
木村司
永井修
小笠原洋人
森常記
吉田寛治
佐藤公彦
久慈勝浩

◆昭和五十六年卒業

高橋俊也
大志田研
佐藤明彦
佐藤聡

牧洋一
正木祐輔
阿部康弘
小原公一
八重樫永規
岩崎徹哉
久慈勉
松島稔
森雅之
照井史生
沼倉明彦
下田栄行

◆昭和五十七年卒業

清武英司
西郷晃
杉田英一
森広樹
坂野信一郎
橋田元
中山篤
澤村省逸
遠藤祐人
津志田彰秀
中村信夫
孤崎浩

◆昭和五十八年卒業

泉館英美
澤口順
高橋充
福井敏也

小山雅之
昆野佳範
高畑嗣人
千葉博之
一戸俊行
菊池義則
吉田勝信
飯岡隆
照井史生
下田栄行
佐々木裕二
鎌田俊一
塚原義則
長岡敏昭
福田晴文
川村憲弘
平野学
川村公司

◆昭和五十九年卒業

小林猛将
横田昌之
工藤隆俊

森浩之

◆昭和六十年卒業

作山誠
角掛典生
柳村宏治
吉田金一
藤原学
高橋進
木皿裕之
土井尻英明
階猛
千葉靖久
小野寺宏和
工藤正義
樋口耕太郎
佐藤真
佐々木智之

◆昭和六十一年卒業

橋本英教
中村和生
岩間信之
大形恵司
臼沢勉
小松慎
川上博基

畠山剛
岡市大樹
下川原潤一
松田修一
川村公一
萩原康弘
中黒和孝
吉田健嗣
桜克宏
鈴木伸宏
高橋直人
村田忍
柳原和久

◆昭和六十二年卒業

◆昭和六十三年卒業

菊池拓
吉田賢治
小松渡
松田宣久
杉田誠
中村明寛
阿部計哉
佐々木伸也
岡村亨
生田目仁
畠山健志

佐藤洋彦
小野寺亨
和山亘
女鹿芳文
細川琴也
川村仁
佐々木康文
山口則幸
佐々木傅兆
清水成樹
細川康
橋本英二
高橋雪文
島田一志
伊藤博紀
加藤正晃
高橋真輝

◆平成元年年卒業

◆平成二年年卒業

菅原草
白藤幸喜
松本諭
戸澤幸一
藤原良彦

阿部徳義
柴内健
佐藤克博
川又範明
高橋岳志
吉田智規
中野俊一
細田知宏
本宮久仁彦
菅原淳
天間崇文
栗谷川昌宏
筒井繁行
岩動一将
長野恭朋
小野寺一典
大森慎一
長崎伸一
野内敦史
野崎俊剛
松島太

◆平成三年年卒業

◆平成四年年卒業

◆平成五年年卒業

市川俊也
千葉佳史
佐藤晋
曽我井透
八重樫純生
佐藤朋哉
佐々木勝俊
阿部康寿
坂井一博
平塚博史
矢治光
平賀正人
宮崎貴史
大沼健
安部俊司
高下崇徳
新谷聡
八角有紀
渡邉史隆
多田祥明
千葉俊介
藤原正孝

◆平成六年年卒業

◆平成七年年卒業

紺野博行

大柏大
鏡高志森克仁
沼崎光祥高橋宗康
沼崎宏祥上野敏弘
佐賀康文渡邉里沙
田沼徳真坂本知規
藤村康浩道場理平

◆平成八年卒業

我妻俊彦吉田透
畠山将樹小笠原卓哉
小野家拓洋亀澤祐介
新沼克久佐々木建
三田慶佐藤崇史
小山泰士藤原顕輔
舟山翼斉藤紘文
明戸剛中澤勘
大沼明小原一夫
佐川範章小瀬川創
重石聡子赤松洋祐

◆平成九年卒業

工藤哲人松川智美
村田尚也大塚亮平
鈴木信郷高橋健資
千葉正範望月史生
工藤健人我妻康弘

◆平成十年卒業

堀合英洋小平顕
木村泰成高橋欣宏
戸羽文武千葉高大
小松崇紀亀田真太郎
日向啓白木健悠
西田祐介伊藤達博
北嶋伸好小笠原賢二

◆平成十二年卒業予定

佐竹研安紀幸
松村国彦池田謙輔
立花寛雄遠藤智嗣
田中裕也及川広之
渡邉昌也司東隆光
荻野真一田面木真也
菅原悠我妻慎弥
梅村達秋篠秀弥
重石徹吉田大徹
加藤宏泰近藤誠之
佐々木真大内賢太郎
佐々木優佐々木真希子
細川星児
高前田幸大
前澤健志

◆平成十三年卒業予定

菊池瞬

編集後記

平成十年五月一日。第一回編集会議が開かれた。歴史と伝統ある盛岡一高野球部創設百周年記念誌編さんへの第一歩だったが、まさに雲をつかむような話であった。

百年前の写真や資料が本当にあるのだろうか…。これまで盛中、盛岡高、一高の野球部に関する新聞記事、著作のたぐいは、活躍の著しい年度や特定の人物が中心である。しかし、グラウンドで汗と泥にまみれて白球を追い、一高野球に青春をかけた熱い思いは、時代、学年の壁を越えて皆同じである。編集方針は『どの学年にも平等にスポットを当てる』ことで一致した。

七月二日。「IBCニュースエコー」が我々の活動を取材放映してくれることになった。TVを見た多くの方々からの温かい声援が大きな励ましとなった。

七月十二日。花泉町の小野寺家を委員三人で訪ねた。明治三十三年卒の盛中野球部第一号の卒業生である小野寺真平氏の生家である。当時使用したキャッチャーマスクが蔵の中にあったというのだ。胸が高鳴った。他にも貴重な資料が出てきた。帰りの車中、胸中は、百年前の盛一野球の出発点をついに探り当て、触れることができた感激でいっぱいであった。後日、岩手日報が記事掲載してくれた。早速、確かな反応があった。写真や資料提供の電話が続いた。連日の取材訪問で話を伺い、資料をお借りした。明治、大正期のものの時など思わず「バンザイ」を叫んだ。

こんなことがあった。「私の父は生前、盛中で野球をやっていたと言っていたが、記録も写真も残っていない。本当に野球をやっていたことを証明していただけませんか」――調べてみると小野寺真平氏の資料の中にその方の名前があった。その資料を複写して届けた時の娘さんの一言「父の供養になります」が、私の脳裏から今も離れない。

最後に、ご多忙中、快く原稿をお寄せいただいた各位と、資料提供をいただいた多くの方々に厚く御礼を申し上げます。編集に当たり多くの文献等も参考にさせていただいた。特に写真や記録収集に当たり、岩手日報社の全面的な協力をいただいた。重ねて感謝申し上げます。これをたたき台にして後世、より正確で詳細な野球部史編さんを後進に託し、編集後記とさせていただきます。（渡邉史朗）

編集委員会

委員長　三浦　宏
委　員　渡邉　史朗
　　上和野　基
　　山崎　泰宏
　　久慈　勝浩
　　小山田浩之
　　阿部　洋三

百周年記念誌編さんに当たり、史実や各種資料をもとに正確性に万全を期しましたが、記録や記述等に疑問、お気付きの点は、事務局迄ご連絡いただければ幸いです。

凡例

◆通史と資料編では、歴史を記録することに重点を置いたため、人名への敬称を一切省いた。

◆多くの文献を参考とさせていただいたが、引用に当たっては原文の尊重に努めた。ただ、明らかな誤記（史実と異なる記述や脱字など）については、編集委員会が訂正して引用した。

◆白堊野球の試合結果は、すべてイニングスコアを載せるように努めたが、紙面の都合で1行スコアに止めざるを得なかったところもある。また、当時の史料にイニングスコアが記されていない試合もあった。

◆明治、大正、昭和の戦前までは1行スコアの表記に本校名を入れたが、戦後以降は省略した。

◆通史と資料編では、当時の氏名で記した。部員名簿においては、現姓、現名として、旧姓と旧名は（　）でくくった。

◆試合データは、対抗戦時代（明治32年から大正4年まで）は旧制盛岡中学の『校友会雑誌』を、公式戦時代は『新岩手日報』・『岩手日報』を、それぞれ主として記述根拠とした。

主な参考文献

盛岡中学校『創立六十周年』
『白堊校80年史』
『白堊校90年史』
『白堊校百年史』
『白亜同窓会会員名簿』
『盛岡一高硬式野球部後援会会員名簿』
盛岡中学校『校友会雑誌』各号
盛岡中学『卒業アルバム』
盛岡高校『卒業アルバム』
盛岡一高『卒業アルバム』
『岩手県高等学校野球連盟20周年記念誌』
岩手県高等学校野球連盟30周年記念誌『熱球』
岩手県高等学校野球連盟40周年記念誌『熱球Ⅱ』
『岩手のスポーツ人』岩手日報社刊
『岩手年鑑』岩手日報社刊
『高校野球グラフ』岩手日報社刊
『新岩手日報』
『岩手日報』
『河北新報』
『朝日新聞』
『甲子園の60年』サン企画刊
『白堊校硬式野球部史研究ノート』弓村胡鰐著
『盛岡一高野球百年』弓村胡鰐著
『"夏の荒武者"盛岡一高、通算200勝への軌跡』
弓村胡鰐著
青森県立弘前高校『鏡ヶ丘百年史』

資料写真協力者

浅沼康一　阿部洋三　一条八平太　今渕宗孝　小田島忠　小田島浩之　小野寺寛一　川村裕　工藤昭子　佐藤新　澤村省逸　獅子内建二　鈴木正樹　瀬川明　関和雄　船山賢一　船山喬　細田敬一　三浦良雄　室岡明直　茂木芳子　安嶋信雄　山本勝茂　吉田治夫　渡邉史隆

❖

岩手日報社
朝日新聞社

（順不同・敬称略）

盛岡一高野球部創設百周年記念誌
白堊熱球譜

平成11年5月15日発行

編集　盛岡一高野球部創設百周年記念誌
編集委員会

発行　盛岡一高野球部後援会
後援会事務局
盛岡市黒石野1―30―16
〒020―0111
電話019―661―7355

印刷　川口印刷工業株式会社

題字◎浅沼一道［盛岡一高 昭和二十七年卒業］